

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (104)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVII

(伊集院IC～市来IC)

堂園平遺跡

(日置市東市来町)

2006年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C間）の建設に伴って、平成10年度に実施した日置市東市来町に所在する堂園平遺跡の発掘調査の記録です。

堂園平遺跡は、日置市東市来町伊作田の遠見番山裾部の平坦部に位置し、南東側には浅い谷を隔てて向楯城跡がみられます。この遺跡は、主に旧石器時代、縄文時代、古代にわたる複合遺跡です。特に、旧石器時代は、ナイフ形石器・細石刃文化期にわたる遺構や遺物が出土し、縄文時代も早期から晩期に至る各時期の遺構や遺物が出土しており、当時の文化を解明する上で貴重な資料と考えています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

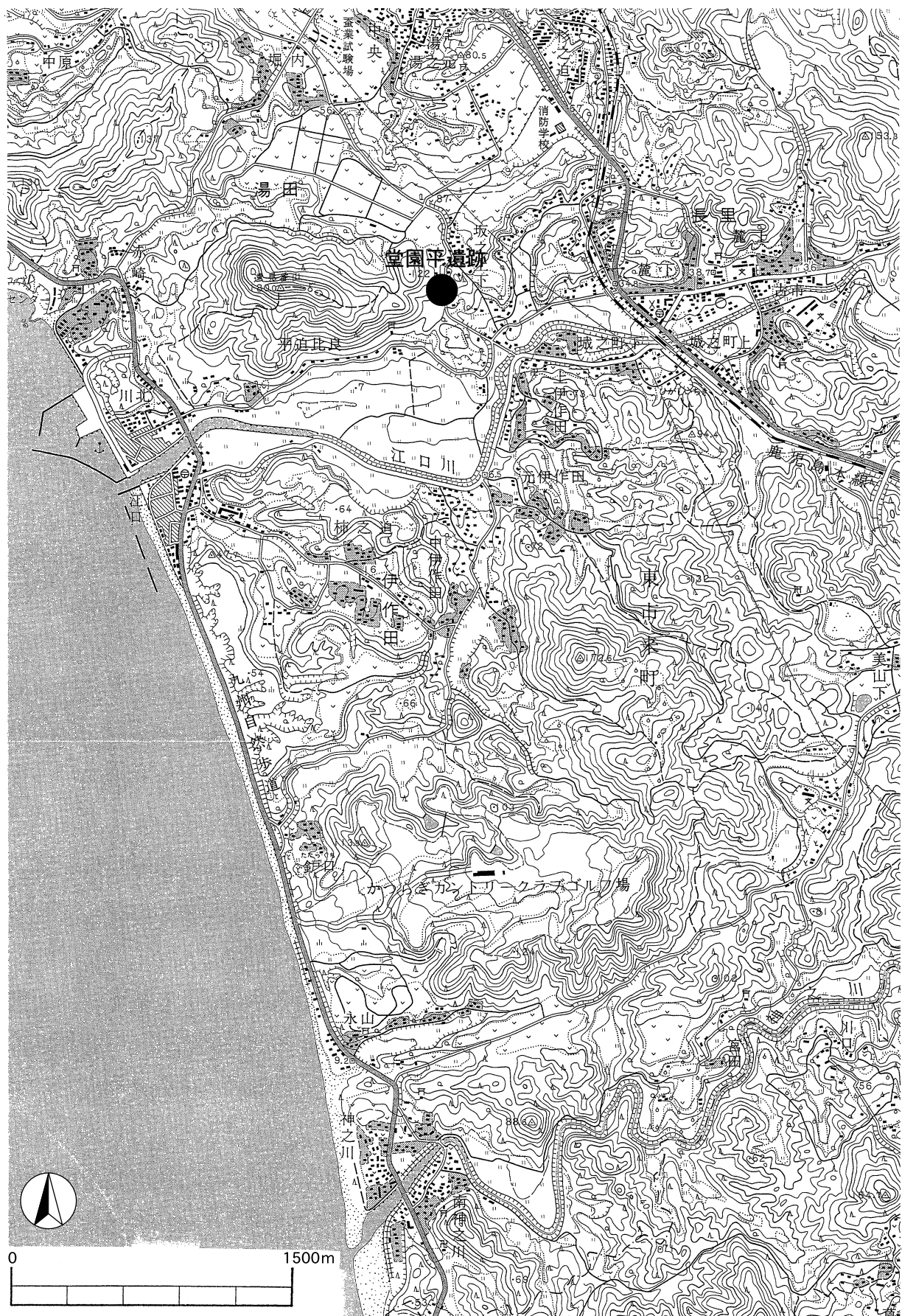
最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、日置市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 上 今 常 雄

報告書抄録

ふ り が な	どうぞのびらいせき							
書 名	堂園平遺跡							
副 書 名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	104							
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	XVII							
編 著 者 名	寒川 朋枝							
編 集 機 関	鹿児島県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4461 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査起因
どうぞのびらいせき 堂園平遺跡	か ご し ま け ん ひ お き し 鹿児島県日置市 ひがしいちきちよう 東市来町 い さ く だ 伊作田	463621	29-74	31 ° 39 ' 20 "	130 ° 20 ' 15 "	確認調査 19961120 ～ 19961214 本調査 19980506 ～ 19981110	2,000m ²	南九州西 回り自動 車道鹿児 島道路建 設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物				
堂園平遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 古代 中・近世	礫群 集石、土坑 土坑	ナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、石核、細石刃核、細石刃、ハンマーストーン早期貝殻条痕文土器、押型文土器、塞ノ神A式、苦浜式、右京西式、鎌石橋式、轟A・B式、深浦式、中期条痕文土器、春日式、凹線文系土器、指宿式、市来式、上加世田式、入佐式、無刻目突帯文土器、耳栓、蛇紋岩製垂飾品 須恵器、土師器、内黒土師器、内赤土師器 陶磁器				
遺跡の概要	旧石器時代・縄文時代を中心に近世の時期にわたる遺構・遺物が出土した。旧石器時代の遺構は礫群9基がみられ、遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・スクレイパー・細石刃核など良好な資料が得られた。また、縄文時代の遺物は各時代の土器が出土している。なかでも塞ノ神A式、早末前初の条痕文土器群、轟B式の出土がやや多く、形態にもバリエーションがみられる。また、古代の時期ではほぼ完形に復元できる須恵器の壺が大小併せて2個体出土していることも注目される。							



堂園平遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C）建設に伴う堂園平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県日置市東市来町伊作田に所在する。
- 3 発掘調査は建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は平成10年5月6日から平成10年11月10日まで実施し、整理作業及び報告書作成は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成17年度に実施した。
- 5 本書に記載したレベル数値は建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく。
- 6 堂園平遺跡該当地区（I～M-33～37区）の遺跡名・遺物番号は、「堂園平遺跡№1～2717」に加え、一部の遺物の取り上げ番号が「向楯城跡№1～6579, 7001～8323, 8501～8624」となっている。整理作業の都合上、上記の向楯城跡の遺跡名を「堂園平遺跡1～6579, 7001～8323, 8501～8624」に変更し、堂園平遺跡№1～2717を9001～11717に変更した。また平成8年度の確認調査の遺物については1トレンチの遺物を12001～12159, 2トレンチの遺物を12201～12439, 3トレンチの遺物を12501～12537, 4・5・6トレンチの遺物を12551～12642とした。なお、遺物の注記については番号札の遺跡名（略号「向」「堂」）・取り上げ番号のまま注記している。
- 7 遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 8 石器の挿図縮尺は、細石刃核は1／1, その他剥片石器は4／5, 礫石器・大型石器は1／3もしくは1／4を基本とする。挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 9 旧石器・縄文時代の石器実測については、大部分を大成エンジニアリング株式会社に委託し、監修は宮田栄二・寒川朋枝が行った。その他の石器の実測は整理作業員が行った。土器の実測は、寒川、相美伊久雄、整理作業員が行った。
- 10 発掘調査における図面の作成は、一部埋蔵文化財サポートシステム株式会社に委託し、その他を調査担当者の八木澤一郎、横手浩二郎が行った。
- 11 現場写真の撮影は八木澤・横手が行い、出土遺物の写真撮影は吉岡康弘が行った。
- 12 放射性炭素年代測定については株式会社加速器分析研究所に委託して行った。
- 13 本書における執筆分担は、第I～III章、第IV章第1・2・5節は寒川、第IV章第3節、第VI章第1節は宮田、第IV章第4節、第VI章第2節は寒川・相美、第IV章第6節は寒川・関明恵、編集は寒川が行った。
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。
- 15 発掘調査にあたっては、五味克夫氏（鹿児島大学名誉教授）、上村俊雄氏（鹿児島国際大学教授）、本田道輝氏（鹿児島大学助教授）、渡辺芳郎氏（鹿児島大学教授）、柴田博子氏（宮崎産業経営大学助教授）に現地指導をいただいた。

本文目次

巻頭図版	
序 文	
抄 録	
例 言	
目 次	

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	7
第1節 調査の経緯	7
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過（日誌抄）	8
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	12
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	12
第Ⅳ章 発掘調査の成果	17
第1節 調査の方法と成果の概要	17
第2節 遺跡の層序	17
第3節 旧石器時代の調査	21
第4節 縄文時代の調査	73
第5節 弥生～古代の調査	157
第6節 中世～近世の調査	164
第Ⅴ章 分析・同定	166
第Ⅵ章 発掘調査のまとめ	168
第1節 旧石器時代	168
第2節 縄文時代	170
写真図版	175
あとがき	

挿 図 目 次

第1図	南九州西回り自動車道調査遺跡位置図	4	第39図	石核（3類）	60
第2図	堂園平遺跡周辺遺跡位置図	15	第40図	石核（4・5類）	61
第3図	堂園平遺跡周辺地形図	16	第41図	石核（5類）	62
第4図	堂園平遺跡の基本土層柱状模式図	17	第42図	石核（6類）	63
第5図	確認トレンチ・グリット配置図	18	第43図	接合資料(1)	64
第6図	堂園平遺跡土層断面図(1)	19	第44図	接合資料(2)	65
第7図	堂園平遺跡土層断面図(2)	20	第45図	接合資料(3)	66
第8図	旧石器時代礫群検出位置図	22	第46図	石核の出土分布図	66
第9図	旧石器時代の遺構1（1～4号礫群）	23	第47図	ハンマーストーン	67
第10図	旧石器時代の遺構2（5号礫群）	24	第48図	細石刃・細石刃核（1類）	69
第11図	旧石器時代の遺構3（6～9号礫群）	25	第49図	細石刃核（2・3類）	70
第12図	旧石器時代層別遺物出土分布図	27	第50図	縄文時代検出遺構分布図（Ⅲb・Ⅳ層）	73
第13図	黒曜石出土分布状況図	28	第51図	縄文時代の遺構（1～3号集石）	74
第14図	安山岩出土分布状況図	29	第52図	縄文時代の遺構（4号集石）	75
第15図	玉随・タンパク石出土分布状況図	30	第53図	縄文時代の遺構（1・2号土坑）	76
第16図	頁岩出土分布状況図	31	第54図	縄文時代の遺構（3～5号土坑）	77
第17図	ナイフ形石器（1a・1b類）	33	第55図	縄文時代の遺構（6号土坑、柱穴群）	78
第18図	ナイフ形石器（2a類）	34	第56図	縄文時代の遺物出土状況	79
第19図	ナイフ形石器（2b・2c類）	35	第57図	縄文時代の土器1（1・2類）	80
第20図	ナイフ形石器（3類）	37	第58図	縄文時代早期遺物分布状況図	81
第21図	ナイフ形石器（3・4類）	38	第59図	縄文時代の土器2（3・4a・4b類）	82
第22図	ナイフ形石器出土分布図（1・2類）	39	第60図	縄文時代の土器3（4b・4c類）	83
第23図	ナイフ形石器出土分布図（3～5類）	40	第61図	縄文時代の土器4（4d類）	84
第24図	ナイフ形石器（5・6類）	41	第62図	縄文時代の土器5（4e類）	86
第25図	台形石器	42	第63図	縄文時代の土器6（5類）	89
第26図	剥片尖頭器（1類）	44	第64図	縄文時代早期末～前期遺物出土分布図	91
第27図	剥片尖頭器（2類）	45	第65図	縄文時代の土器7（6a・6b類）	92
第28図	剥片尖頭器（3類）	46	第66図	縄文時代の土器8（6c類）	93
第29図	台形石器・剥片尖頭器出土分布図	47	第67図	縄文時代の土器9（6a類）	94
第30図	木葉形尖頭器・三稜尖頭器・搔器	49	第68図	縄文時代前期遺物出土分布図	97
第31図	搔器・削器	50	第69図	縄文時代の土器10（6・7b類）	98
第32図	削器・グレイバー・石錐・二次加工剥片	51	第70図	縄文時代の土器11（7b・7c類）	99
第33図	二次加工剥片	52	第71図	縄文時代の土器12（7a・7b・7c類）	100
第34図	二次加工剥片・使用痕剥片	53	第72図	縄文時代中期遺物出土分布図	102
第35図	尖頭器・搔器・削器の出土分布図	54	第73図	縄文時代の土器13（8類）	103
第36図	石核（1類）	57	第74図	縄文時代の土器14（9a・9b・9c類）	104
第37図	石核（1・2類）	58	第75図	縄文時代の土器15（9c類）	105
第38図	石核（2類）	59	第76図	縄文時代の土器16（9c類）	106

第77図	縄文時代の土器17（9 c 類）	107	第102図	石核（2 a・2 b 類）	139
第78図	縄文時代の土器18（10類）	108	第103図	石核（2 b 類）	140
第79図	縄文時代の土器19（11類）	109	第104図	石核（2 c・3・4 類）	141
第80図	縄文時代中期遺物出土分布図	111	第105図	垂飾品・擦切石器・石斧・礫器出土分 布図	142
第81図	縄文時代の土器20（12 a・12 b・12 c 類）	112	第106図	垂飾品・擦切石器	144
第82図	縄文時代の土器21（13類）	113	第107図	礫器	145
第83図	縄文時代後期遺物出土分布図	116	第108図	石斧・石斧未製品・敲石・砥石	146
第84図	縄文時代の土器22（14～17類）	117	第109図	磨石敲石・石皿出土分布図	147
第85図	縄文時代の土器23（17・18類）	118	第110図	ハンマーストーン・磨石・敲石	148
第86図	縄文時代晩期遺物出土分布図	119	第111図	磨石・敲石	149
第87図	縄文時代の土器24（19～21類）	120	第112図	磨石・敲石	151
第88図	縄文時代の土器25（22～24類・耳栓）	121	第113図	石皿	152
第89図	縄文時代石鏃・石槍出土分布図	125	第114図	石皿	153
第90図	石鏃	126	第115図	古代遺構分布図	157
第91図	石鏃・石槍・石匙	127	第116図	須恵器壺検出土坑図	157
第92図	石匙・楔形石器・スクレイパー・石錐・ 異形石器・二次加工剥片出土分布図	128	第117図	炭化物集中部検出状況図	158
第93図	石匙	129	第118図	溝状遺構検出状況図	159
第94図	石匙・楔形石器・スクレイパー	130	第119図	出土遺物分布状況図	160
第95図	スクレイパー	131	第120図	弥生時代・古代の遺物	161
第96図	スクレイパー	132	第121図	古代の遺物	162
第97図	スクレイパー・石錐	133	第122図	中世～近世の遺物	164
第98図	スクレイパー・異形石器・二次加工剥片	134	第123図	堂園平遺跡調査範囲と残存部分	165
第99図	縄文時代石核出土分布図	136	第124図	堂園平遺跡旧石器時代編年図	169
第100図	石核（1 類）	137	第125図	堂園平遺跡早期末～前期初頭土器編年図	172
第101図	石核（1・2 b 類）	138			

目 次

第1表	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査遺跡一覧表(1)	5	第11表	縄文土器観察表 6	101
第2表	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査遺跡一覧表(2)	6	第12表	縄文土器観察表 7	109
第3表	堂園平遺跡周辺遺跡一覧表	14	第13表	縄文土器観察表 8	110
第4表	旧石器時代遺物観察表 1	71	第14表	縄文土器観察表 9	114
第5表	旧石器時代遺物観察表 2	72	第15表	縄文土器観察表10	122
第6表	縄文土器観察表 1	87	第16表	縄文土器観察表11	123
第7表	縄文土器観察表 2	88	第17表	縄文時代石器石材別・器種別出土数	154
第8表	縄文土器観察表 3	90	第18表	縄文時代石器観察表 1	155
第9表	縄文土器観察表 4	95	第19表	縄文時代石器観察表 2	156
第10表	縄文土器観察表 5	96	第20表	弥生～古代出土遺物観察表	163
			第21表	中世～近世出土遺物観察表	164

図 版 目 次

- | | | | |
|------|---|------|---------------------------------------|
| 図版 1 | 堂園平遺跡遠景 | 図版15 | 旧石器時代の遺物 7 (二次加工剥片) |
| 図版 2 | I～K-35区北壁土層 (a・b・c) 断面図／
I-35区北壁土層 (a) 断面図／調査風景 | 図版16 | 旧石器時代の遺物 8 (石核) |
| 図版 3 | VIII層 1・2号礫群検出状況／VIII層 1号礫群検
出状況／VIII層 2号礫群検出状況 | 図版17 | 旧石器時代の遺物 9 (石核) |
| 図版 4 | VIII層 3号礫群検出状況／VIII層 5号礫群検出状
況／VIII層 6号礫群検出状況／VIII層 7号礫群検
出状況／VIII層 8号礫群検出状況(1)(2)／剥片尖
頭器出土状況 | 図版18 | 旧石器時代の遺物10 (石核・接合資料) |
| 図版 5 | VI層下層 9号礫群検出状況(1)(2)／1号集石検
出状況／IIIb層検出 6号土坑断面／IIIb層検
出 6号土坑完掘状況／IIIb層検出 4・5号土
坑完掘状況／IV層 2号集石検出状況 | 図版19 | 旧石器時代の遺物11 (接合資料) |
| 図版 6 | IIIb層検出 2号土坑断面／IIIb層検出 2号土
坑完掘状況／IIIb層検出 3号土坑断面／IIIb
層検出 3号土坑完掘状況 | 図版20 | 旧石器時代の遺物12 (細石刃・細石刃核・ハン
マーストーン) |
| 図版 7 | 炭化物集中地点／縄文時代遺物出土状況／須
恵器壺検出土坑断面 | 図版21 | 縄文時代の土器 1 (1～4 d類) |
| 図版 8 | IIIb層検出溝状遺構完掘状況／内黒土師器出
土状況／須恵器出土状況／蛇紋岩製垂飾品出
土状況 | 図版22 | 縄文時代の土器 2 (4 b・4 e類) |
| 図版 9 | 旧石器時代の遺物 1 (ナイフ形石器) | 図版23 | 縄文時代の土器 3 (5・6 a類) |
| 図版10 | 旧石器時代の遺物 2 (ナイフ形石器) | 図版24 | 縄文時代の土器 4 (6 a・6 b類) |
| 図版11 | 旧石器時代の遺物 3 (ナイフ形・台形石器) | 図版25 | 縄文時代の土器 5 (6 c・7類) |
| 図版12 | 旧石器時代の遺物 4 (剥片尖頭器) | 図版26 | 縄文時代の土器 6 (7 b類) |
| 図版13 | 旧石器時代の遺物 5 (剥片尖頭器・木葉形尖
頭器・三稜尖頭器) | 図版27 | 縄文時代の土器 5 (8・9類) |
| 図版14 | 旧石器時代の遺物 6 (搔器・スクレイパー・二
次加工剥片) | 図版28 | 縄文時代の土器 6 (9・10類) |
| | | 図版29 | 縄文時代の土器 7 (9 c・11類) |
| | | 図版30 | 縄文時代の土器 8 (12・13類) |
| | | 図版31 | 縄文時代の土器 9 (14～18類) |
| | | 図版32 | 縄文時代の土器10 (19・21類) |
| | | 図版33 | 縄文時代の土器11 (22～24類・耳栓) |
| | | 図版34 | 縄文時代の石器 1 (石鏃・石槍・石匙) |
| | | 図版35 | 縄文時代の石器 2 (楔形石器・スクレイパー・
石錐・二次加工剥片) |
| | | 図版36 | 縄文時代の石器 3 (石核) |
| | | 図版37 | 縄文時代の石器 4 (垂飾品・礫器・石斧類) |
| | | 図版38 | 縄文時代の石器 5 (磨石・敲石・砥石・石皿) |
| | | 図版39 | 古代～中世の遺物 1 |
| | | 図版40 | 古代～中世の遺物 2 |

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は20,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出した。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は3,100㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は10,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早

期・後期)、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早期で遺構は、道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

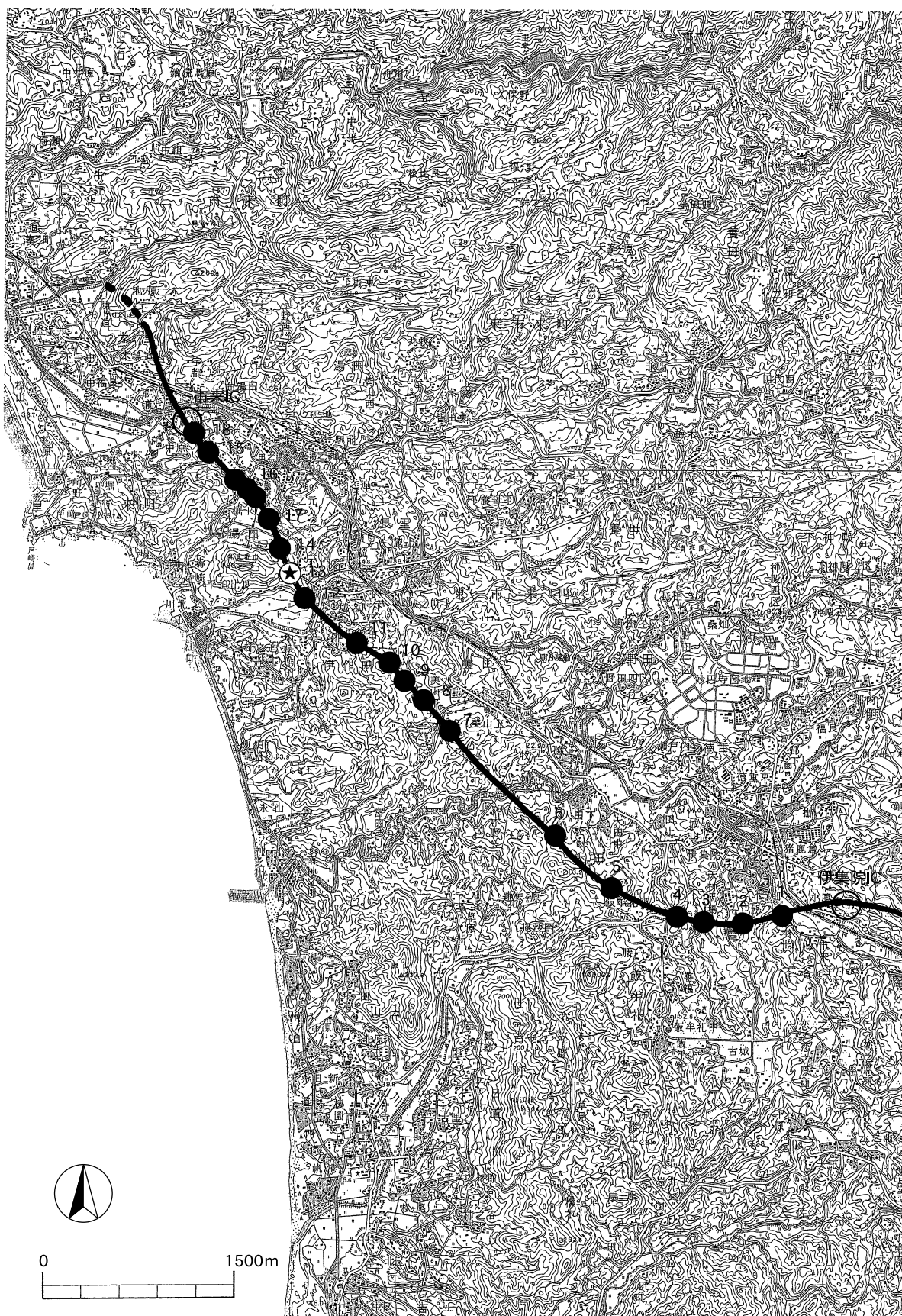
- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・搦鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭……東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山……東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は3,100㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・椀）、染付（椀・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引……東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鑄羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向柵城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帶曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。遺跡面積は2,900㎡で、そのうち調査対象面積は2,000㎡で、近世～旧石器時

代にわたる時期ののべ調査面積は6,000㎡である。旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。本報告書で詳述する。

- 14 今里……………東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は11,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……………市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は95,850㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……………市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は4,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

刊行報告書

- 『一ノ谷遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31） 2001.3
『池之頭遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32） 2002.3
『今里遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33） 2002.9
『市ノ原遺跡（第1地点）』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49） 2003.3
『犬ヶ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50） 2003.3
『上ノ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（62） 2003.3
『下永迫A遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72） 2004.3
『永迫平遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（93） 2005.3
『柳原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（94） 2005.3
『大田城跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95） 2005.3



第1図 南九州西回り自動車道調査遺跡位置図

第1表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(1) (伊集院 I C～市来 I C)

番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査員	時代	概要
①	一ノ谷	日置市伊集院町下谷口	1250m ²	確認平成8.10 全面H8.10～11	三垣・桑波田	中世～近世	掘立柱建物跡・土坑・陶磁器 県埋文センター報告書31 2001年刊行
②	永迫平	日置市伊集院町下谷口	20000m ²	確認H8.10～12 全面H8.10～H10.7	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原・ 桑波田・川口・大窪	旧石器 縄文 古代～近世	礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑、前平式・吉田式 青磁・土師器・陶磁器 県埋文センター報告書93 2005年刊行
③	下永迫	日置市伊集院町下谷口	3100m ²	確認H9.10 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石、須恵器・土師器 青磁・白磁 県埋文センター報告書72 2004年刊行
④	柳原	日置市伊集院町下谷口	10000m ²	確認H9.11 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土、須恵器・土師器・鉄製品 ピット・溝状遺構、陶磁器 県埋文センター報告書95 2005年刊行
5	上山路山	伊集院町大田	6300m ²	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生～古墳	剥片・碎片 道跡・集石、 成川式土器
⑥	大田城	伊集院町大田	3500m ²	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三稜尖頭器 集石・土坑、前平式・石鏃・磨石 県埋文センター報告書95 2006年刊行
7	堂平窯	東市来町美山	3500m ²	確認H10.2 全面H10.8～12	池畑 池畑・繁昌・宮田・森田・ 元田他	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	7500m ²	確認H9.8 全面H10.8～11 全面H12.7～8	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ・台形石器・石核・細石刃核・細石刃 集石、前平式・吉田式・出水式・黒川式土器 成川式土器 県埋文センター報告書32 2002年刊行
⑨	雪山	東市来町美山	3100m ²	確認H12.6 全面H12.6～8	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳 近世～近代	前平式・春日式・石鏃・磨石・敲石・石皿 成川式土器 窯道具・焙烙・石臼・陶磁器・砥石・鉄製品 県埋文センター報告書53 2003年刊行
⑩	猿引	東市来町長里	800m ²	確認H12.5 全面H12.5～6	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	礫群、剥片尖頭器・ナイフ・細石刃核 官畑式・石斧・磨石・敲石 県埋文センター報告書53 2003年刊行
⑪	犬ヶ原	東市来町伊作田	2700m ²	確認H9.2, H10.6 全面H11.11～H12.2	池畑・三垣 牛ノ瀨・橋口・大窪	旧石器 縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・剥片 黒川式土器・石斧・石皿・石鏃 掘立柱建物跡・竪穴遺構、須恵器・土師器 県埋文センター報告書50 2003年刊行

○印 報告書刊行済

第2表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(2) (伊集院 I C～市来 I C)

番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査員	時代	概要
12	向椿城	東市来町伊作田	16000m ²	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.7～8	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・隆帯文・前平式・市来式土器 竪穴住居跡、成川式土器 空堀・帶曲輪・曲輪・堀切・竪穴遺構・掘立柱 建物跡・炉跡・土坑、青磁・備前焼・鉄製品
⑬	堂園平	東市来町伊作田	60000m ²	確認H8.11～12 全面H10.5～11	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代ほか	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群、細石刃核・細石刃 集石、塞ノ神式・溝式・深浦式・春日式土器他 土坑、須恵器・土師器 県埋文センター報告書104 2006年刊行
⑭	今里	東市来町伊作田	11000m ²	確認H8.11～12 全面H10.5～11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古墳	礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・ブランク・調整剥片 集石、前平式・深浦式・出水式・黒川式土器 成川式土器 県埋文センター報告書33 2002年刊行
⑮	市ノ原 1地点	市来町大里	12000m ²	確認H8.10～12 全面H9.4～H10.3	繁昌・西園・宮田 寺師・藤野	縄文 弥生 古代	集石、前平式・春日式・黒川式・玦状耳飾り 埋甕 掘立柱建物跡・土坑・溝・須恵器・墨書土器 県埋文センター報告書49 2003年刊行
16	市ノ原 2～4地点	東市来町湯田	66150m ²	確認H8.10～12 全面H8.12～H9.3 全面H9.4～H10.3 全面H10.5～H11.3 全面H11.5～7	繁昌・西園・宮田 繁昌・西園・宮田・池畑 宮田洋・前野・上之園 八木澤・三垣・元田・西村 松村・松崎	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	礫群、ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石 竪穴住居跡・壺棺・土坑、高橋式・成川式土器 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構、須恵器・土師器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉、陶磁器
17	市ノ原 5地点	東市来町湯田	17700m ²	確認H8.10～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.5～H11.3	繁昌・西園・宮田 森田・中原 寺原・松村	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群、ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 落とし穴・集石、前平式・押型文・深浦式 弥生土器・成川式土器 道跡、須恵器・土師器・滑石製石鍋
⑯	上ノ原	市来町大里	4000m ²	確認H8.11 全面H10.7～9	繁昌・西園・宮田 上之園・栗林	縄文 古墳 古代～中世	集石・土坑、塞ノ神式土器 竪穴住居跡・土坑・貝殻土坑、成川式土器 須恵器・土師器・青磁 県埋文センター報告書62 2003年刊行

○印 報告書刊行済

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

堂園平遺跡については、平成8年11月20日から平成8年12月14日（実働16日）まで確認調査を行い、遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて、平成10年5月6日から平成10年11月10日まで（実働82日）の本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図った。調査対象面積は6,000㎡である。なお、整理作業及び報告書作成は17年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

平成8年度調査体制（確認調査）

事業主体者：建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所

調査主体者：鹿児島県教育委員会

企画・調整：鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画者：	次長兼総務課長	尾崎 進
	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
	調査課長補佐	新東晃一
調査企画・担当者：	主任文化財主事兼第三調査課長	池畑耕一
調査担当者：	文化財調査員	湯之前尚
	文化財調査員	西園勝彦
調査事務担当：鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	成尾雅明
	主査	前屋敷裕徳
	主事	迫立ひとみ

平成10年度調査体制（本調査）

事業主体者：建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所

調査主体者：鹿児島県教育委員会

企画・調整：鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
----------------------	----	------

調査企画者：	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
--------	---	---------	------

〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
---	--------------	------

〃	調査課長補佐	新東晃一
---	--------	------

〃	主任文化財主事兼第三調査課長	池畑耕一
---	----------------	------

調査担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	八木澤一郎
----------------------	--------	-------

〃	文化財研究員	横手浩二郎
---	--------	-------

発掘事務担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	前屋敷裕徳
------------------------	----	-------

〃	主査	政倉孝弘
---	----	------

〃	主事	溜池佳子
---	----	------

平成17年度体制（整理・報告書作成）

事業主体者：国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

作成主体者：鹿児島県教育委員会

作成責任者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今常雄
----------------------	----	------

作成企画者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長	有川昭人
----------------------	----	------

〃	次長兼調査課長	新東晃一
---	---------	------

〃	調査第二課長	立神次郎
---	--------	------

〃	調査第二課第二調査係長	牛ノ濱修
---	-------------	------

作成担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	寒川朋枝
----------------------	--------	------

作成事務担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	主幹兼総務係長	平野浩二
------------------------	---------	------

〃	主査	寄生田正秀
---	----	-------

報告書作成検討委員会	平成17年12月20日	上今所長ほか	10名
------------	-------------	--------	-----

報告書作成指導委員会	平成17年12月13日	新東次長ほか	7名
------------	-------------	--------	----

企画担当者 宮田栄二・八木澤一郎

第3節 調査の経過（日誌抄）

調査の経過は日誌抄により略述する。

確認調査

平成8年11月20日から12月14日まで向楢城跡と同時に実施した（実働16日）。確認トレンチを6か所に設定し、掘り下げを行った。その結果、古代の土師器、縄文時代早期・前期（曽畑式）・後期（市来式）土器や石器と集石、旧石器時代では剥片尖頭器、細石刃核などが出土した。

本調査 平成10年5月6日（水）～11月10日（火）

平成10年5月6日（水）～5月8日（金）

表土深度確認トレンチ 2 本設定。確認調査時のトレンチ清掃。

平成10年 5 月11日（月）～ 5 月15日（金）

I・J-34・36・37, J・K-38・39区の表土剥ぎ, アカホヤ上面検出。

平成10年 5 月18日（月）～ 5 月22日（金）

アカホヤ層上面コンタ図作成。I～L-34～36区アカホヤ層（Ⅲ層）掘り下げ, 出土遺物取り上げ。K-35区炭集中部平面実測。L-36区Ⅲb層検出円形遺構掘り下げ, 写真撮影。

平成10年 5 月25日（月）～ 5 月28日（木）

I～L-35・36区Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ, 遺物取り上げ。K-35区炭集中部遺物取り上げ後, 掘り込みを掘り下げ。J-35区Ⅲa層古代須恵器集中部掘り下げ。

平成10年 6 月 1 日（月）～ 6 月 5 日（金）

I～L-35・36区Ⅲb層掘り下げ, 遺物取り上げ。K-36区Ⅲb層検出土坑掘り下げ, 断面写真撮影, 北久根山式土器出土状況写真撮影。K-36区炭集中部掘り込み断面図作成。I・J-35区, L-36区, Ⅲb層検出チップ集中域掘り下げ。

平成10年 6 月 8 日（月）～ 6 月12日（金）

I～L-35～37区Ⅲb層掘り下げ（I～K-35・36区Ⅲb層 2 mで千鳥掘り）, 遺物取り上げ。K-35区炭集中部完掘。

平成10年 6 月15日（月）～ 6 月19日（金）

I・J・K-35・36区Ⅲb層掘り下げ, 遺物取り上げ。K・L-36区出土土坑 1～3 半截掘り下げ, 断面写真撮影, 実測。J-35区Ⅲa層出土古代須恵器写真撮影。姫島産黒曜石フレーク出土。

平成10年 6 月22日（月）～ 6 月26日（金）

I～L-35・36区Ⅲb層掘り下げ, 遺物取上げ。土坑 1～3 完掘, 写真撮影終了。I・J-35区Ⅲb層検出土坑 4・5 実測。

平成10年 6 月30日（火）～ 7 月 3 日（金）

I～K-36・37区Ⅲb層・Ⅳ層, L-36区Ⅲb層掘り下げ。I～L-35・36区Ⅲb層遺物取上げ。土坑 4・5 掘り下げ。I-36区Ⅲb層検出ピット 1・2 掘り下げ。

平成10年 7 月 6 日（月）～ 7 月10日（金）

I～L-34・35区先行トレンチ設定, Ⅷ層まで掘り下げ。I・J-36区Ⅲc・Ⅳ層掘り下げ。I～L-34～36区Ⅲa・Ⅲb層出土遺物取上げ。I-34・35区Ⅳ～Ⅷ層出土遺物取上げ。土坑 5 の小ピット（土坑 6）より板石出土, 写真撮影。J～L-35区, L-36区Ⅲb層検出ピット配置図, 断面実測図作成。

平成10年 7 月14日（火）～ 7 月17日（金）

I～K-36区先行トレンチ設定, 掘り下げ。J～L-35区, L-36区Ⅲb層検出ピット掘り下げ。土坑 4 完掘状況写真撮影。土坑 5 実測終了。

平成10年 7 月20日（月）～ 7 月24日（金）

I・J・L-35・36区Ⅲb層掘り下げ。I～K-35・36区Ⅲb層出土遺物取り上げ。J-35区Ⅲb層検出土坑 6 実測終了。向柵城跡部分調査開始。J～L-35区Ⅲb層検出ピット完掘, 写真撮影。

平成10年 7 月27日（月）～ 7 月29日（水）

I～K-34・35区北壁土層断面図作成。I-35区Ⅲb層，J・K-35・36区Ⅳ層掘り下げ。I～K-35・36区Ⅲa・Ⅲb層出土遺物取り上げ。

平成10年8月3日（月）～8月7日（金）

I～K-35区Ⅳ・Ⅴ層，L-36区Ⅲb層掘り下げ。I～L-35・36区Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ～Ⅵ層出土遺物取り上げ。J-35区Ⅲb層検出須恵器出土土坑掘り下げ，実測，写真撮影。I～K-35区土層観察用ベルト掘り下げ。I・K-35区Ⅳ層出土集石1・2写真撮影後，実測。

平成10年8月10日（月）～8月14日（金）

J・K-34区Ⅳ層，I～K-35区Ⅴ層，L-35・36区Ⅲb層掘り下げ。J～L-34～36区Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ層出土遺物取り上げ。

平成10年8月17日（月）～8月20日（木）

I～L-34・35区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。L-35区Ⅲb層検出ピット57・58・59半截，ピット57は実測図作成。I・J-34・35区Ⅱ・Ⅲ層，I～K-35・36区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物取り上げ。

平成10年8月24日（月）～8月28日（金）

I～L-34～36区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。K-34区Ⅳ層検出集石3実測。

平成10年9月1日（火）～9月4日（金）

J～L-35・36区Ⅴ層掘り下げ。K・L-34・35区Ⅲb～Ⅴ層遺物取り上げ。L-36区先行トレンチ設定，掘り下げ。L-35区Ⅲb層検出焼土写真撮影，実測，掘り下げ。

平成10年9月7日（月）～9月11日（金）

I～K-34・35・36区Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ。I～K-36，J-37区Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層遺物取り上げ。J-35，J-36・37区に先行トレンチ（東西方向）設定，掘り下げ。Ⅷ層礫群検出。

平成10年9月14日（月）～9月18日（金）

I・J-34～36区Ⅵ・Ⅶ層下部，J・K-35区Ⅷ層掘り下げ。I～K-34～36区Ⅵ～Ⅷ層遺物取り上げ。I-35区Ⅵ層下部出土剥片尖頭器出土状況写真撮影。I-35区Ⅵ層出土礫群実測。

平成10年9月21日（月）～9月25日（金）

I・J-34～36区Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ。I-36区完掘。J-35区Ⅷ層検出礫群実測。J-35・36区Ⅷ層検出ブロック出土状況写真撮影。

平成10年9月28日（月）～10月2日（金）

I・J-34～36区Ⅷ層掘り下げ。I-35完掘。I-34，I・J-35・36区Ⅷ層礫群検出。検出ブロック掘り下げ，遺物取り上げ。L-34・35区土層観察用ベルト掘り下げ。

平成10年10月5日（月）～10月9日（金）

I-34・35，J-35区Ⅷ層掘り下げ，検出ブロック遺物取り上げ。隣接する向楯城跡の調査開始。本田道輝鹿児島大学助手，渡辺芳郎鹿児島大学助教授（6日），上村俊雄鹿児島大学教授（9日），現地指導。

平成10年10月12日（月）～10月16日（金）

I-34・35，J-35区Ⅷ層掘り下げ。J-35区掘り下げ，遺物取り上げ。K・L-34区下層確認トレンチ遺物取り上げ。I・J-35区Ⅷ層検出礫群写真撮影。五味克夫鹿児島大学名誉教授（13日），柴田博子宮崎産業経営大学助手（16日），現地指導。

平成10年10月19日（月）～10月23日（金）

L－34・35区，M－34～36区表土剥ぎ後Ⅲ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。

平成10年10月27日（火）～10月30日（金）

L・M－34～36区Ⅲb層掘り下げ，出土遺物取り上げ。I－36・J－35区Ⅷ層検出礫群実測。

平成10年11月2日（月）～11月10日（火）

L・M－35・36区Ⅲ層掘り下げ，遺物取り上げ。堂園平遺跡部分終了後，向楯城跡へ移動。

整理・報告書作成事業の概要

堂園平遺跡の整理・報告書作成作業は，平成17年3月～12月に行った。また，本田道輝氏（鹿児島大学法文学部助教授）に遺物指導をいただいた。

整理作業従事者：蔵元真奈美，野間尚美，日高千津子，藤本恵子，松元康子（50音順，敬称略）



平成8年度確認調査風景

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

堂園平遺跡は日置市東市来町伊作田に所在する。遺跡の所在する東市来町は、薩摩半島のほぼ中央部、日置市の北西部に位置し、南西には東シナ海に面している。東は郡山町、南は伊集院町・日吉町、北は市来町・薩摩郡樋脇町に接する。北東部・北部には重平山・中岳・矢岳などの山が連なり、大里川・江口川・神之川が町を貫流する。江口川は標高522mの重平山に源を発して町の中央部を貫流し、東シナ海に注いでいる。これらの川の流域に沿って水田が形成され、畑地はその丘陵に分布するが、大半はシラス台地である。また、江口浦の海岸は砂丘の発達がみられず、風雨による浸食作用によりシラスの山肌をさらしており、「江口蓬萊」の名がある。

堂園平遺跡は東市来町伊作田の標高180mの遠見番山から下る南東の斜面の裾部にある。標高約50mの平坦部に位置し、南側には浅い谷を隔てて向楢城を望む。約300mほど南部には東西に江口川が貫流し、河口である江口浜までは直線距離で約1.5kmである。

第2節 歴史的環境

東市来町内の遺跡は、昭和59年度発行の遺跡地名表では15ヶ所が紹介されているのみであったが、平成3年度以降の北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査、東市来町による県営圃場整備事業・農道整備事業等に伴う発掘調査、平成8年度以降の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、遺跡数は増加し、現在では92ヶ所の遺跡が周知されている。周辺遺跡と合わせて紹介する。

旧石器時代

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し、ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー、細石刃期の細石刃・細石刃核が出土している。特に細石刃核は101点と多く出土し、分類・編年が行われ重要な資料となっている。猿引遺跡は、長里の標高約110から115mの尾根上の台地に所在し、ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石核や細石刃がみつかった。向楢城跡は、堂園平遺跡の南隣の標高約50mの独立した台地上に所在し、剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し、縄文時代後期の住居跡2基・土坑・炉跡などが検出され、遺物には平椀式・塞ノ神式・深浦式・春日式・出水式・西平式・黒川式・夜臼式・高橋Ⅰ式土器等が出土している。今里遺跡は、早期の集石と早期～晩期の土器が多くの石器と出土しており、特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡は古墳時代を主体とする遺跡であるが、縄文時代早期の集石8基と前平・吉田・石坂式・春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器も出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器が出土している。向楢城跡は、西側遠方に東シナ海を望む良好な景観をもつシラス台地に築かれており、草創期の配石遺構・集石が隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧などが出土している。また、前期～晩期の轟・阿高・市来・黒川式土器も出土している。市ノ原遺跡は、調査面積95,850㎡と広範囲の遺跡で、早期～晩期の多種多様な遺構・遺物がみられ

る。特殊なものとしては、竹崎式土器、耳飾、三角埴土・石製品などがある。

弥生～古墳時代

弥生時代の遺跡は少ないが、市ノ原遺跡では竪穴住居や壺棺が高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式と共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く、住居跡は市ノ原遺跡で7基、向楯城跡で11基みられる。老ノ原遺跡では、同一層内から須恵器と成川式土器が出土しており、成川式土器の下限を考える資料になるとされている。池之頭遺跡では狭い尾根上に成川式土器が出土しており、住居跡などの遺構がみられず手捏ね土器の出土が多いことから、祭祀場などの可能性が指摘されている。

古代～近世

堂園平遺跡が所在する東市来町と隣接する市来町は、古代においては薩摩国日置郡に属していたと考えられている。この地は市来院に属し、宝亀年間（770～780）以降、郡司の大蔵氏一族が支配し市来氏を称した。市ノ原遺跡では、第1地点で掘立柱建物跡15棟が検出され、墨書土器も100点以上出土し「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。

南北朝内乱期に入ると、北朝方の足利尊氏から市来院地頭職に任ぜられた島津貞久と対立が続き、市来氏は鶴丸城に拠ったが、興国二年（1341）鶴丸城は島津貞久の軍によって落城した。また、鶴丸城には天文19年（1550）にフランシスコ＝ザビエルが立ち寄り布教活動を行っている。中世山城は、戦乱が激化する南北朝期から増加する。堂園平遺跡の南側には向楯城跡があり、江口川を挟んで南に楯城跡、南西に伊作田城跡、東に平ノ城、鶴丸城、といくつかの中世山城を望む。伊作田城跡では帯曲輪の構築が確認されたほか、古墳時代の遺跡の存在が確認されている。向楯城跡では、堂園平遺跡を挟んで大規模な帯曲輪・曲輪や2本の空堀が検出され、福郭域には炉跡・土坑・堀切・通路状遺構などの遺構と輸入陶磁器や国内産陶磁器などが出土した。

また、東市来町内には多くの窯跡が確認されている。その発祥は、1592～1598年に豊臣秀吉の名によって行われた朝鮮出兵（文禄・慶長の役）で、出兵した島津義弘が帰国に際して朝鮮の陶工らを招来したことにはじまる。このとき、陶工らの大部分は串木野市島平に上陸したが、一団10名ほどは神之川に着き、やがて苗代川（美山）に屋敷を与えられて作陶に従事することとなった。

堂園平遺跡の北西に隣接する遠見番山は、近世には異国船の往来・漂着を監視する遠見番所が置かれ、郷士が2名ずつ交代で勤務し異国船の監視に当たった。遠見番山の山頂には古くは弁財天が祀られており弁財天岳と呼ばれていたが、近世後期になって遠見番所が置かれてから遠見番山といわれるようになった。

引用・参考文献

『東市来町郷土誌』1985 東市来町教育委員会

『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）』1992 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書61

『今里遺跡』2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33

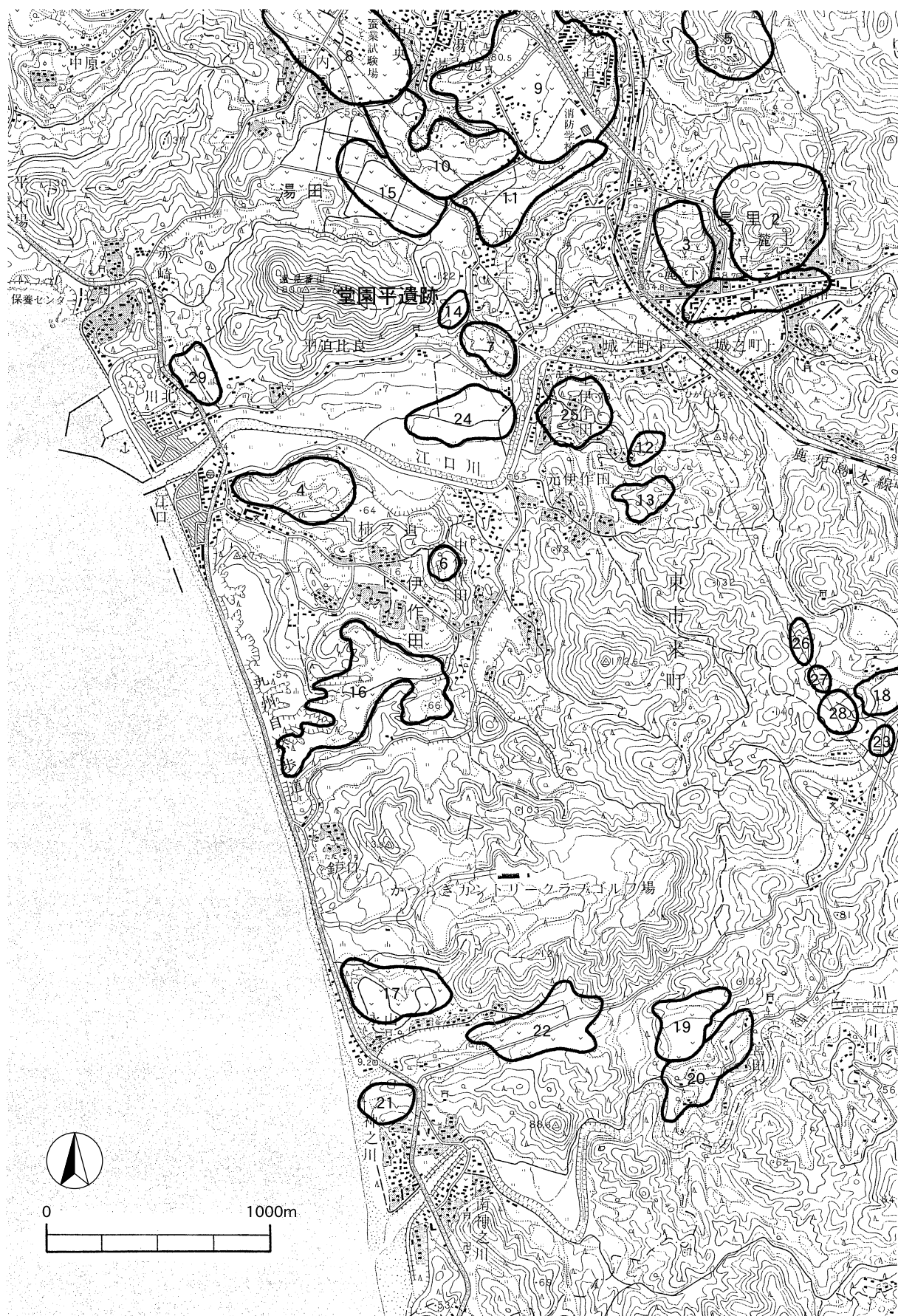
『老ノ原遺跡』1996 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書8

『猿引遺跡・雪山遺跡』2003 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53

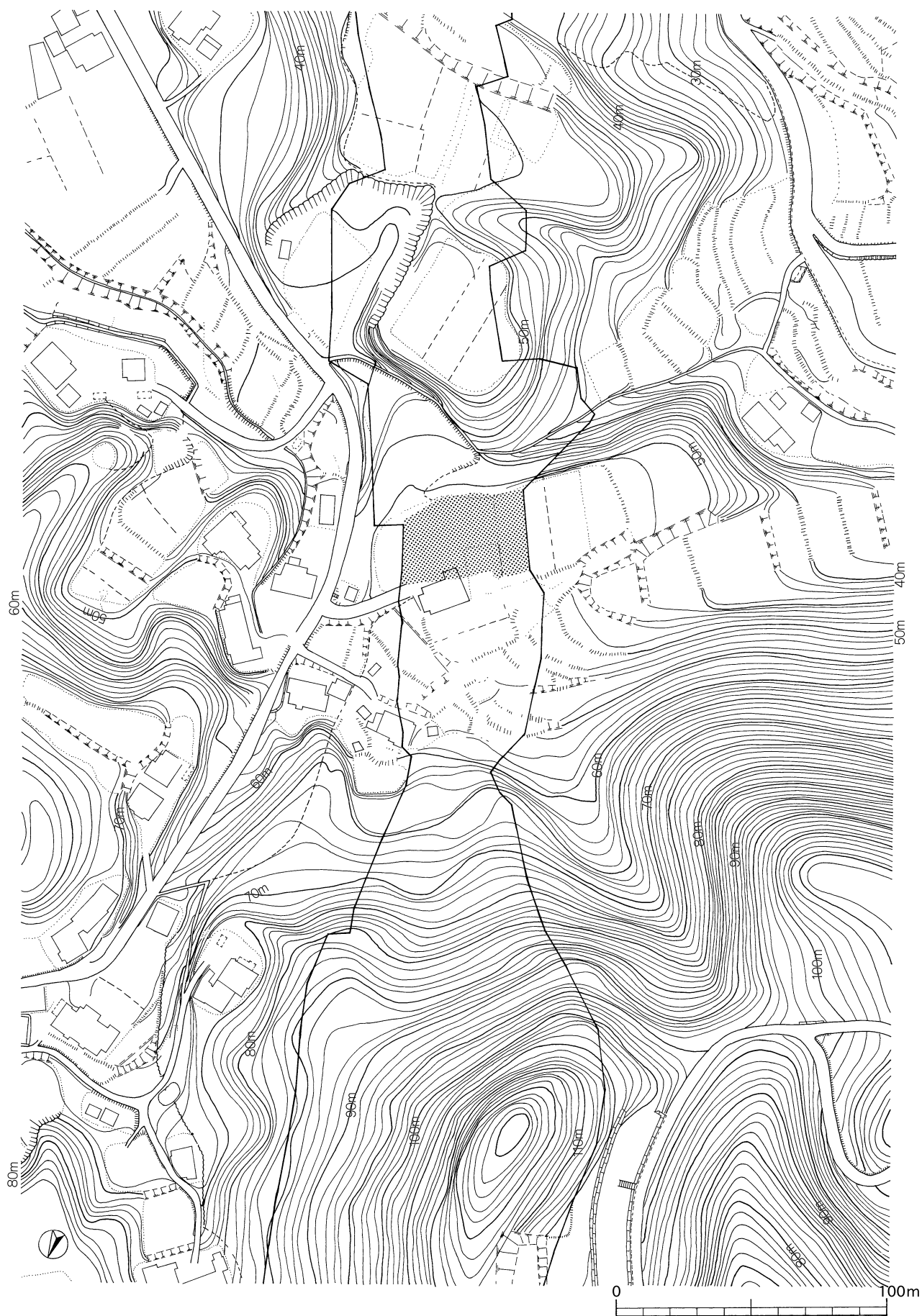
『犬ヶ原遺跡』2003 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書50

第3表 堂園平遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	29-3	大日寺跡	長里本寺	山麓	鎌倉	仁王像・墓塔他	
2	29-4	鶴丸城跡	長里鶴丸小学校一帯	山麓	平安～室町	空堀・土塁・礎石	
3	29-17	平之城	長里字平之城	丘陵平地	南北朝～室町	空堀・古墓塔	中世城館跡
4	29-18	伊作田城	伊作田字浜之丸	丘陵平地	南北朝～室町	伊崎田道材居城	中世城館跡
5	29-19	古城	長里字古城原	山頂平地		石塁	中世城館跡
6	29-22	椿城	伊作田字椿原	山頂平地			中世城館跡
7	29-23	向椿城	伊作田字上椿	丘陵平地	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 隆帯文・前平式・市来式 竪穴住居跡・成川式土器 空堀・曲輪・竪穴状遺構・炉跡・青磁	中世城館跡
8	29-67	市ノ原	湯田上市ノ原ほか	台地	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・細石刃核 集石・石器 竪穴住居跡・壺棺 竪穴住居跡・土坑・成川式土器 竪穴住居跡・焼土・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉・白磁・青磁	H3.北薩・伊佐分布 西回り自動車道
9	29-68	諏訪原	湯田諏訪原ほか	台地	古墳・中世	土師器・陶器・染付	H3.北薩・伊佐分布
10	29-69	森蘭平	長里森蘭平ほか	台地斜面	弥生・古墳 中世	弥生式土器・成川式土器 土師器・須恵器	H3.北薩・伊佐分布
11	29-70	浦田	長里浦田（一）ほか	台地	古墳・中世	成川式土器・土師器	H3.北薩・伊佐分布
12	29-72	犬ヶ原	伊作田犬ヶ原（一）ほか	丘陵	旧石器 縄文 中世・近世	細石刃核・細石刃 黒川式・石鏃 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器	H3.北薩・伊佐分布
13	29-73	金木山	伊作田金木山ほか	丘陵	古墳・近世	成川式土器・陶器	H3.北薩・伊佐分布
14	29-74	堂園平	伊作田堂園平	台地	旧石器 縄文 古代	剥片尖頭器・ナイフ・台形石器・細石刃核 条痕文・墓之神式・轟式・春日式・市来式・後晩期土器 土師器・須恵器	西回り自動車道
15	29-75	今里	伊作田今里ほか	台地	旧石器 縄文 古墳 中世・近世	尖頭器・ナイフ・細石刃核 集石・前平式・深浦式・出水式 成川式土器 土師器・陶器・磁器	西回り自動車道
16	29-76	老ノ原	伊作田東老ノ原ほか	台地	旧石器 弥生・古墳 中世	細石刃・細石刃核 弥生式土器・成川式土器 土師器・染付	H3.北薩・伊佐分布
17	29-77	立元原	伊作田立元原ほか	追頭	弥生 古墳 中世・近世	弥生式土器 成川式土器 土師器・陶器	H3.北薩・伊佐分布
18	29-76	池之平	美山池之平ほか	丘陵	古墳・近世	成川式土器・土師器・陶器	H3.北薩・伊佐分布
19	29-80	原	宮田原ほか	丘陵	弥生 古墳 中世・近世	弥生式土器 成川式土器 土師器・陶器	H3.北薩・伊佐分布
20	29-81	馬通	美山馬通ほか	台地	弥生 古墳 近世	弥生式土器 成川式土器 土師器・陶器	H3.北薩・伊佐分布
21	29-82	力石ヶ原	神之川力石ヶ原ほか	後背砂地	縄文・弥生・古墳・中世	土器・土師器・青磁・陶器	H3.北薩・伊佐分布
22	29-83	浜之丸	神之川浜ノ丸	丘陵斜面	古墳・中世	成川式土器・土師器	H3.北薩・伊佐分布
23	29-84	堂平窯跡2号窯	美山堂平	台地	近世	陶器・窯道具	H3.北薩・伊佐分布
24	29-85	西原持原	養母	台地	古墳・中世		H.8農整分布
25	29-89	赤平	長里	台地			西回り自動車道
26	29-90	猿引	長里	台地	旧石器 縄文	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器・細石刃 曾畑式・石斧	西回り自動車道
27	29-91	雪山	美山	台地	縄文 近世～近代	集石・前平式・春日式 陶器・磁器・瓦・窯道具	西回り自動車道
28	29-92	池之頭	美山	台地	旧石器 縄文 古墳	ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 集石・前平式・春日式 成川式土器	西回り自動車道
29	29-96	菖蒲河内	江口	台地		土器・青磁	H.11農整分布



第2図 堂園平遺跡周辺遺跡位置図



第3図 堂園平遺跡周辺地形図

第Ⅳ章 発掘調査の成果

第 1 節 調査の方法と成果の概要

調査に先立ち、平成 8 年度の堂園平遺跡の緊急発掘調査の際、約 2 × 5 m の 6 本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果、2000m²の範囲において旧石器時代ナイフ形石器期から古代の時期に至る、合計 7 枚の包含層が良好に存在することを確認した。調査では、センターラインを基準として設定された 10m × 10m のグリッドラインを延長してグリッドを設定し、南側から重機で表土を剥ぎ、順次掘り下げを行い遺構・遺物の検出を行った。グリッドは向楯城跡も含んで設定し、南東から北西へ 1 ～ 41 区、南西から北東へ A ～ O 区の番号・記号を付した。堂園平遺跡はほぼ 33 ～ 36 区、I ～ M 区に該当する（第 5 図）。

第 2 節 遺跡の層序

本遺跡の基本土層は次の通りであるが、堆積が安定していないところもある。

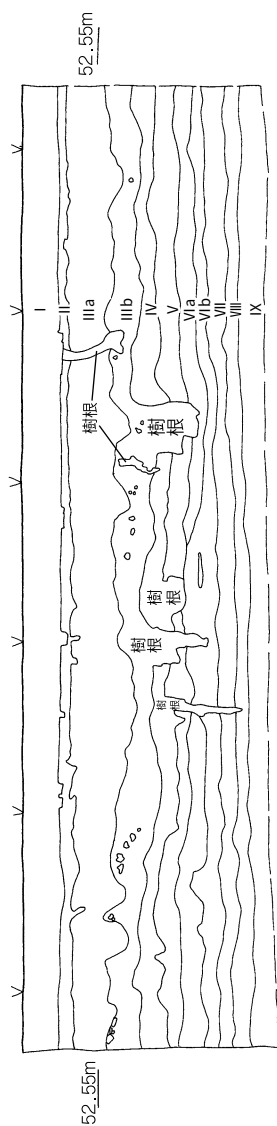
I 層	I 層 耕作土（表層）
II 層	II 層 灰黒褐色砂質土層（主に古代～近世包含層）
III a 層	III a 層 暗茶褐色粘質土層（縄文晩期～古代包含層）アカホヤ火山灰腐植土で粘性が低い。
III b 層	III b 層 黄褐色粘質土層（縄文前期～後期包含層）III a 層と同じく、アカホヤ火山灰腐植土で粘性は低い。明黄褐色微砂質の噴出物がブロック状に混ざる。
IV 層	IV 層 暗褐色粘質土層（縄文早期包含層）III 層の浸潤がみられる。
V 層	V 層 黒褐色砂質土層（縄文早期包含層）硬く粘質があり、サツマ火山灰と思われる白色パミスを含む。
VIa 層 VI 層 VIb 層	VI 層 紫褐色強粘質土層（旧石器時代包含層、主に細石刃文化期）部分的に、下部に漸移層（VIb 層）がみられる。いわゆるチョコ層である。
VII 層	VII 層 黒褐色粘質土層（旧石器時代包含層、主にナイフ形文化期）やや硬く、白色パミスを若干含む。
VIII 層	VIII 層 淡褐色混砂土層（旧石器時代包含層、主にナイフ形文化期）若干粘質がある。
IX 層	IX 層 シラス

第 4 図 堂園平遺跡の基本土層柱状模式図



第5図 確認トレンチ・グリット配置図

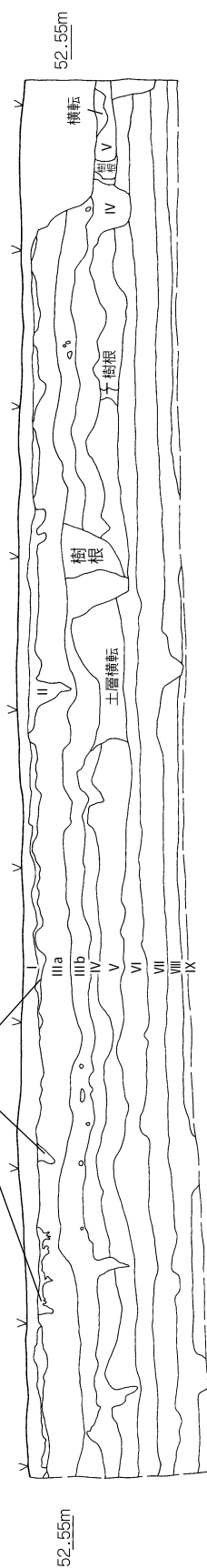
I 35 | J 35



a

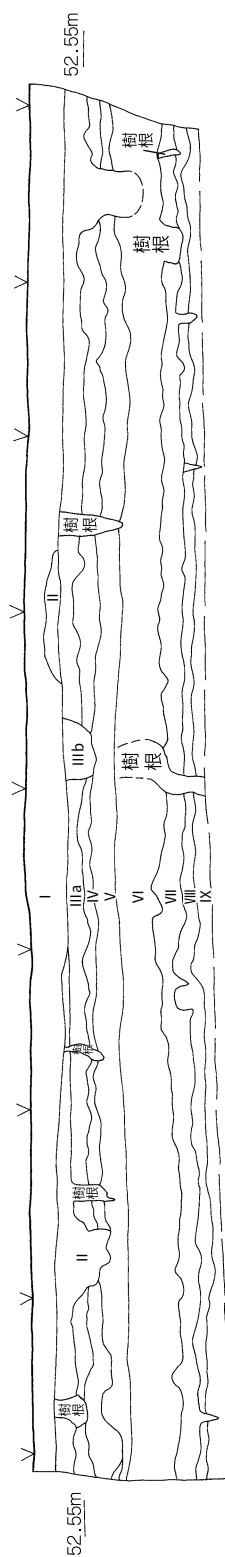
I と IIIa の混

J 34 | K 34

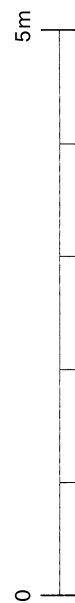


b

K 35 | L 35

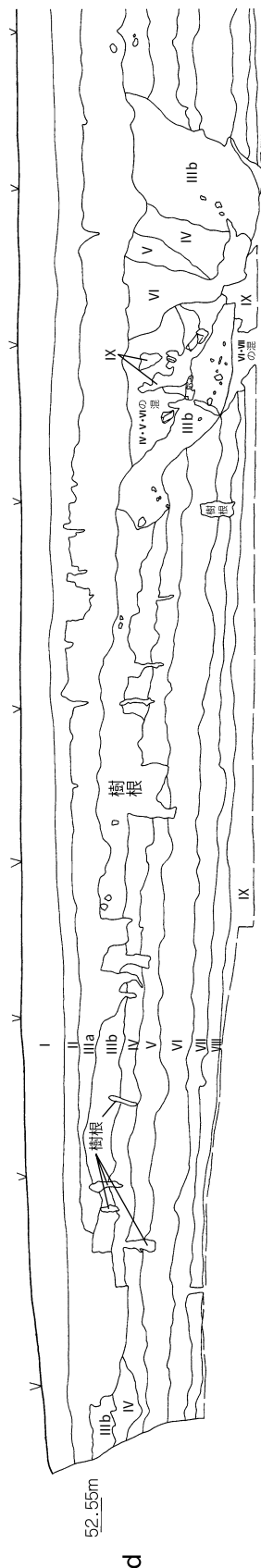


c

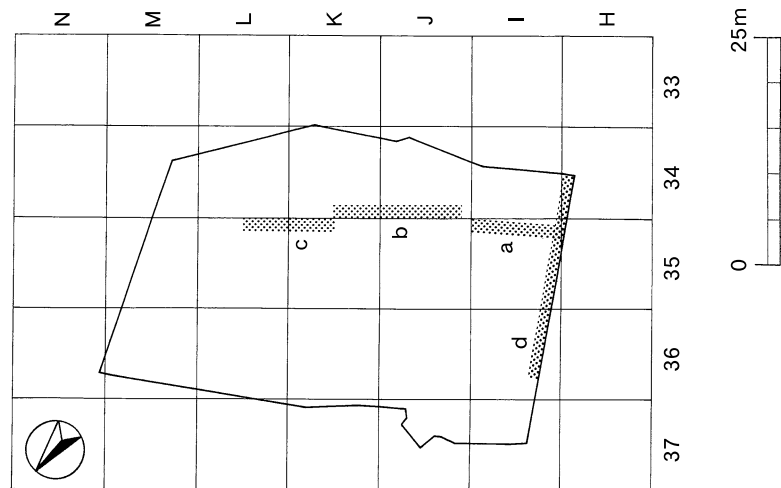
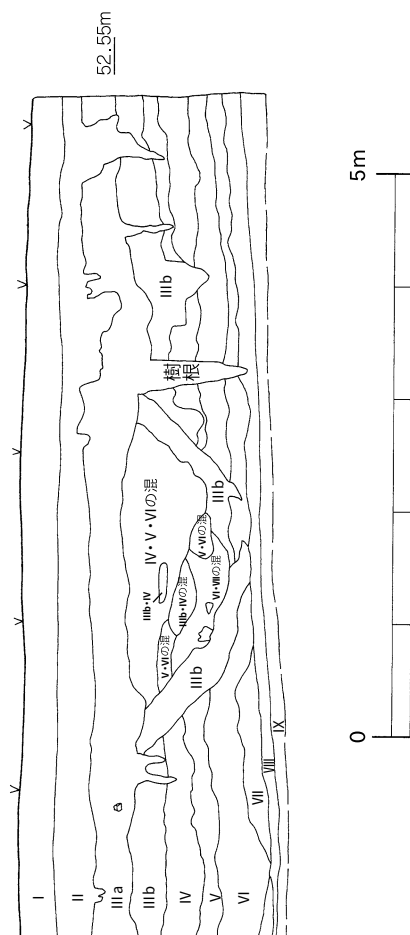


第6図 堂園平遺跡土層断面図(1)

I 34 | I 35



I 35 | I 36



第 7 図 堂園平遺跡土層断面図(2)

第3節 旧石器時代の調査

1. 旧石器時代の概要

旧石器時代に概当する遺構及び遺物はⅥ層、Ⅶ層、Ⅷ層から検出された。遺構は礫群が計9基検出されており、検出面はⅥ層下部とⅧ層下部であり、遺構の検出層位から確実に複数時期と考えられる。石器群の出土分布における視覚的なまとまりを石器群ブロックとして認識し、調査中にⅥ層のブロックとⅧ層のブロックをそれぞれ区別した。その後、整理作業段階において、石器器種や石器石材の出土分布も加味して最終的なブロックとした。ブロックは総数16となった。

旧石器時代の出土遺物は細石刃・細石刃核などの細石刃文化期に属するものと、ナイフ形石器、剥片尖頭器などのナイフ形石器文化期に属するものに大きく区別できる。さらにナイフ形石器文化期のものについては時期的に細分される可能性がみられた。

2. 検出遺構

旧石器時代の遺構は、礫群を9基検出した。礫群はその検出面よりシラス直土のⅧ層下部から8基と、Ⅵ層下部から1基検出されている。時期は異なるが、ここではまとめて説明する。

また石器群ブロックについては別の項目を設けた。

(1) 礫群

検出された礫群は第8図に示すように、調査区の南西側に多く、Ⅰ-35区及びⅡ-35区に集中した分布を示す。

1号礫群

Ⅱ-35、36区の境界付近で検出されたもので、最も北側に位置する。礫は径60cm×70cmの楕円に比較的集中しているが、北東側に礫細片が広がり長径110cmとなる。礫は安山岩が多く、径約10cm程度のものが多い。比較的集中した部分の中央は礫が少なく、後で抜き取られた可能性もある。総礫数は54点で、火熱のため赤化したものが多い。

2号礫群

長径×短径は110cm×70cmの楕円形に広がるもので、1号礫群の南側に近接した位置で検出された。礫は10cm程度のものが円形を呈し、北東側には径4～5cm程度の小さなものも多くみられる。礫は赤化した安山岩などが多く、総数は約50点程度である。この礫群も1号と同様に中央部が礫の少ない部分となっており、礫の再利用などのため抜かれた可能性がある。

3号礫群

径50cm×40cmに集中した部分と、それから30～90cm離れた7個のまとまりからなる。礫は径10～15cm程度と比較的大きなものが多い。集中した部分には、径40cm×30cmの楕円形を呈し、深さ約10cmの掘り込みが確認された。礫の総数は36点であった。

4号礫群

Ⅰ-35区で最も南側に位置する。径7cm程度の礫が多く、長さ長径160cm×短径60cmに散在している。礫は安山岩などが多く、火熱のため破碎したものが多い。礫の総数は43点であった。この北側に接して5号礫群がみられる。

5号礫群

礫の総数は約200個からなり、約3m×2mの広さに分布している。礫の大きさは約8～12cm程

度のものが多く、石材は安山岩が主体であった。中央付近には礫が集中した部分が認められ、その下面には約50cm×30cmで深さ10cm程度の浅い楕円形の掘り込みが認められた。

6号礫群

直径約30cmの円形部分に、礫が集中しているものである。礫は径6～10cm程度のものが多く、29点の礫が集中した部分の下面には、径約40cm×30cm深さ10cm程度の掘り込みが確認された。礫は安山岩の角礫が多く、火熱を受けており赤化が著しい。

7号礫群

大きさは100cm×70cm程度で、礫は比較的集中している。礫の大きさは径5～10cm程度で安山岩が中心となっている。礫の総数は39点であった。分布はほぼ水平であり、掘り込みなどは全くなかった。

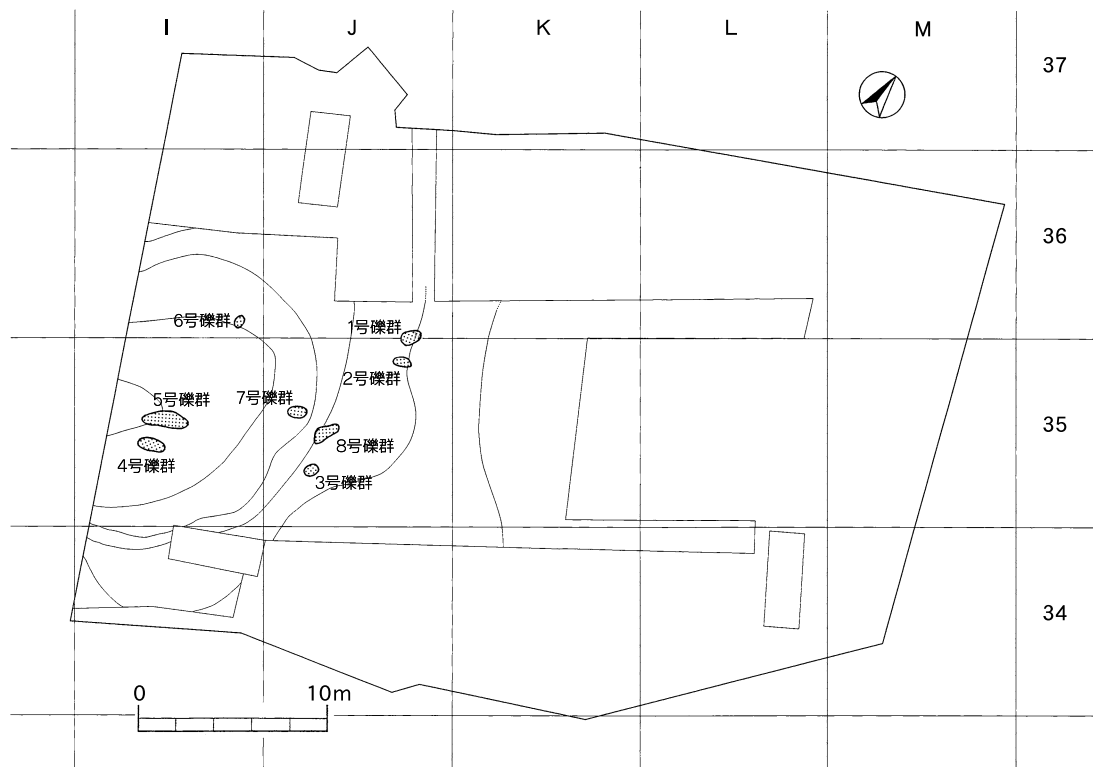
8号礫群

礫が密に集中して下面に掘り込みをもつ部分と、近接して散在して広がる部分から構成される。集中した部分は径約50cm程度と小さく、下面の掘り込みは楕円形を呈し、約60cm×40cmの大きさで、深さは約10cmである。散在した部分は地形の傾斜に沿ったものである。礫は安山岩が主であり、火熱を受け赤化したものが多い。

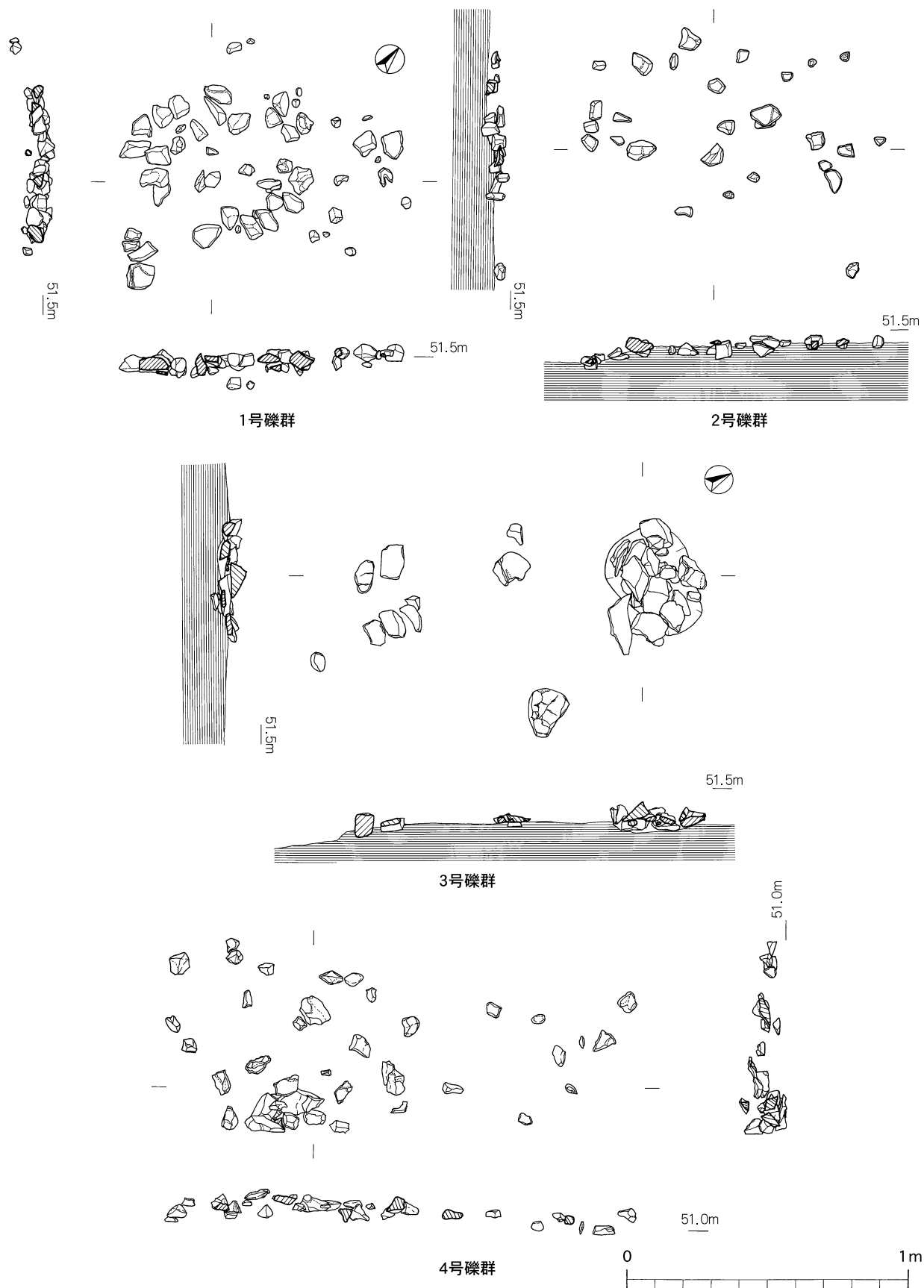
9号礫群

I-35区で検出され、これのみ検出層が異なりVI層下部となっている。时期的に他の礫群と異なり、ナイフ形石器文化期の終末から細石刃文化期にかけてのものと思われる。

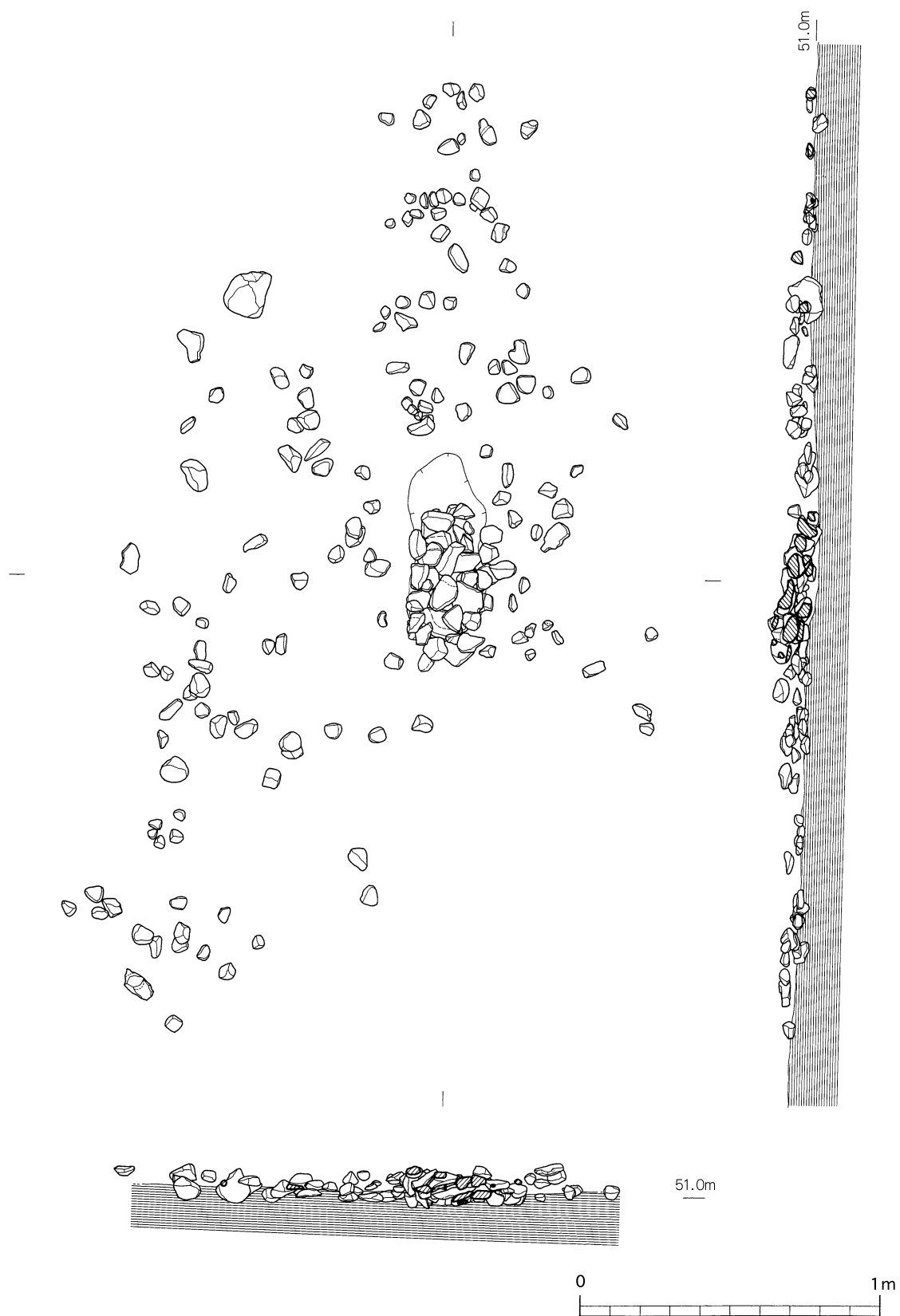
礫は総数17個からなり、集中度は高い。しかし下面に掘り込みは検出されていない。礫群の大きさは径約50cm程度である。礫は安山岩が多く、火熱を受けている。



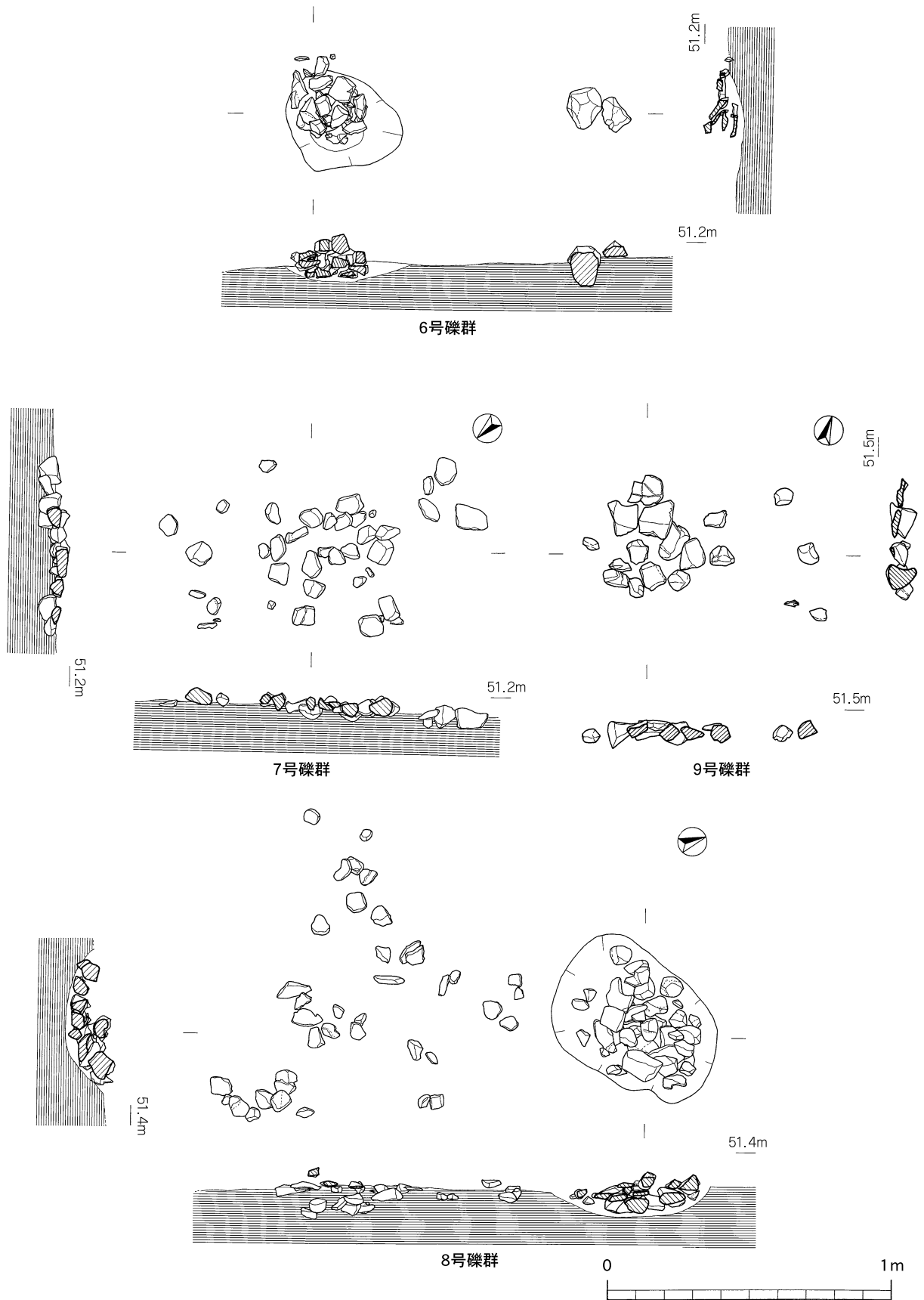
第8図 旧石器時代礫群検出位置図



第9図 旧石器時代の遺構1（1～4号礫群）



第10図 旧石器時代の遺構 2 (5号礫群)



第11図 旧石器時代の遺構 3 (6～9号礫群)

(2) 石器群ブロック

出土遺物はまとまりを示し、各層で集中している部分が認められている。ただし、VI層、VII層、VIII層の各堆積間隔は厚くなく、当然のことながら遺物の上下移動を考慮する必要がある。

第12図に各層ごとの全体遺物分布を示した。視覚的に判断すると、VI層でa～dの4ヶ所、VII層では大小含めて1～6の6ヶ所、VIII層でA～Fの6ヶ所集中部が認識できうる。これらの集中部が全て石器群ブロックとして区別されうるものではない。VI層とVII層を比較すると、VI層のc集中部北側とd集中部はVII層の集中部と重複せずVI層の所産である可能性が高い。b集中部のなかの西側の集中の強い部分もVI層の所産と推定できる。またVII層の6集中部と3集中部についてはVII層の所産である可能性が高い。次にVII層とVIII層を比較した場合、VIII層のE集中部はVII層と重複せずVIII層の所産と推定できる。VII層の1集中部については北側部分がVI層と重複しており、南側半分はVIII層のA集中部と重複している。両方に区分できないことよりVII層からVIII層にかけての集中域と判断することもできる。最も集中しているVI層bとVII層4とVIII層Bの集中部は複合しており分離は困難であり、複数の時期の所産と判断できよう。

次に石材別分布から石器群の判別を行ってみる。

第13図は黒曜石の種類別の分布を各層ごとに示したものである。本遺跡で出土した黒曜石は色調風化の状況、礫皮面の状況、光沢、不純物の有無など肉眼的観察により次のように区分できた。

OB 1…漆黒色で光を通さず、消し炭状の風化面をもつ特徴から上牛鼻産と判断できるもの

OB 2…ガラス質が強く、透明感があり不純物を多く含むことから三船産と推定できるもの

OB 3…漆黒色を呈し、ガラス質で不純物をほとんど含まないことから腰岳産と推定されるもの

OB 4…青灰色を呈し、風化があり新鮮面はガラス質で不純物を含まず針尾産系と推定されるもの
このほか姫島産類似や判別不能なその他のものがみられた。三船産黒曜石の分布はVII層1・3集中部に多く、また上牛鼻産黒曜石はVII層の4集中部に多いことより、これらの集中部は妥当性が高い。

第14図に示した安山岩についてはハリ質のものとその他に分けられたが、VI層に多いということがわかる。

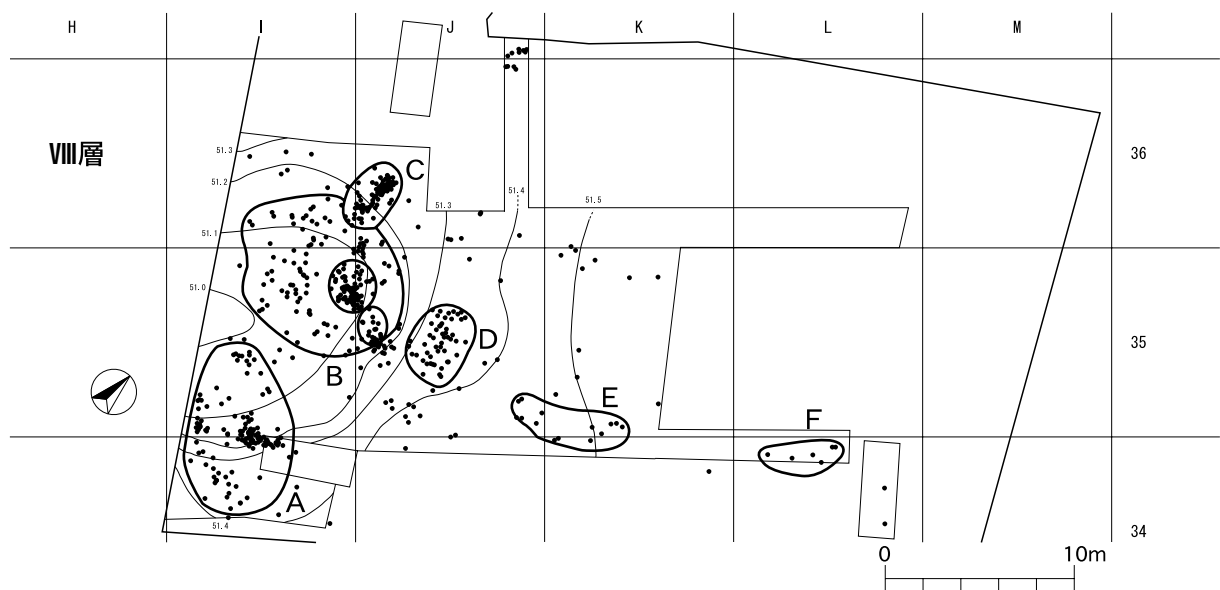
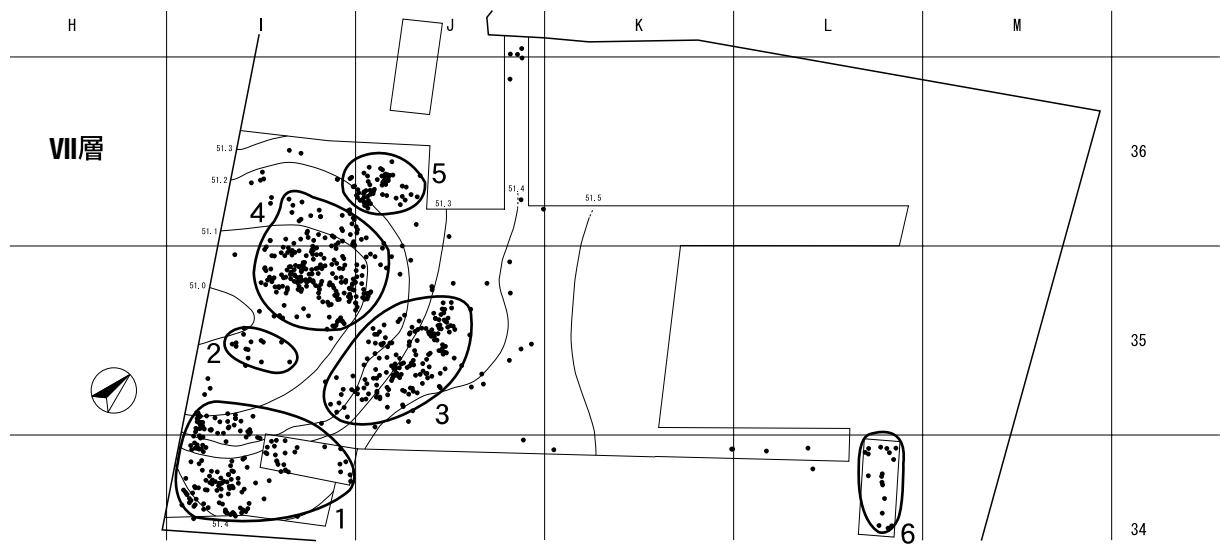
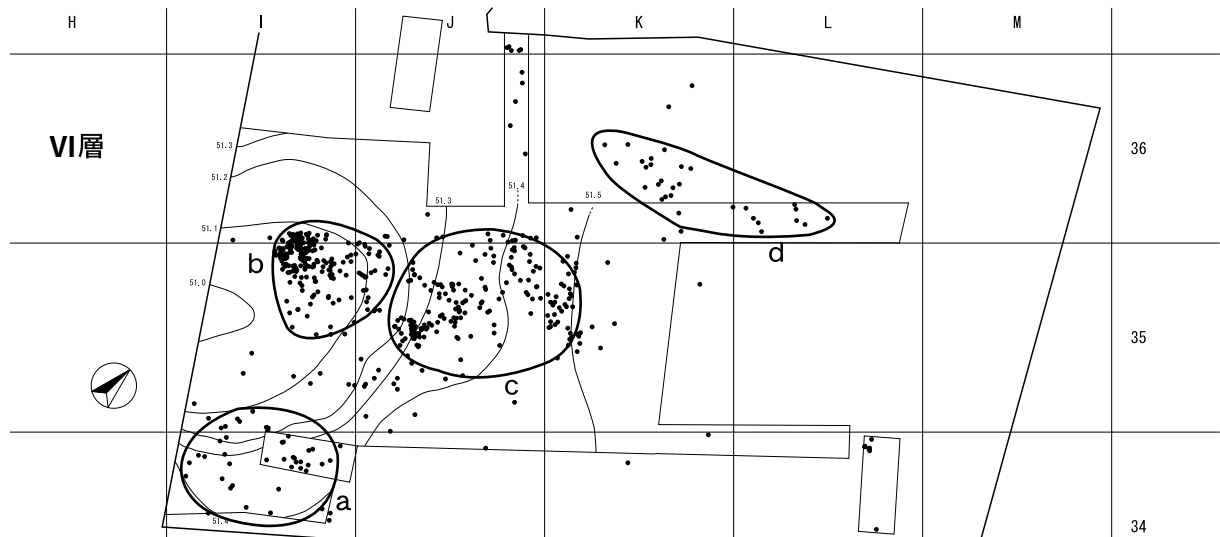
第15図は玉随・チャート・鉄石英・タンパク石等の出土分布である。全体的に出土量が少ないためブロックの判別には向かない。

第16図は頁岩とホルンフェルスの出土分布である。出土量は多くはないが、シルト質の良質な頁岩はVII層に多く出土しており、VII層の1集中部及び4集中部にまとまっている。またVIII層のA集中部にも特徴的に多い。

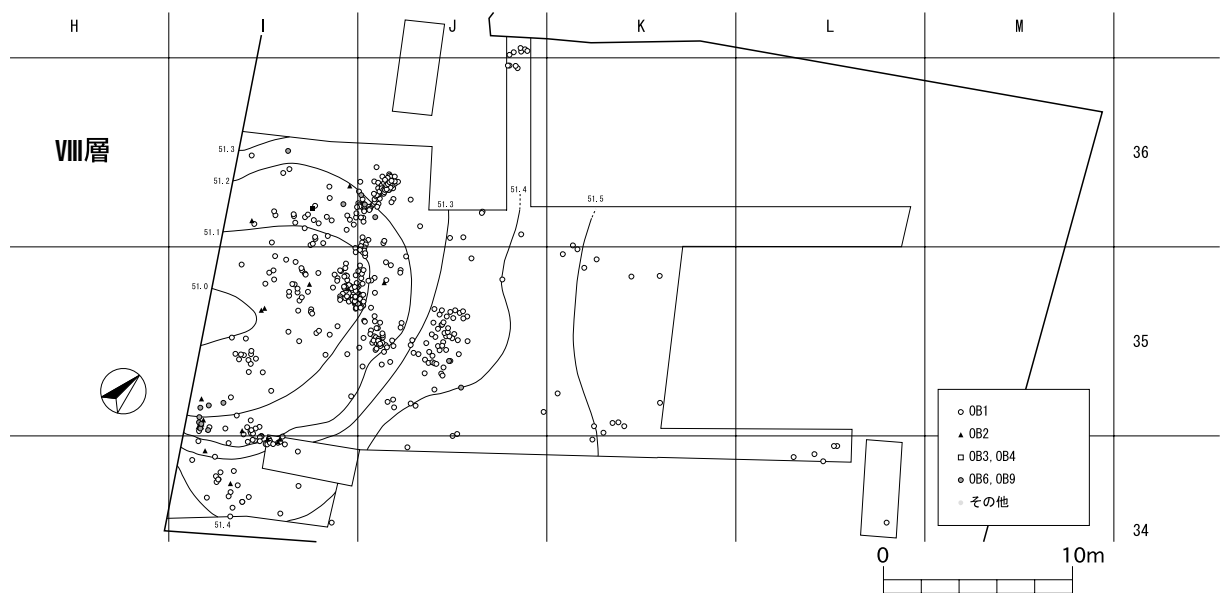
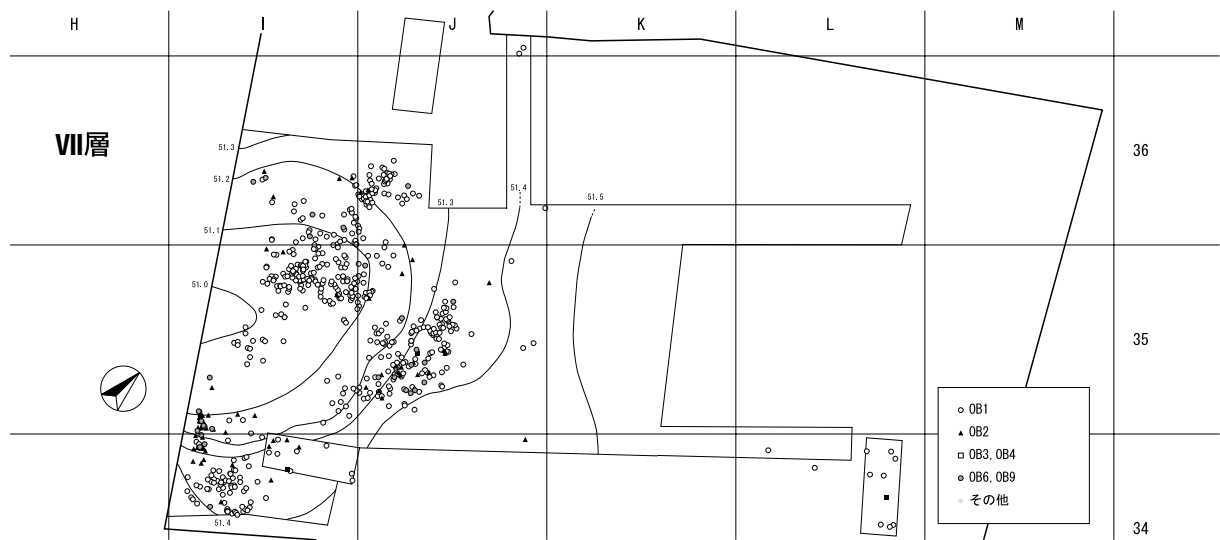
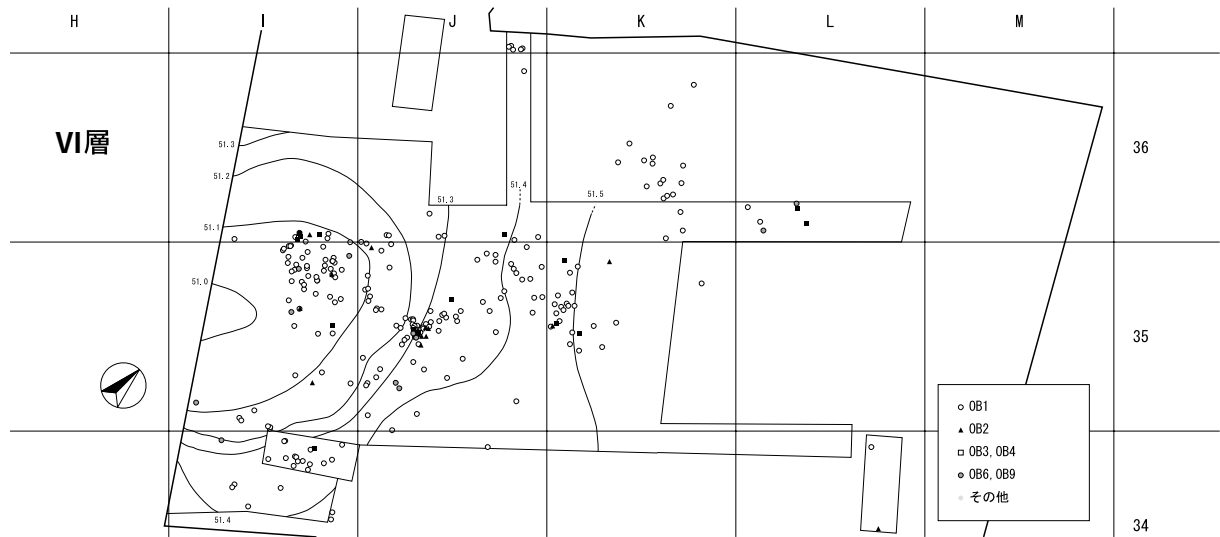
以上のような各石材ごとの層位的出土分布を重ねて石器群ブロックの認定を行う必要がある。それでも決定的なものとは断定できない。

そこで各石器ごとの出土分布ならびに各石器の細かい分類ごとの出土分布により補強することにした。例えばナイフ形石器1類の分布と、その時期とは明らかに異なるナイフ形石器3類の分布は完全な差異が認められる。また小型ナイフ形石器の分布も一定の場所に集中しており、石器群ブロックの存在が理解される。

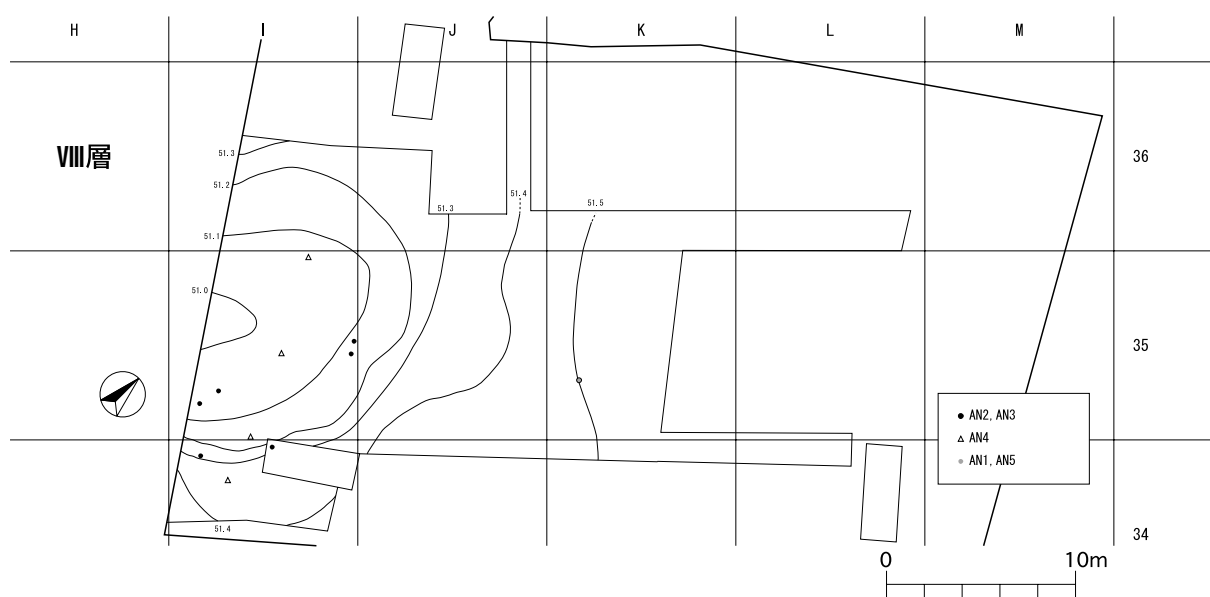
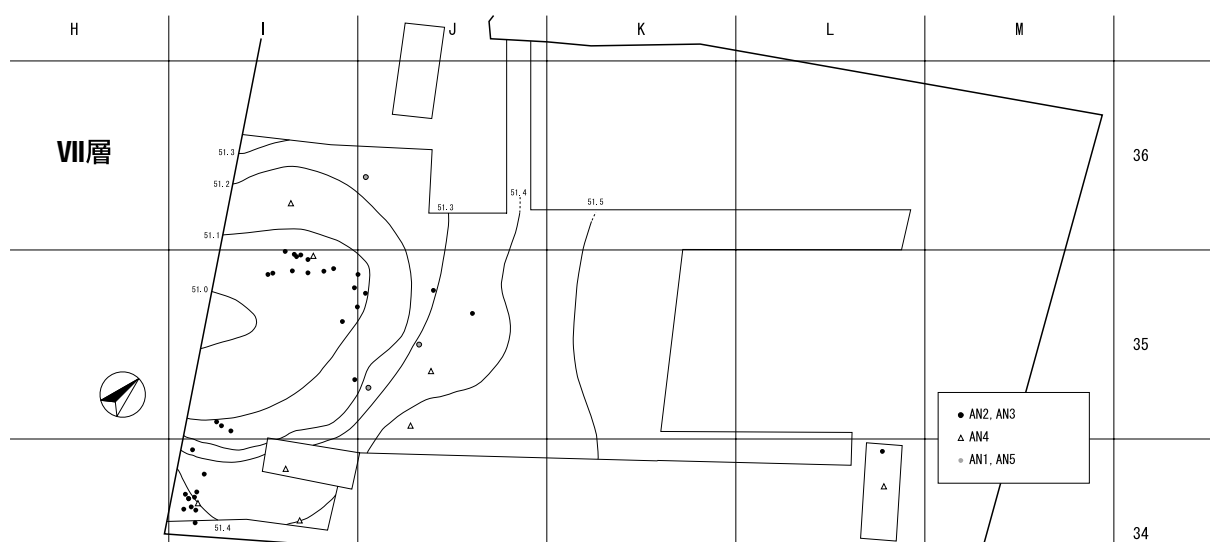
ここでは各器種ごとの分布などを通じてブロック認定を行う必要があるろう。遺物包含層がうすい場合、ブロック認定については複数の時期の混在を考慮して慎重に対応すべきと考える。



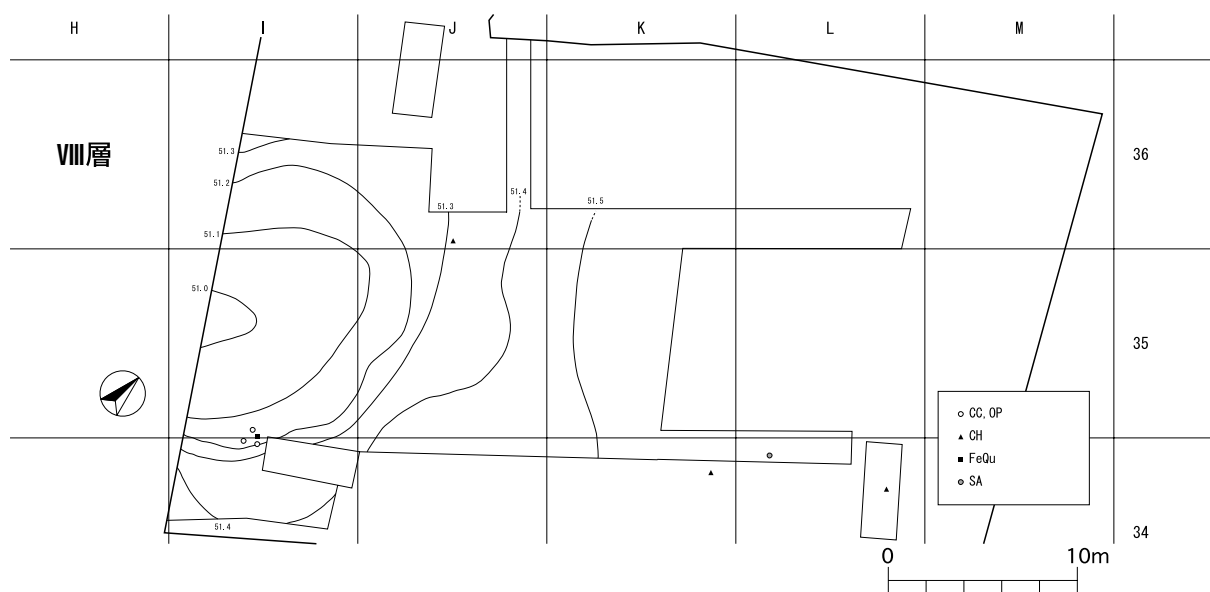
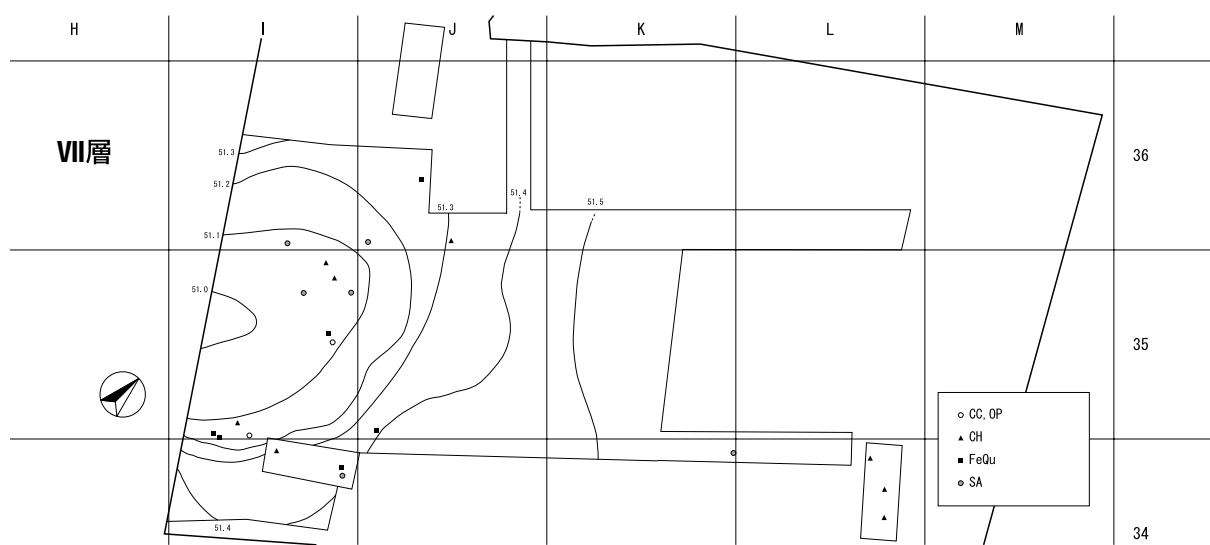
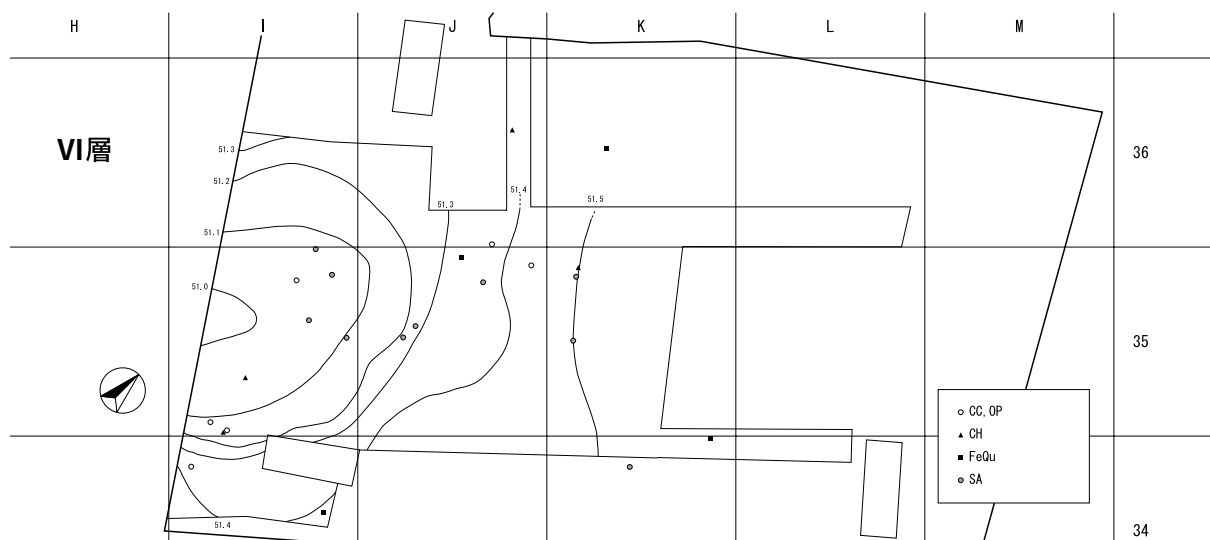
第12図 旧石器時代層別遺物出土分布図



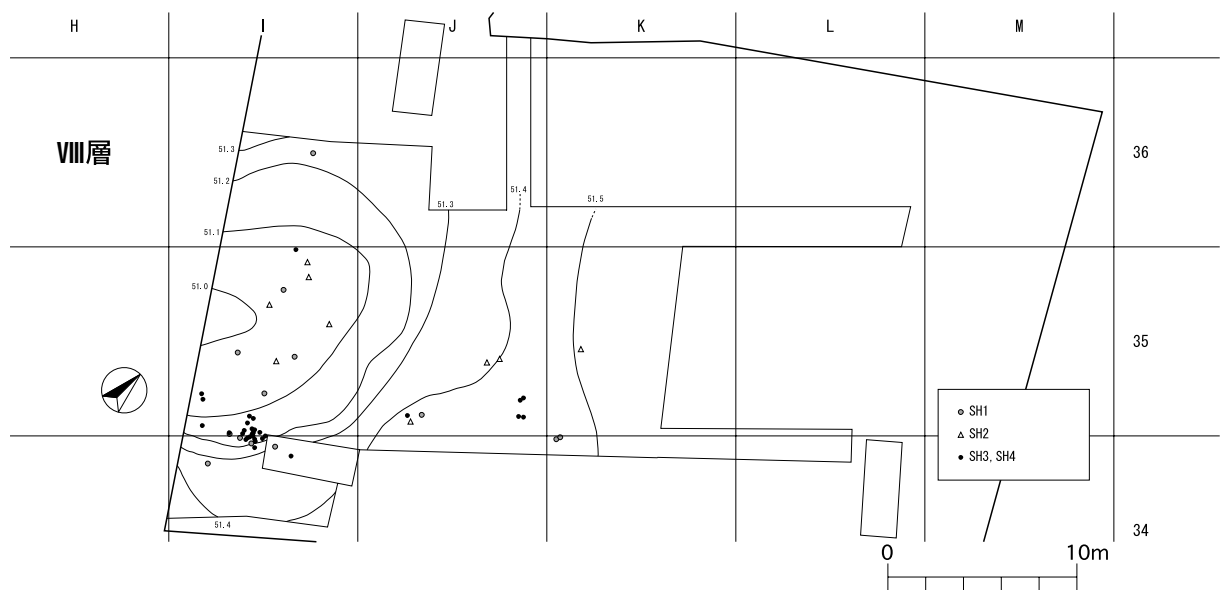
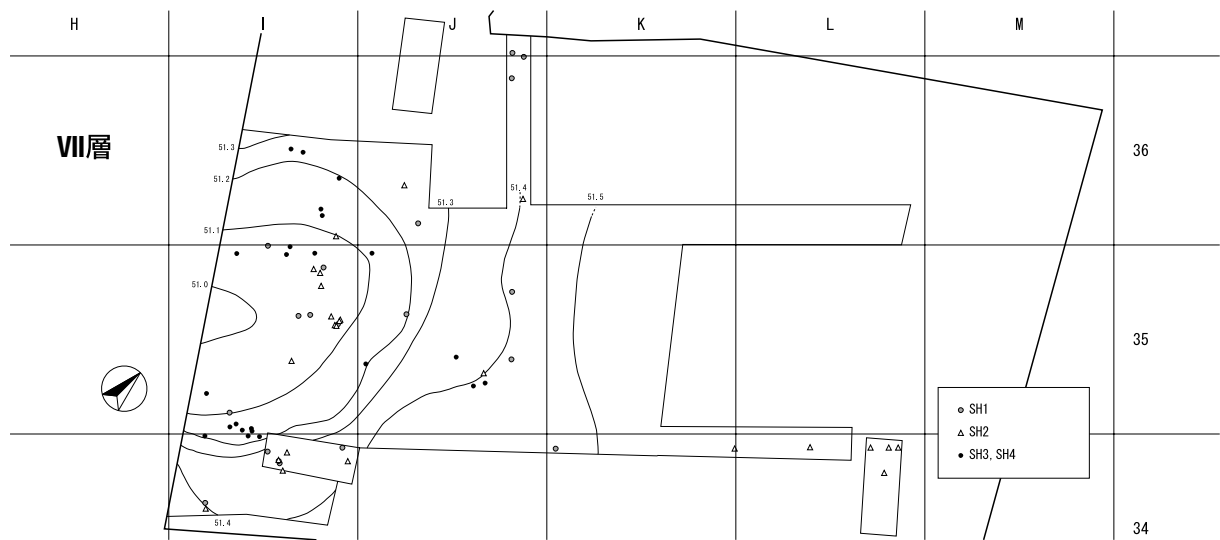
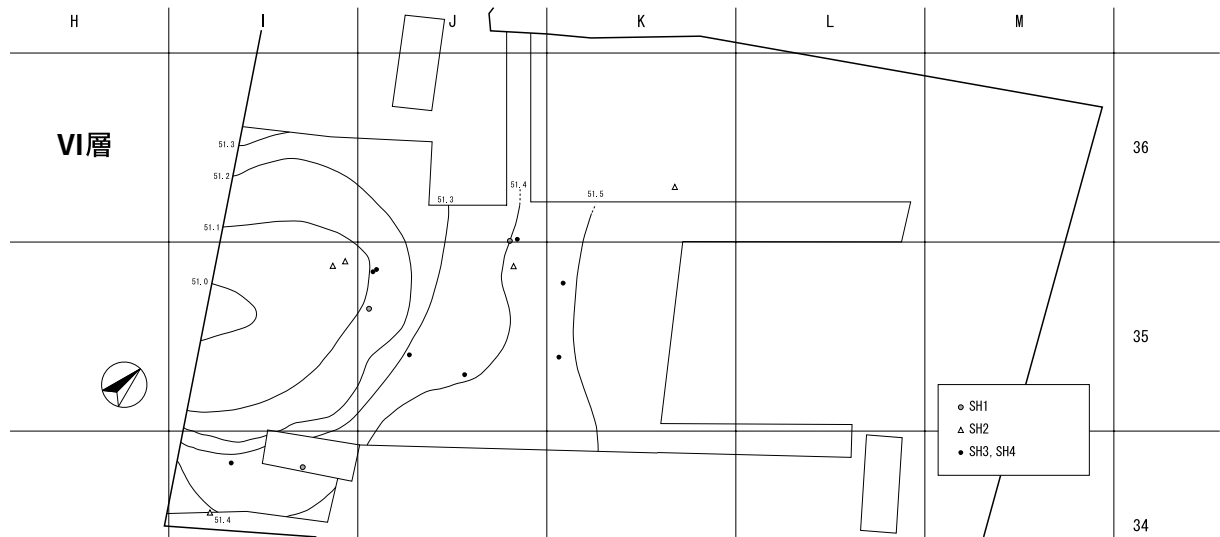
第13図 黒曜石出土分布状況図



第14図 安山岩出土分布状況図



第15図 玉随・タンパク石出土分布状況図



第16図 頁岩出土分布状況図

3. ナイフ形石器文化期の遺物

旧石器時代の遺物の主体は、いわゆるナイフ形石器文化期に属するものであり、遺物の出土層はⅦ層からⅧ層で、一部Ⅵ層下部のものも含まれる。出土した石器器種は、ナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器などの狩猟具とともに、搔器、削器、二次加工のある石器、使用痕のある剥片、敲石などで多種におよぶ。また、ナイフ形石器についても形態的に細分されるだけでなく、これまで他の遺跡出土例から時期が異なると判断されるものも含む。すなわち、ナイフ形石器文化期の石器群は一時期のものだけでなく、複数の時期のものと考えられる。つまり、上記の各石器器種は石器群としてとらえるべきで石器組成という用語は使用できない。以下各石器を器種ごとに分類し説明を加えていく。

ナイフ形石器（第17～21・24図 1～50）

多形態のものが出土した。ここでは使用される素材剥片の形状と用い方、二次加工の状況及び加工部位を考慮して分類した。

1 a類：比較的厚みのある幅広い剥片を素材とするもので、二側縁に二次加工であるブランディングを施したもの、刃部は剥片の鋭利な側縁が利用される。いわゆる狸谷型ナイフ形石器と呼称されるものである。

1 b類：切出し型を呈するもので狸谷型からはずれるもの。

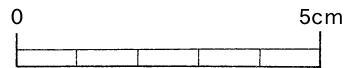
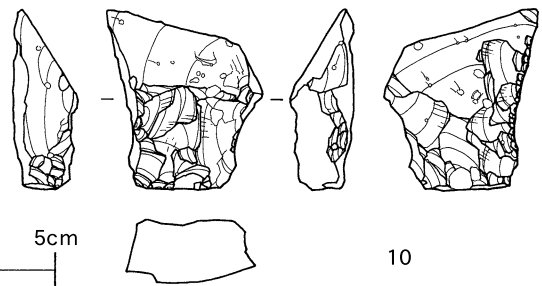
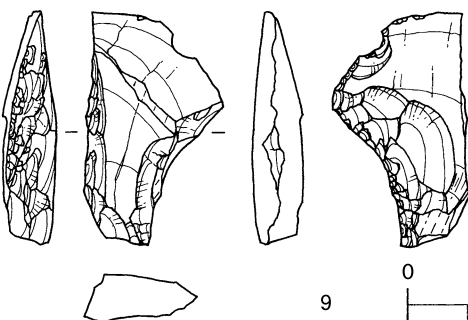
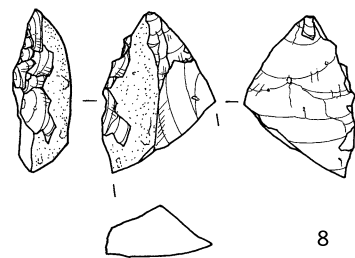
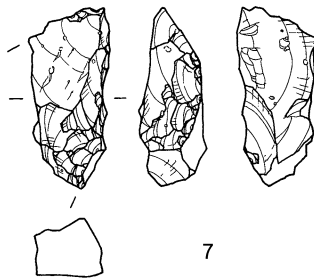
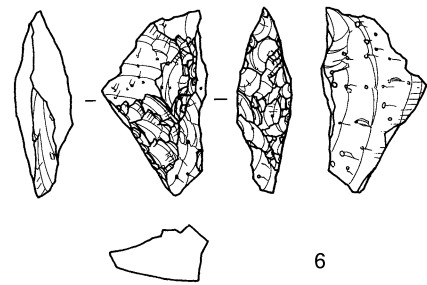
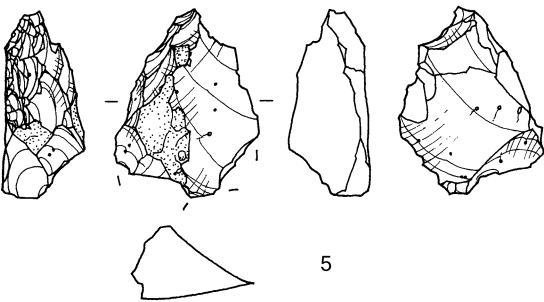
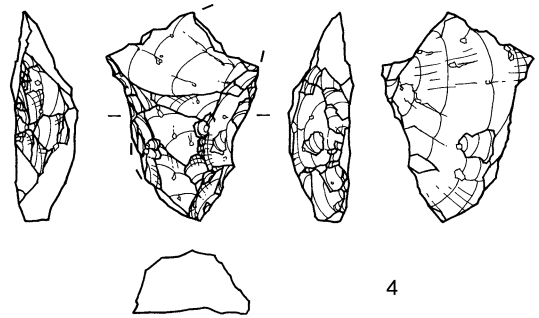
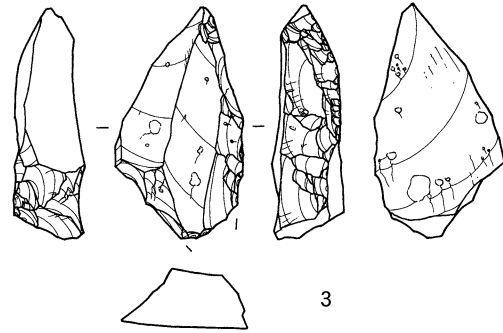
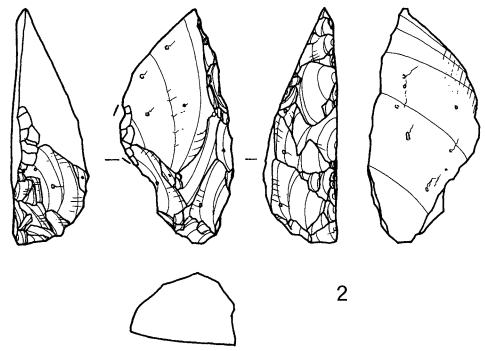
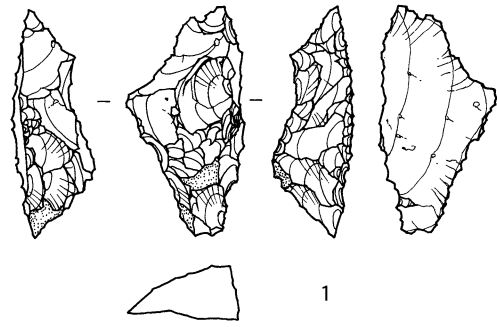
第17図1～8が1 a類に該当する。1は幅広剥片を素材とし、打面部を裁断するような背縁及び対向する部分にブランディングを施し、切出し型に仕上げてある。背縁の二次加工は腹面側からのみでなく、背面からも行われている。また、背面は背縁からの平坦剥離が行われ、厚みを減じようとしている。

2は青灰色を呈する針尾産系の黒曜石を使用したものである。厚みのある剥片を素材とし、二次加工を施している。背縁の二次加工は上下両面から施され、対向する短辺はノッチ状に施されている。3は基部を欠損し、4は先端部を欠損するもので、同様に幅広剥片を素材とし、短辺の二次加工はノッチ状になる。5・6・7は各々欠損品であるが、同様の厚みのある素材を利用している。6は日東産系の黒曜石の幅広剥片を素材とするもので、短辺は折断のあと、平坦剥離を施している。1・3・5・8は上牛鼻産黒曜石、4・7は三船産黒曜石が使用されている。

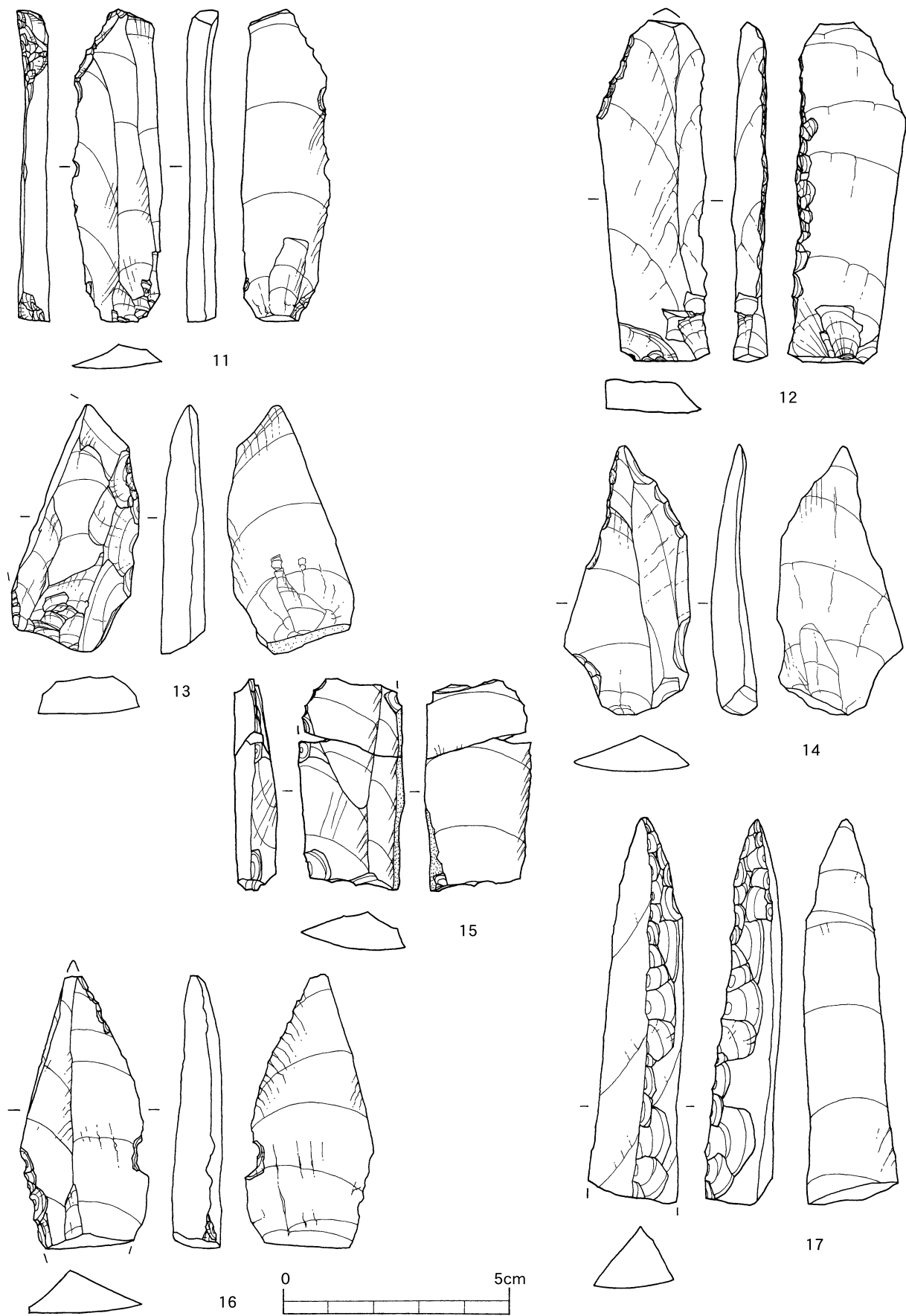
第17図9・10は1 b類である。いずれも短い剥片の末端部を刃部とし、切出し型を呈するものである。9は良質な黄褐色頁岩を利用し、背縁の加工のほか、短辺から腹面側に平坦剥離を行いノッチ状に加工を施している。10は上牛鼻産黒曜石を利用したもので、背縁は折断の後、腹面に平坦剥離を施したものである。

2 a類：石刃もしくは石刃状の縦長剥片を素材とし、基部や先端部を部分的に二次加工を施したもの。

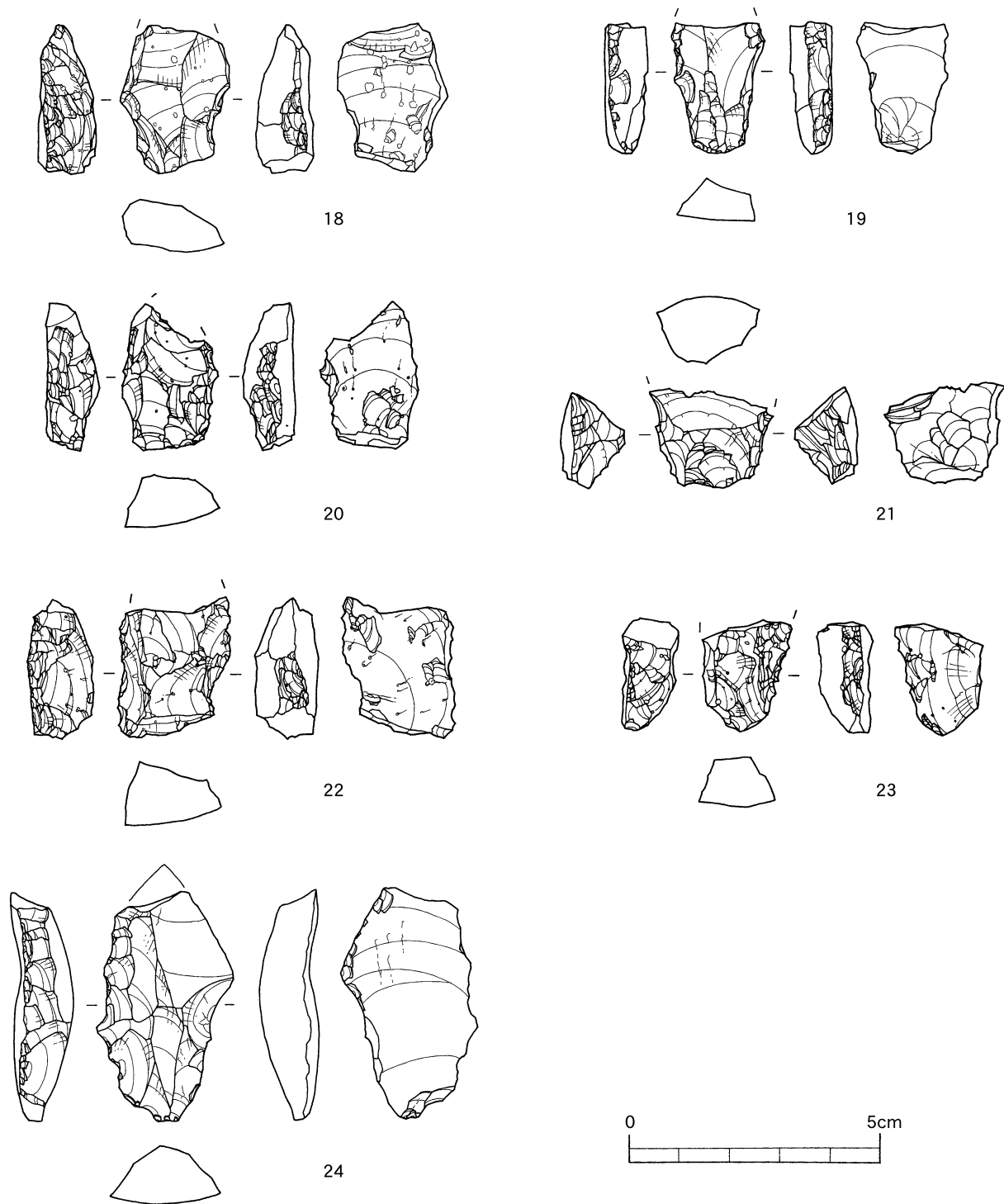
第18図11～17は2 a類である。11は珪質頁岩の石刃を素材とし、片側先端部近くに急角度のブランディングを施したものである。また打面近くも背面からの二次加工が認められる。先端は尖らない。12は砂岩の縦長剥片の片側先端部近くに刃潰し加工を施したもので、鋭利な片側縁辺には二次加工によりスクレイパー状の刃部が形成されている。13・14は風化が著しい頁岩を素材とし、部分的に二次加工が認められるものである。15は11と同質の頁岩製石刃であり、上下両端とも折断され



第17図 ナイフ形石器 (1 a・1 b類)



第18図 ナイフ形石器（2 a類）



第19図 ナイフ形石器（2 b・2 c 類）

たものである。下端には折断後のわずかな加工が認められる。16は安山岩製の先細りの縦長剥片が利用され、片側下半と先端部近くに二次加工が認められる。基部は欠損する。17は風化する頁岩製で、片側に二次加工を施し、また先端部は上下からの加工により先端部を形成する。

2 b 類：黒曜石製の縦長剥片を素材とする基部加工のナイフ形石器である。

第19図18～21は縦長剥片の打面を残し、打面近くの両側縁に二次加工を直線状に施し基部とする

もので、いずれも先端部を欠損する。使用されている石材は、18・20・22・23が三船産黒曜石で21は上牛鼻産黒曜石であり、このうち19は針尾産系の黒曜石が使用されている。22・23は幅広剥片を使用し、同様に基部加工を施しているものである。これらも先端部を欠損している。

2c類：縦長剥片の打面を残さず二次加工を施すもの。

24は青灰色を呈する良質の珪質頁岩製であり、片側縁辺に二次加工を施し背縁とし、それに対応する基部側縁と打面部に二次加工を施したものである。二次加工は急角度のブランディングではなく、60度程度でスクレイパーエッジ状に施されている。先端部を欠損する。鋭利な刃部縁辺には使用痕が著しい。

3類：いわゆる「ノの字」形の剥片を使用した今峠型ナイフ形石器である。

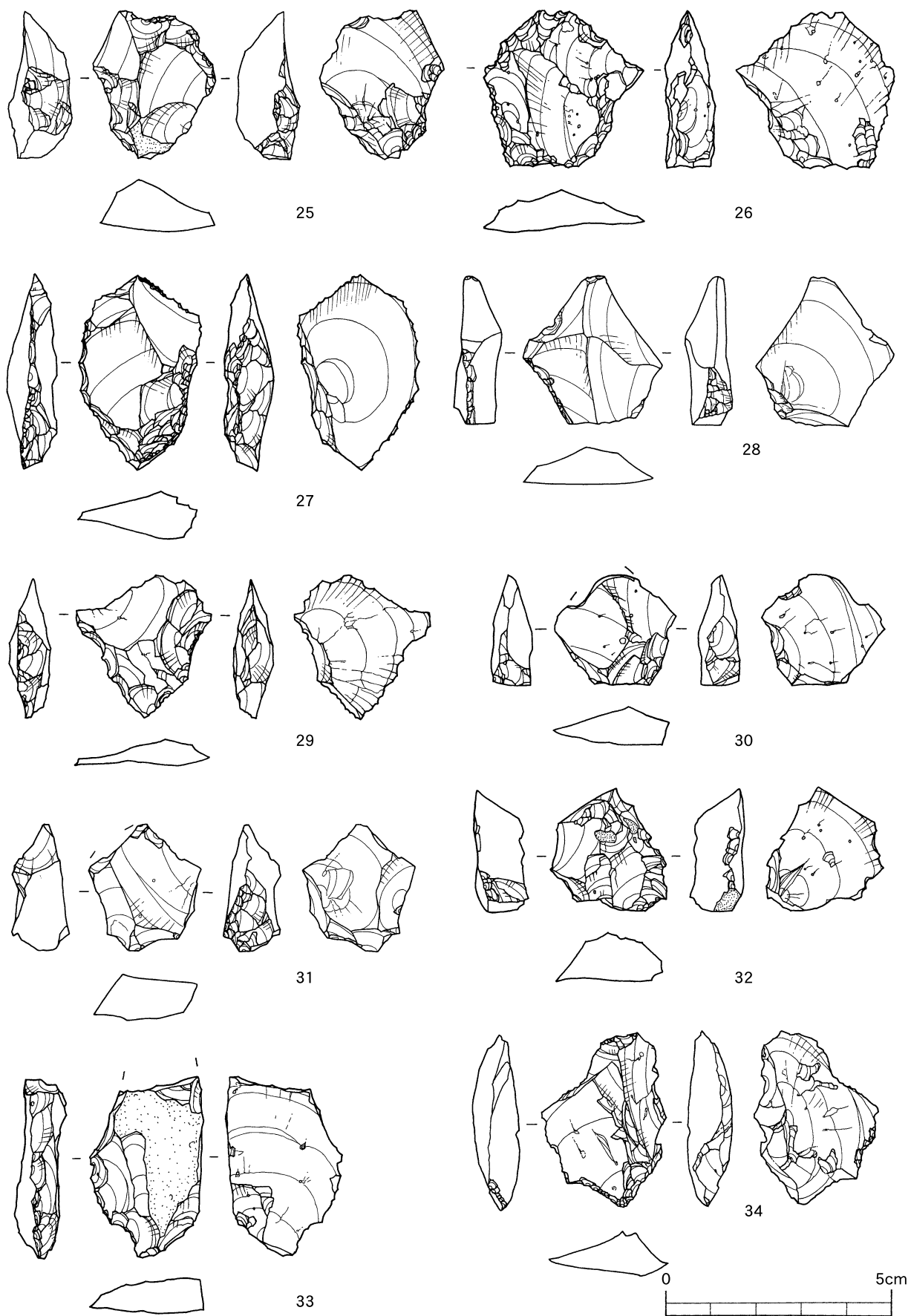
第20図と第21図25～42が該当する。このうち25～31は打面に背面からの二次加工を施している。25は「ノの字」形の剥片を素材にしたもので、剥片の末端には旧剥片の底面が認められる。打面は背面からの二次加工が施され、反対側は腹面からの加工により、基部が形成される。また、その腹面には厚みを減じる平坦加工が施される。先端部は再加工によるスクレイパー状の刃部の再生がみられる。26も同様の剥片が使用され、基部の右側縁は背面からの二次加工、左側縁は腹面からスクレイパー状の二次加工が施される。先端部は二次加工や使用痕がみられる。27も右側縁は打面を背面から二次加工し、左側縁は腹面からブランディングが施される。その後、基部背面は厚みを減じるため平坦剥離が行われる。先端部をわずかに欠損し、現存する刃部は使用痕が著しい。28も同様の素材剥片が使用され基部の二次加工が施されているものである。左側縁の加工はわずかであり、スクレイパー状となる。先端部は細かい二次加工が施され、その部分は磨滅し、周辺には使用痕が認められる。背面の構成から求心的な石核から生産されたものと推定される。29も同様の二次加工により基部を形成し、また最後に背面の平坦剥離が行われている。30～41も「ノの字」形の剥片を使用し、基部部分に二次加工を施したものである。30・31は打面を同様に背面から二次加工し、30には平坦剥離もみられる。34～36は「ノの字」形の剥片というより横長剥片と呼ぶべき剥片を素材にしているが、同様の二次加工が施されている。37～41は基部近くをわずかに二次加工を施したものである。41はこれまでのものと異なり、「逆ノの字」形の剥片を使用したものであるが、打面は腹面からの1回の剥離で折り取り、その後腹面は平坦剥離が行われている。反対側の縁辺はスクレイパー状の二次加工が行われている。使用されている石材は、25が腰岳産黒曜石、27・28は珪質頁岩であるが、宮崎北部の流紋岩に類似するものである。42は日東産黒曜石に類似しており、36は頁岩、その他は全て上牛鼻産黒曜石が使用されている。

4類：横長剥片素材の一側縁加工ナイフ

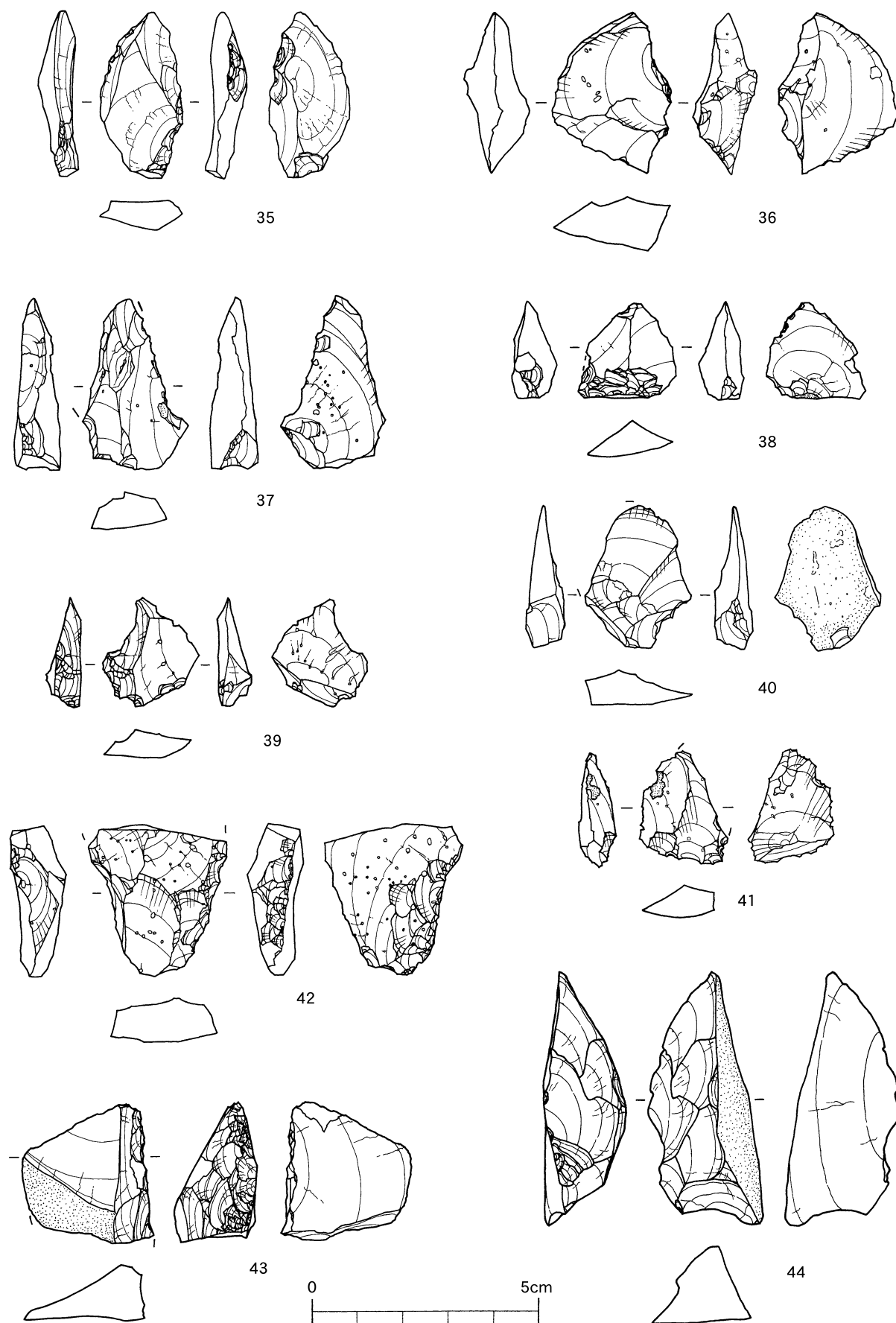
第21図43は比較的大型の横長剥片を使用したもので、厚みのある打面部に腹面から急角度のブランディングを施している。剥片の底面は自然である。下半は欠損している。44も同一母岩と思われる横長剥片を利用したもので、左側基部付近にブランディングが施されている。これは未製品の可能性もある。

5類：小型のナイフ形石器

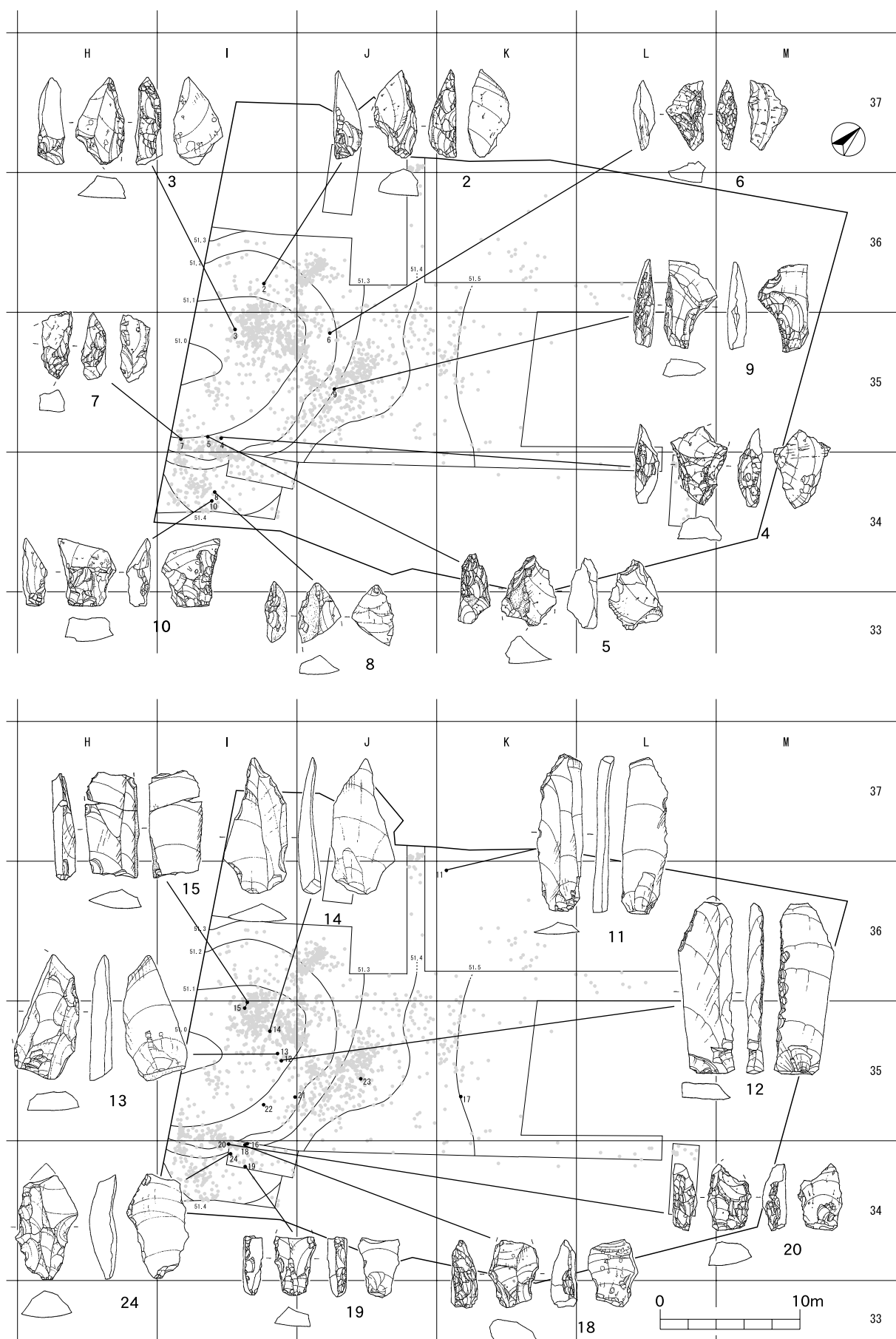
第24図45～48はいわゆる小型のナイフ形石器である。45・46は背縁側に急角度のブランディングが施されるものであるが、46で明確なように刃部側縁辺にも細かい二次加工が認められるものであ



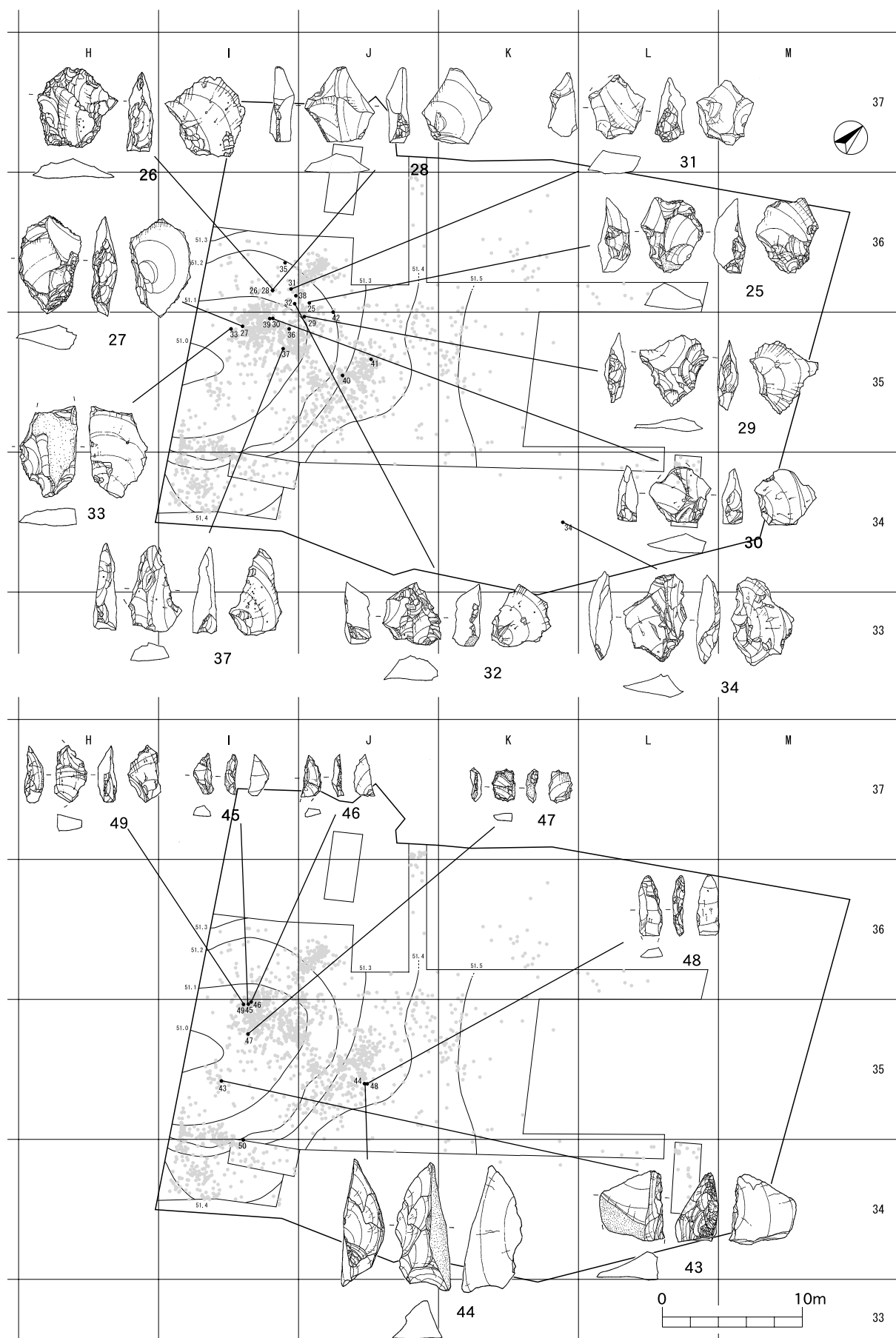
第20図 ナイフ形石器（3類）



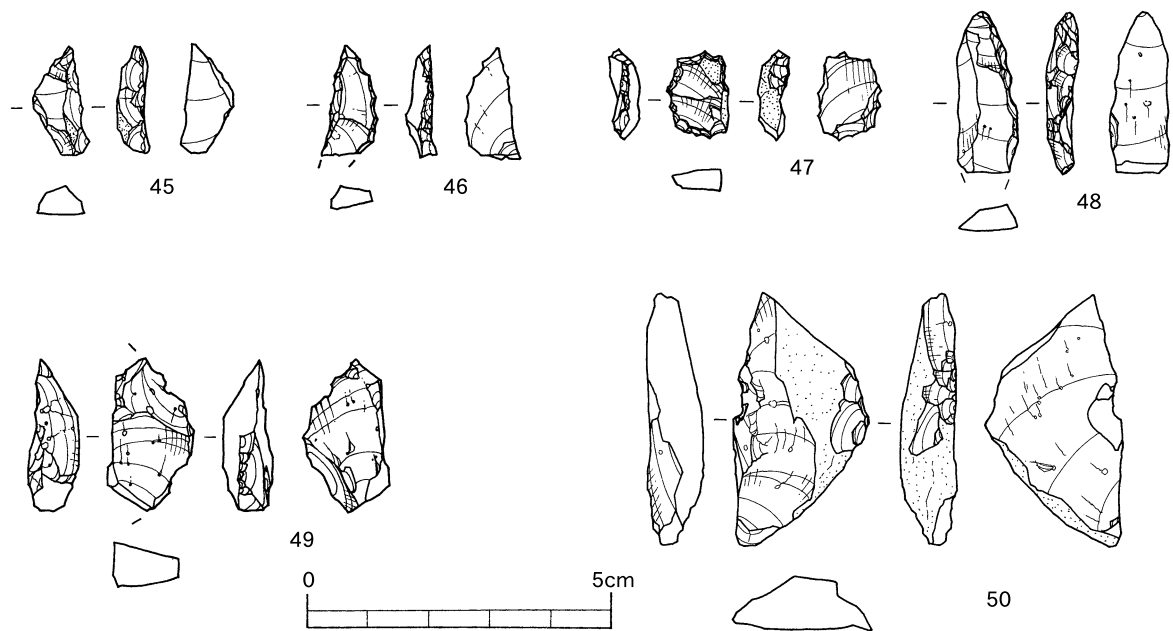
第21図 ナイフ形石器（3・4類）



第22図 ナイフ形石器出土分布図（1・2類）



第23図 ナイフ形石器出土分布図（3～5類）



第24図 ナイフ形石器（5・6類）

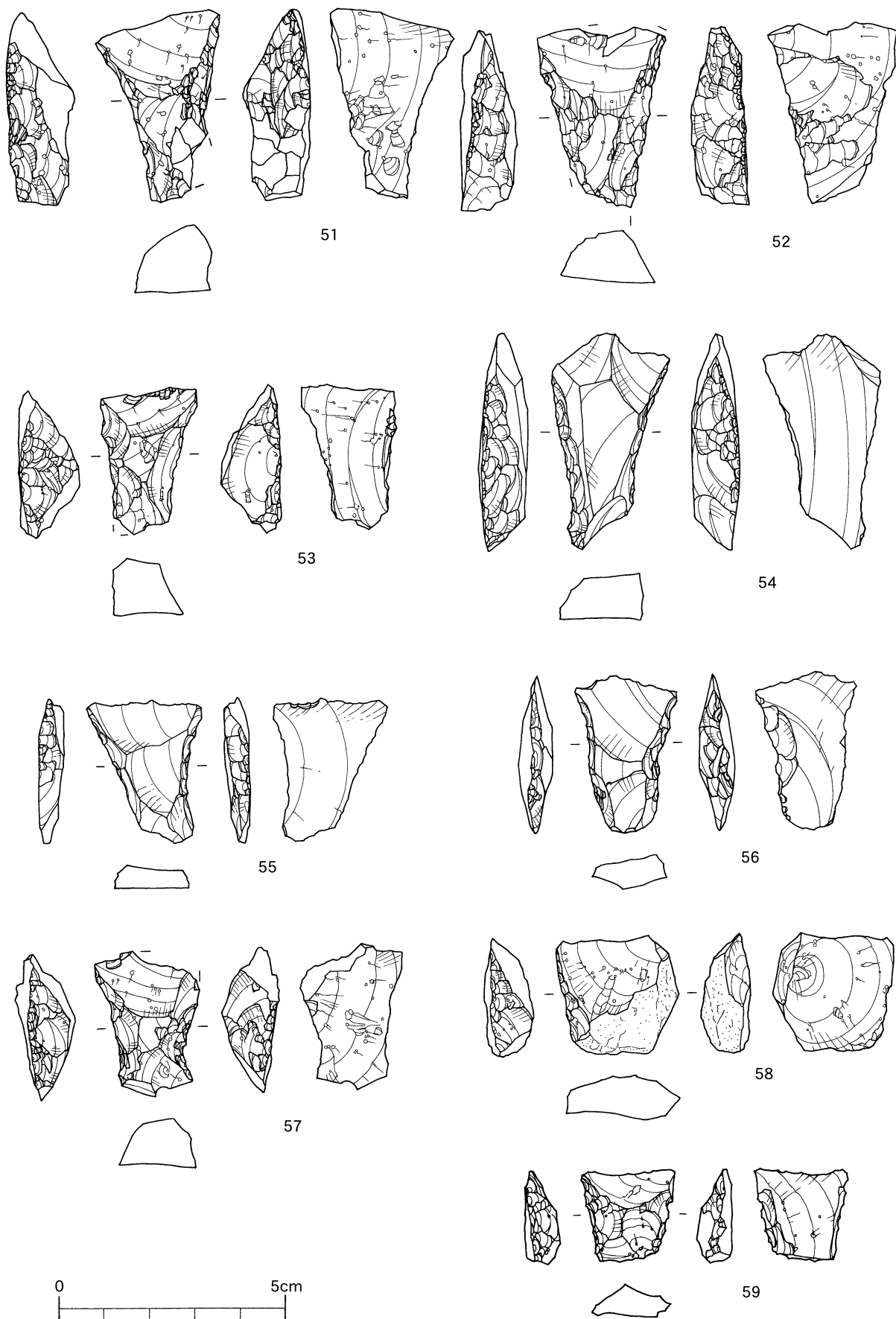
る。47は厚い背縁にブランディングが施され、他の縁辺にも細かい二次加工が認められ再加工の可能性も考えられる。48は細みの縦長剥片を素材とし、一側縁に急角度のブランディングが施されたものである。半分欠損する。

6類：その他のナイフ

第24図49・50はこれまでの分類には入らないが、一部にブランディングが施されたナイフ形石器である。

台形石器（第25図 51～59）

第25図は台形石器であり、大型品と中型品に分けられる。51は幅広で比較的厚みのある剥片を素材とし、剥片の鋭利な側縁を刃部としたものである。石器の両側縁には急角度のブランディングが施され、厚みのある打面側は背面の平坦剥離も認められる。基部を欠損する。52も同様の剥片を素材とした大型のもので、両側縁のブランディングは急角度でなくスクレイパーエッジ状である。先端部の一部と基部を欠損している。53は右側縁の大きな剥離がみられる。これも基部を欠損し、刃部には著しい使用痕が観察される。54～56は良質で黄白色を呈す珪質頁岩製である。54も幅広剥片を素材にした大型のものである。両側縁のブランディングは丁寧に施されている。55は比較的うすい剥片を素材とするものであり、両側縁のブランディングは丁寧である。右側縁のブランディングはわずかにノッチ状に施され、左側縁の直線的なものとの違いがあることより、切出し型のナイフ形石器の可能性もある。56もうすい剥片が使用されたもので、石材は55と同一母岩と思われる。腹面はブランディング以前に厚い部分を平坦剥離によりうすくしている。57は53と同様右側縁の加工は大きな剥離でなされ、また左側縁の加工はスクレイパーエッジ状に施されている。58は右側縁が剥片の打面をそのまま利用し左側縁のみ加工を施したものである。59は上牛鼻産の黒曜石製のうすい剥片を利用したものである。両側縁の加工はスクレイパーエッジ状であり急角度ではない。腹面には平坦剥離が施されている。基部を欠損する。なお、51・52・53・57・58は三船産黒曜石が使用されている。



第25图 台形石器

剥片尖頭器（第26～28図 60～77）

剥片尖頭器は素材剥片の形状と二次加工部位・加工状況等により大きく3類に区分できる。

1類：先細りの剥片を素材とし、基部を両面からノッチ状に加工するもの。

第26図60～65がこれに該当し、このなかには中型品と小型品に分けられる。60は頁岩製の先細りの剥片を素材とするもので、打面近くをノッチ状に二次加工を施し基部を形成している。ヒンジした先端部には細かい加工がみられ、右側縁に使用痕が認められる。61も同様の素材剥片に基部はノッチ状に加工したものである。先端を欠損する。62は風化が著しい砂岩製で、小型品である。基部のみノッチ状に加工している。63はノッチ状に加工した基部が欠損したものである。64は中型の剥片を素材としているが、先端部は尖らない。右側縁に使用痕と思われる剥離が認められる。65は風化が著しい頁岩製であり、この部類に入るものである。

2類：両側縁が平行する石刃状の縦長剥片を使用するため、片側縁辺に二次加工を施して先端を尖らすもの。

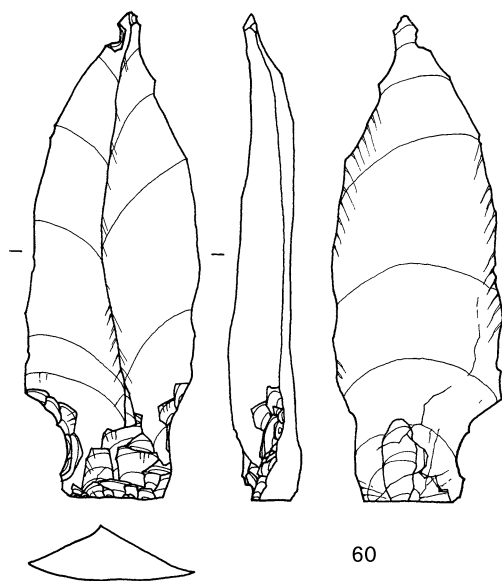
第27図66～70が該当する。66は比較的うすい縦長剥片を使用し、基部は両側からノッチ状に二次加工を施して形成している。右側縁は連続する二次加工が行われ、鋭い先端部が形成されている。67は厚みのある剥片が利用されているもので、片側縁辺は粗い鋸歯状の剥離が行われている。二次加工は腹面からのみでなく、背面からも行われている。鋭利な右側縁に使用痕は認められない。基部は節理面で折れている。

68は比較的うすい剥片が使用され、片側縁辺全体に二次加工が施されているものである。先端部を欠損し、また背面の基部付近にはスクリーントーンで図示したような黒色の有機質と思われる付着物が認められる。69は長さ10cmを超す大型品であり、左縁辺全体に二次加工を施している。70は礫皮面の残る縦長剥片を利用したもので、両側からのノッチ状の加工による基部形成と、片側先端部付近に二次加工が施されたものである。先端部を欠損する。

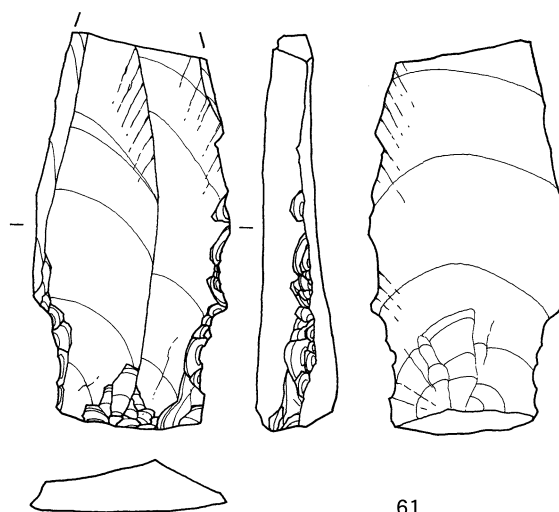
3類：基部の二次加工が明確でなく直線状に施されるもの。基部をノッチ状に加工しないことにより剥片尖頭器の退化形態とされ、本来は剥片尖頭器に含めないものであるがここでは3類として区別した。

第28図71～76が該当する。71は先細りの剥片が使用され、基部加工は主に片側に施され、ノッチ状というより直線状に近いものである。72も同様の剥片が使用されており、基部の整形加工はあまり明確に施されていない。先端部近くを欠損している。74も縦長剥片が使用されており、基部は左側のみ簡単に二次加工が施されている。73は片側縁辺全体に二次加工が施されたものであり、2類に近いものの、基部加工が直線状であることより、ここに入れてある。75は良質の珪質頁岩を石材とするものである。腹面のリングと打面から判断すると「ノの字」に近い形状の剥片が使用され背面の右側には石核の底面が残っている。基部加工は直線状に近くまた片側縁辺全体も二次加工がスクレイパーエッジ状に施されている。76は三船産黒曜石製のものである。基部のみの欠損品であるが、基部整形の状況から判断して3類に入れてある。

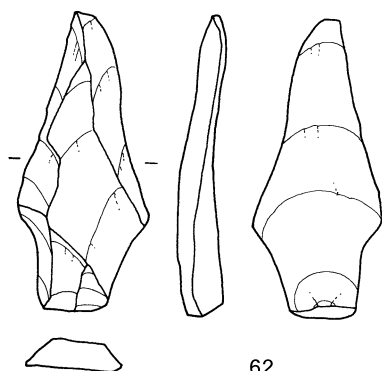
77はかなりうすい剥片が使用されており、形態的に基部の整形など1類に近いものの、剥片時の打面を残しておらず、また風化が著しく、基部加工は粗い加工であり明確な整形加工でないため別扱いとした。



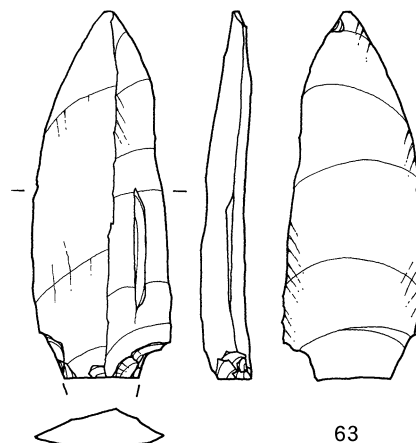
60



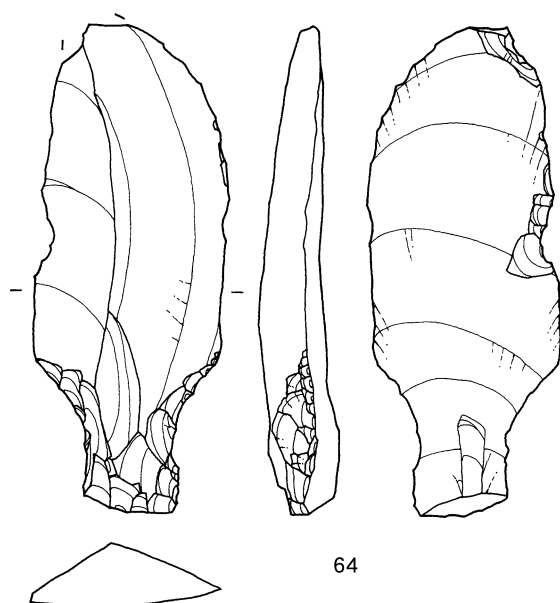
61



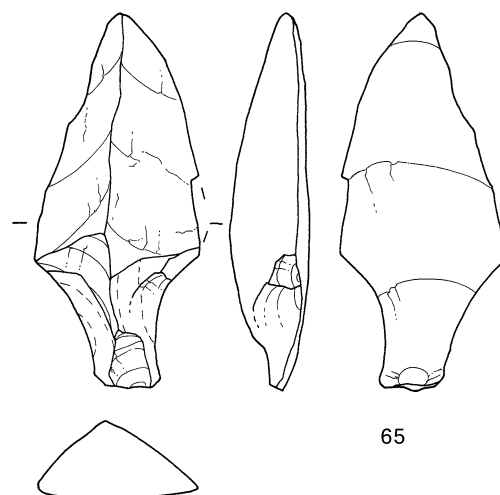
62



63



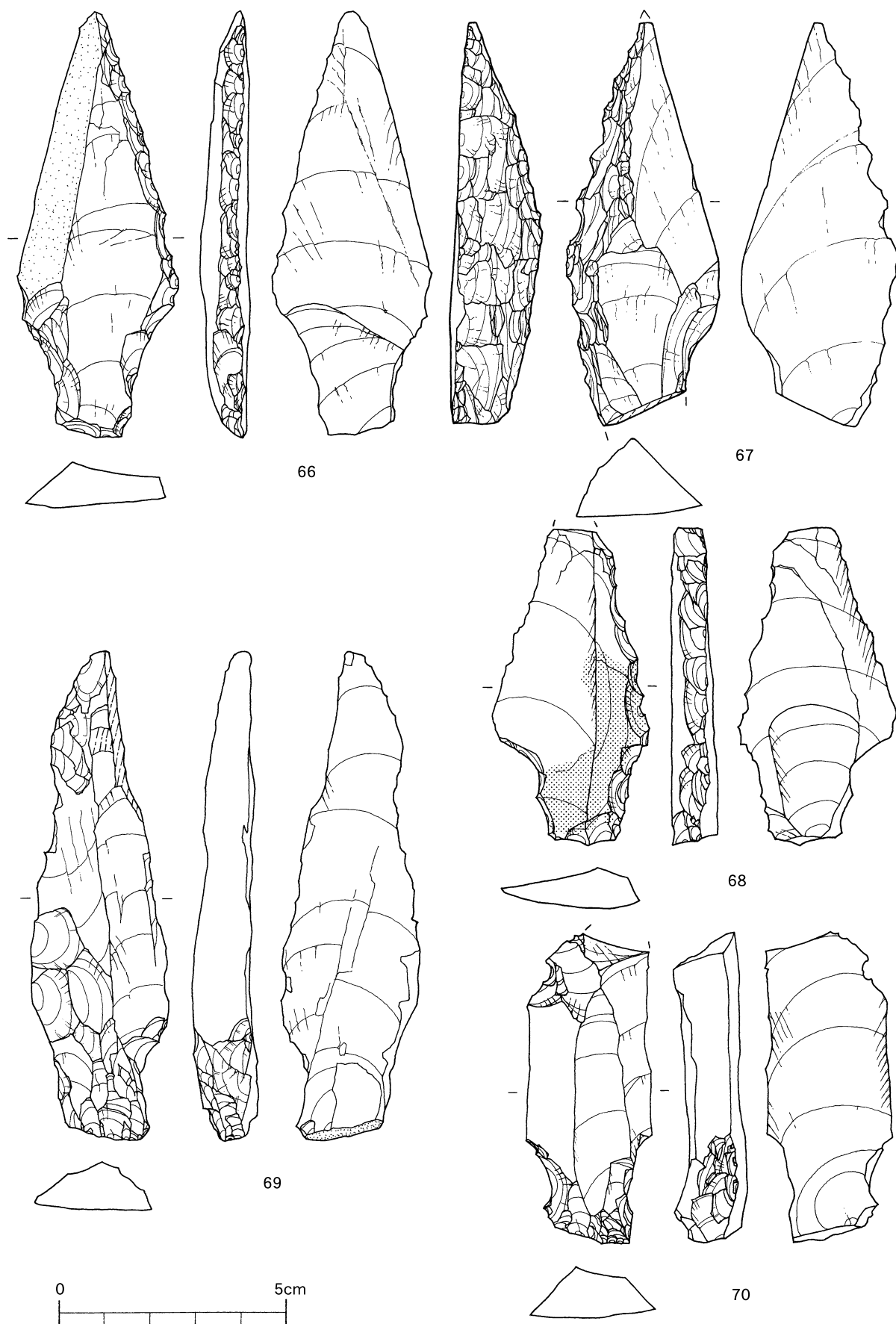
64



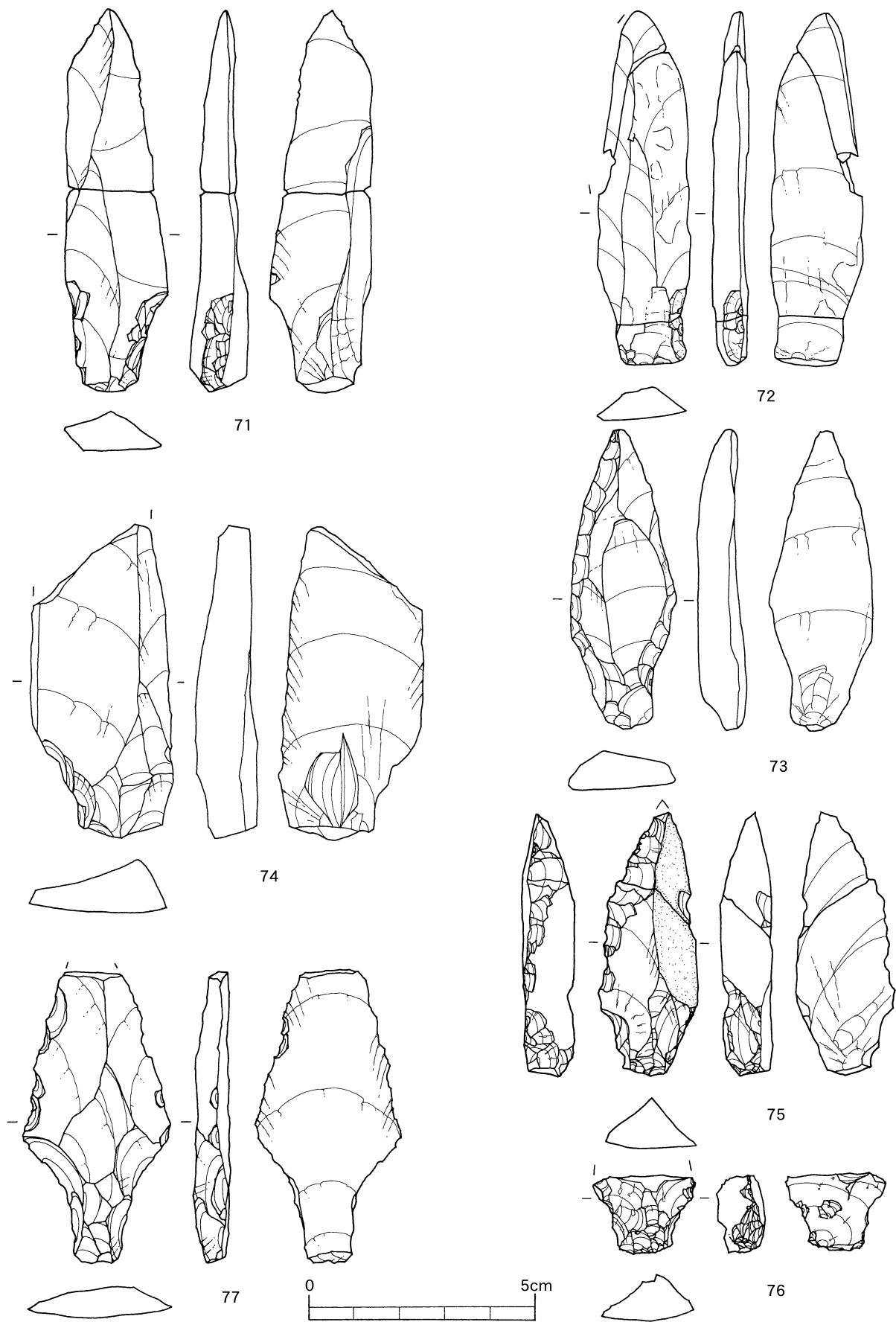
65



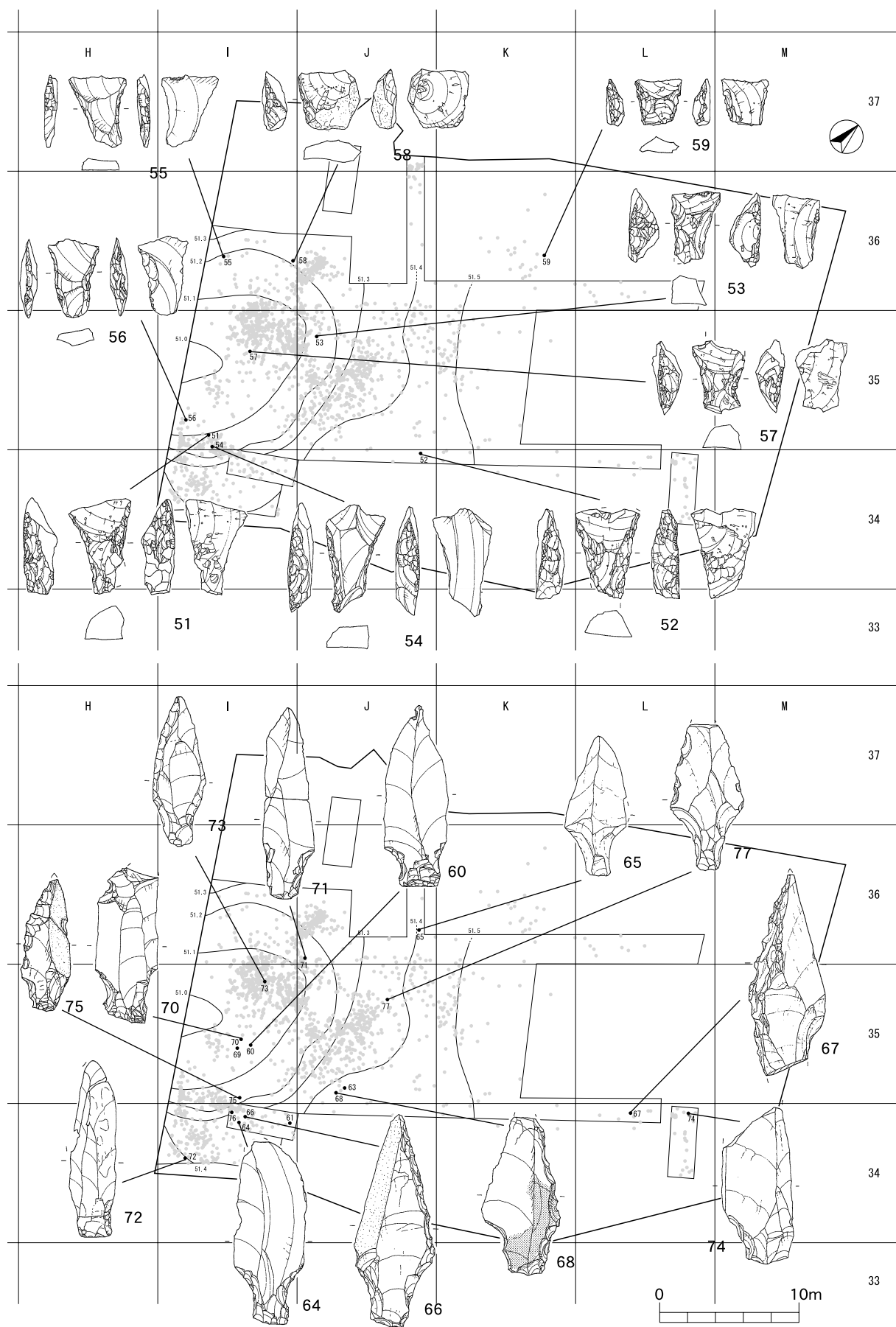
第26図 剥片尖頭器（1類）



第27図 剥片尖頭器（2類）



第28図 剥片尖頭器（3類）



第29図 台形石器・剥片尖頭器出土分布図

木葉形尖頭器（第30図 78）

第30図78は粘板岩を使用し、うすく扁平に剥げる石材の特徴を生かして粗い剥離により両面の形状を整え、その後、両面と両側縁を細かい二次加工を施している。先端部を欠損している。

三稜尖頭器（第30図 79・80）

79は安山岩の縦に長い剥片を素材にしたものであり、両側縁部とも腹面からの二次加工により形状を整えている。先端部を欠損している。80は日東産系の黒曜石を使用したもので、腹面からの二次加工により両側面を整形している。また、図の下部の背面は平坦剥離が行われ、上位の方は稜上剥離が施されている。先端と基部端を欠損する。

搔器（第30・31図 81・82）

第30図81～第31図82は搔器である。81は表皮がついた厚みのある大型剥片を素材とし、剥片先端部に粗い二次加工を施し刃部としたものである。また先端部に近い両側縁にも細かい二次加工が行われ、刃部は円形につくられている。82は頁岩製で、同様に表皮の残る厚手の剥片を素材とし、剥片末端部及び左側縁辺に二次加工を施し刃部としたものである。

削器（第31・32図 83～87）

第31図83～第32図87は削器である。84は頁岩製の縦長剥片を素材とし、片側縁辺に細かい二次加工を施して刃部としたものである。反対側の縁辺に使用痕は認められず、ナイフ形石器ではない。先端部を欠損する。83も縦長剥片を素材とし、片側縁辺に丁寧な二次加工を施して刃部としたものである。先端部の背面には稜上調整が施されている。先端部を欠損する。石材は安山岩である。85は削器の再加工石器である。頁岩製の縦長剥片を素材とし、両側縁を刃部としたものが使用中に折れ、その後、分離したものは打面部と末端をそれぞれ折れ部近くの再加工を行ったものであると推定される。86は自然礫皮面の残る比較的幅広の剥片を利用し、両側縁に粗い二次加工を施したものである。87は大型の剥片の片側縁辺に粗い剥離を行い鋸歯状の刃部としている。

グレイバー（第32図 88）

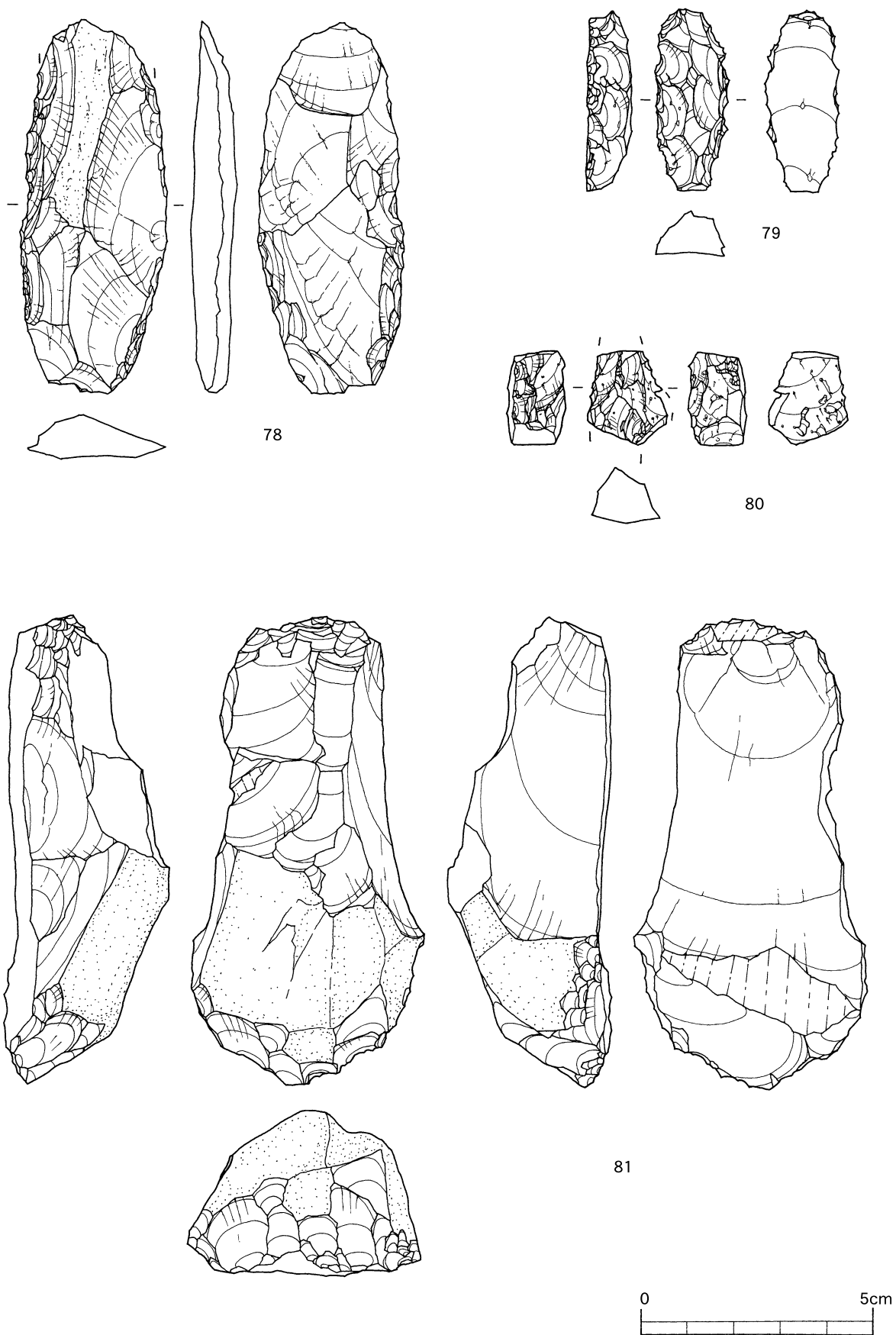
88は良質の安山岩を石材とし、石刃状の縦長剥片を素材にしたものである。左側には二次加工が施されスクレイパー刃部となっている。先端部を欠損する。また、打面には側面からの桶状剥離が行われており、グレイバーと判断される。複合機能を持つ石器と考えられている。

石錐（第32図 89・90）

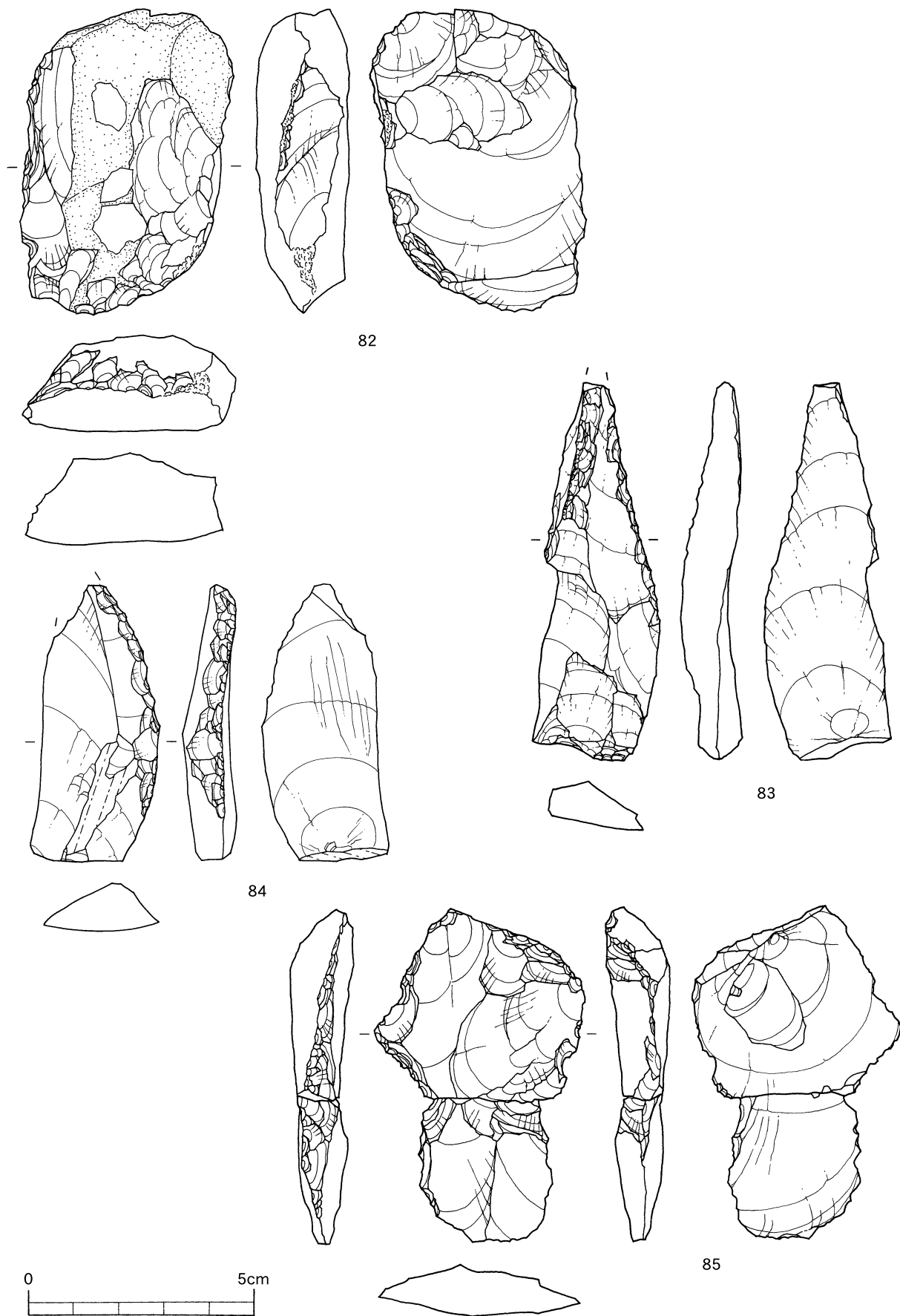
89は上牛鼻産の黒曜石を石材にした剥片であり、尖った末端に微細剥離痕が認められることから石錐と判断した。90は安山岩の先細りの剥片であり、先端部には3mm程度の長さで回転した痕が認められ、その部分は微細剥離が観察される。

二次加工のある剥片（第32～34図 91～104・106）

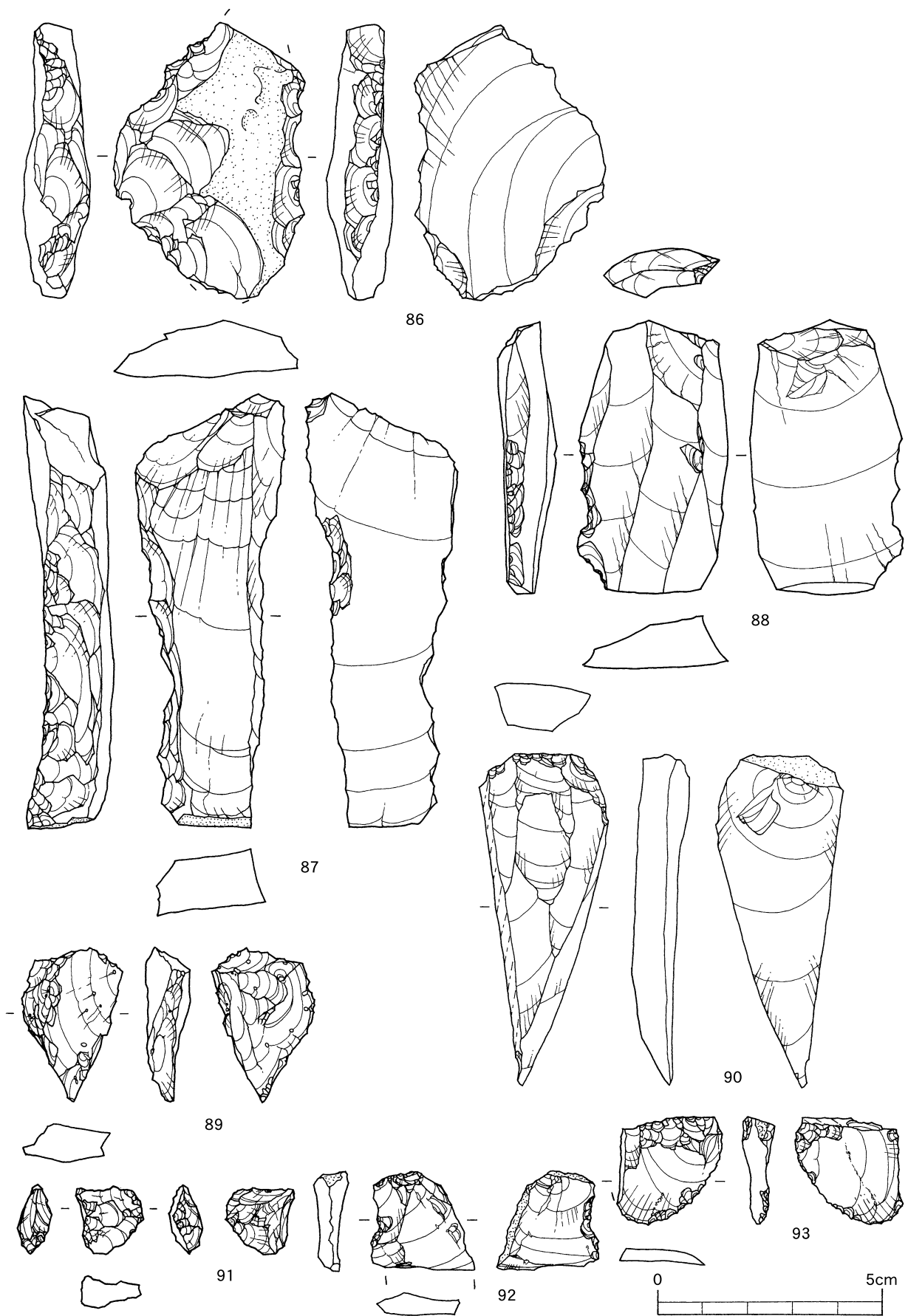
第32～34図91～104・106は一部に二次加工が認められる剥片である。91と93は一部に平坦剥離が施されており台形石器の可能性もあるが、93は鋭い縁辺に微細な二次加工が施される。92は打面近くの腹面側に二次加工が施されている。94は両側縁に粗い二次加工が施されている。96は剥片の先端部が折れており、その欠損部に近い位置に二次加工があり、そこから残存部全体にかけて使用痕が認められる。95は鋭い左側縁に加工及び使用痕の微細剥離が認められるものである。基部加工ナイフ形石器の先端部、もしくは剥片尖頭器の先端部である可能性も考えられる。



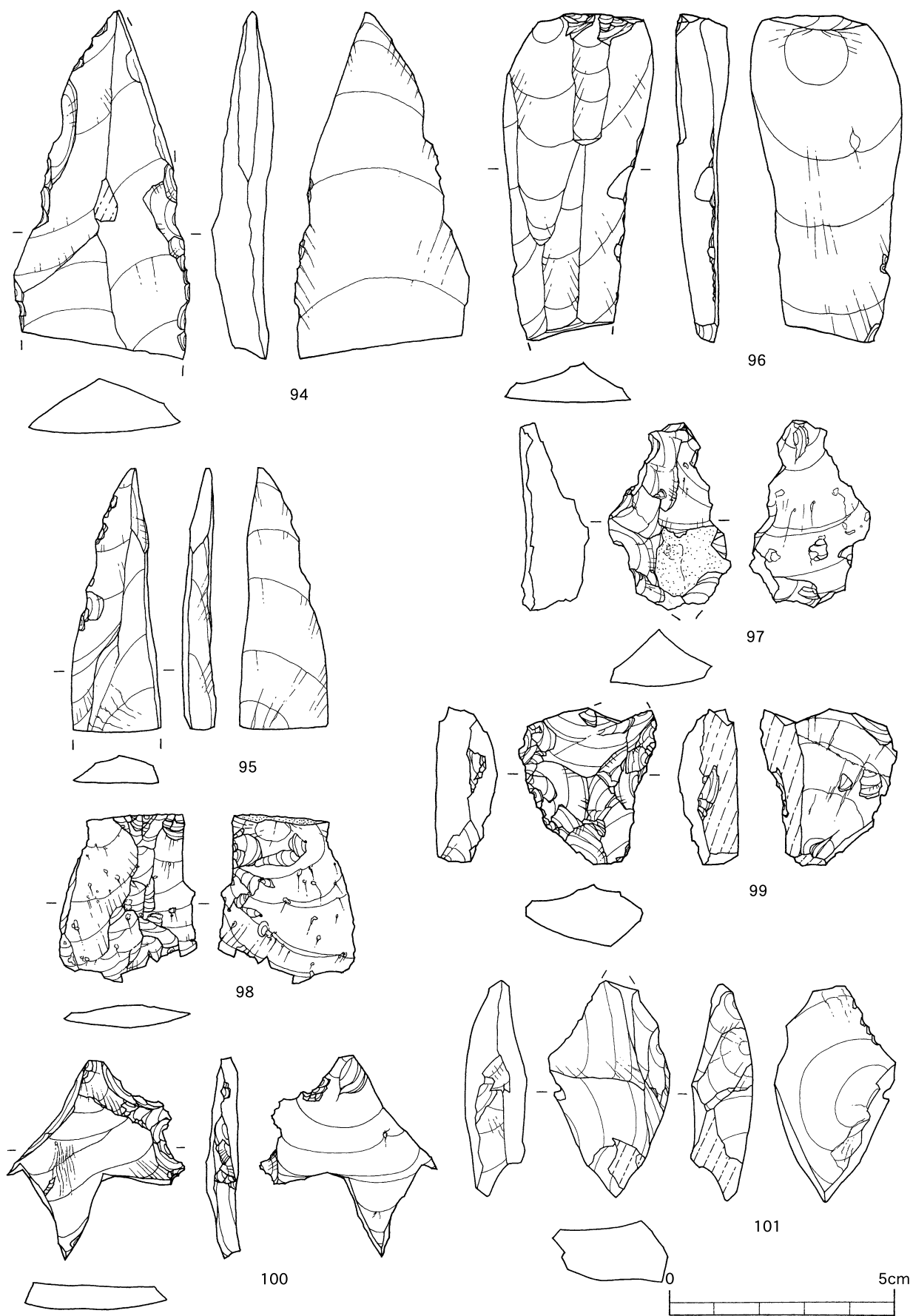
第30図 木葉形尖頭器・三稜尖頭器・搔器



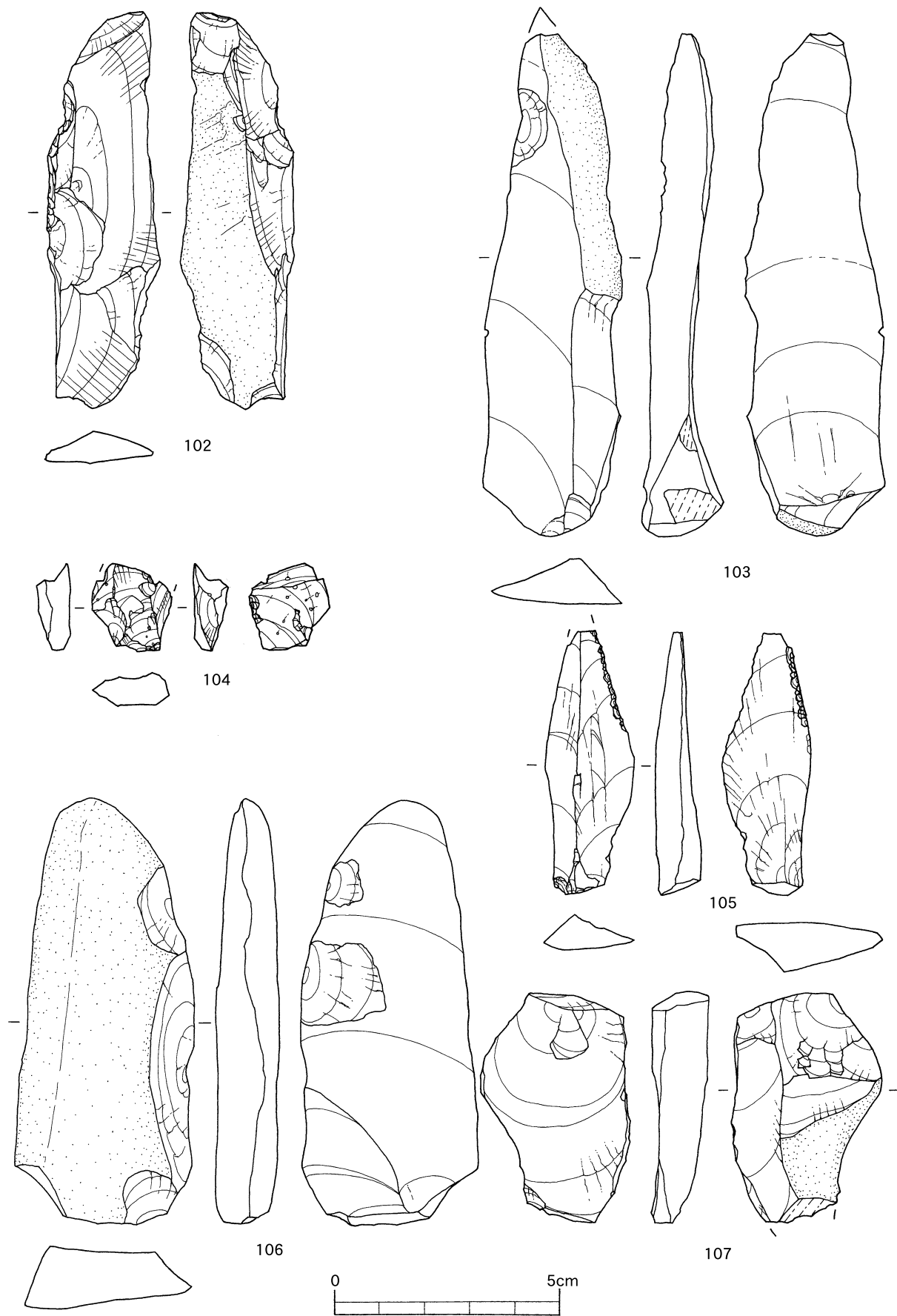
第31図 搔器・削器



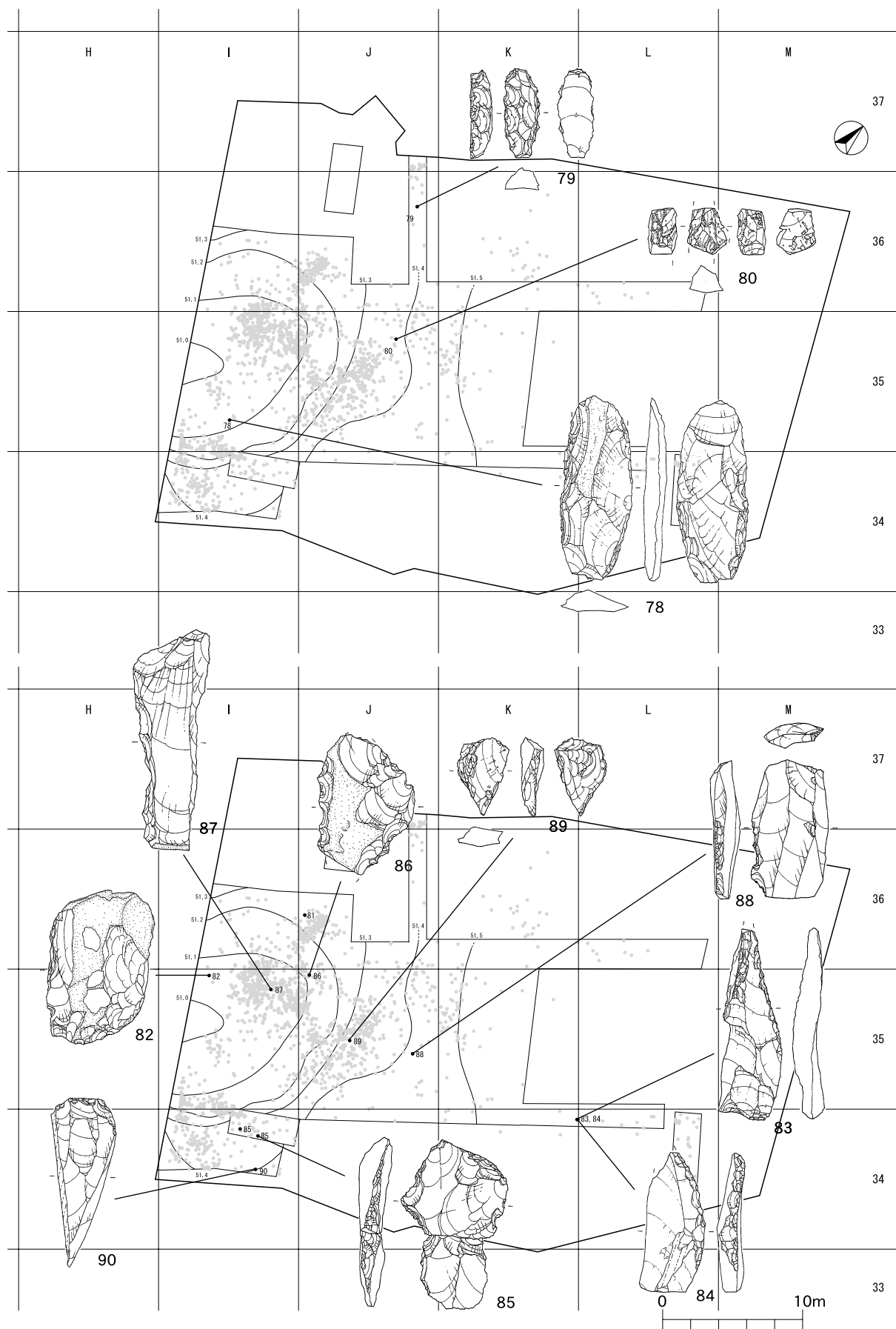
第32図 削器・グレイバー・石錐・二次加工剥片



第33图 二次加工剥片



第34図 二次加工剥片・使用痕剥片



第35図 尖頭器・搔器・削器の出土分布図

97～100は黒曜石やチャートの剥片に二次加工が施されているものである。99はチャート製であり、両側縁の加工を整形と判断すると台形石器として認定できる可能性もあろう。101は「ノの字」形剥片を使用したもので、先端近くに粗い二次加工が施されている。石材と素材利用は3類とした今峠型ナイフに類似するものの基部加工が認められず、別とした。102は粘板岩製で部分的に二次加工が認められる。103と106は風化の著しい頁岩であり、二次加工は明確に残存していないがわずかに痕跡が残る。

使用痕のある剥片（第34図 105）

第34図105は頁岩製の先細りの剥片である。二次加工は全く施されていないが、両側縁には使用痕と判断される微細剥離が顕著に観察できる。

剥片（第34図 107）

第34図107は風化が著しい剥片である。

石核（第36～42図 108～135）

出土した石核は多数であり、ここでは6類に分類した。

1類：多面体のサイコロ状を呈し、打面転移を頻繁に行うもの。広い平坦面を打面にして、そこから周辺の面を剥ぐもの。部分的に打面転移を行うものもここに含めた。

108は平坦面を打面にしたもので正面と右側を剥いている。剥離角は約80度から90度である。

石材は上牛鼻産黒曜石である。

109・110はいずれも類似する形態で、平坦な打面を有し、そこから正面や右側面などの周囲を剥いている。これらの打面もまた剥離面を利用している。これらも石材は上牛鼻産黒曜石である。

111は打面を転移しながら順次作業面を変えて剥離作業を行っている。これも剥離角度は約80度程度である。112はこれまでの上牛鼻産黒曜石ではなく安山岩である。多面体で全ての面が作業面となっている。

2類：断面三角状を呈し、打面と作業面を交互に入れかえながら剥片剥離を行うもの。剥離角度は約60度となる特徴がある。

113は作業面を次の打面にして順次剥離作業を行うものであり、剥離角は60度程度となる。114も同様であり、得られる剥片は打面と長さがほぼ同じような三角形の剥片が連続して生産される。115も同様で打面と作業面を入れかえながら剥片剥離を行っているものである。116は安山岩製であり、背面に自然面を残すため、チョッピングツール状の石核となっている。打面と作業面を交互に入れかえながら、幅広で短い剥片が得られている。

3類：求心状に周囲から剥片剥離を行うもの。

117は背面に自然礫面を残すもので、周囲から求心状に剥片剥離を行っている。118・119は表裏両面とも周囲から求心状に剥片剥離したものである。120は小型の礫素材石核であり、求心状に剥片剥離を行っている。いずれも小さな剥片が得られている。121は比較的大きなものであり、裏面には打面形成もみられる。

4類：小礫を分割した面を打面にして剥片剥離を行うもの。

122は頁岩の小円礫を分割し、その分割面を打面にして剥片を剥いだものであるが、作業はあまり進行していない。123は上牛鼻産黒曜石を利用したものである。

5類：剥片を素材とするものであり、剥片の主要剥離面を打面にするものや、側面にして小口から剥ぐものがみられる。図のスクリーントーン部は素材剥片の主要剥離面である。

124は剥片の平坦な広い腹面を打面にして、周囲から求心状に剥片剥離を行ったものである。125は安山岩を石材とするものであり、主要剥離は側面に置かれ、自然面を打面にして、背面及び小口部分から剥片剥離を行っている。126は剥片の腹面が打面にされている。127は頁岩製であり、厚みのある剥片の平坦な主要剥離面が打面に利用されているものである。剥片は比較的幅広のものが剥がされている。

128は主要剥離面が底面にされ、平坦な自然礫皮面が打面になり、横長剥片が連続的に剥離されている。また最後は、その作業面を打面にして、小口部分から先細りの剥片が剥がされている。

129は主要剥離面が側面とされ、小口部分から連続して細身の縦長剥片が生産されている。安山岩製である。

130は頁岩の大型剥片を素材とし、剥片時の主要剥離面を側面とし、小口部分から細身の縦長剥片を連続して剥離しているものである。打面は上端と下端にあり両設打面となっている。

6類：背面に自然礫皮面があり、平坦な打面から連続して一定方向に後退するように剥片剥離を行うもの。

131は上牛鼻産黒曜石の円礫が使用され、一回の剥離で得られた平坦面を打面とし、そこから連続して剥片剥離が行われているものである。132も同様の工程で剥片剥離が進行しているが、側面の状況から途中で作業面を打面にして、底面が作業面になった形跡が認められる。

133も背面に自然面が残存するもので、石材は三船産の黒曜石が利用されている。平坦な打面が形成され、そこから連続的に剥片剥離が行われたものと推定される。そして最後にその作業面を打面として横長剥片が取られている。

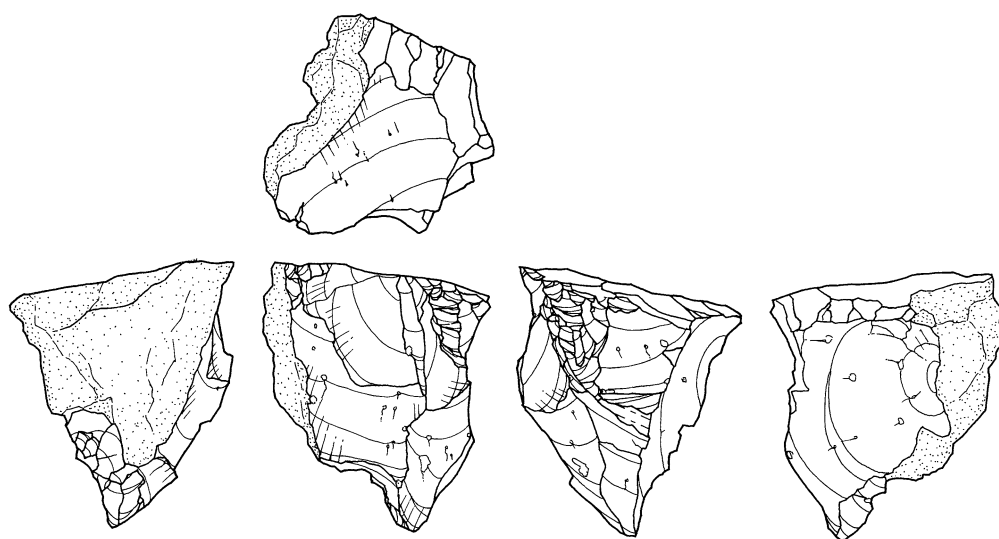
134は小角礫を利用したもので、平坦な自然面を打面としている。

135は平坦面を打面とし、幅広剥片がとられたもので、背面に自然面が残存している。

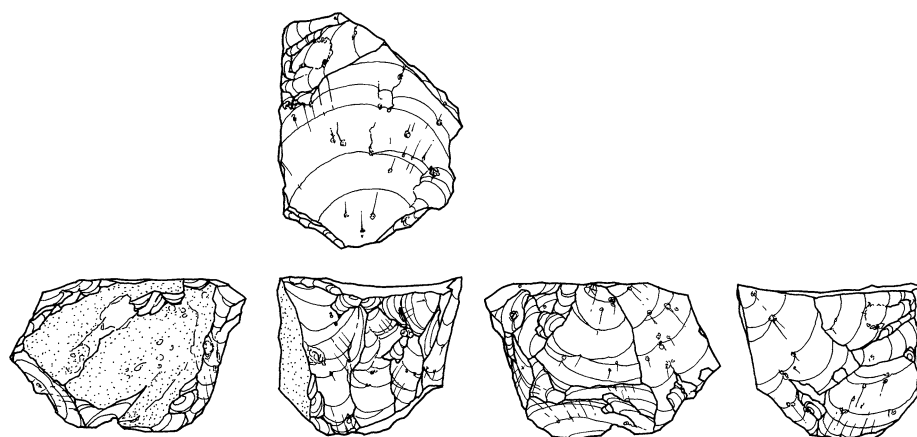
接合資料（第43～45図 136～138）

136は黒曜石製の石核と剥片3点の接合資料である。136-①はすべての剥片が剥がされた残核の状態である。3点接合した剥片のなかで最初に剥離されたものは②の礫皮がついたもので、136の右側面が打面となっている。この右側面を打面にして、現在の打面部分の面がその前に縦長状の剥片が連続して剥離されている。③及び④の剥片はこの打面から剥離されたものである。③は正面の右側面部が剥がされたもので、打面部は折断されている。④も縦長状の剥片であり打面部の上半部は折断され、末端部のみ接合したものである。この現存しない部分は左側縁にシャープな刃部となる縁辺がみられることから台形石器などとして利用された可能性が考えられる。

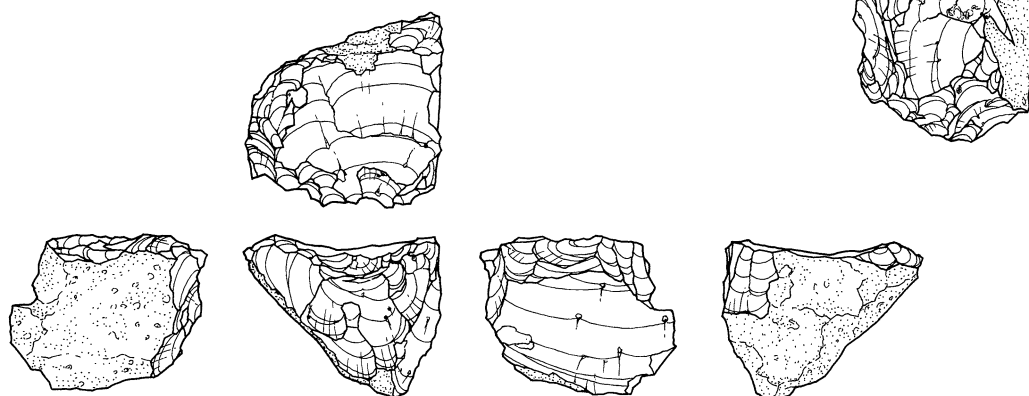
137は黄褐色を呈する玉随系の石核と剥片2点の接合資料である。これは図の右縁辺に裏面の平坦な自然面を打面にして横長剥片が剥離されており、その剥離面を打面にして上の部分は除去されている。その後、そこはわずかに調整が施されている。剥片はその反対側の縁辺部が、やはり裏面の平坦な自然面を打面にして、小さな剥片が連続して剥離されており、②はその一つである。得られる剥片の形状は幅1cm程度、長さ2cm程度の縦長剥片であり、小型ナイフ形石器などの素材と思われる。



108



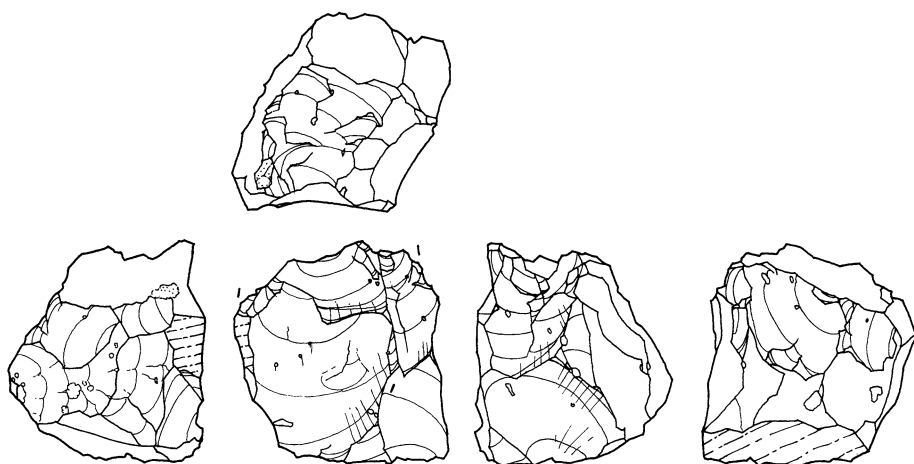
109



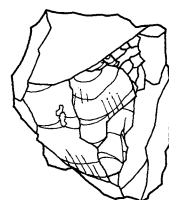
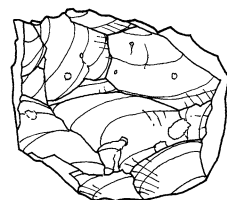
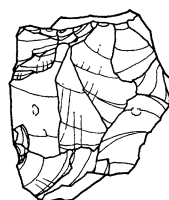
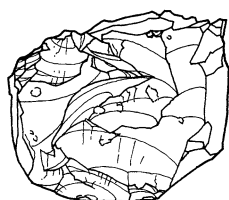
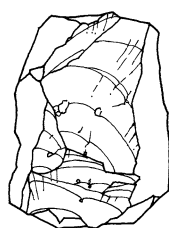
110



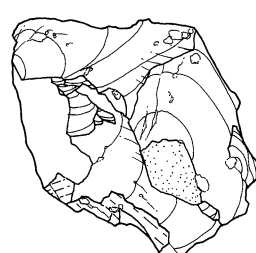
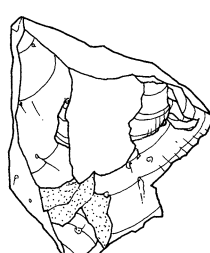
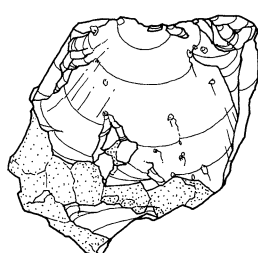
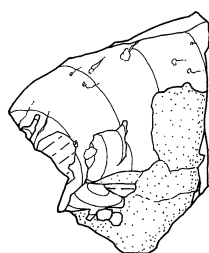
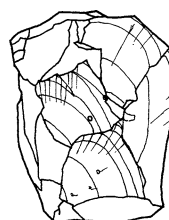
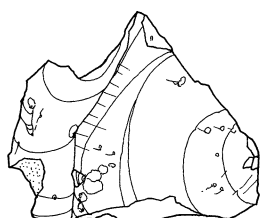
第36図 石核（1類）



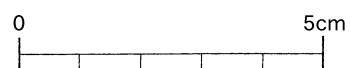
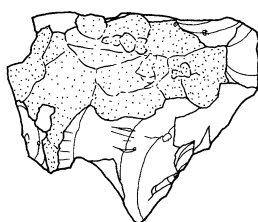
111



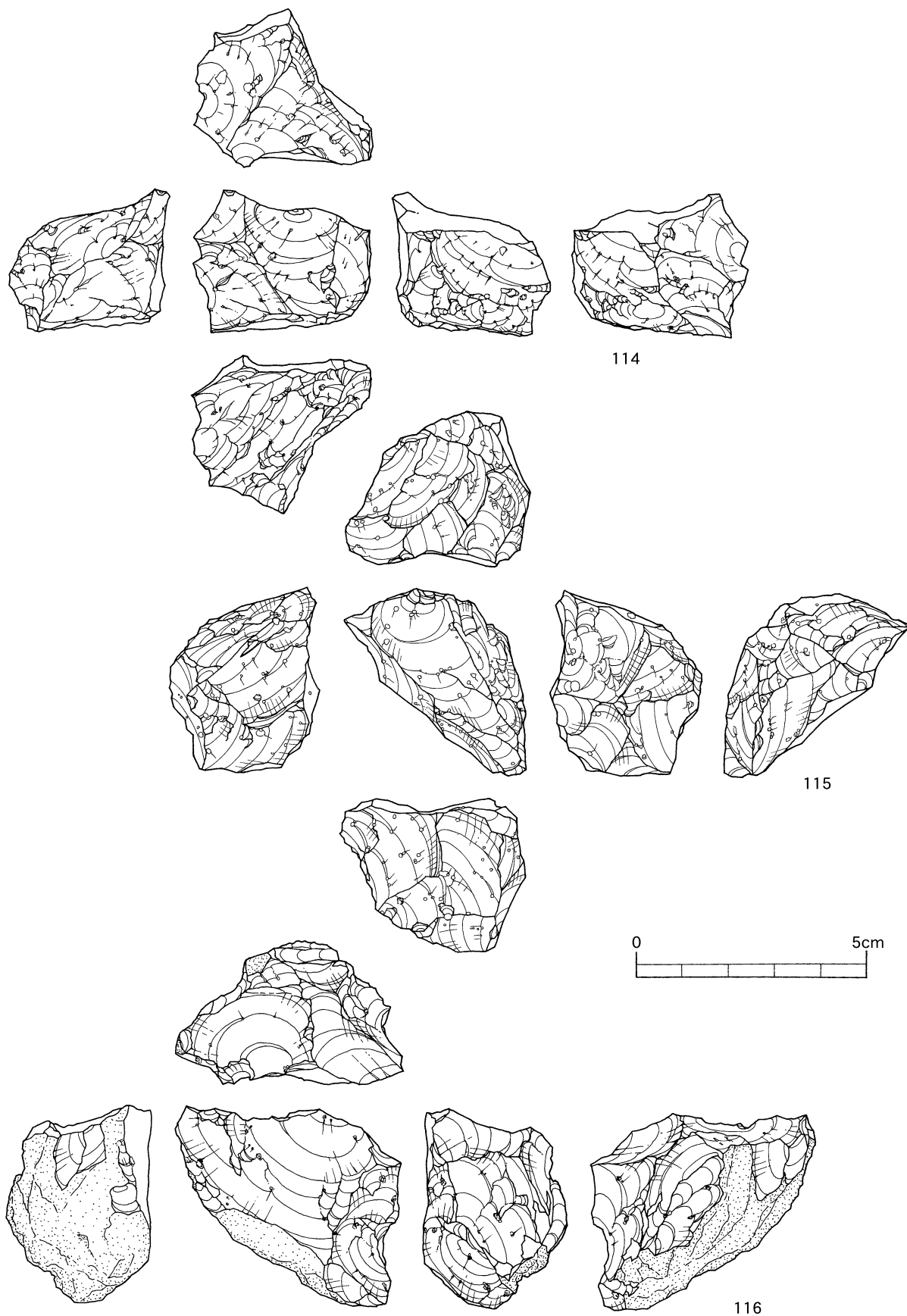
112



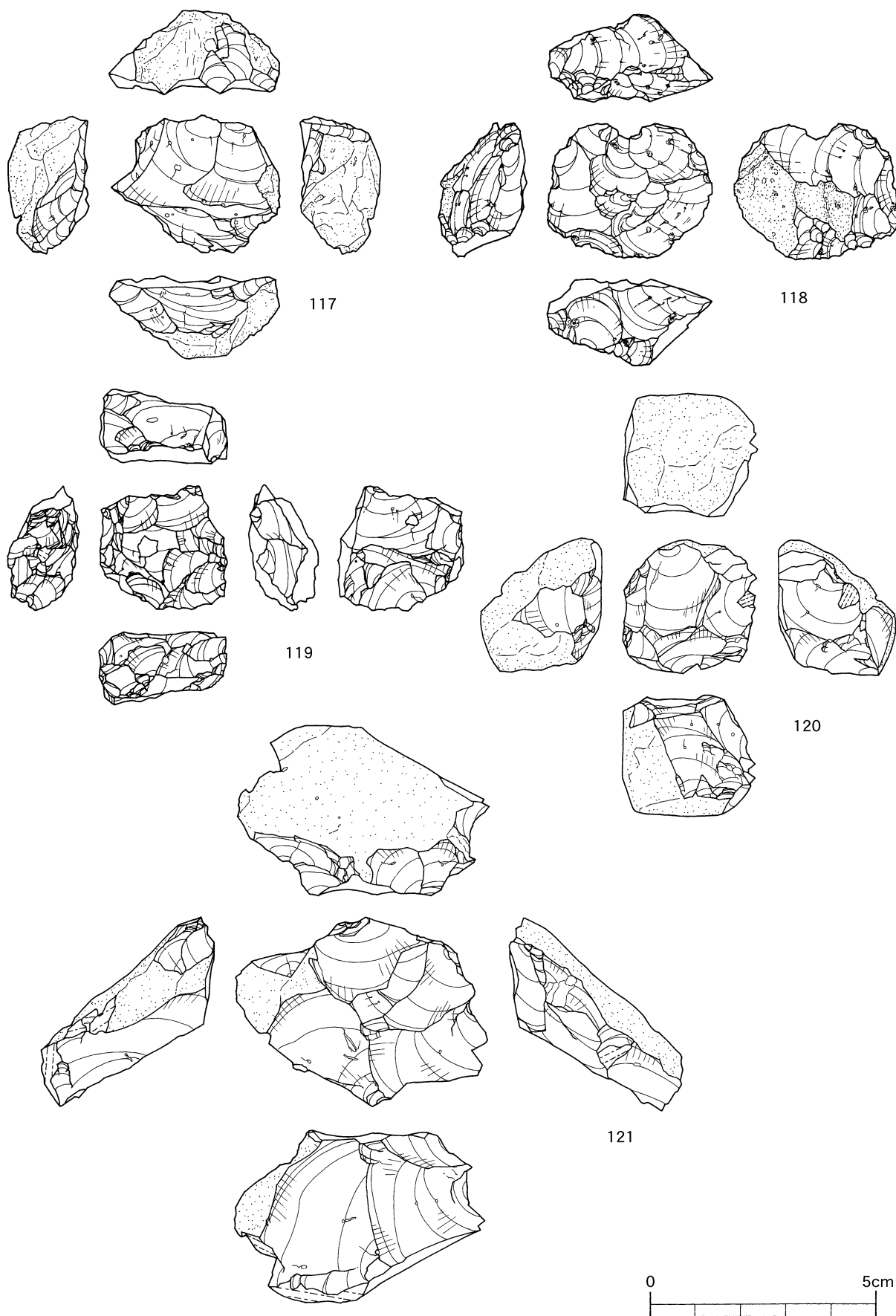
113



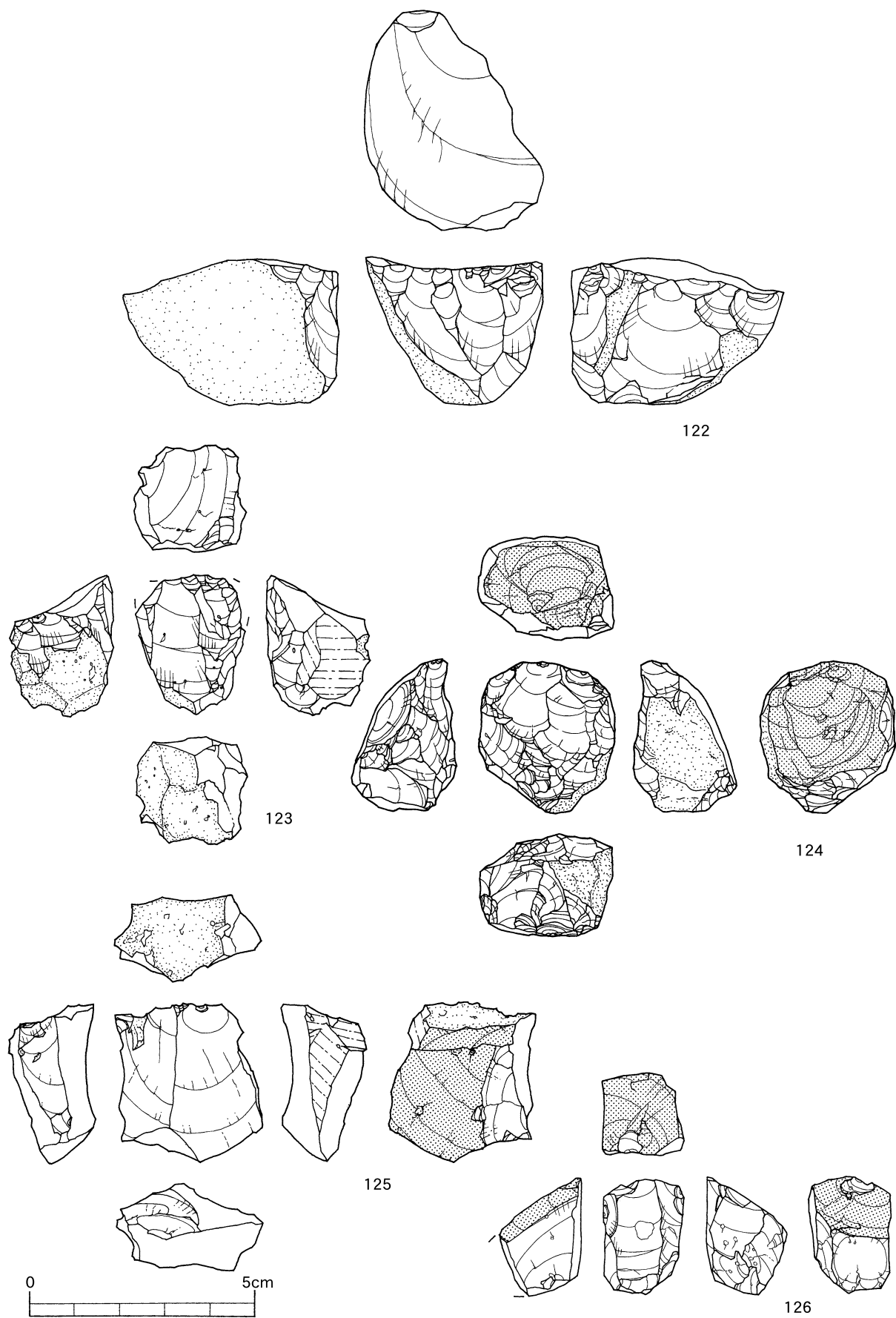
第37図 石核 (1・2類)



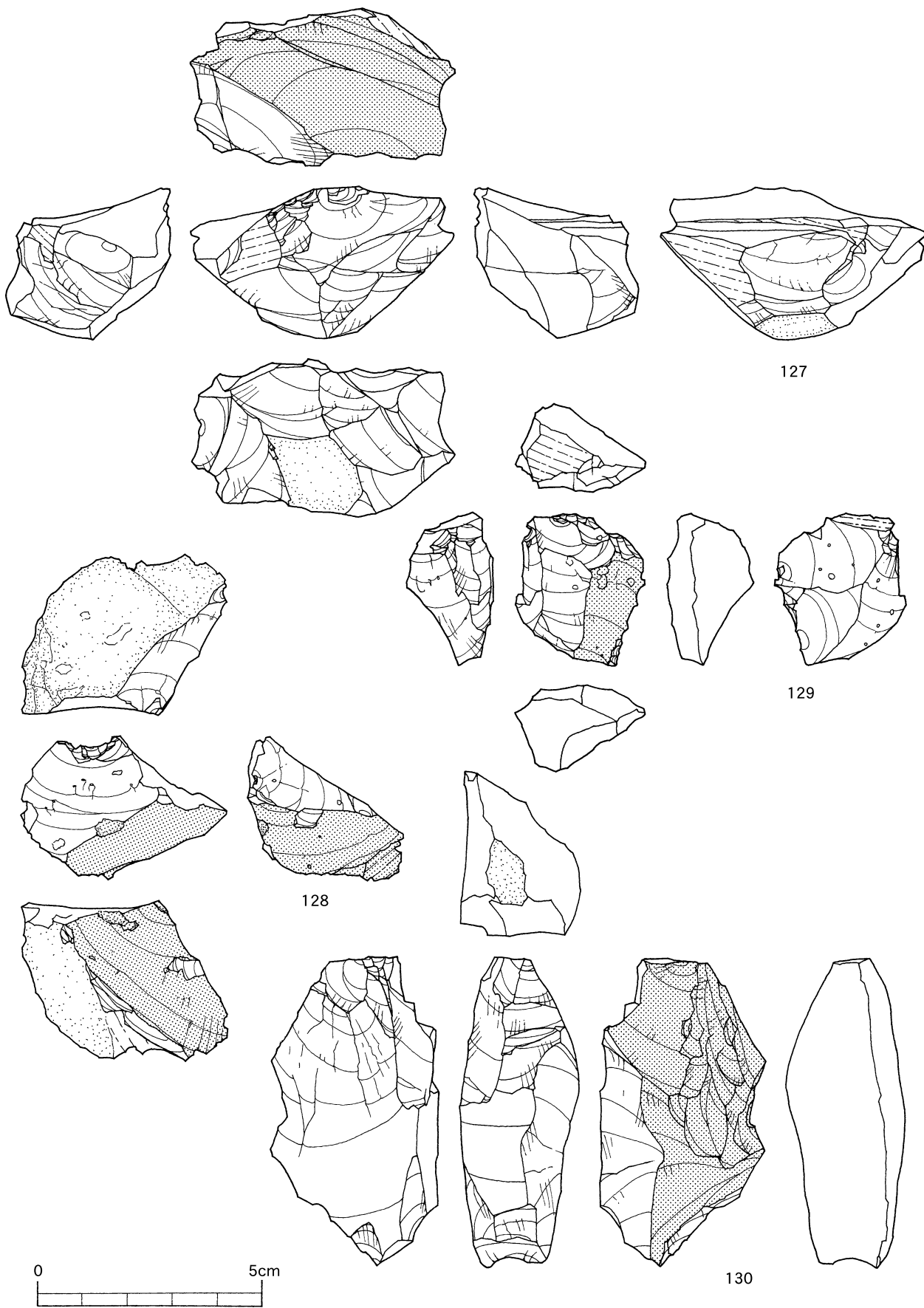
第38図 石核（2類）



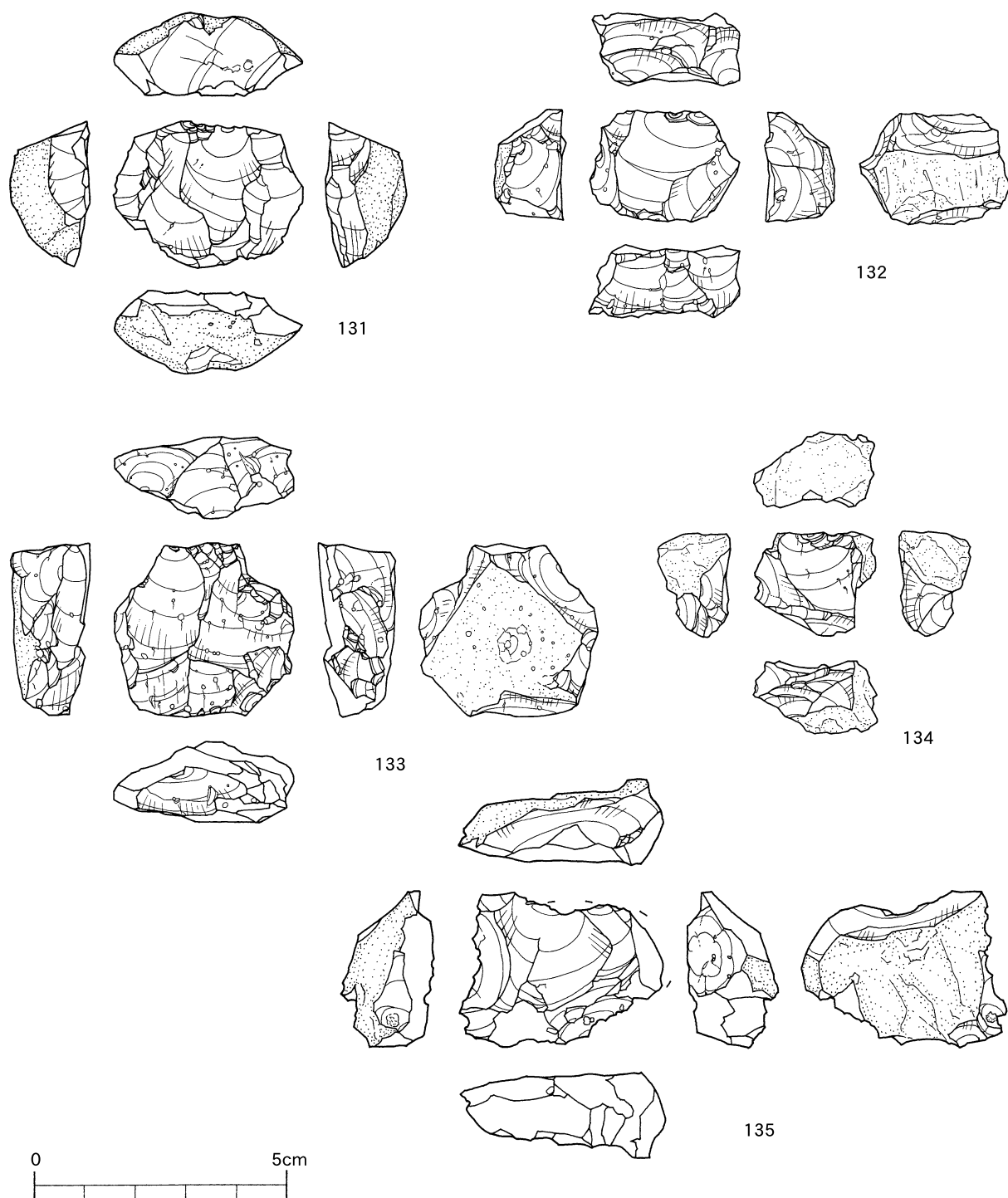
第39図 石核（3類）



第40図 石核（4・5類）



第41図 石核（5類）



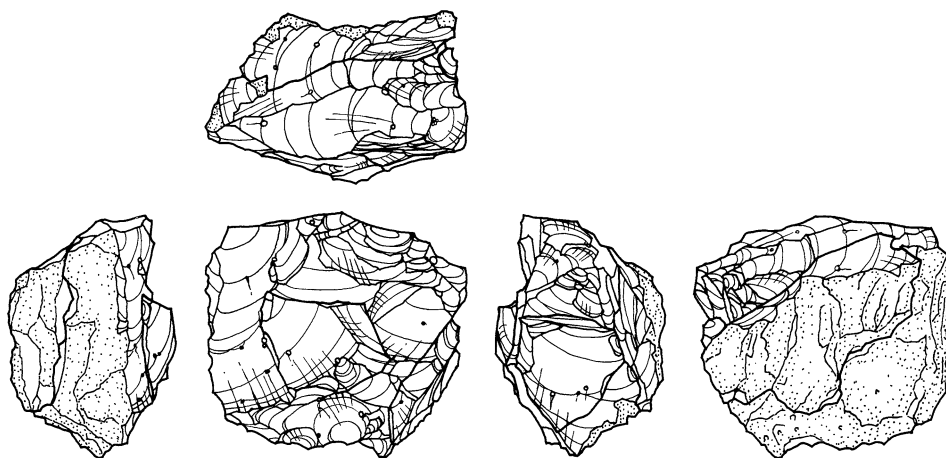
第42図 石核（6類）

138も同じ石材の石核と剥片の接合資料である。これも平坦な礫面が打面とされ縁辺から連続して比較的幅広の剥片が剥離されている。②は剥離された幅広の剥片であり、折断により分割されている。

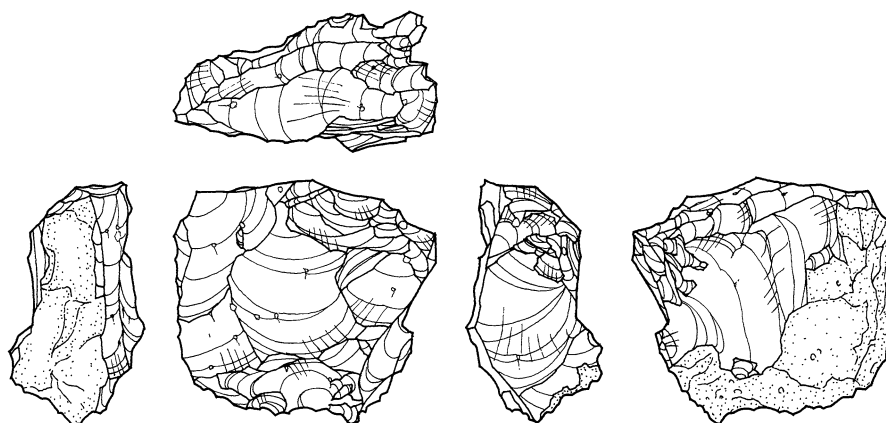
ハンマーストーン（第47図 139～142）

第47図139～142はハンマーストーンである。

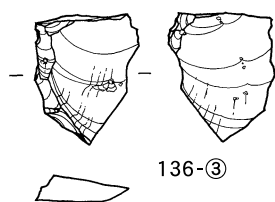
139は砂岩の小さな楕円形状の円礫を使用したものであり、長軸の両端に使用痕である敲打痕が



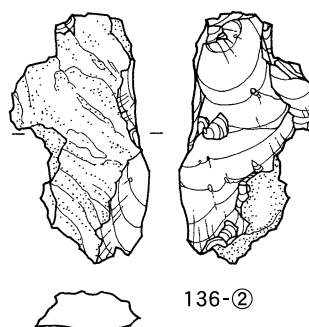
136



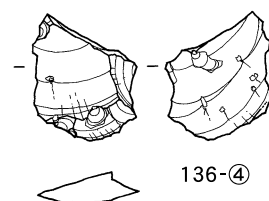
136-①



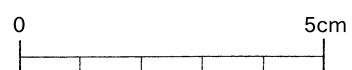
136-③



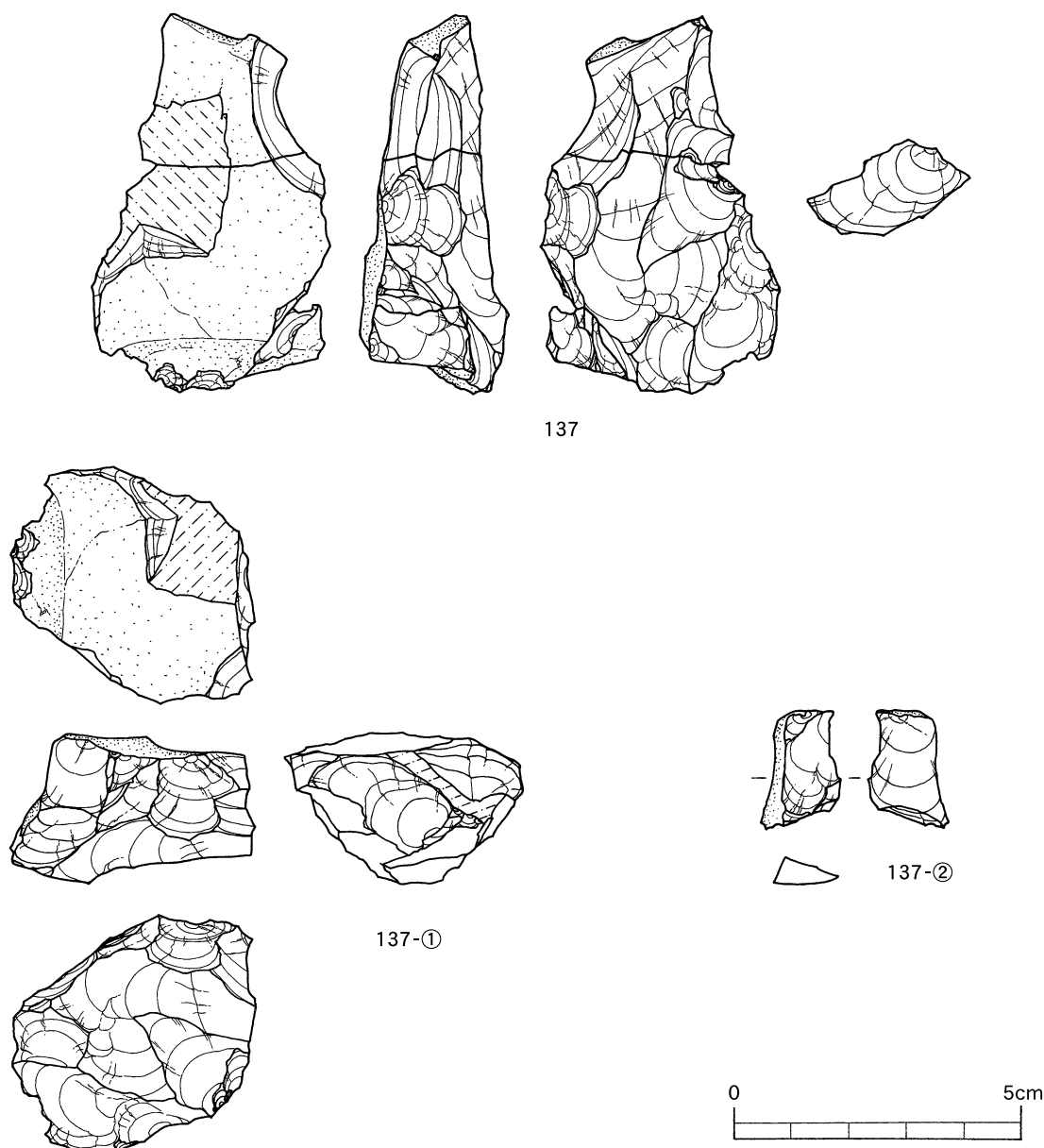
136-②



136-④



第43図 接合資料(1)



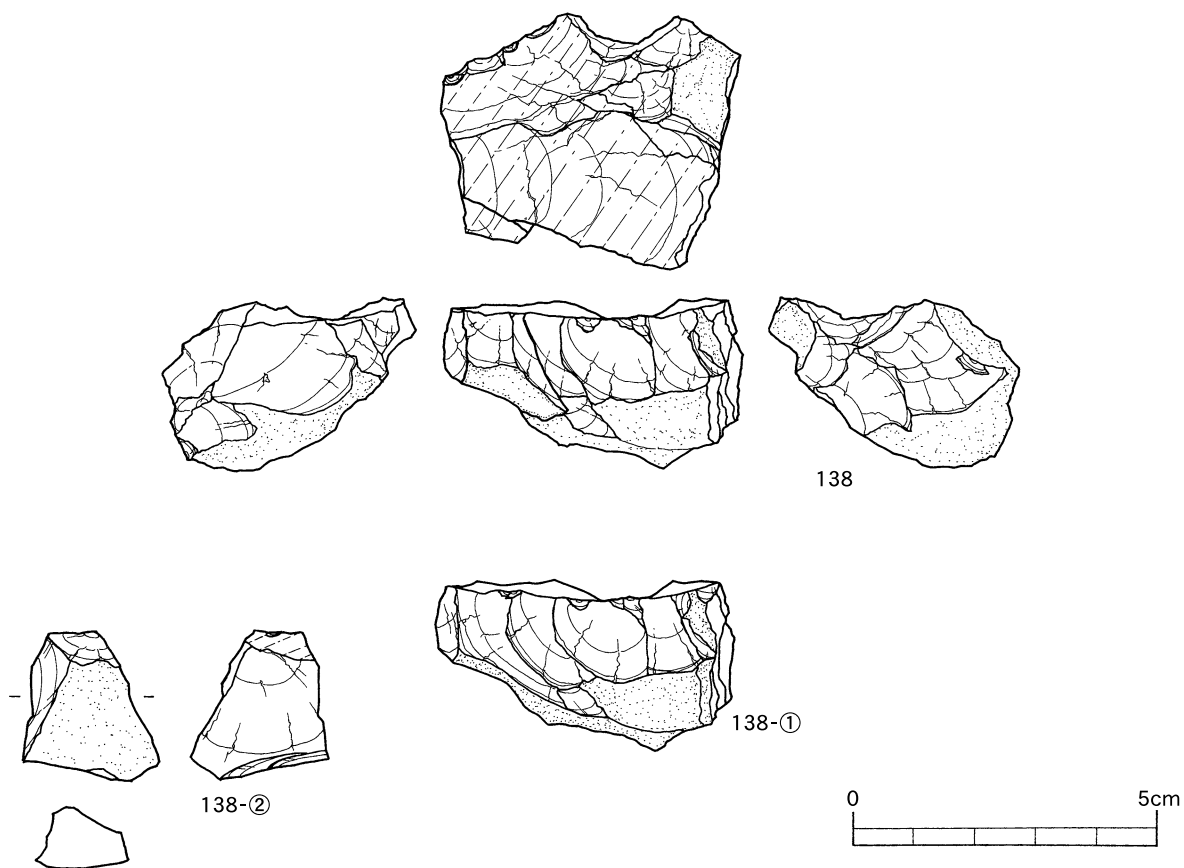
第44図 接合資料(2)

顕著に認められるものである。一端は節理により部分的に破損しているが、破損後の敲打痕も観察されることから破損後も使用されたことがわかる。最大長約 5 cm である。

140はそれより小さい扁平な砂岩を利用したものであり、端部にわずかであるが敲打痕が認められる。

141は石英の細長い礫で、長軸の両先端部に使用痕である敲打痕が認められるものである。長軸の長さは約 6 cm で、重量は 65.45 g を測る。

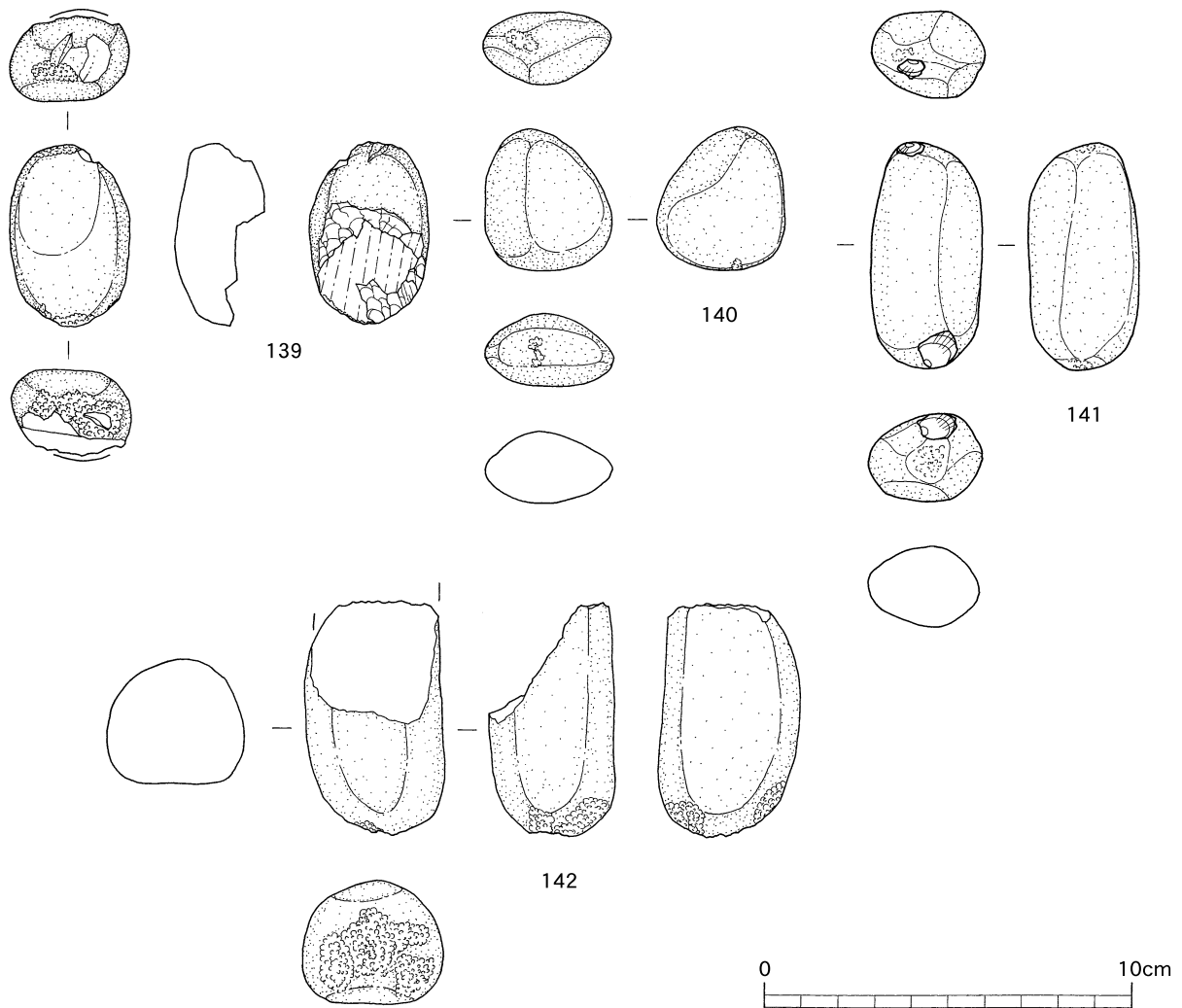
142は比較的大型の細長い円礫を使用したハンマーストーンである。半部欠損しているが残存する端部には敲打痕が顕著に観察される。石材は砂岩である。



第45図 接合資料(3)



第46図 石核の出土分布図



第47図 ハンマーストーン

石器の出土分布

出土した石器は各器種ごとに出土分布を示した。第22, 23, 29, 35, 46図がそれである。なお、ナイフ形石器については類別に示している。これによると、ナイフ形石器Ⅰ類は散在した分布であるのに対し、ナイフ形石器Ⅲ類は比較的集中した分布となっている。またナイフ形石器Ⅴ類は1ヶ所にまとまりがみられる。このことから各分類したナイフ形石器は分布状況が異なり、この出土分布の違いは時期的な違いを有すると判断される。

一方、台形石器も散在した出土分布であり、三稜尖頭器は離れた場所での出土であり特徴的であった。

第4節 細石刃文化期の遺物

細石刃文化期の遺物はVI層を中心に出土しており、一部VII層にも認められている。出土石器は細石刃、細石刃核などであるが、それら以外の削器等についても細石刃文化期の可能性があるものの、明確な時期区別は困難であるため除外してある。

細石刃（第48図 143・144）

第48図143・144は細石刃である。143は背面に自然礫皮面が残存するものであり、打点と末端部は折断された中間部である。144も中間部であり、打点部と末端部は折断により除去されている。左側縁部には使用痕と推定される微細剥離が観察される。2点とも針尾産の黒曜石と推定される。

細石刃核（第48・49図 145～155）

総計11点の細石刃核が出土した。大きく3類に区分できる。

1類：船野系の細石刃

145は厚みのある剥片もしくは分割礫を素材とし、平坦面を打面として、両側面を打面からの整形剥離で船底形に仕上げたものである。打面幅は狭く、作業面長は長く、断面が「V」字状となるもので船野2型（宮田2004）に相当する。146・147は類似するものであり146は一部欠損する。147は打面形成後に左側面を整形しており船野の範疇で捉えられる。148は平坦な礫皮面が打面となり、そこから左側面の整形を施している。作業面は前後2面みられる。149は小さな角礫を分割し、その分割面を打面として両側面の整形を行っている。細石刃作業面は1端からのみであり、作業面には頭部調整の痕が認められる。

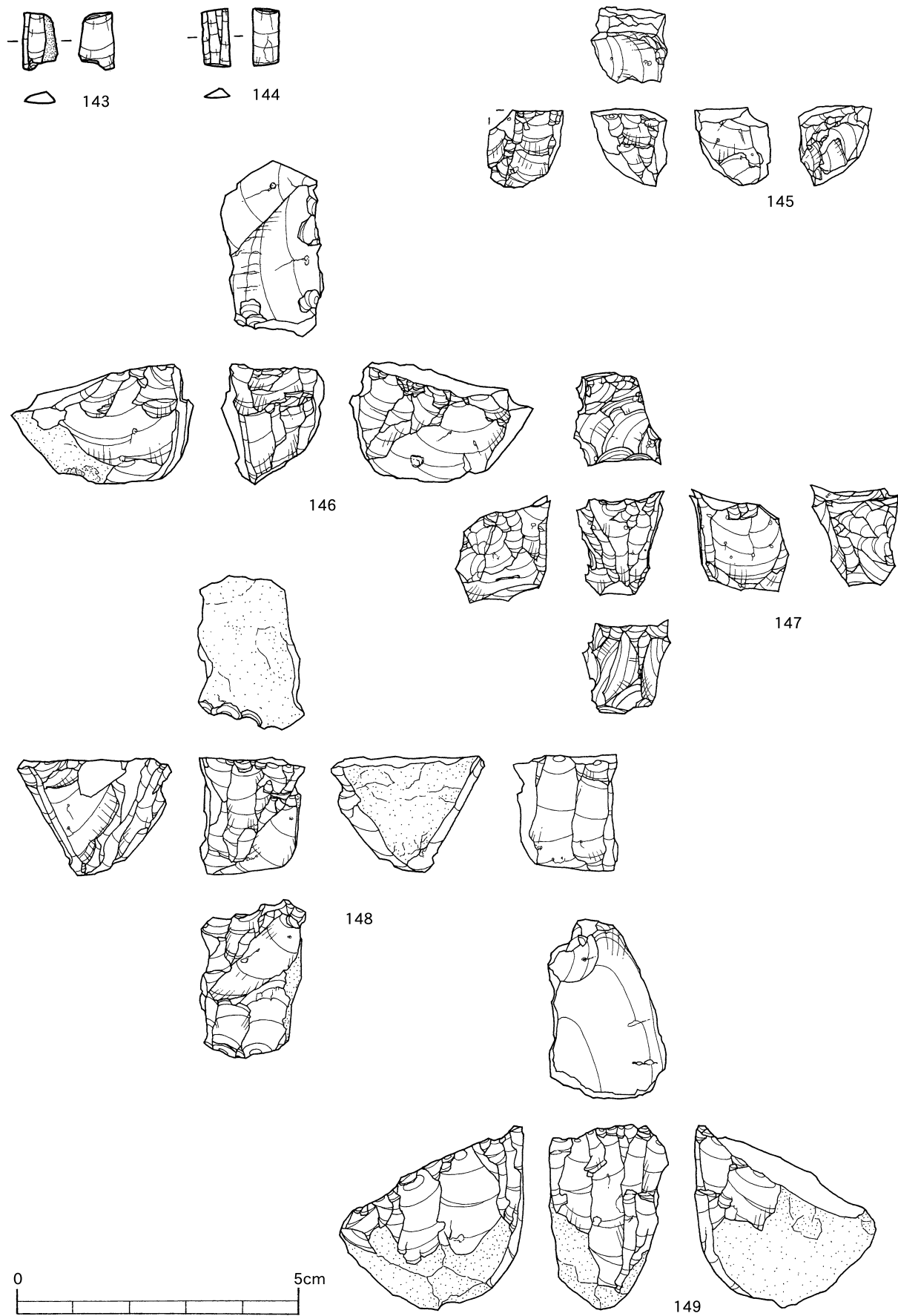
2類：野岳系の稜柱型の細石刃核

150は剥片を素材とし、その折断面を打面にして、そこから左側縁の整形を施したものである。細石刃は小口部分から剥離されている。151も同様のものであるが側面調整は施されていない。152は厚みのある剥片が素材とされ、その後、あまり整形は施されず、打面が得られて、そこから細石刃を剥離したものである。細石刃の剥離前には打面調整が丁寧に行われている。153は色調と風化から肉眼的判断により針尾産黒曜石と推定される石材を使用したものである。部分的に礫皮面が残る比較的厚みのある剥片が素材となり、その後打面を形成し、石核整形は全く行われないうまま細石刃が剥離されている。これも細石刃剥離前に細かな打面調整が施されている。

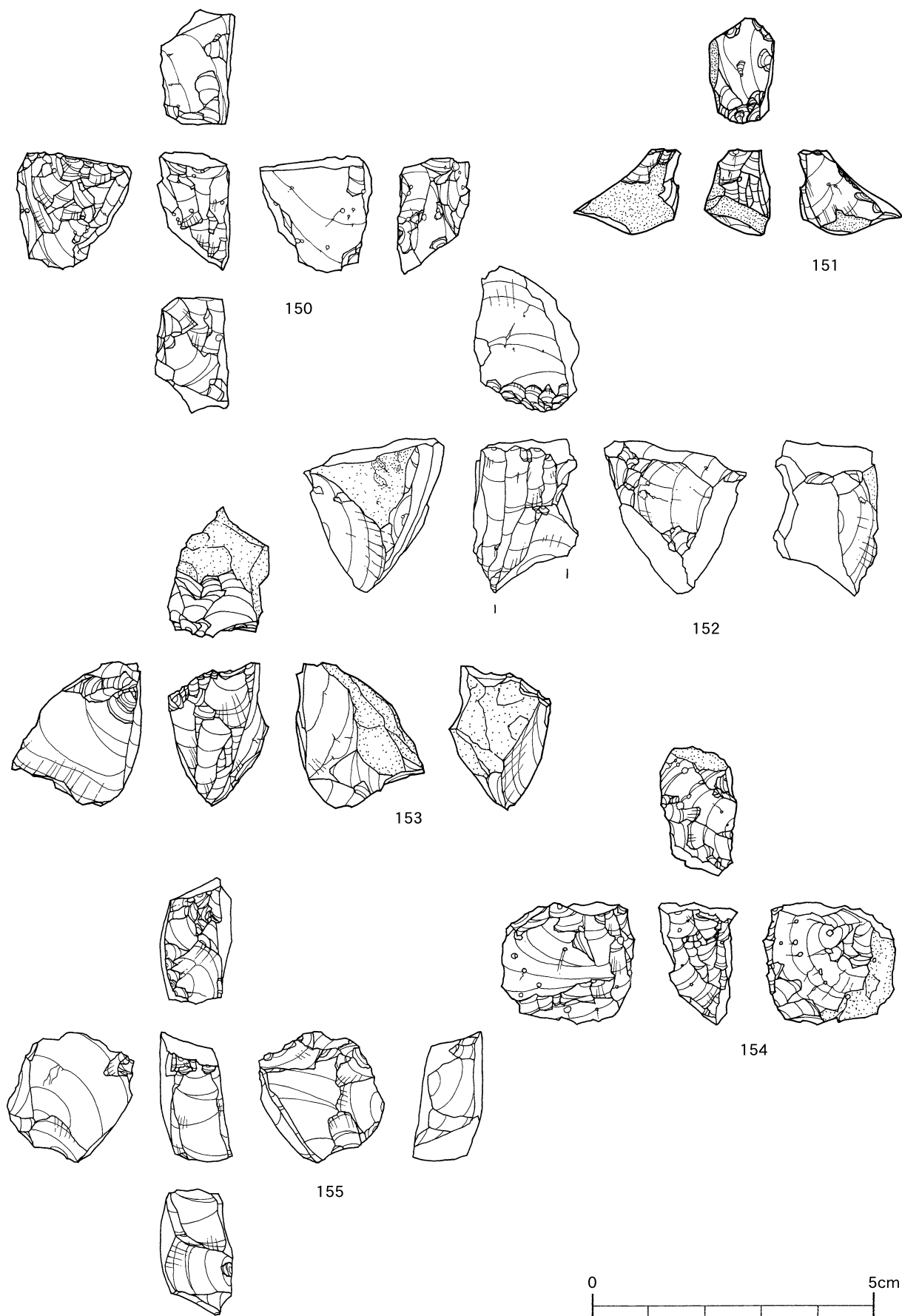
3類：福井型系の細石刃核

154は自然礫皮面を打面として剥離した剥片を素材とし、主要剥離面を側面に用い、打面は側方向からの複数の剥離により形成したものである。ブランク整形は施されず、細石刃剥離は小口部分から行われている。

155は肉眼的観察による色調や風化の状況から153と同様に針尾産の黒曜石を使用したものと判断できる。剥片を素材とし、周辺に二次加工を施し円形状のブランクを明確に形成している。打面は側方向からの連続した剥離により形成している。細石刃剥離は小口部分から行われている。



第48図 細石刃・細石刃核（1類）



第49図 細石刃核（2・3類）

第4表 旧石器時代遺物観察表 1

挿図	番号	器種	分類	石材分類	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
17	1	ナイフ形石器	1a	OB1	—	表土	—	7.60	3.80	1.95	1.30	
	2	ナイフ形石器	1a	OB4	I36	VIII	10626	6.41	4.90	1.90	1.25	
	3	ナイフ形石器	1a	OB1	I35	VIII	11404	8.66	(3.90)	2.15	1.15	
	4	ナイフ形石器	1a	OB2	I35	VII	9057	6.99	(3.48)	2.50	1.00	
	5	ナイフ形石器	1a	OB1	I35	VIII	10488	7.73	(3.10)	2.45	1.35	
	6	ナイフ形石器	1a	OB2	J35	VII下	11392	3.20	3.10	1.80	0.90	
	7	ナイフ形石器	1a	OB2	I35	VII下	10490	4.06	(3.00)	(1.38)	1.10	
	8	ナイフ形石器	1a	OB1	I34	VII下	10973	3.63	(2.70)	(1.90)	0.95	
	9	ナイフ形石器	1b	SH3	J35	IIIb	5466	7.10	3.90	2.82	0.80	
	10	ナイフ形石器	1b	OB1	I34	VIII	10688	7.72	3.00	2.10	1.08	
18	11	ナイフ形石器	2a	SH3	K36	V	9888	10.79	7.00	2.05	0.60	
	12	ナイフ形石器	2a	SH2	I35	VII下	11223	16.92	(7.60)	2.30	0.75	
	13	ナイフ形石器	2a	SH2	I35	VII下	11227	15.59	(5.55)	2.90	1.00	
	14	ナイフ形石器	2a	SH2	I35	VII下	11228	11.99	6.00	2.70	0.85	
	15	ナイフ形石器	2a	SH3	I35	VII下	11233・10319	8.49	(4.55)	2.35	0.90	
	16	ナイフ形石器	2a	AN2	I34	VI	9052	16.83	(6.12)	2.90	1.05	
	17	ナイフ形石器	2a	AN1	K35	VIII	10505	24.78	(8.60)	2.00	1.55	
19	18	ナイフ形石器	2b	OB2	2T	VIII	12419	6.38	(3.00)	2.25	1.15	
	19	ナイフ形石器	2b	OB4	2T	VIII	12408	4.38	(2.65)	1.90	0.85	
	20	ナイフ形石器	2b	OB2	I34	VII	10017	5.98	(3.00)	1.95	1.05	
	21	ナイフ形石器	2b	AN3	I36	VII下	10429	5.24	(1.95)	2.25	1.35	
	22	ナイフ形石器	2b	OB2	I35	VI	10149	8.88	(2.50)	2.55	1.30	
	23	ナイフ形石器	2b	OB2	J35	VII下	11262	3.85	(2.25)	1.85	1.10	
	24	ナイフ形石器	2c	SH1	I34	VII下	10297	14.11	(4.65)	2.80	1.15	
20	25	ナイフ形石器	3	OB3	J36	IV	9103	8.42	3.10	2.70	1.40	
	26	ナイフ形石器	3	OB1	I36	VII	9792	12.70	3.50	3.60	1.10	
	27	ナイフ形石器	3	SH3	I35	V	9530	11.48	4.45	2.80	1.10	
	28	ナイフ形石器	3	SH3	I36	VII	9792	8.15	3.30	3.12	0.90	
	29	ナイフ形石器	3	OB1	J35	VIII	10932	6.13	3.25	3.05	0.90	
	30	ナイフ形石器	3	OB1	I35	VII下	10820	4.94	(2.50)	2.78	0.85	
	31	ナイフ形石器	3	OB1	I36	VIII	9805	7.22	2.85	2.50	1.30	
	32	ナイフ形石器	3	OB1	I36	VII下	10690	6.97	2.75	2.65	1.10	
	33	ナイフ形石器	3	OB1	I35	VII	11033	11.40	(4.05)	2.60	1.00	
	34	ナイフ形石器	3	OB1	K34	IIIb	89	7.61	3.80	2.80	1.00	
21	35	ナイフ形石器	3	SH3	I35	VII	10625	4.60	3.80	1.90	0.75	
	36	ナイフ形石器	3	OB1	I35	VII下	10333	7.75	3.60	2.70	1.10	
	37	ナイフ形石器	3	OB2	I35	VII下	10343	6.40	3.85	(2.40)	1.05	
	38	ナイフ形石器	3	OB1	I36	VII	9788	3.43	2.28	2.20	0.95	
	39	ナイフ形石器	3	OB1	I35	VII下	11059	2.36	2.45	2.10	1.25	
	40	ナイフ形石器	3	OB1	J35	VII下	11341	4.51	3.20	(2.40)	0.85	
	41	ナイフ形石器	3	OB1	J35	VIII	11714	3.34	2.60	(1.95)	0.80	
	42	ナイフ形石器	3	OB2	J36	VII	11386	10.59	(3.35)	3.10	1.10	
	43	ナイフ形石器	4	SH1	I35	VI下	10173	11.79	3.00	2.90	1.80	
	44	ナイフ形石器	4	SH1	J35	VII下	10998	17.97	5.60	2.50	1.80	
24	45	ナイフ形石器	5	OB1	I35	VII	10667	0.67	1.80	0.90	0.45	
	46	ナイフ形石器	5	AN3	I35	VI下	10188	0.63	(1.85)	0.90	0.40	
	47	ナイフ形石器	5	OB3	I35	IIIb	5441	0.65	1.45	1.00	0.45	
	48	ナイフ形石器	5	OB1	J35	VIII	11497	1.16	(2.70)	1.00	0.50	
	49	ナイフ形石器	6	OB2	I35	VII下	11061	2.25	(2.55)	(1.45)	0.80	
	50	ナイフ形石器	6	OB1	I34	VIII	10482	8.26	4.20	2.30	0.90	
25	51	台形石器	—	OB2	I35	VII	9065	11.50	(4.30)	2.80	1.50	
	52	台形石器	—	OB2	J34	VII	9870	10.87	(4.05)	2.90	1.20	
	53	台形石器	—	OB2	J35	VIII	10938	6.64	3.30	2.15	1.40	
	54	台形石器	—	SH3	I35	VII	10010	11.86	4.85	2.70	1.10	
	55	台形石器	—	SH3	I36	IV	9898	4.07	3.20	2.60	0.50	
	56	台形石器	—	SH3	I35	VII	9071	4.62	3.50	2.30	0.80	
	57	台形石器	—	OB2	I35	VII	1363	6.38	(3.28)	2.35	1.20	
	58	台形石器	—	OB2	I36	VII下	10458	8.17	2.65	2.75	1.10	
	59	台形石器	—	OB1	K36	VI	10111	2.73	2.10	2.10	0.80	
	60	剥片尖頭器	1	SH1	I35	VIII	10600	20.82	8.10	2.30	1.10	
26	61	剥片尖頭器	1	SH2	2T	VII	12368	26.77	(6.40)	3.20	1.35	
	62	剥片尖頭器	1	SA	J35	VII下	10535	5.87	5.05	2.15	0.65	
	63	剥片尖頭器	1	SH1	J35	VIII	11396	10.42	(6.10)	2.30	0.75	
	64	剥片尖頭器	1	SH2	2T	VIII	12410	26.98	(8.20)	3.20	1.20	
	65	剥片尖頭器	1	SH2	J36	VII下	10080	19.39	6.25	2.75	1.30	
27	66	剥片尖頭器	2	SH2	2T	VIII	12400	32.10	9.50	3.05	1.05	
	67	剥片尖頭器	2	SH2	L34	VII下	11592	52.42	9.50	3.45	2.10	
	68	剥片尖頭器	2	SH2	J35	VIII	11397	20.72	(7.00)	3.45	1.00	
	69	剥片尖頭器	2	SH2	I35	VIII	10601	40.41	10.90	3.10	1.40	
	70	剥片尖頭器	2	AN2	I35	VIII	10602	34.50	6.80	2.80	1.65	
28	71	剥片尖頭器	3	SA	J36	VII下	10366	19.64	8.50	2.25	1.30	
	72	剥片尖頭器	3	SH2	I34	VII下	10440	15.05	7.90	2.10	0.80	
	73	剥片尖頭器	3	SH2	I35	VII下	10818	16.68	6.20	2.35	1.10	
	74	剥片尖頭器	3	SH2	1T	VIII	12116	31.70	(6.80)	3.10	1.40	
	75	剥片尖頭器	3	SH1	2T・I35	VIII	12441・10744	13.68	5.85	2.20	1.25	
	76	剥片尖頭器	3	OB2	2T	VIII	12417	3.62	(1.70)	2.25	1.05	
	77	剥片尖頭器	—	SH2	J35	V	9595	20.21	(6.60)	3.30	0.80	
30	78	木葉形尖頭器	—	SH1	I35	VIII	10569	27.17	(8.10)	3.15	0.95	
	79	三稜尖頭器	—	AN2	J36	VI	10081	7.72	(4.00)	1.60	1.00	
	80	三稜尖頭器	—	OB2	J35	VII	10000	5.04	(2.05)	1.35	1.25	
	81	搔器	—	AN1	I36	VII下	10459	188.72	10.30	5.60	3.40	

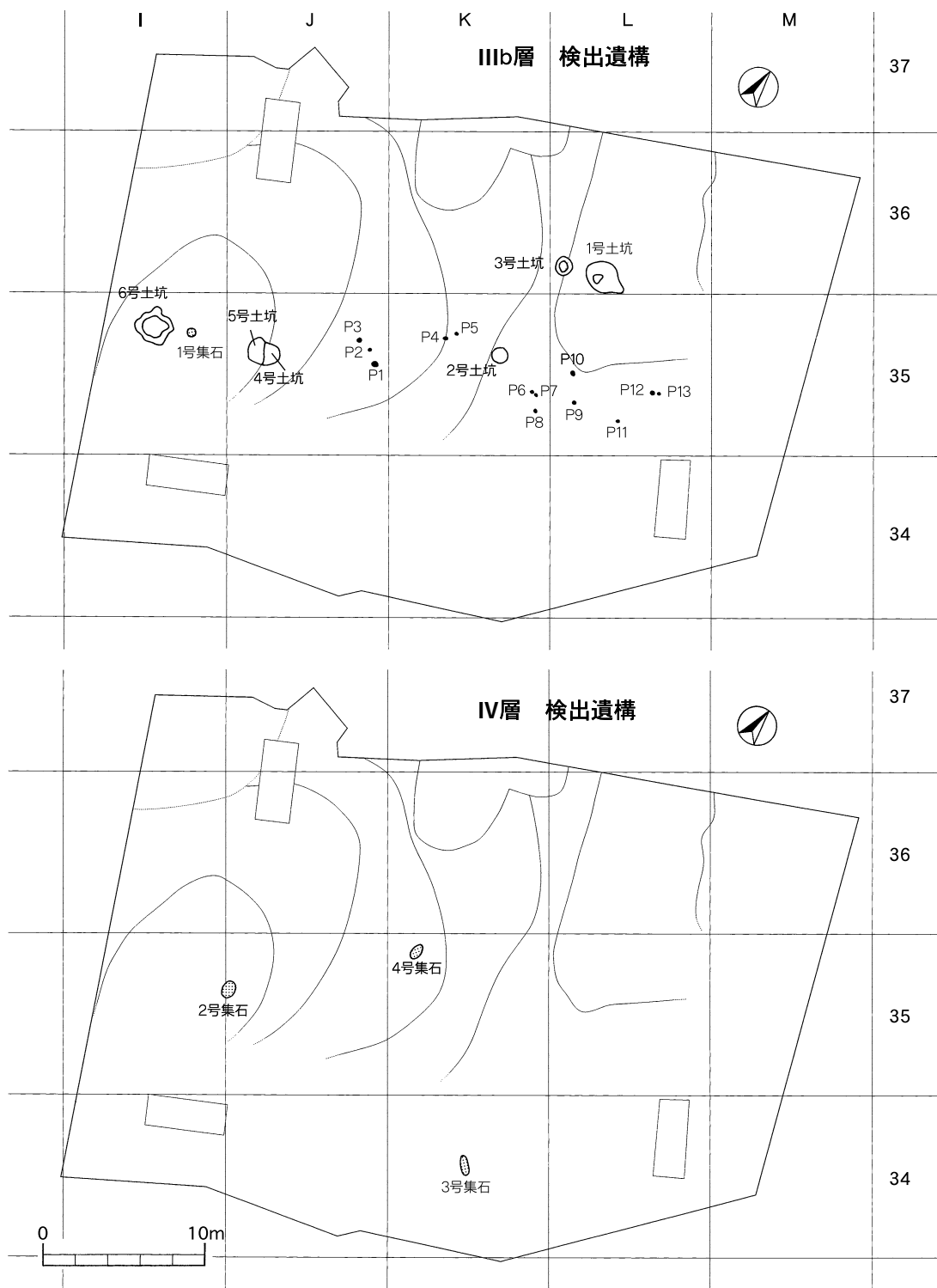
第5表 旧石器時代遺物観察表2

挿図	番号	器種	分類	石材分類	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
31	82	搔器	—	SH3	I35	VII下	11238	95.24	6.80	4.80	2.60	
	83	削器	—	SA	K34	VII下	11599	21.85	(8.50)	2.90	1.10	
	84	削器	—	SH2	L34	VII下	11598	18.92	6.20	2.90	1.05	
	85	削器	—	SH1	2T	VIII	12336・12405	28.97	7.50	4.70	1.45	
32	86	削器	—	SH3	J35	VII下	10364	36.95	(6.20)	4.85	1.50	
	87	削器	—	SH2	I35	VII	10679	65.86	9.80	3.40	1.70	
	88	グレイバー	—	AN1	J35	VII下	10517	32.54	6.10	3.40	1.20	
	89	石錐	—	OB1	J35	VIII	11506	6.90	3.50	2.30	1.00	
	90	石錐	—	AN2	I34	VII下	10566	22.05	7.50	2.80	1.10	
	91	二次加工剥片	—	OB2	I35	VIII	11409	1.23	1.50	1.50	0.70	
	92	二次加工剥片	—	OB1	K36	VIa	9177	2.93	2.25	2.35	0.75	
	93	二次加工剥片	—	OB3	I35	VI	10155	3.33	2.50	2.40	0.70	
	94	二次加工剥片	—	SH2	I35	VIII	10580	31.17	(7.55)	3.90	1.15	
	95	二次加工剥片	—	SH2	2T	VIII	12407	8.46	5.90	2.00	0.70	
33	96	二次加工剥片	—	AN2	I36	VIII	10631	29.77	7.20	3.40	1.20	
	97	二次加工剥片	—	OB1	I35	VII下	10339	11.47	(4.20)	2.70	1.40	
	98	二次加工剥片	—	OB1	J35	VIII	10866	7.33	3.25	3.10	0.80	
	99	二次加工剥片	—	CH	I35	VII下	10699	14.43	(3.50)	3.10	1.35	
	100	二次加工剥片	—	OB4	L36	VI	9771	7.67	4.50	4.00	0.65	
	101	二次加工剥片	—	SH3	J35	VIII	11395	14.69	(4.90)	2.80	1.40	
	102	二次加工剥片	—	SH1	J36	VII	9799	15.65	9.00	2.55	0.85	
	103	二次加工剥片	—	SH2	K35	VIII	10513	46.74	(11.30)	3.00	1.75	
	104	二次加工剥片	—	OB2	I34	VII下	11084	2.32	(1.95)	1.85	0.75	
	105	使用痕剥片	—	SH2	I35	VI	9960	9.14	(5.90)	2.00	1.00	
34	106	二次加工剥片	—	SH2	I35	VIII	11229	78.22	9.55	4.05	1.45	
	107	剥片	—	SA	2T	VIII	12383	21.66	(5.20)	3.40	1.30	
	108	石核	1	OB1	I35	VIII	10942	47.15	4.45	3.85	3.45	
	109	石核	1	OB1	J35	VIII	11480	36.15	3.90	3.10	2.60	
36	110	石核	1	OB1	J35	VIII	11134	26.48	3.25	3.35	2.60	
	111	石核	1	OB1	I34	VII下	10441	44.03	(3.70)	3.60	3.20	
	112	石核	1	AN2	I35	VI下	10194	37.11	3.20	2.70	3.65	
37	113	石核	2	OB1	J35	VIII	10940	47.02	4.00	4.20	3.35	
	114	石核	2	OB2	I35	VII下	11078	28.83	3.15	3.90	3.40	
	115	石核	2	OB2	I35	VII下	11077	38.14	4.10	4.10	3.10	
38	116	石核	2	AN2	I34	VII下	10988	58.09	4.35	5.00	3.10	
	117	石核	3	OB1	I35	VII下	10332	19.22	3.10	3.80	1.80	
	118	石核	3	OB1	I35	VII下	10327	18.17	3.00	3.70	1.90	
39	119	石核	3	OB1	I35	VIII	10590	12.38	2.80	2.85	1.50	
	120	石核	3	OB1	I36	VIII	9808	25.25	3.00	3.00	2.65	
	121	石核	3	OB1	K35	VIII	10509	48.01	4.30	5.75	3.15	
	122	石核	4	SH2	1T	VIII	12126	33.36	2.65	3.20	3.90	
40	123	石核	4	OB1	K35	VI	9935	18.80	3.15	(2.52)	2.40	
	124	石核	4	OB1	J36	VII下	10367	25.42	3.30	3.50	2.20	
	125	石核	4	AN2	I35	VI下	10204	21.36	3.60	3.30	1.70	
	126	石核	4	OB1	I35	VII下	10310	9.80	2.65	1.85	1.85	
41	127	石核	4	SH1	J36	VII	10092	75.05	3.40	6.00	3.50	
	128	石核	4	OB1	J35	VII	11117	34.64	3.28	4.65	3.10	
	129	石核	4	AN2	J35	VI下	9986	15.12	3.45	2.95	1.45	
	130	石核	4	SA	I35	VII	10352	71.42	7.00	2.70	3.70	
42	131	石核	5	OB1	J35	VI	11425	19.67	2.95	3.80	1.60	
	132	石核	5	OB1	I35	VII下	11157	11.02	2.20	3.00	1.30	
	133	石核	5	OB2	I34	VII下	10289	19.85	3.50	3.60	1.55	
	134	石核	5	OB1	I35	VIII	11357	8.87	2.10	2.40	1.45	
	135	石核	5	OB1	I35	VII下	10330	20.44	(3.10)	(4.12)	1.80	
43	136	接合資料	—	OB7	I36	VII	9793・11419・10858・11136	45.70	4.05	4.35	2.95	
	136-1	石核	—	OB7	I36	VII	9793	35.25	4.05	4.35	2.10	
	136-2	剥片	—	OB7	J36	VIII	11419	7.34	4.15	2.30	0.60	
	136-3	剥片	—	OB7	J36	VIII	10858	1.60	2.15	1.80	0.45	
	136-4	剥片	—	OB7	J36	VIII	11136	1.51	2.10	1.75	0.50	
44	137	接合資料	—	CC	I35	VIII上	9059・9064・9060	55.23	2.10	1.10	0.50	
	137-1	剥片	—	CC	I35	VIII上	9059	44.06	4.30	4.20	2.60	
	137-2	剥片	—	CC	I35	VII	9060	1.38	6.70	4.10	2.60	
	138	接合資料	—	CC	I35	VIII上	9061・12213	50.90	4.20	4.90	4.30	
45	138-1	剥片	—	CC	2T	IIIb	12213	46.08	2.50	2.30	1.00	
	138-2	剥片	—	CC	I35	VIII上	9061	4.82	2.90	4.90	4.30	
	139	ハンマーストーン	—	SA	I35	VII	10321	48.38	5.00	3.25	(2.40)	
47	140	ハンマーストーン	—	SA	I35	VI	10637	28.86	3.90	3.50	2.00	
	141	ハンマーストーン	—	QU	J35	VIII	10515	65.45	6.20	3.10	2.40	
	142	ハンマーストーン	—	SA	L34	VIII	11597	107.42	(6.35)	3.85	3.45	
	143	細石刃	—	OB4	I35	VI下	1216	0.19	1.30	0.70	0.20	
48	144	細石刃	—	OB4	I34	VII下	1976	0.16	1.30	0.60	0.30	
	145	細石刃核	1	OB2	J35	VII下	11272	2.46	1.40	1.40	1.25	
	146	細石刃核	1	OB1	1T	—	12058	12.20	2.25	1.85	3.25	
	147	細石刃核	1	OB1	K34	IIIb	5304	4.42	1.70	1.55	1.65	
	148	細石刃核	1	OB1	J35	VI	9922	11.30	2.10	1.90	2.75	
	149	細石刃核	1	OB1	J35	VI	11043	20.35	3.30	2.10	3.30	
	150	細石刃核	2	OB2	M36	IV	7544	5.93	2.15	1.30	2.05	
49	151	細石刃核	2	OB3	K35	IIIb	6543	2.64	6.00	3.90	1.80	
	152	細石刃核	2	OB1	I35	IIIb	3418	15.12	2.80	1.90	2.40	
	153	細石刃核	2	OB4	J35	IIIb	4055	7.57	2.60	1.80	2.10	
	154	細石刃核	3	OB2	L35	V	9758	7.20	2.25	1.40	2.35	
	155	細石刃核	3	OB4	J35	VI	9925	6.71	2.35	1.30	2.25	

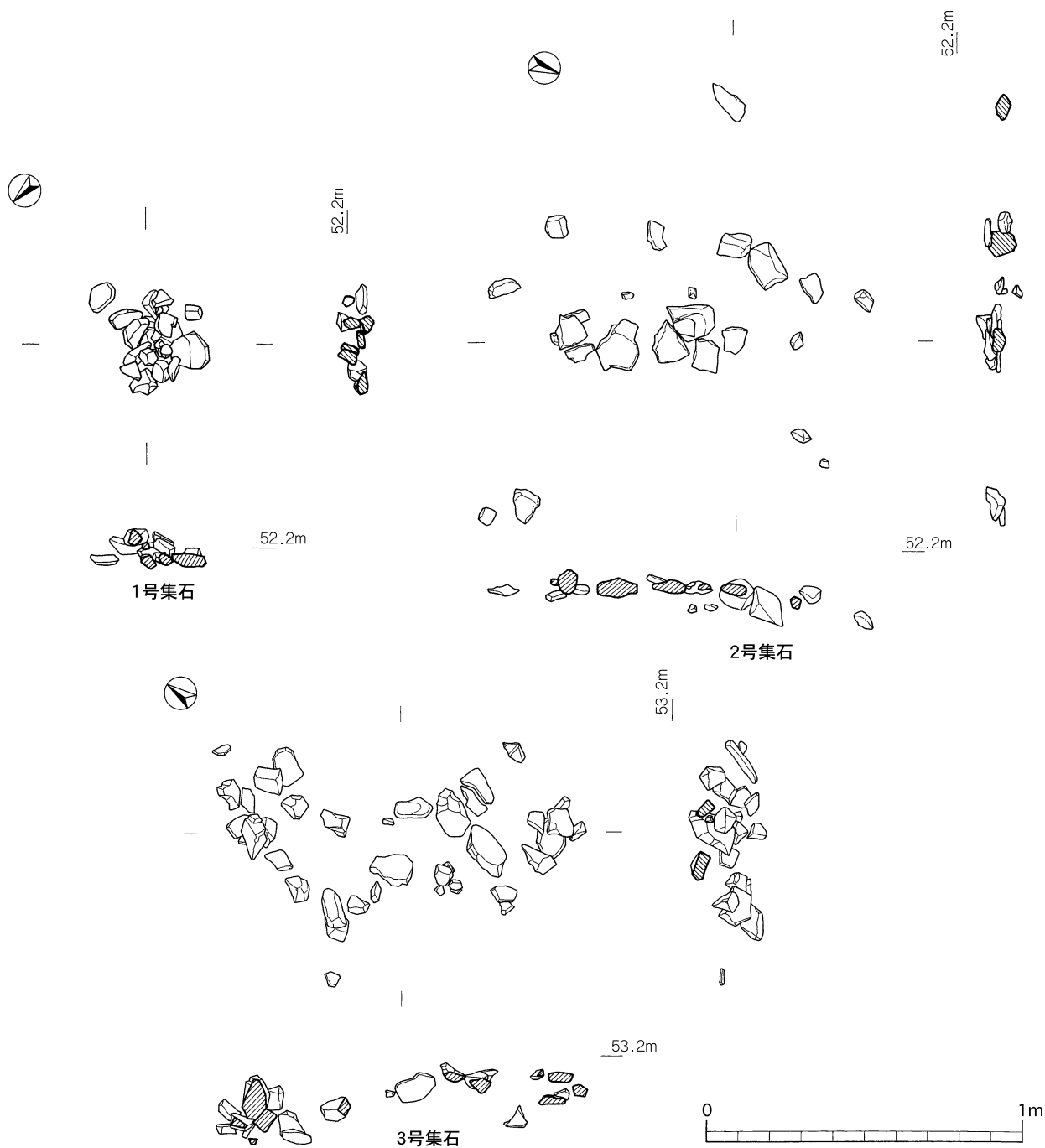
第4節 縄文時代の調査

1. 調査の概要

I～M-34～37区はIV層まで、I～L-34～37区はV層まで掘り下げた。III a層からは主に縄文晩期に属する土器、III b層は縄文時代早期末～後期土器、IV・V層は縄文時代早期土器が主に出土している。遺構はIII b層から集石が1基・土坑・ピット群、IV層から集石3基が検出されている。



第50図 縄文時代検出遺構分布図（III b・IV層）



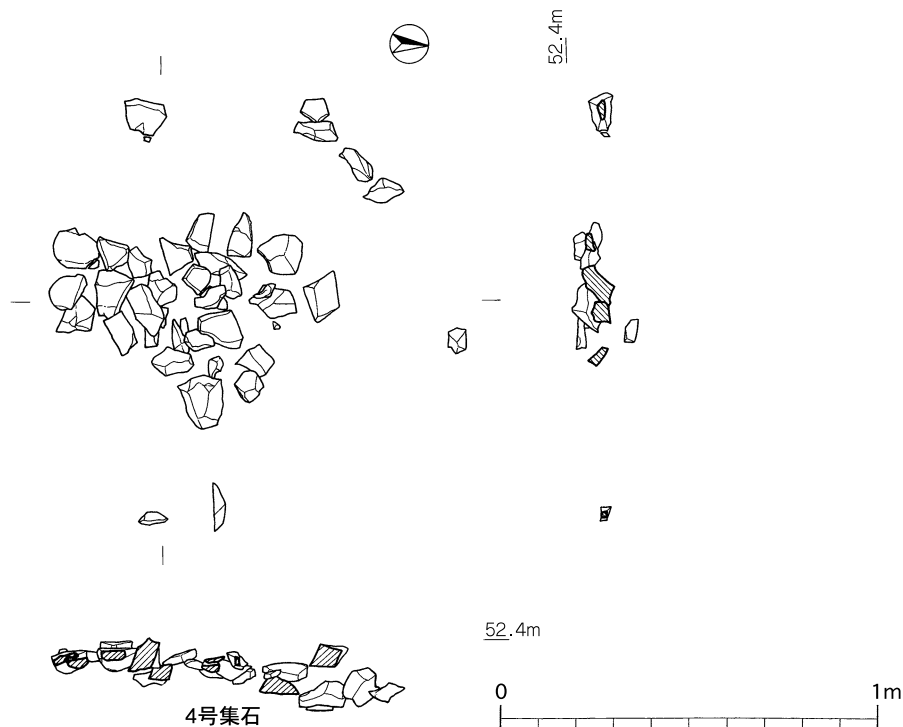
第51図 縄文時代の遺構（1～3号集石）

2. 縄文時代の遺構

(1) 集石（第51・52図）

縄文時代の集石は、Ⅲb層で1基、Ⅳ層で3基の計4基検出されている。

1号集石は、Ⅰ－35区Ⅲb層で検出された。径約40cmに集中している集石である。礫総数は21個であり、その内7個の礫が接合し3個の礫になった。礫は角礫で、径は5～10cm大である。砂岩を主体とし安山岩も含む。すべて被熱礫である。



第52図 縄文時代の遺構（4号集石）

2号集石は、J-35区IV層で検出された。長径約1m×短径約50cmにまとまっている。礫総数は26個であり、その内12個が接合し5個になった。礫は角礫で、径約10cmのものが中心部に集中する。安山岩を主体とし、ほかに砂岩を含む。すべて被熱礫である。

3号集石は、K-34区IV層で検出された。長径1.2m×短径60cmにまとまる集石である。礫総数は39個であり、その内16個の礫が接合し6個の礫になった。安山岩と砂岩が約半数の割合でみられ、すべて被熱礫である。

4号集石は、K-35区IV層で検出された。長径80cm×短径約50cmに集中する集石である。礫総数は40個であり、その内13個の礫が接合し、5個の礫になった。礫の径は5～10cmであり、安山岩が主体を占め砂岩も含まれる。ほぼ全てが被熱礫である。

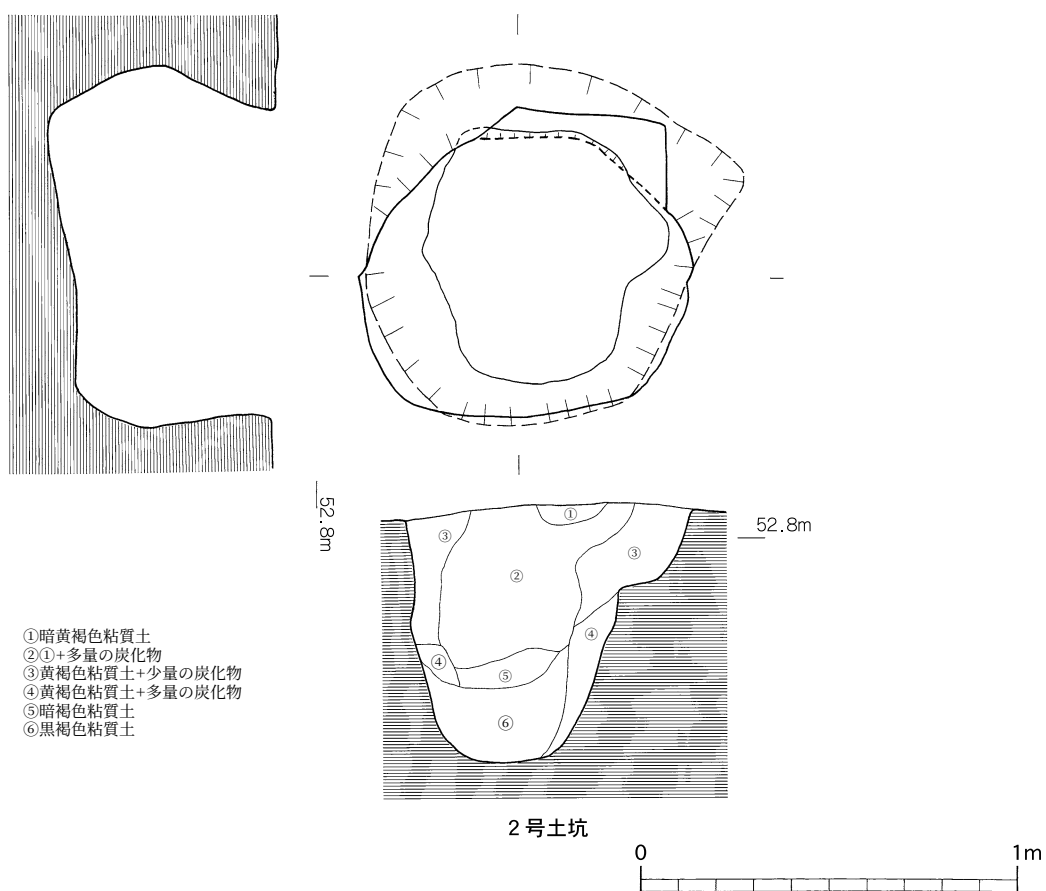
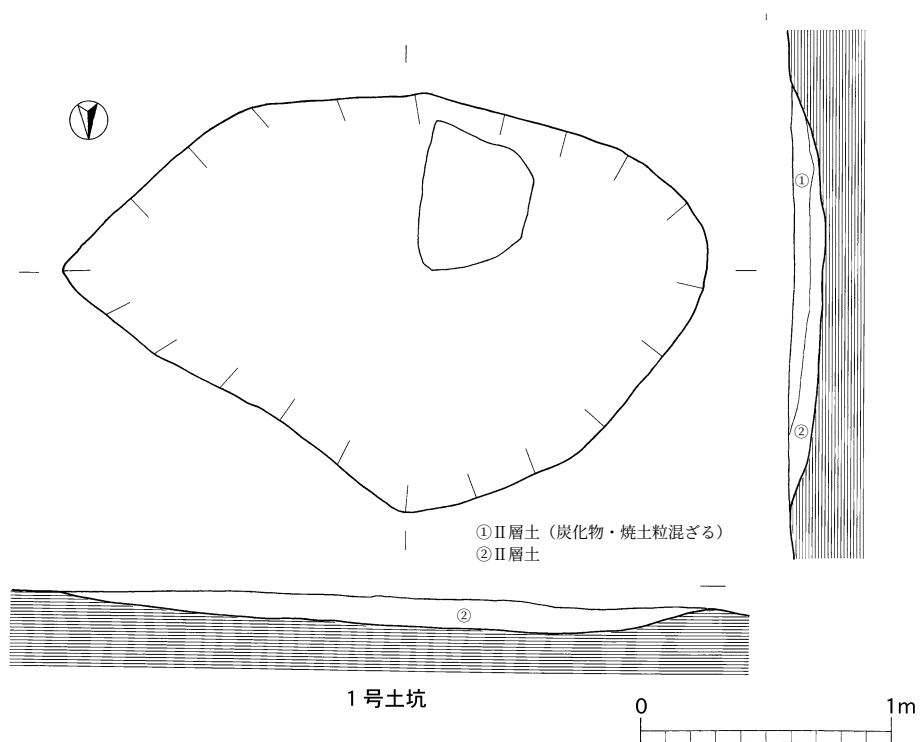
(2) 1～6号土坑（第53～55図）

1号土坑は、L-36区IIIb層で検出された。最深部約10cmの浅い土坑で、遺構に伴う遺物はなく時期は不明である。埋土はII層土が主体であり、埋土上方には炭化物が含まれる。

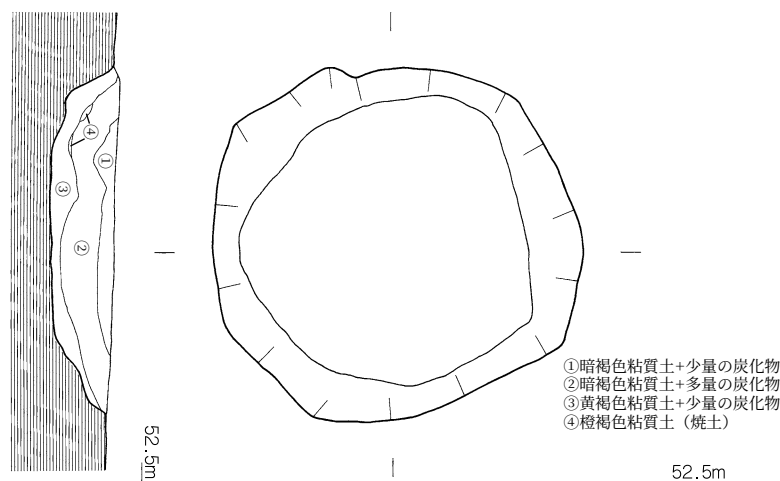
2号土坑はK-35区IIIb層で検出された。土坑の口径は約80cmで、フラスコ状に内部が約1mに広がっており、深さは60cmである。上半部の埋土には炭化物が混じっていた。遺物は検出されなかった。

3号土坑はL-36区IIIb層で検出された。口径は約1m、深さは約15cmである。同じく埋土には炭化物が混じっていた。遺物は検出されなかった。

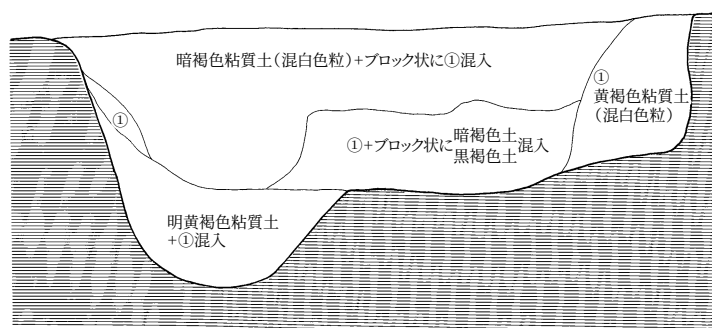
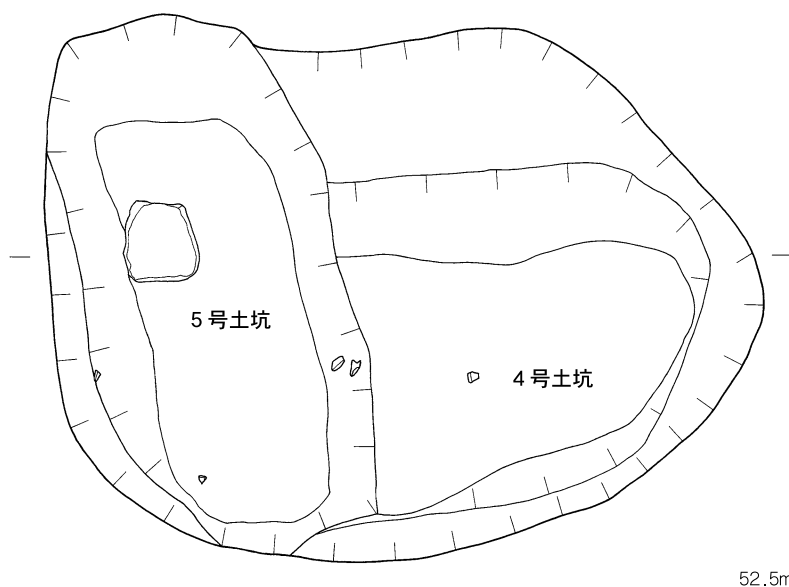
4・5号土坑は4号土坑を5号土坑が切る形で掘り込まれている。J-35区IIIb層の検出である。4号土坑の深さは約40cmで、5号土坑の深さは約68cmである。5号土坑からは径約20cmの平坦な礫が出土し、また小礫も数点出土している。



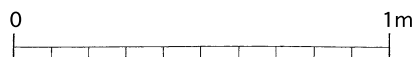
第53図 縄文時代の遺構（1・2号土坑）



3号土坑



4・5号土坑



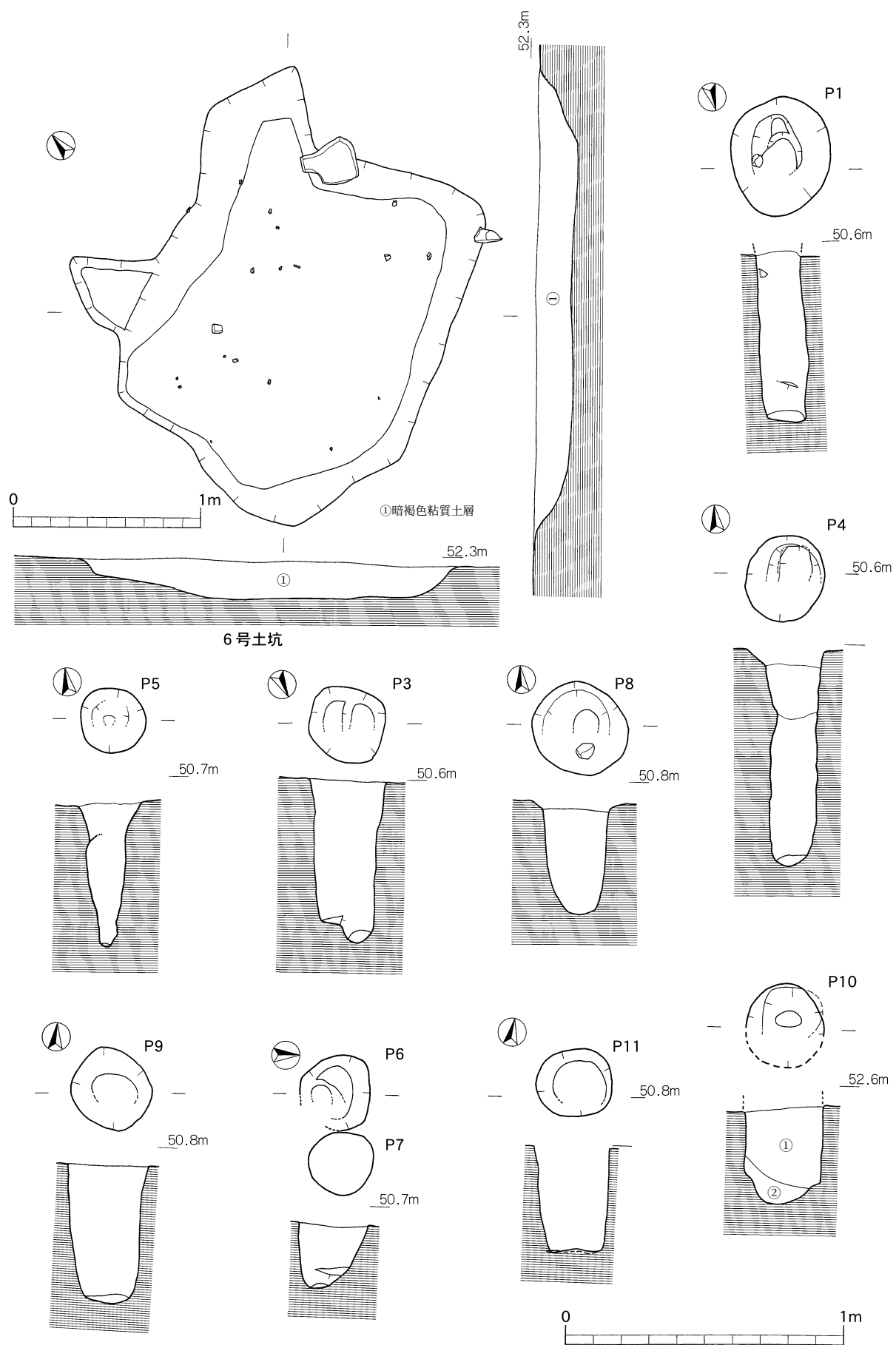
第54図 縄文時代の遺構（3～5号土坑）

6号土坑はI-35区IIIb層で検出された。サイズは長径約2.3m×短径約1.7mである。底部は平坦で、深さは約20cmほどである。遺物は礫が出土しており、大きいもので径約30cmの平坦なものが1点、小礫も含めて合計22点が出土している。

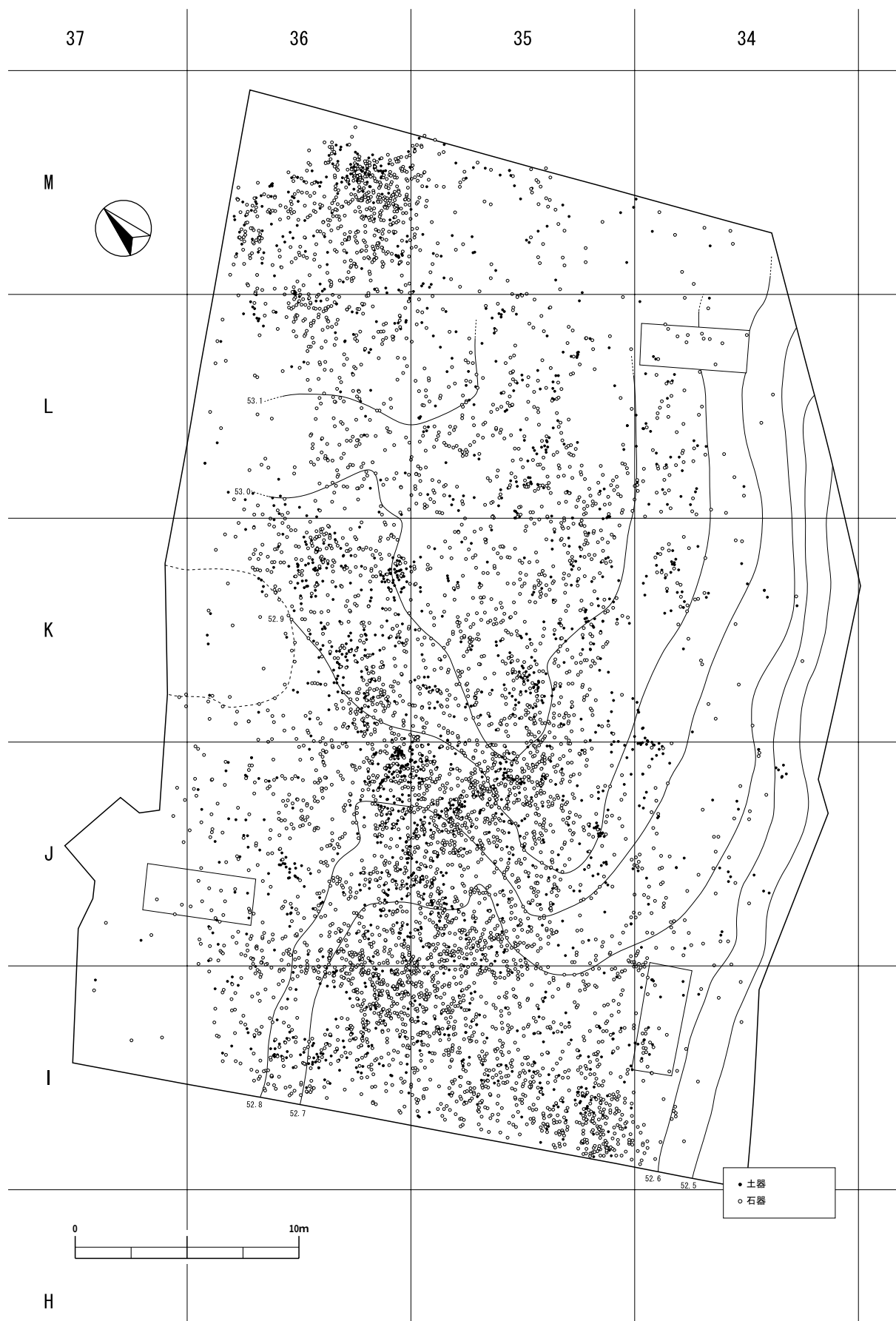
(3) 柱穴群（第55図）

IIIb層ではJ・K・L-35区で13ヶの柱穴が検出されている。並びに規則性等はみられないが、口径は殆ど20～30cmのものである。時期を示す遺物等の出土はみられなかった。

ピット1は口径42×35cm、深さ約60cmである。ピット3は径27×27cm、最深部約60cmである。ピット4は口径約30cm、最深部まで約76cmである。ピット5は口径23×23cm、最深部は50cmである。ピット8は検出面近くで径約7cmの円礫が出土しており、口径35×33cm、最深部まで約40cmである。ピット7は口径22×23cm、ピット9は口径30cm、最深部は50cmである。ピット11は口径24×27cm、最深部約40cmである。ピット6は口径24×27cm、最深部約25cm、ピット10は口径約28cmである。



第55図 縄文時代の遺構（6号土坑，柱穴群）



第56図 縄文時代の遺物出土状況

3. 縄文時代の土器・土製品

縄文時代の土器は、早期～晩期のものが出土しており、早期中葉の土器は主にIV層、その他の時期のものは主にIIIb層から出土している。形態・文様などから1類～24類に分類した。

1 類土器（第57図 156・157）

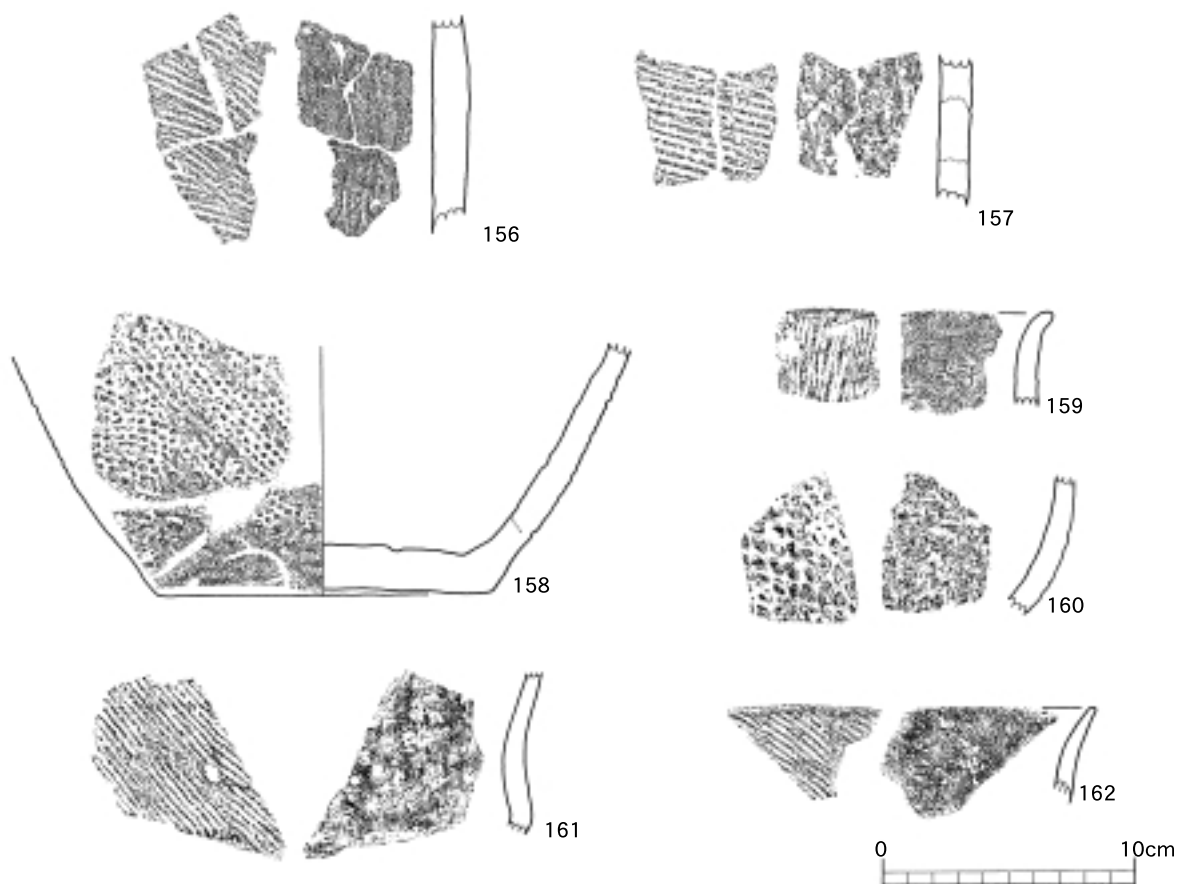
胴部に斜位・横位の貝殻条痕文が施される。胴部のみ出土で、口唇部形態は不明であるが円筒形になるものと思われる。

156・157は、外面に斜位または横位の貝殻条痕文が施される。156の内面にはケズリが施されている。他にも早期貝殻文胴部と思われる破片が約40点ほど出土している。

2 類土器（第57図 158～162）

器面には楕円押型文・山形文・撚糸文が施される。器形は平底を呈し、胴部に向かってやや丸味をもって開き、頸部で屈曲し口唇部は湾曲するものである。

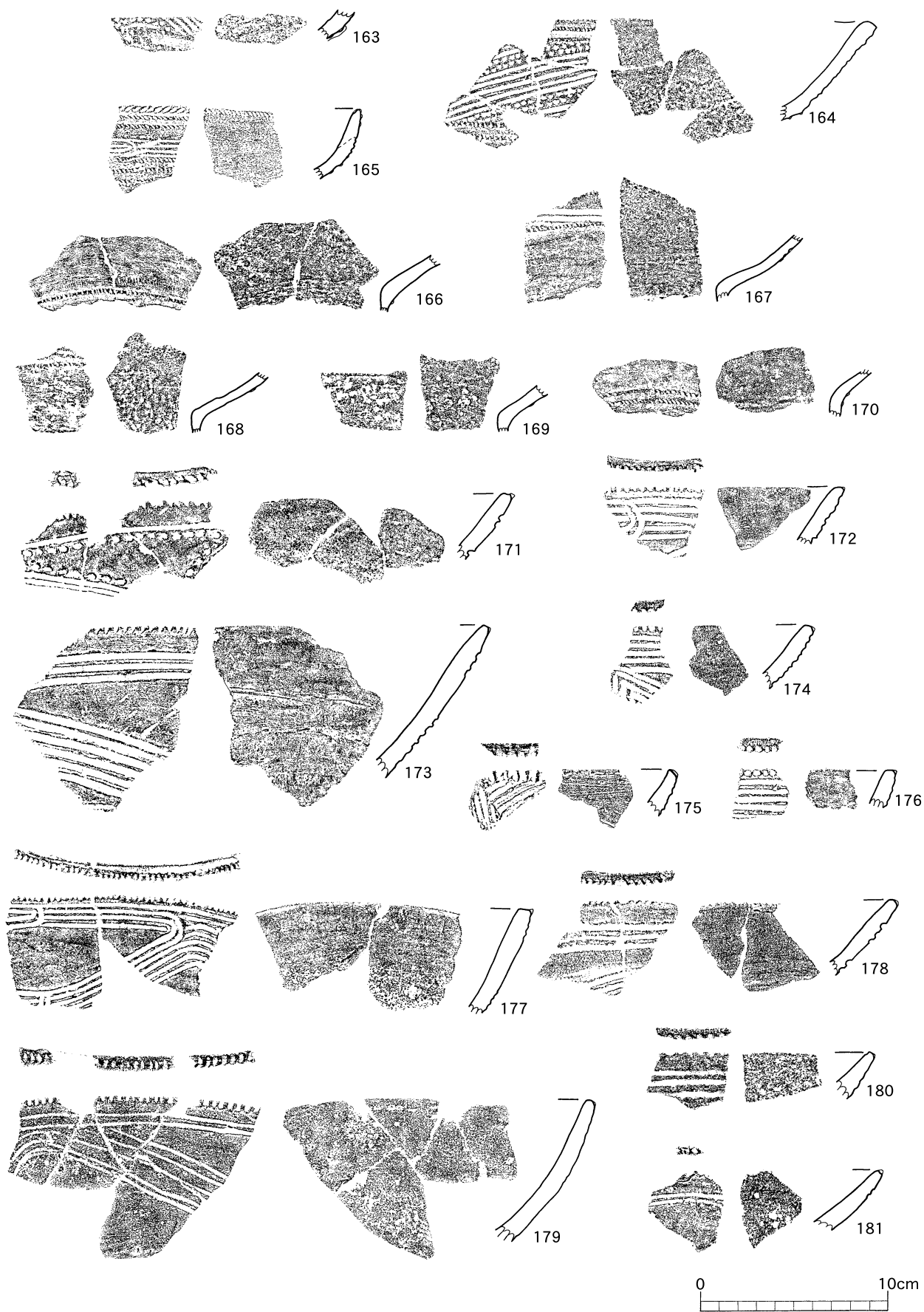
158は底部であり平底を呈する。内面はほとんど剥落しているが、外面は丁寧なナデの上に楕円押型文が施される。160も楕円押型文の施された胴部である。159は口縁部が外反し、外面はRL方向の撚糸文が施されている。161・162は斜行縄文が施されており、胎土の類似からも同一個体の可能性が考えられる。159と同じく口縁が外反し、頸部はくびれ、胴部中央辺りで張り出して屈曲する器形と思われる。



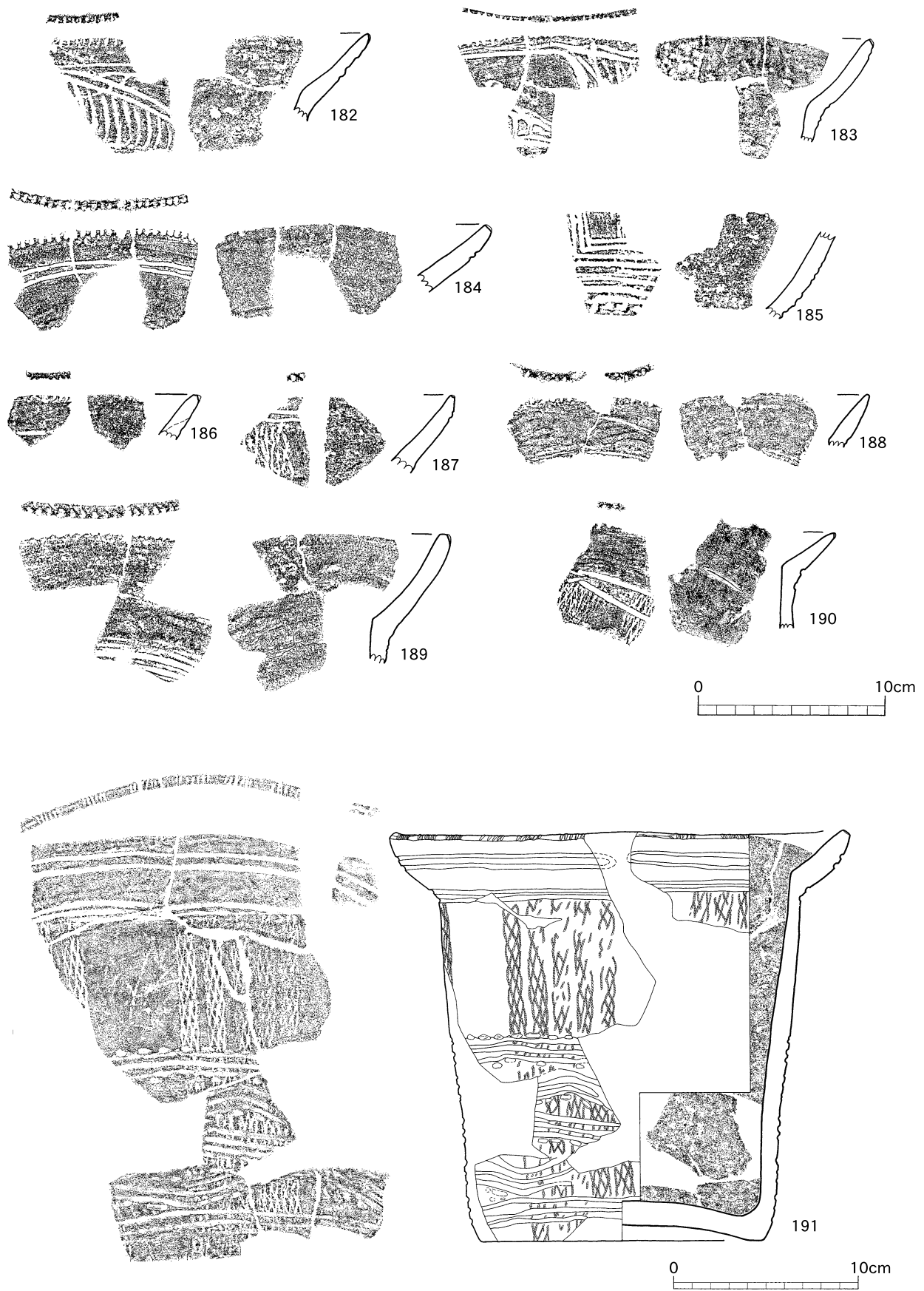
第57図 縄文時代の土器 1（1・2類）



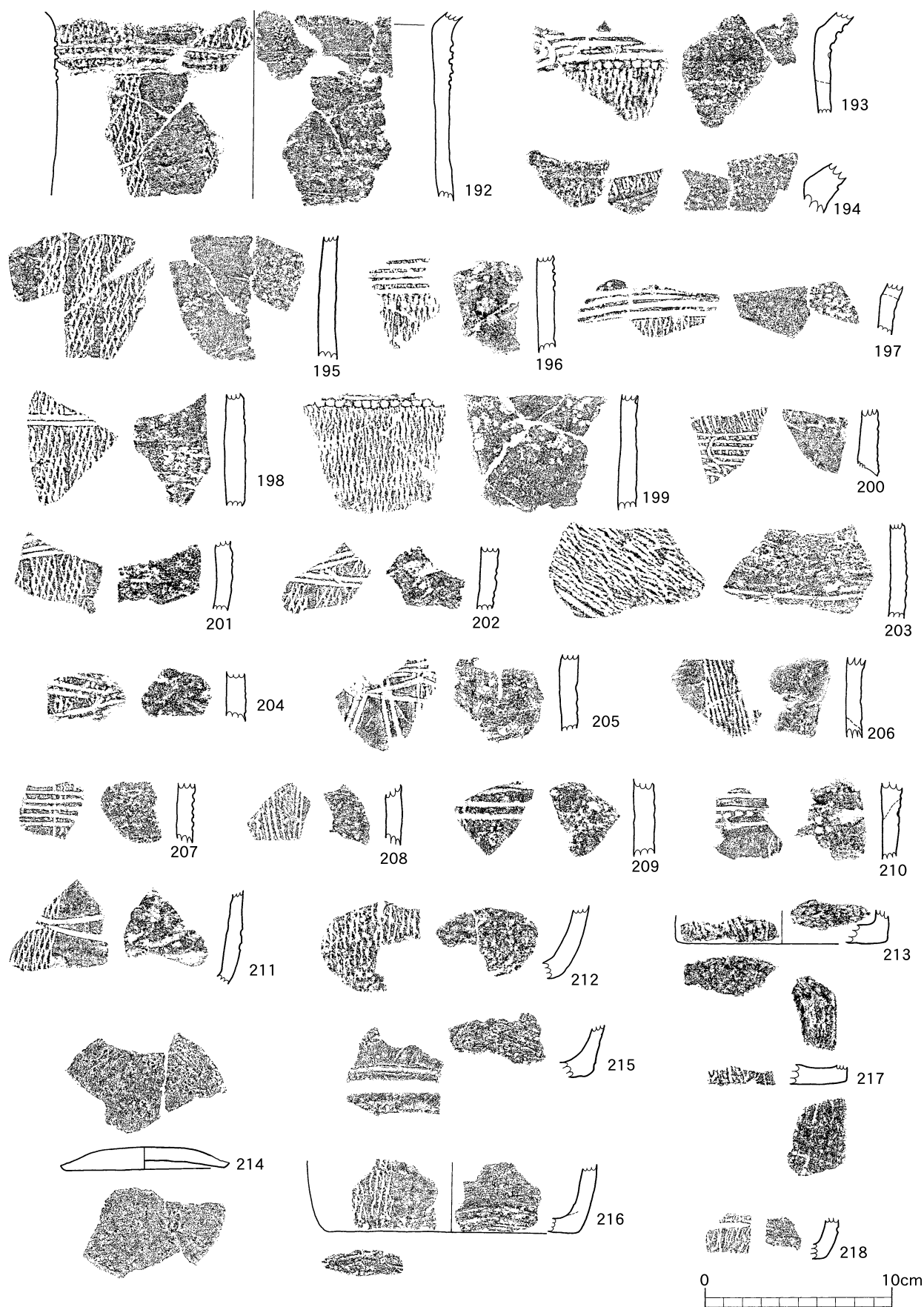
第58図 縄文時代早期遺物分布状況図



第59図 縄文時代の土器 2 (3・4 a・4 b類)



第60図 縄文時代の土器3（4b・4c類）



第61図 縄文時代の土器 4 (4 d 類)

3 類土器 (第59図 163・164)

口縁部に向かって開きながら途中でゆるく屈曲している。屈曲部に刻目突帯があり、文様は凹線文・刺突文が施される。163は縦位方向の突帯も貼付される。164の口縁部形態は緩やかな波状と考えられる。

4 類土器 (第59～62図 165～219)

底部は中央部がやや上げ底になる平底で、胴部はやや膨らむ円筒形を呈し、頸部で屈曲し口縁部はラッパ状に外反する。文様は撚糸文系のものであり、器形・文様などから4つに細分した。

4 a 類：口縁には刺突連点文・沈線文、刻み目がある微隆帯文が施される。口唇部上端には刻み目が施される。(165～170)

4 b 類：口唇部にはヘラによる刻みがみられ、口縁部外面には刺突文、数条の直線または曲線の沈線文などが施される。胴部は間隔を置きながら縦位の網目状撚糸文を回転押圧し、その上から凹線文帯を頸部・胴中央部に横位に巡らせる。(171～187, 191)

4 c 類：口縁部外面は無文となり、頸部から口縁部までが短い。口唇部は稜がなく薄い。(188～190)

4 d 類：上記 a～c 類の胴部と思われるもので、間隔を置きながら、網目状撚糸文などを回転押圧し、沈線が横位・斜位に施されるもの(192～218)

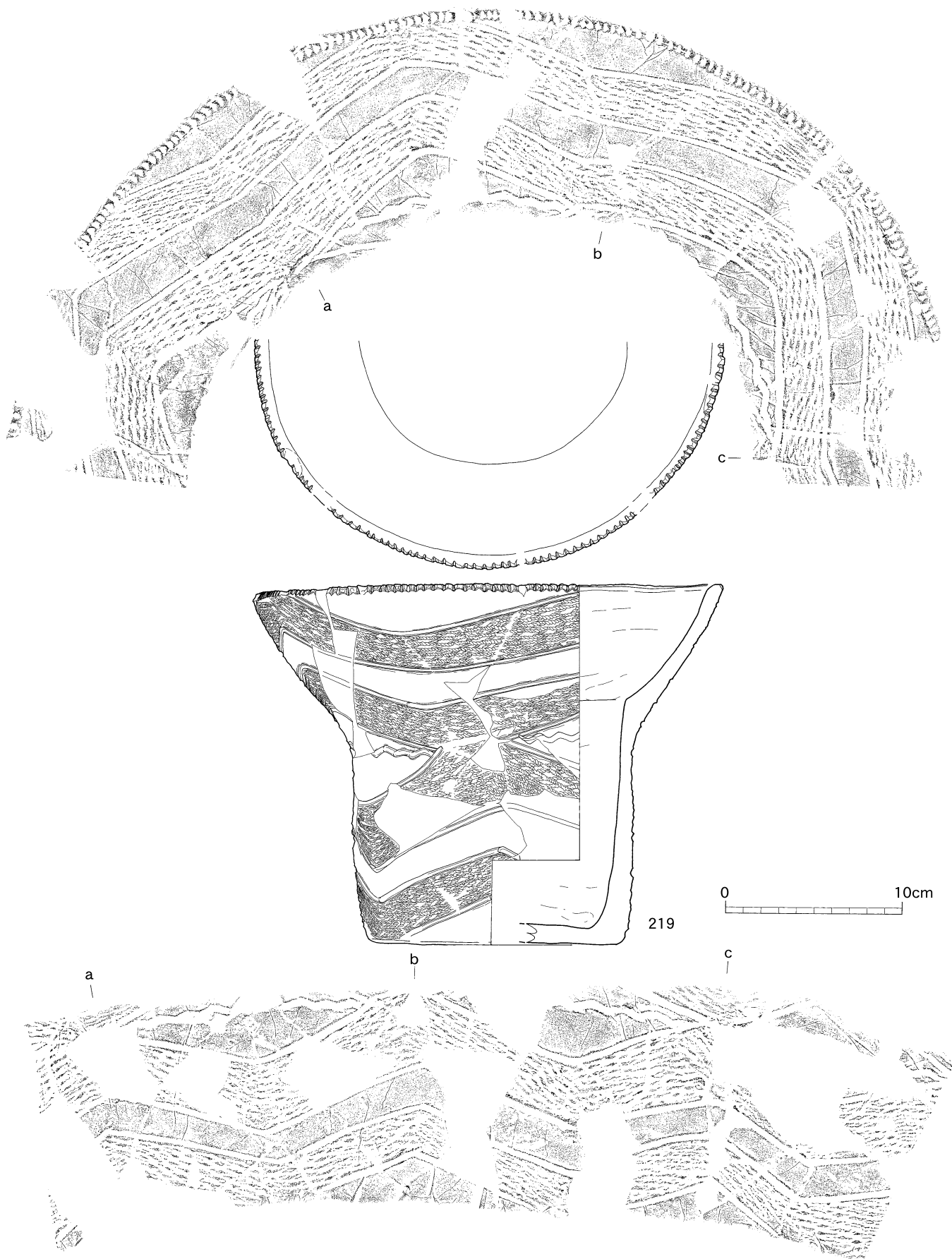
4 e 類：器面に幾何学的な沈線区画を施文し、その区画内を撚糸文で充当している。胴部文様は口縁部に及ぶ。(219)

165は口縁がラッパ状に開き、頸部に到る途中でゆるく屈曲する。波状口縁と思われる。外面文様は沈線文と刺突連点文が施され、刻みをもつ微隆帯文が巡る。166～170は文様は微隆帯文のみであるが同類の頸部と考えられるものである。

4 b 類の口縁部の文様は、171は沈線文と刺突文、172・177・179・182・183などは曲線の沈線文が組み合わされている。187は口縁部付近まで撚糸文が施文されたものである。また、182・183は同一個体の可能性がある。191は口唇部に5もしくは6ずつの単位で刻みがあり、その間をつなぐよう横位沈線が巡る。また、口縁部の平行凹線は数カ所で丸くつながると考えられ、口唇部が部分的に磨滅しているため不明瞭であるが、平行凹線が丸く繋がる場所は口縁部が波状の頂部になる可能性がある。また、胴部は5条の網目状撚糸文を縦位方向に施文している。

4 c 類は、口縁部外面が無文となり頸部から口縁部が短くなる特徴をもつものである。4 b 類と同様、ラッパ状に開く口縁に続く頸部には数条の沈線が巡る。また胴部文様については、192～210の胴部は3～数条の単位の網目状撚糸文のあるもの(192・195・198・201・202)と、1条ごとの間隔が狭くなり施文単位が広がるもの(193・196・199・203・206)があり、前者は191などのようにb類の胴部に該当する可能性がある。211～218は4類の底部と思われるものである。平底であるが、中央部がやや上げ底になる。

219は4 e 類である。山形の区画が口縁部・胴部ともに上下2区画施され、口縁部の谷と胴部の山、口縁部の山と胴部の谷の位置が並ぶよう3パターン繰り返し器面を巡る。区画内には、RL方向の間隔の狭い網目状撚糸文を充填する。頸部に波状の凹線文が巡る。



第62図 縄文時代の土器 5 (4 e 類)

第6表 縄文土器観察表1

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
57	156	1	貝殻条痕文	胴	I35	V	9013	ケズリ	貝殻条痕	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白	白色粗砂△	
	157	1	貝殻条痕文	胴	I35 J35	IIIb IV	3402 5501	ナデ	貝殻条痕	黄褐2.5Y5/3	橙7.5YR6/6	○	○		粗砂・砂礫◎	
	158	2	押型文	底	K35 K36	IIIb IV	4563 4708 9138 9147	ナデ	ナデ・楕円押型文	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	△	△	白△	白色粗砂◎ 砂礫	
	159	2	押型文	口縁	K35	IV	9234	ナデ	撚糸文	にぶい黄2.5Y6/4	にぶい黄2.5Y6/4		△	黒△	白色粗砂△	RL
	160	2	押型文	胴	K35	IV	9238	ヨコナデ	ヨコナデ・楕円押型	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2	○	○	白△	砂礫	
	161	2	押型文	頸	L34	IIIb	7277	ナデ	撚糸文	浅黄2.5Y7/4	にぶい黄2.5Y6/3	○	○	白△	白色粗砂△	LR
	162	2	押型文	口縁	M35	IIIb	7520	ナデ	撚糸文	浅黄2.5Y7/4	にぶい黄2.5Y6/3	○	○	白△	白色粗砂△	LR
59	163	3	平格式	口縁	K35	IIIb	434	ナデ	刻目突帯・凹線文	橙7.5YR7/6	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白	砂礫	
	164	3	平格式	口～頸	K35 K36	IIIb IV	5841 4634 9232 9085	ナデ	刻目微隆帯文 凹線文・連続刺突文	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	◎	○		白色粗砂	
	165	4a	塞ノ神A	口縁	I36	IIIb	1538	ナデ	刻目突帯・凹線文	にぶい黄2.5Y6/3	灰黄2.5Y6/2	○	○		金雲母・粗砂	
	166	4a	塞ノ神A	頸	K35	IV	9622 9624	ナデ	刻目微隆帯文	橙7.5YR6/6	橙7.5YR7/6	○	○		白色粗砂 砂礫◎	
	167	4a	塞ノ神A	頸	K34	IIIa	85	ナデ	凹線文・微隆帯文	浅黄2.5Y7/3	にぶい黄橙10YR7/3	○	△		白色粗砂	
	168	4a	塞ノ神A	頸	K35	IIIb	6323	ナデ	刻目微隆帯文	浅黄2.5Y7/3	浅黄2.5Y7/3	○	△		白色粗砂 砂礫◎	
	169	4a	塞ノ神A	頸	K34	IIIb	203	ナデ	刻目微隆帯文	浅黄2.5Y7/4	浅黄2.5Y7/3	○	○		白色粗砂	
	170	4a	塞ノ神A	頸	I36 J37	IIIb	2464 2683	ナデ	刻目微隆帯文	にぶい黄2.5Y6/3	黄褐2.5Y5/3	○	○		金雲母 白色粗砂	
	171	4b	塞ノ神A	口縁	J34 I35 K36	IIIb IV	9839 6448 5603	ヘラナデ	丁寧なナデ	にぶい褐7.5YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白△	白色粗砂	
	172	4b	塞ノ神A	口縁	J35	IV	9441	丁寧なナデ	ナデ・凹線文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白△	白色粗砂△	
	173	4b	塞ノ神A	口縁	J34 J35	IIIb IV	9409 5329 60	ナデ	ナデ後凹線文	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/6	○	○	白・黒 △	白色粗砂 黒曜石	
	174	4b	塞ノ神A	口縁	J35	IIIb	3734	ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒 △	白色粗砂 砂礫△	
	175	4b	塞ノ神A	口縁	K35	V	9448	ヘラナデ	凹線文	暗灰黄2.5Y4/2	暗灰黄2.5Y4/2	○	○	白△	白色粗砂△	
	176	4b	塞ノ神A	口縁	J35 J34	IV IIIb	9283 5182	ヨコナデ	凹線文	にぶい褐7.5YR5/4	灰黄褐10YR4/2	○	○		白色粗砂△	
	177	4b	塞ノ神A	口縁	K35	IIIb IV	9244 4249 5355	ヘラナデ	ヘラナデ・4～6条の 凹線文	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白	白色粗砂◎	
	178	4b	塞ノ神A	口縁	J34 J36	IIIb	5173 5471	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデのち 凹線文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白・黒 △	白色粗砂 砂礫△	
	179	4b	塞ノ神A	口縁	J34	IIIb IV	77 9696 665 9511 189	ナデ	2～3条の凹線文	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白・黒 △	白色粗砂◎	
	180	4b	塞ノ神A	口縁	I35	IIIb	5438	ナデ	ナデ・凹線文	にぶい黄2.5Y6/3	浅黄2.5Y7/3	○	△		砂礫△	
	181	4b	塞ノ神A	口縁	J34	IIIb	5168	ナデ	凹線文	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
60	182	4b	塞ノ神A	口縁	K35	IIIb IV	1251 9625 9241 5875	ナデ	凹線文	にぶい黄褐10YR6/4	にぶい黄褐10YR6/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	183	4b	塞ノ神A	口縁	K35	IIIb IV	3312 5819 9240 9764	ナデ	ナデ・凹線文	黄褐2.5Y5/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	184	4b	塞ノ神A	口縁	J34 K36	IIIb IV	5320 4463 9043	ナデ	ナデ・凹線文	にぶい黄褐10YR6/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	黒	白色粗砂 砂礫△	
	185	4b	塞ノ神A	頸	K36	IIIb	4623	ナデ	ナデ・凹線文	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	○	○	白△	白色粗砂 砂礫△	
	186	4b	塞ノ神A	口縁	—	横転	—	ナデ	ナデ・凹線文	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白・黒	白色粒	
	187	4b	塞ノ神A	口縁	J35	IIIb	5866	ナデ	凹線文・撚糸文	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白・黒	白色粗砂 砂礫△	LR
	188	4c	塞ノ神A	口縁	I36 K35	IIIa IIIb	5356 922 920	ナデ	丁寧なナデ・凹線文	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒	白色粗砂△	
	189	4c	塞ノ神A	口縁	J34	IV	183	ナデ	ナデ・凹線文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	△	白△	白色粗砂△	
	190	4c	塞ノ神A	口縁	K36 I36	IIIa IIIb IV	923 2717 5606 1482	ヨコナデ	丁寧なナデ 網目状撚糸文 凹線文	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	○	○	白・黒 △	白色粗砂△	LR

第7表 縄文土器観察表2

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
60	191	4b	塞ノ神A	口～底	I35 J35	IIIb IV	3876 4056 4730 5772 9040 9416 9425 9428 9434 9463 9476 9479 9485 9487 9492 9496	ヨコナデ	丁寧なナデ 網目状燃糸文 凹線文	橙7.5YR7/6	明赤褐2.5YR5/6	○	○	白・黒	砂礫	RL
61	192	4d	塞ノ神A	胴	J34 J35 J36	IIIb IV	9409 9293 6362 4850 5865	ナデ	ナデ・凹線文 網目状燃糸文	明赤褐5YR5/6	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒 △	白・赤色粗砂 砂礫◎	LR
	193	4d	塞ノ神A	頸	J35	IV	9505	ナデ	凹線文・燃糸文	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR6/4	○	○	白・黒 △	白色粗砂	
	194	4d	塞ノ神A	胴	I35	IIIb IIIa	3393 900	ナデ	ナデ・凹線文 網目状燃糸文	橙5YR6/6	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白	白色粗砂 砂礫◎	LR
	195	4d	塞ノ神A	胴	J35 J36	IIIb	3764 1932 3763	ナデ	ナデ・網目状燃糸文	にぶい黄褐10YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白△	白色粗砂 黒色粒	LR
	196	4d	塞ノ神A	胴	I35	IV V	9397 9578	丁寧なナデ	ナデ 燃糸文・凹線文	にぶい赤褐5YR4/3	明赤褐5YR5/6	○	○		赤・白色粗砂 砂礫	RL
	197	4d	塞ノ神A	頸	K35	IIIb	5366	ナデ	凹線文・燃糸文	橙7.5YR6/6	にぶい黄褐10YR5/4	○	○		粗砂	LR
	198	4d	塞ノ神A	胴	J35	V	9602	ナデ	燃糸文・凹線文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白	白・赤色粗砂 砂礫	LR
	199	4d	塞ノ神A	胴	J35	IIIb	4356 5724 5472	ナデ	燃糸文・刺突文	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/6	○	○	白・黒	赤色粗砂 砂礫	RL
	200	4d	塞ノ神A	胴	L35	IIIb	6442	丁寧なナデ	凹線文・燃糸文	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白	粗砂・砂礫△	LR
	201	4d	塞ノ神A	胴	I35	IV	9555	ナデ	凹線文・燃糸文	褐7.5YR4/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○		白色粗砂 砂礫	LR
	202	4d	塞ノ神A	胴	J36	IIIb	4841	丁寧なナデ	凹線文・燃糸文	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	黒	白・黒色粗砂	LR
	203	4d	塞ノ神A	胴	J34	IIIb	45	ナデ	凹線文・燃糸文	にぶい赤褐5YR5/4	明赤褐5YR5/6	○	○	白	白・赤色粗砂 砂礫◎	RL
	204	4d	塞ノ神A	胴	K35	IV	9256	ナデ	凹線文・燃糸文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白△	白・赤色粗砂 黒曜石・砂礫	
	205	4d	塞ノ神A	胴	K35	IIIb	5874 5969	ヨコナデ	丁寧なナデ 凹線文・燃糸文	暗灰黄2.5Y4/2	にぶい黄橙10YR6/4	○	△	白・黒	白色粗砂△	
	206	4d	塞ノ神A	胴	L36	IIIb	6400	ヨコナデ	ヨコナデ・燃糸文	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白	白色粗砂△	RL
	207	4d	塞ノ神A	胴	K35	IIIb	5827	丁寧なナデ	凹線文・燃糸文	暗灰黄2.5Y4/2	黄褐2.5Y5/3	○	○	白	粗砂・砂礫△	LR
	208	4d	塞ノ神A	胴	K35	IIIb	4205	ナデ	凹線文・燃糸文	暗灰黄2.5Y4/2	黄褐2.5Y5/3	○	○	白	粗砂・砂礫△	LR
	209	4d	塞ノ神A	胴	K35	IV	9257	ナデ	凹線文・燃糸文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白・黒	白・赤色粗砂 黒曜石・砂礫	
	210	4d	塞ノ神A	胴	J35	IIIb	788	ナデ	凹線文・刺突文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白	粗砂・砂礫	
	211	4d	塞ノ神A	底	I36	IV	853	ヨコナデ	凹線文・燃糸文	にぶい褐7.5YR5/4	橙7.5YR6/6	○	△	白	白色粗砂	RL
	212	4d	塞ノ神A	底	J36 I35	IIIb IV	3603 9467	ナデ	燃糸文	黒褐2.5Y3/1	橙2.5YR6/6	○	○	白	1mm大の軽石	LR
	213	4d	塞ノ神A	底	K35	IIIb	6131	ナデ	燃糸文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白	粗砂・砂礫	LR
	214	4d	塞ノ神A	底	M35	IIIa	7122	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄褐10YR5/3	○	○	白	白色粗砂△	
	215	4d	塞ノ神A	底	J34	表層	—	ナデ	凹線文・燃糸文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい赤褐5YR5/4	○	○	白	白色粗砂	
	216	4d	塞ノ神A	底	I35	IIIb	3954	ヨコナデ	ナデ・燃糸文	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白	粗砂	LR
	217	4d	塞ノ神A	底	K35	IIIb	5266	ナデ	燃糸文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○		粗砂	
	218	4d	塞ノ神A	底	—	排土	—	ナデ	凹線文・燃糸文	黄褐2.5Y5/3	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白	粗砂△	
62	219	4e	塞ノ神A	口～底	I36 J35 K36	IIIb IV	1865 4692 5370 5376 5395 5591 5857 5871 9270 9272 9275 9280 9282 9286 9455	ナデ	凹線文・燃糸文	浅黄橙10YR8/4	灰白10YR8/2	○	○	白△	白色粗砂△	RL



第63図 縄文時代の土器 6（5類）

5類土器（第63図 220～222）

底部から口縁にかけて直線に開き，器面には波状文・貝殻腹縁による押引き文などがみられ，刻み目の入った突帯文が施される。

5類は，器形が判明したものが3点みられるが，すべて直線に口縁部がひらく器形であった。220・221は波状条線文と平行方向の条線文が施され，221はナデ出した刻み目をもつ微隆起突帯が2条みられる。222は半円状の貝殻腹縁による刻み目突帯が口縁部に貼付される。この突帯は半円形で横方向に向くものと上方向に向くものがある。また胴部には4～5条の横位貝殻条痕文と貝殻腹縁によるロッキング手法を用いた押引き文が口縁部と胴部を巡るように施されている。220・221に比べ，砂礫が多くもろい。

第8表 縄文土器観察表3

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
63	220	5	苦浜式	口～胴	I36	IIIb	4745 4746 4806 1510 3470	ナデ	ナデのち波状文 一部タテ方向ナデ	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6	○	○	白・黒	赤・白色粗砂 砂礫◎	
	221	5	苦浜式	口～胴	I36 J36	IIIb	3993 1572 3267	ナデ	波状文のちナデ 刻目突帯文	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6	○	○	白・黒	赤・白色粗砂 砂礫	
	222	5	苦浜式	口～胴	I35 J35	IIIb IV	3859 3864 3900 3959 5640 5643 6004 6005 6012 9836	指押えの ちヨコナデ	貝殻腹縁による押引 き文・条痕文 貝殻腹縁刻目突帯	にぶい黄2.5Y6/4	橙5YR6/6	○	○	白△	軽石 白色粗砂 砂礫◎	

6 類土器（第65～67・69図 223～228）

器形は口縁部がゆるやかに、もしくは直線的に立ち上がり、口唇部には刻目が施されることが多い。底部は小さな平底か上げ底、もしくは尖底と思われる。器面には条痕文が施される。器形や施文の特徴から以下の3類に分類した。

6 a 類：板状のヘラ状工具を用いて器面がなでられ、工具に押し出された粘土が微隆起線文状をなす。口唇部には刻みが施される。（223・226）

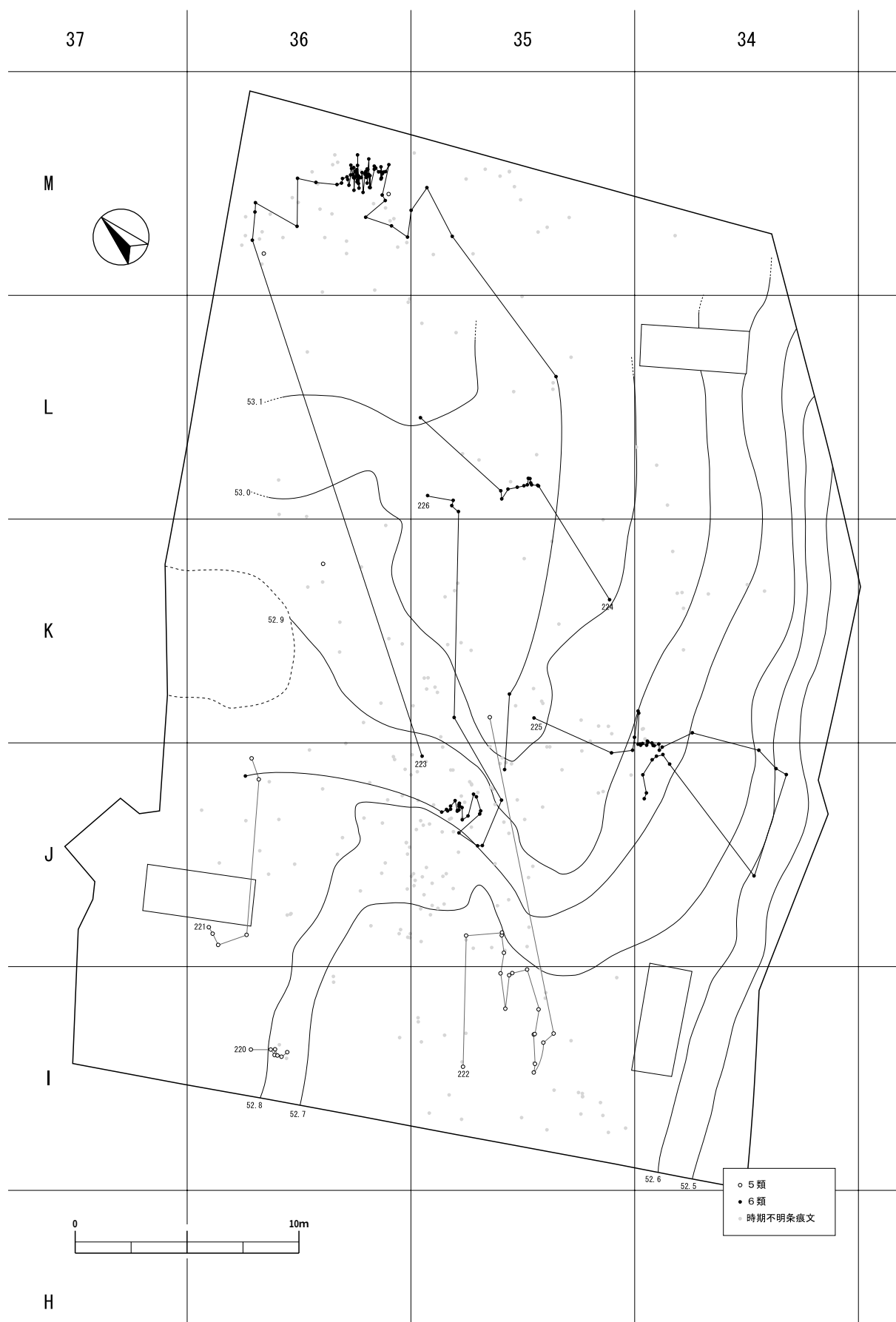
6 b 類：縦方向の条痕を施した後、口縁部や胴部に横や斜め方向の条痕が施される。口唇部に刻みはみられない。（224）

6 c 類：器面全体に斜めの条痕を施した後、胴部以下に綾杉状の文様が施され、口縁部のみ横位の条痕が施される。内面の条痕も明瞭に施される。（225）

223は6 a 類で、施文具を用いてやや幅広の浅い凹線文を施し、その際両側に押し出された粘土が微隆起線文となる。その施文方向は、口縁部では横位もしくは曲線文、胴部は縦方向のち綾杉状にナデられ、口縁部と胴部で文様帯の違いがみられる。口唇部には刻みが施される。内面はナデ調整である。226－1～4は同一個体と思われるものの胴部である。器面は、斜方向の条痕文が施された後、やや幅広の凹線文が施されている。226－1・2が口縁部付近と思われるが、横方向と曲線凹線文の口縁部文様帯と綾杉状凹線文を施す胴部文様帯に区別されている。凹線文は、223のように微隆起線文とはならないが、外面施文が類似するため、6 a 類とした。

224は6 b 類で、胴部に縦・斜め方向、一部曲線の条痕文を施し、口縁部と胴部に横方向の条痕を施す。口唇部に刻み目が施され、穿孔の痕跡が2ヶ所みられる。内面は横・斜め方向の条痕がみられる。225は6 c 類で、器面に斜方向の条痕文を施した後、綾杉状の条痕文を施す。口唇部には刻みはみられない。内面は横方向の条痕文が残る。

227は内外面に条痕が残る尖底の底部である。228は底部に向かってすぼまる小さな底部で上げ底である。6 c 類の底部と思われる。



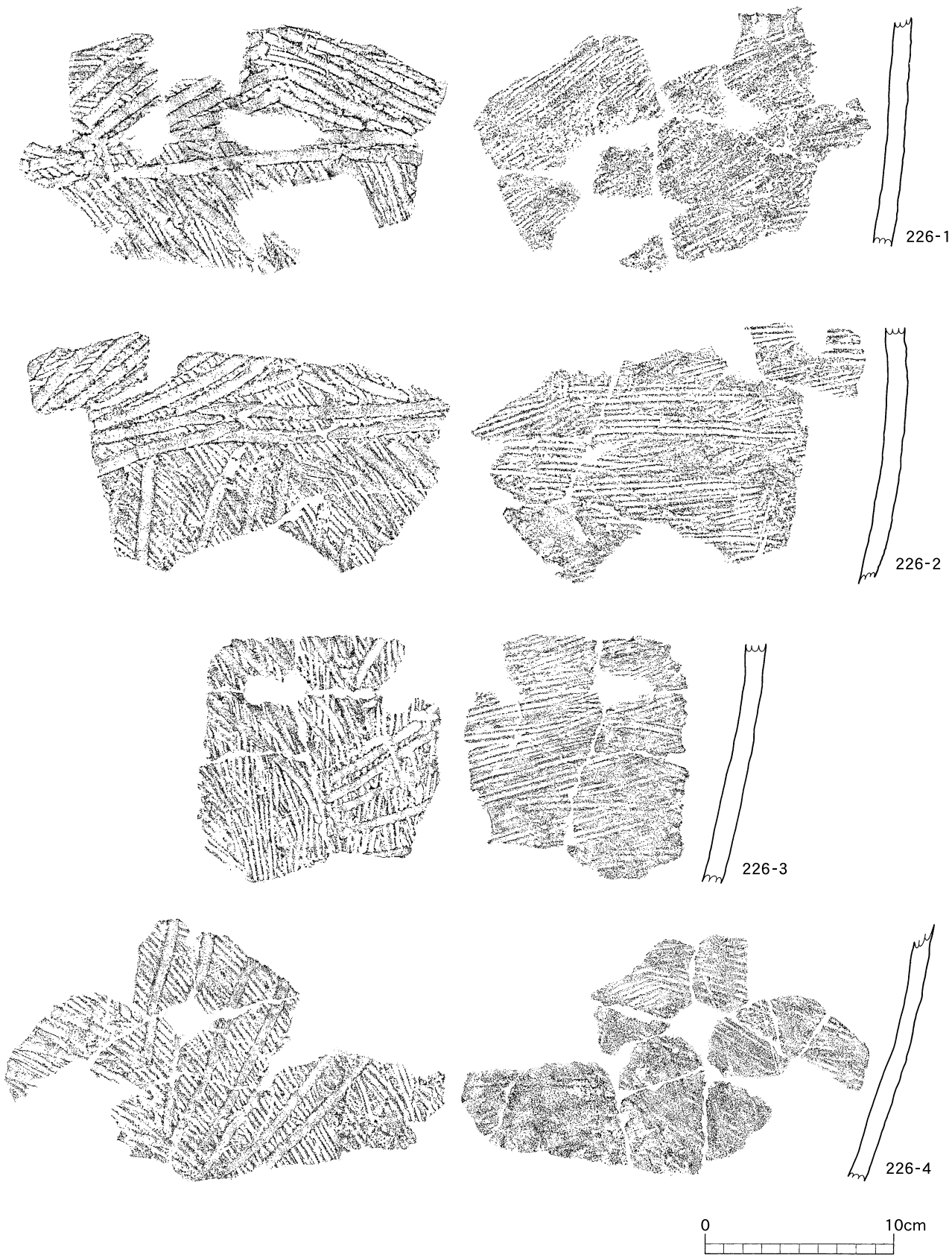
第64図 縄文時代早期末～前期遺物出土分布図



第65図 縄文時代の土器 7 (6 a・6 b類)



第66図 縄文時代の土器 8 (6 c 類)



第67図 縄文時代の土器 9 (6 a 類)

第9表 縄文土器観察表4

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備 考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
65	223	6a	右京西式	口～胴	M35 M36 L35 K35 J35	IIIb	2353 5570 5857 6557 7998 8087 8088 8158 8254 8260 8262 8267 8273 8276 8278 8282 8295 8298 8309 8316 8317	ナデ	ナデのちへラ削り 工具による微隆帯文	にぶい橙7.5YR7/4	橙7.5YR7/6	○	△		2～3mm大の 軽石・砂礫△	
	224	6b	轟A式	口～胴	L35 K35	IIIb	6335 6336 6334 6333 6269 6341 6346 1247 6332 6337 6330 6329 5900 6363	条痕	タテ条痕のち 口縁部・胴部ヨコ条 痕	灰黄2.5Y7/2	にぶい橙7.5YR7/4	○	△		白色粗砂 軽石△	穿孔 有
66	225	6c	鎌石橋式	口～胴	J34 K34 K35 J35	IIIb	6319 5189 5190 5205 5264 5265 5184 5199 5187 5200 5201 5204 5203 5191 5202 5796	ヨコ条痕	タテ条痕 のち緩杉条痕	灰5Y4/1	黄灰2.5Y6/1	○		白	赤・白色粗砂	
67	226 -1	6a	右京西式	胴	J35 J36	IIIa IIIb IV	4687 4448 9457 1867 1873 6383 476 2320 479 242	ヨコ条痕	ナナメ条痕のち ナナメ・ヨコ方向浅 い凹線文	にぶい黄橙10YR5/4	明褐7.5YR5/6	○	△	白・黒 △	白・赤色粒 軽石	
	226 -2	6a	右京西式	胴	J35	IIIb IV	5748 9289 5749 4687 9296									
	226 -3	6a	右京西式	胴	L35 K35	IIIb	5902 4585 6206 6503 5901									

第10表 縄文土器観察表 5

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
67	226 —4	6a	右京西式	胴	J35	IIIa IIIb IV	4107 9291 5746 5745 4108 5744 4111 3546 9290 9458 107 115	ヨコ条痕	ナナメ条痕のち ナナメ・ヨコ方向浅 い凹線文	にぶい黄橙10YR5/4	明褐7.5YR5/6	○	△	白・黒 △	白・赤色粒 軽石	
69	227	6	轟式	底	K36	IIIb	3345 5041 3354 1139	条痕	タテ条痕	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	○	△	白・黒 △	粗砂・砂礫△	
	228	6	轟式	底	L35	IIIb	6364	条痕	条痕・タテナデ	黄褐2.5Y5/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白△	白・赤色粗砂 黒赤岩片	

7 類土器（第69～71図 229～239）

器面に条痕がみられ、口縁部に刻目突帯文やみみずばれ状突帯文を施すものである。また、器形は6類と類似するものもあるが、胴部が屈曲する形態のものもみられる。器形・施文などから3つに細分した。

7 a 類：器面に粗い条痕文を施す。口縁部に突帯、口唇部に刻み目があるものもある。（238・239）

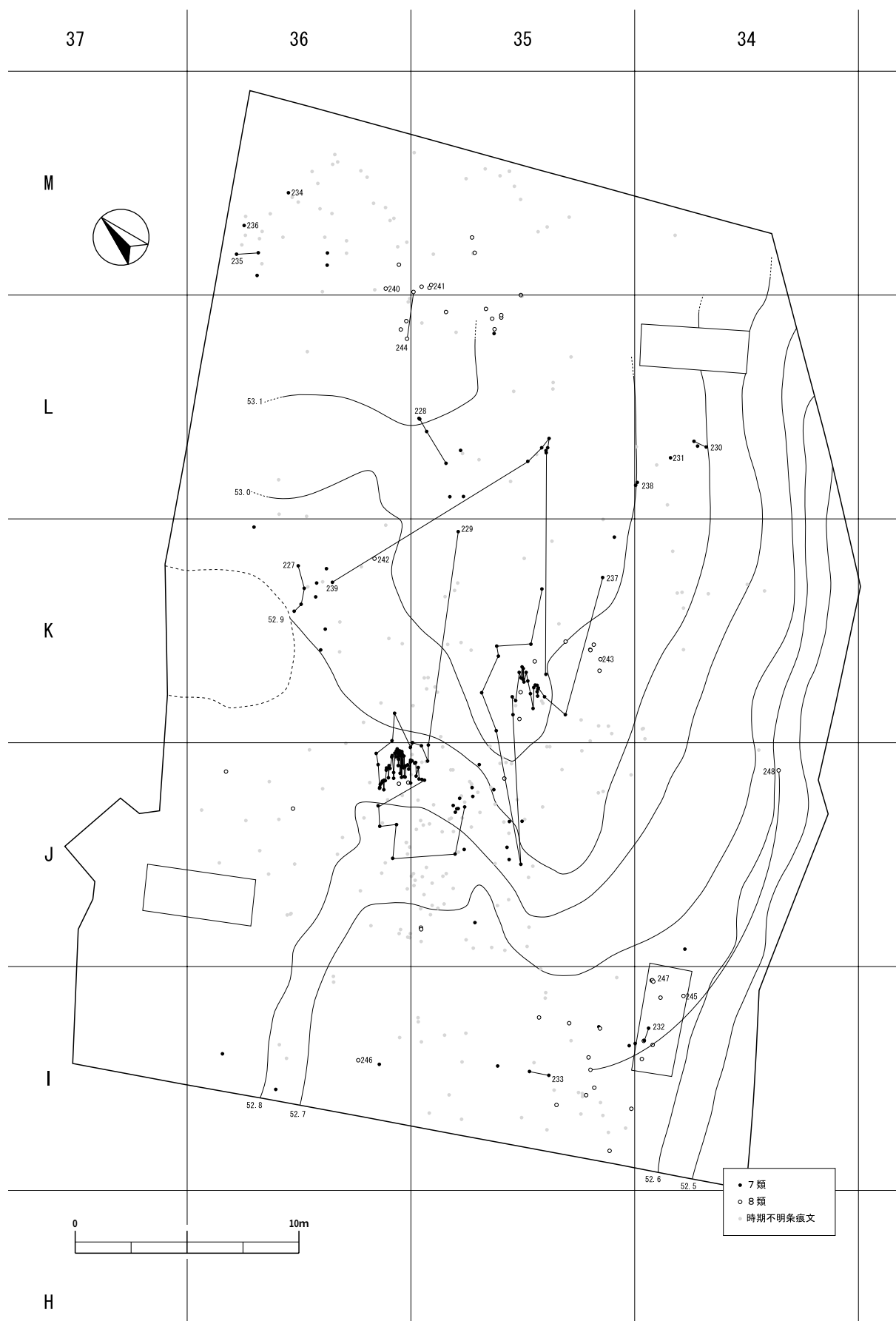
7 b 類：口縁部にみみずばれ突帯を数条巡らせ、地文は条痕文が施される。（229～231・235・236）

7 c 類：器面には浅い丁寧な条痕が施され、横位・縦位に突帯を巡らせる。頸部がゆるくくびれて胴部が膨らむ形態を呈する。（232～234・237）

229は7 b 類で、器面全体にみみずばれ状突帯文と格子状沈線を施す。みみずばれ状突帯文は、工具により口縁部に沿って8条、胴部に山形になるように8条、その下に横位に7・8条、波状口縁頂部から下垂するよう1条が施され、その間を格子状沈線文が施されている。口唇部には沈線が施される。内外面とも条痕文がみられる。

230・231も同じく横位・縦位方向にみみずばれ状突帯文が施されている胴部である。

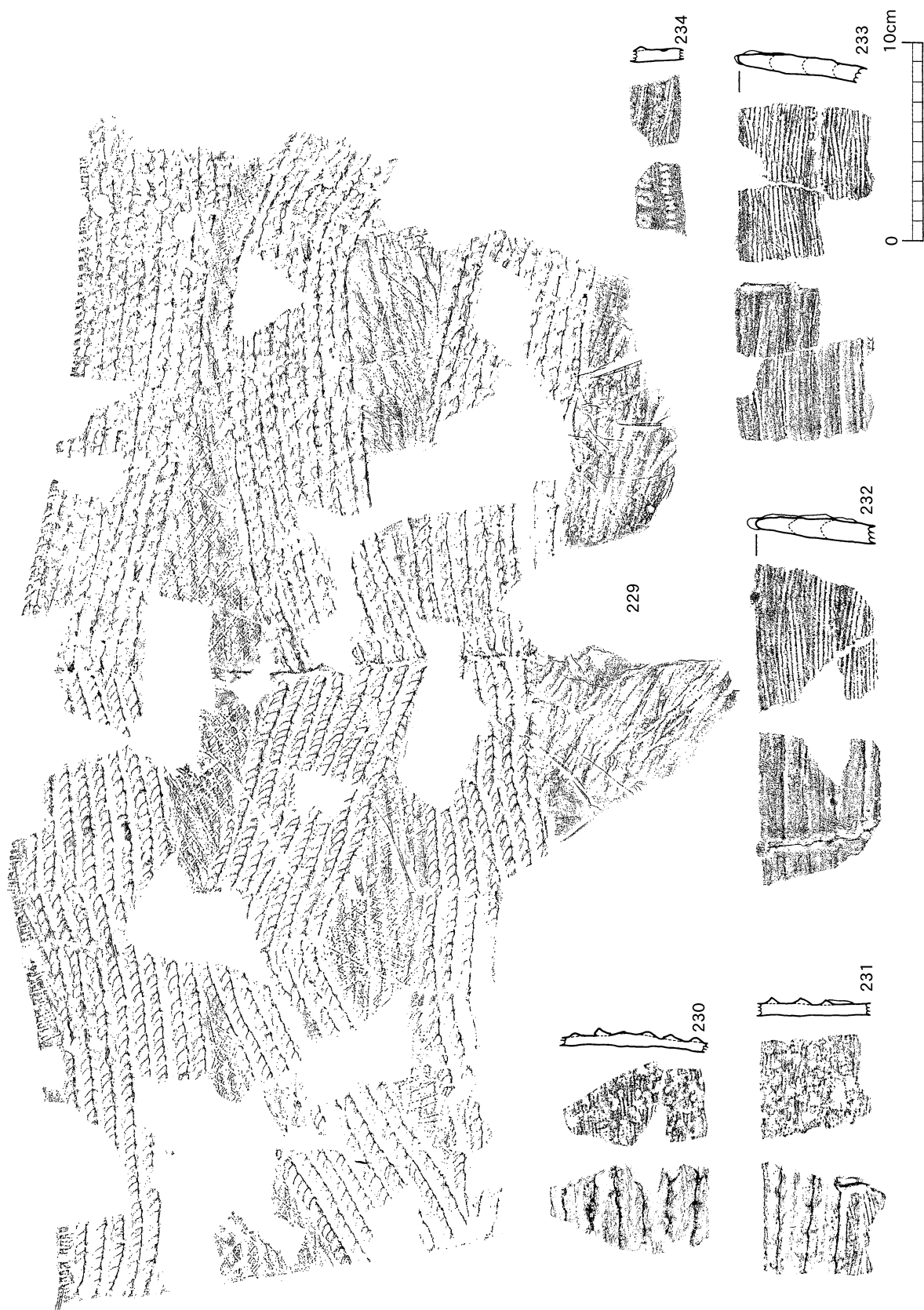
232は横位方向に工具でなでられ、それにより作り出された微隆帯文がみられ、その上から縦方向の隆帯文が施されている。233も同一個体と思われる。234は刻みが施され、小突起が貼付されている。235は7 b 類に類似する。内外面調整は条痕文であり、口縁部には突帯が施されている。236は調整は条痕文であり、外面は格子状の沈線、突帯がみられる。237は7 c 類である。胴部断面形態が一部分屈曲しているのと、突帯文が横位だけでなく縦位にもみられるのが特徴である。横方向の突帯は2条、縦方向の突帯は9条であり、縦方向の突帯は、丸くつながっている部分が一部みられる。器面には浅い条痕文が施される。238は7 a 類であり、器面調整には粗い条痕文が斜方向に施され、口縁部に突帯文がみられる。内面調整も粗い条痕文である。239は同一個体の胴部である可能性が高い。



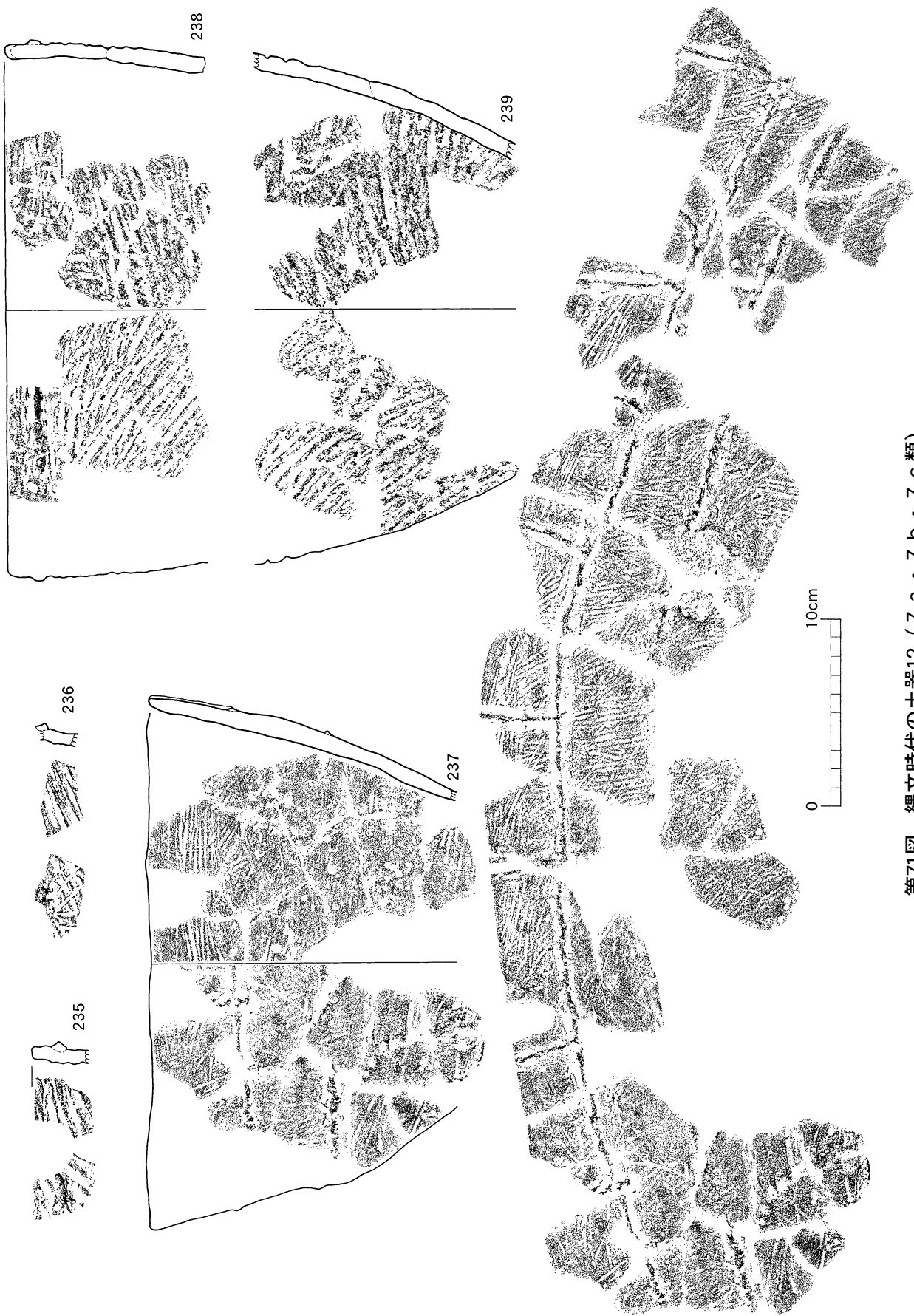
第68図 縄文時代前期遺物出土分布図



第69図 縄文時代の土器10（6・7 b類）



第70図 縄文時代の土器11 (7 b・7 c類)



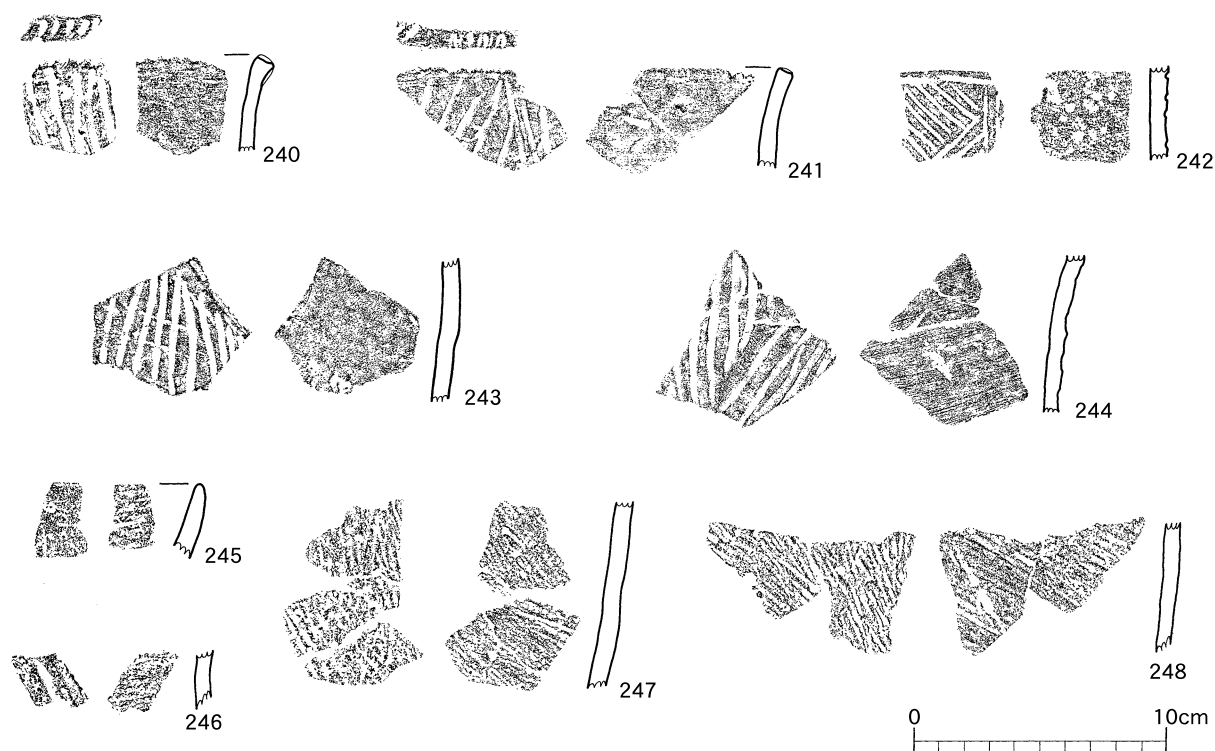
第71図 縄文時代の土器12 (7 a・7 b・7 c 類)

第11表 縄文土器観察表 6

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
69	229	7b	轟B式	口～胴	I35 J35 J36 K35	IIIa IIIb	229 496 505 514 2292 2580 2904 4001 4409 4410 4414 4417 4420 4470 4654 4672 4675 4783 4842 4869 4870 6108 6382 6385	貝殻条痕	貝殻条痕 みみずばれ状突帯 格子状沈線	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR6/4	○			白色粗砂	
							5300 5316									
							5296									
							12279 12329									
							6048 5638									
							8246									
							8306 8225									
							8214									
							430 2757 3295 3306 4245 4710 4727 5398 5806 5809 5812									
							6577 6568									
							6526 6435 6348 1228 6522 5586									
							7349									
							7232 7231									
							677									
							4274									
							7658 1090									
70	230	7b	轟B式	胴	K34 L34	IIIb	5316	条痕	突帯・条痕文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR7/4	○	△	白△	白色粗砂△ 黒曜石	
	231	7b	轟B式	胴	K34	IIIb	5296	条痕	突帯・条痕文	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/4	○	△	白・黒△	白・赤色粗砂	
	232	7c	轟B式	口縁	2T	IIIb	12279 12329	ヨコ条痕 ナデ	微隆起突帯	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6	○	○	白△	軽石 白色粗砂△	
	233	7c	轟B式	口～胴	I35 K36	IIIb	6048 5638	ヨコ条痕	微隆起突帯	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6	○	○	黒△	軽石 白色粗砂△	
	234	7c	轟B式	胴	M36	IIIb	8246	条痕	刺突文・コブ状突起	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒△	粗砂◎	
	235	7b	轟B式	口縁	M35 M36	IIIb	8306 8225	条痕	条痕 みみずばれ状突帯	にぶい黄橙10YR6/4	黒褐10YR3/1	○	△		赤・白色粗砂 軽石・砂礫	
	236	7b	轟B式	胴	M36	IIIb	8214	条痕	沈線・突帯	にぶい黄橙10YR6/4	黒褐10YR3/1	○	○		白色粗砂	
	237	7c	轟B式	口～胴	I36 K35	IIIa IIIb	430 2757 3295 3306 4245 4710 4727 5398 5806 5809 5812	条痕	条痕・突帯文	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR7/6	○	○	白・黒△	白色粗砂	
	238	7a	西之蘭式	口～胴	L34	IIIb	6577 6568	条痕	刻目突帯文	褐灰10YR4/1	にぶい黄褐10YR5/3	○	○	白△	白色粗砂	
	239	7a	西之蘭式	胴	L35	IIIb	6526 6435 6348 1228 6522 5586	条痕	条痕	灰黄褐10YR4/2	橙5YR6/6	○	○	白△	白色粗砂 砂礫	
73	240	8	曾畑式	口縁	M36	IIIb	7349	ヨコナデ	ナデ	浅黄2.5Y7/4	にぶい黄2.5Y6/3	○	○	白△	白色粒△	
	241	8	曾畑式	口縁	M35	IIIb	7232 7231	ヨコナデ	ナデ	浅黄2.5Y7/4	暗灰黄2.5Y5/2	○	○	白△	白色粒△	
	242	8	曾畑式	胴	K36	IIIb	677	ヨコナデ	ナデ	明黄褐10YR7/6	橙7.5YR6/6	○	○	白△	白色粗砂△	
	243	8	曾畑式	胴	K35	IIIb	4274	ヨコナデ	ナデ	浅黄2.5Y7/4	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白△	白色粒△	
	244	8	曾畑式	胴	M36 L35	IIIb IIIa	7658 1090	ヨコナデ	ナデ・沈線文	明黄褐2.5Y7/6	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白・黒△	白色粒△	
	245	8	曾畑式	口縁	2T	IV	12302	条痕	ナデ	黄灰2.5Y5/1	にぶい黄橙10YR6/4	○	△	白	滑石・粗砂△	
	246	8	曾畑式	胴	I36	IIIb	4771	条痕	ナデ	黄灰2.5Y5/2	にぶい橙7.5YR7/4	○	△	白	滑石・粗砂△	
	247	8	曾畑式	胴	2T	IV	12247 12248 12249	条痕	条痕	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	△	白	滑石・粗砂△	
	248	8	曾畑式	胴	J34 I35	IIIb	76 6060	条痕	条痕	褐灰10YR5/1	褐灰10YR6/1	○	△	白	滑石・粗砂△	



第72図 縄文時代中期遺物出土分布図



第73図 縄文時代の土器13（8類）

8類土器（第73図 240～248）

沈線文を幾何学的に施すものである。胎土に滑石を含むものもある。

240・241・243・244は同一個体である。口縁部はやや外反し、外面には小破片のため確認しにくいが、三角文が施されると考えられる。口唇部に刻みを施す。内面はヨコナデ調整が行われ、擦痕が残る（244）。245～248は同一個体で、胎土に滑石を含む。内外面ともに条痕が残る。246には浅い沈線文が認められる。

9類土器（第74～77図 249～264）

貝殻連点文・突帯文・相交弧文を主文様として、それぞれ1つもしくは組み合わせて施すものである。内外面ともに主にナデ調整を行う。器形・文様モチーフにより3つに細分した。

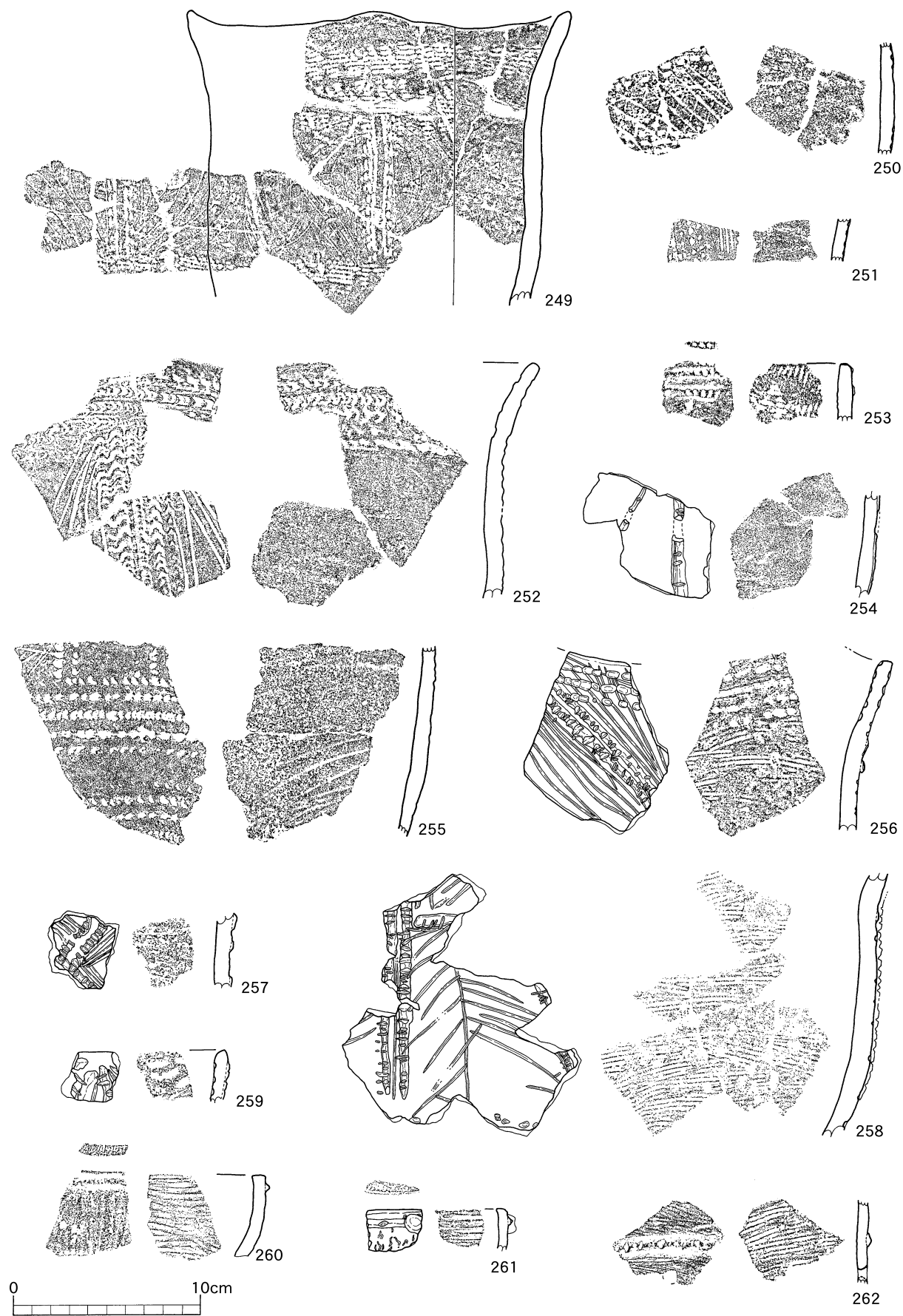
9 a類：貝殻連点文を主文様として、直線的なモチーフのもの（249～252・255）

9 b類：突帯文を主文様として、直線的なモチーフのもの（253・254・256～258）

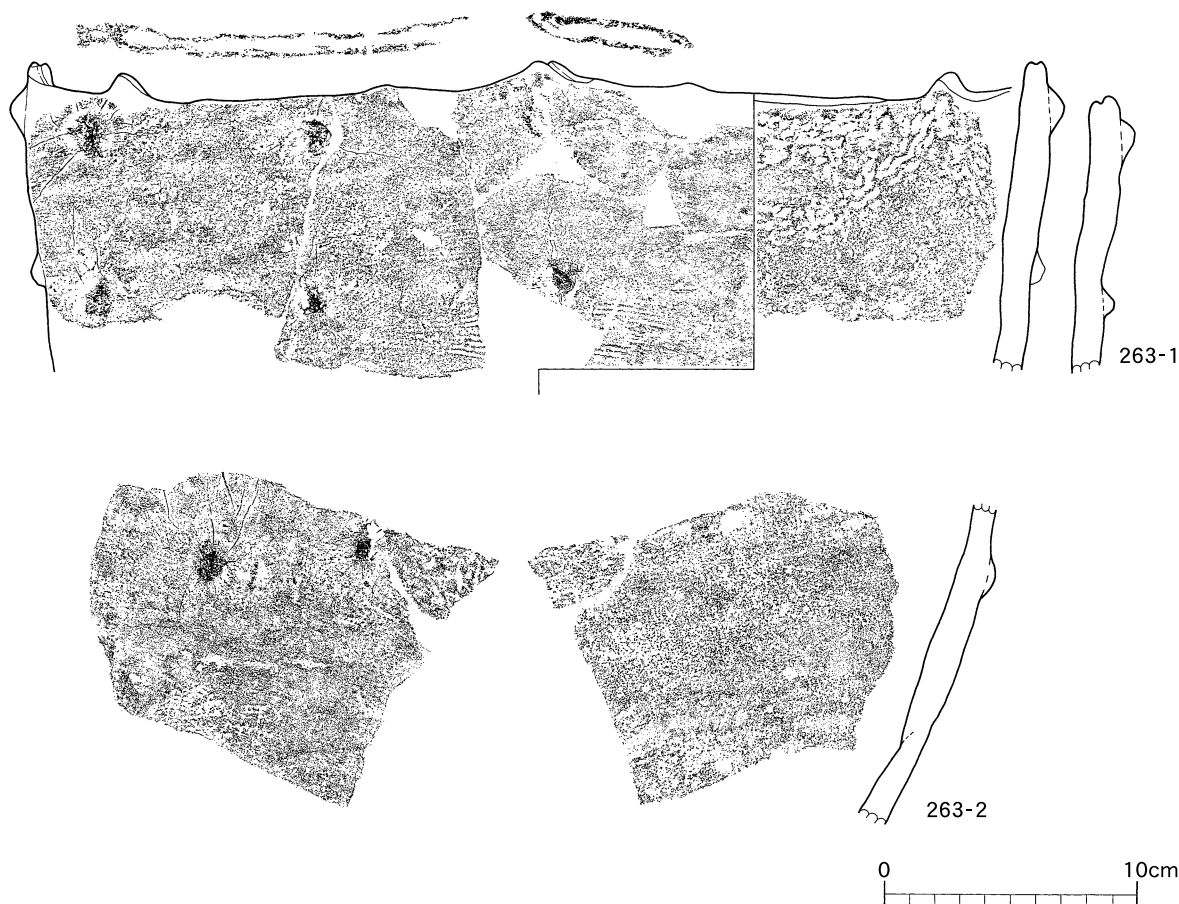
9 c類：口縁部が内反または内湾し、曲線的な文様を施すもの（259～264）

249は外反する口縁部からそのまま胴部へ続くものである。4ヶ所に緩やかな山形突起をもつ。口縁部に2段、胴部に1段の貝殻連点文を横位に施した後、縦位の貝殻連点文を施す。そして、その間に沈線文を縦位、X字状の順に施す。口縁部内面には2段の横位の貝殻連点文を施す。250は横位の貝殻連点文を施した後、沈線文を格子状に施す。252は外反する口縁部で、横位の貝殻連点文を施した後、縦位の貝殻連点文、沈線文の順で施す。255は横位の貝殻連点文を2段に施した後、縦位の貝殻連点文、そして沈線文を施す。内面には調整工具痕と思われる沈線状の痕跡が残る。

253の内面は縦位の貝殻条痕を施した後、貝殻連点文を横位に施す。256・258は同一個体と考え



第74図 縄文時代の土器14 (9 a・9 b・9 c類)



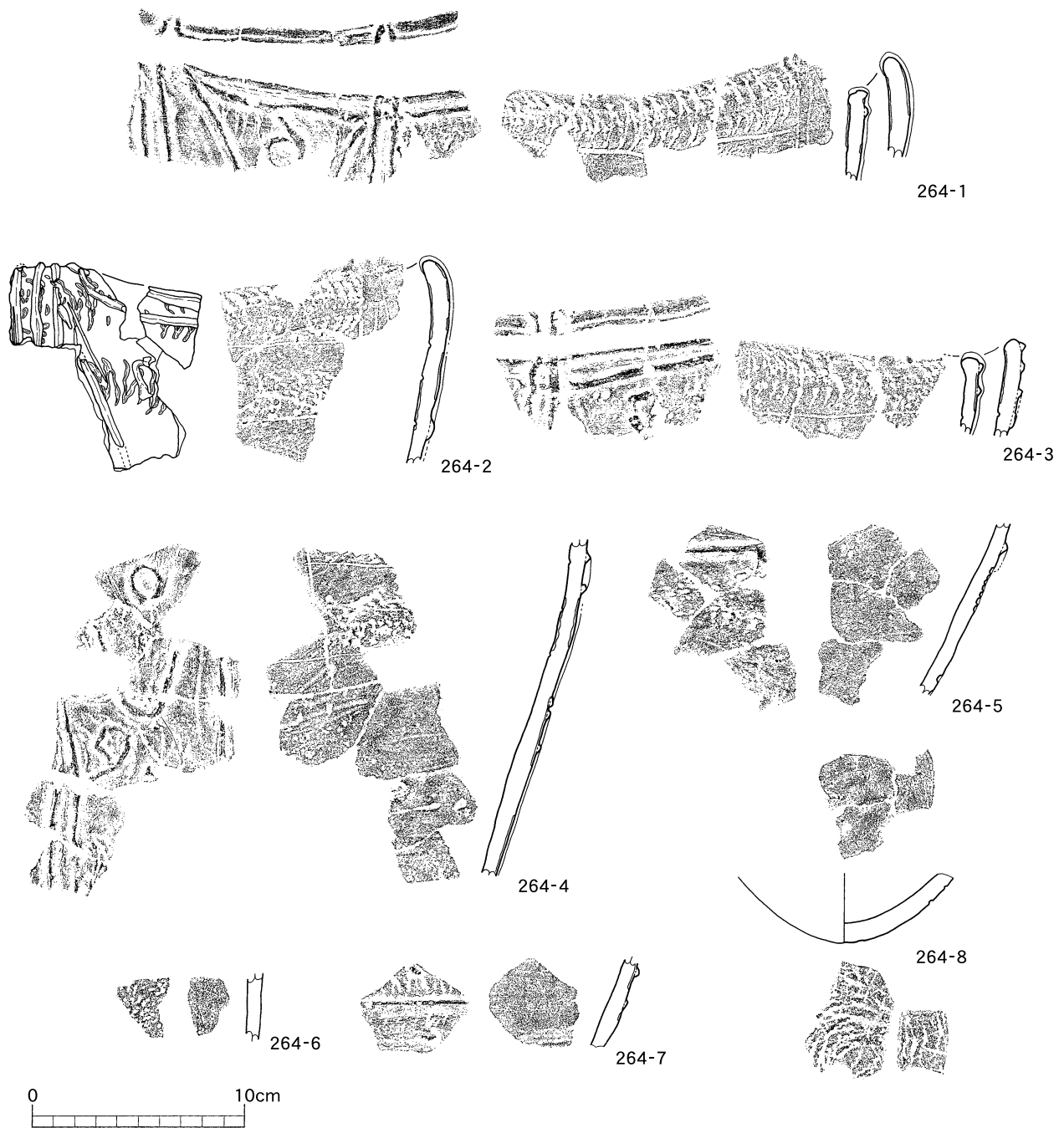
第75図 縄文時代の土器15（9c類）

られるものである。256は外反する口縁部で、外面は斜位の2条突帯、斜位の沈線文、突帯上への刻み、横位の貝殻連点文の順で施文する。内面は貝殻連点文を横位に施す。258は胴部下位に横位に貝殻連点文を、そして縦位の2条突帯、横位・斜位の突帯を施文後、沈線文を綾杉状に施す。257は胎土に小礫を多く含み、他の土器とは異なる。

259はやや内反する口縁部で、内面には横位の貝殻連点文を施す。260・261は同一個体と考えられるもので、内反する口縁部である。相交弧文状の貝殻刺突文を施文後、1条の突帯を横位に貼付し、突帯上に浅い刻みを施す。また、突帯上に円形浮文を貼付する（261）。口唇部は二枚貝の表面を用いた押圧文と思われる文様を施す。また、外面は縦位の貝殻条痕を施すが、ナデ調整のため不明瞭である。なお、260は接合痕で剥離している。

263は直行する口縁部から、そのまま胴部へ続くものである。また、場所によっては口縁部下位でくびれる。8ヶ所に緩やかな山形突起を有すると思われる。外面にはコブ状突起を3+α段施す。内面は山形突起を基準にして、貝殻連点文を波状に2段施す。口唇部には沈線を施す。

264-1～8は同一個体であり、全て接合しなかったものの、図上復元したものが第77図である。口縁部が内反し、そのまま丸底を呈する底部へ至る。4ヶ所に頂部をもつ波状口縁を呈すると思われる。外面はまず横位の相交弧文を6段施す。次に胴部下位に1条の突帯を横位に施し、波頂部に3条の突帯を口縁部内面から胴部下位にかけて縦位に施す。その後、口縁部上端に2条の突帯を波状に施す。そして、波頂部間のほぼ中央に2条の突帯を口縁部内面から胴部下位にかけて縦位に



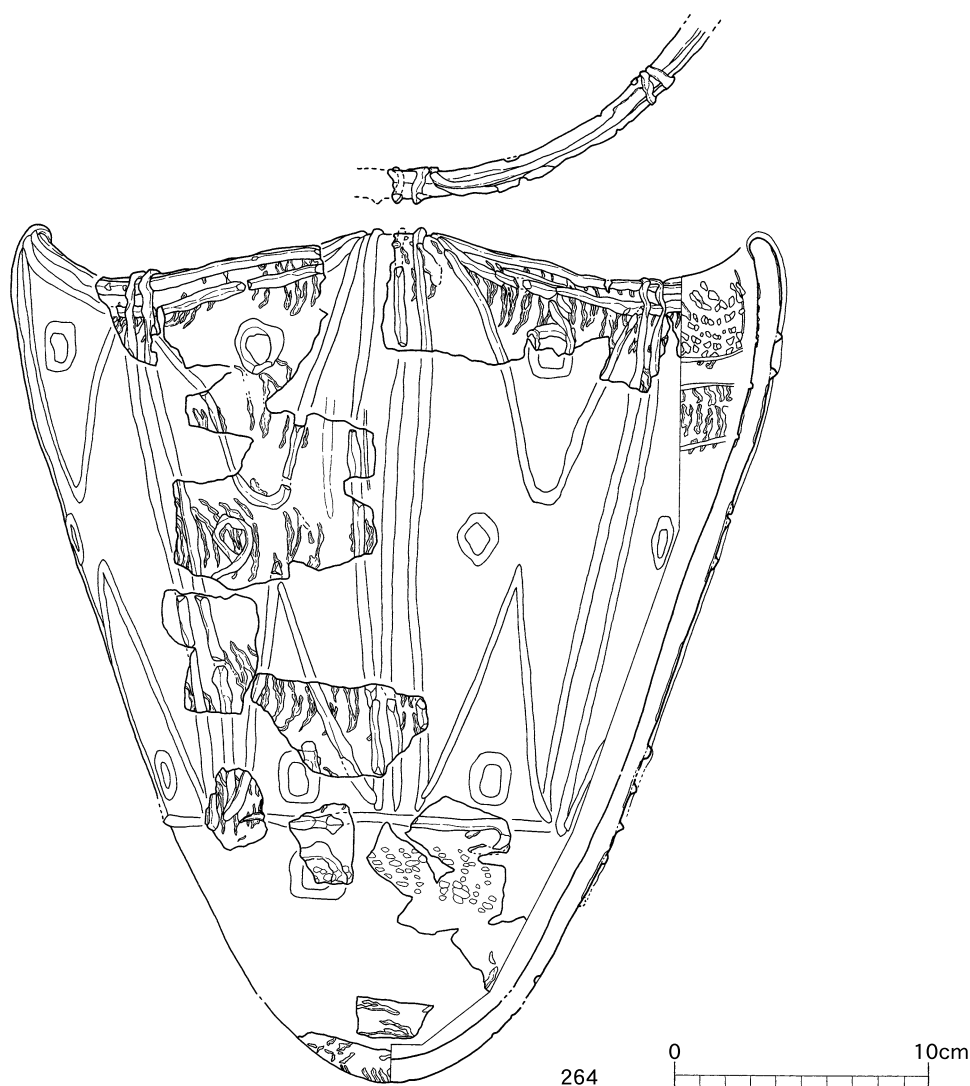
第76図 縄文時代の土器16 (9 c 類)

施し、その区画された文様帯にV字状・逆V字状の突帯を施し、最後にドーナツ状の円形浮文を貼付する。突帯に沿うように沈線文を施す箇所もある。なお、底面にも相交弧文を施す(264-8)。口縁部内面はまず波頂部に3～4条の沈線文を縦位に施した後、横位の相交弧文を2段施す。そして、その相交弧文を挟むように沈線文を施す。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われ、一部光沢をもつ。

10類土器 (第78図 265～274)

外面に縦位の貝殻条痕を施すものである。内面は基本的に、横位の貝殻条痕である。口縁部は外傾するものと内反するものがある。口縁部に突帯を貼付するものもある。

265～268は外傾する口縁部である。265・267は同一個体の可能性が高いもので、縦位の貝殻条痕

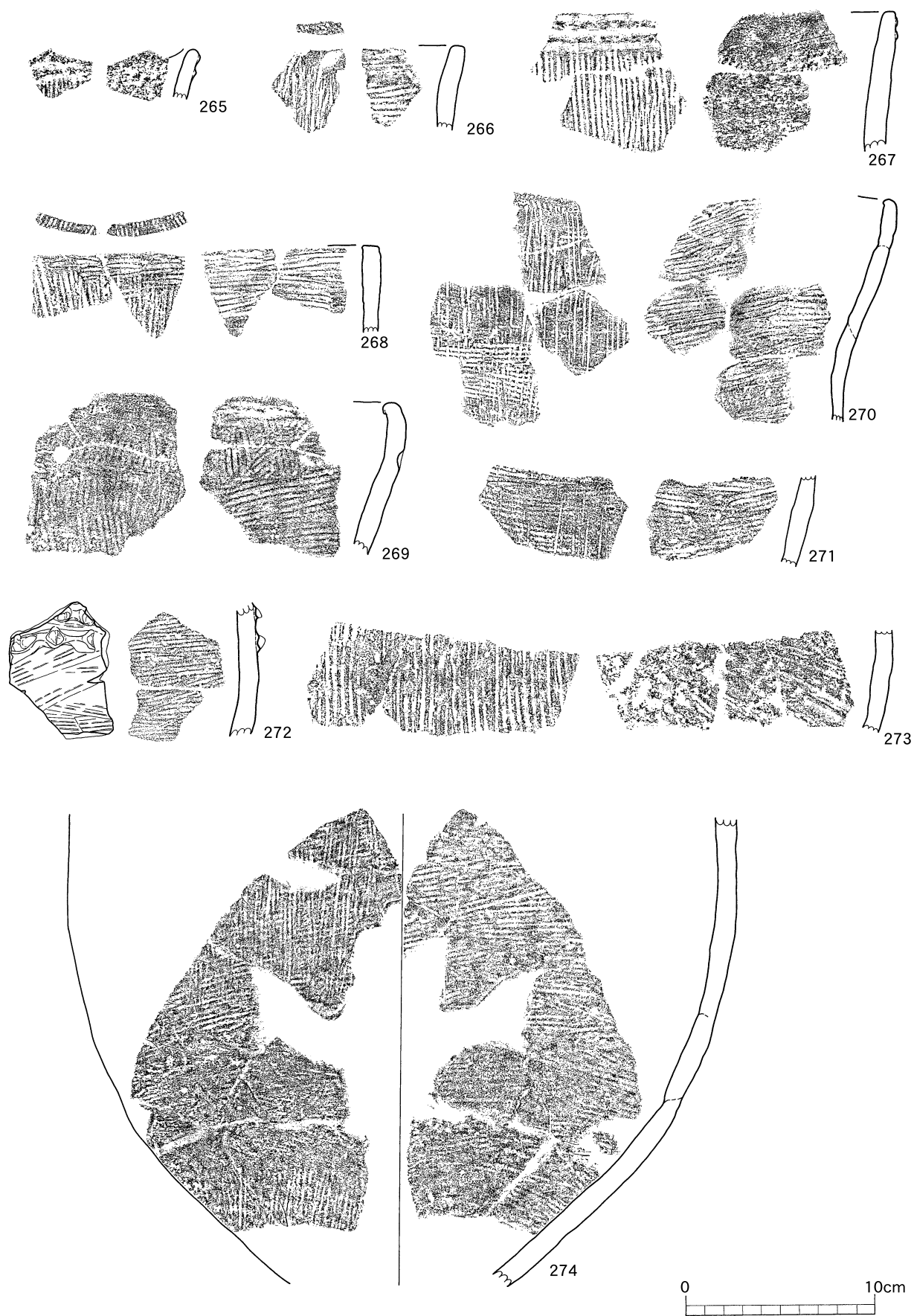


第77図 縄文時代の土器17 (9c類)

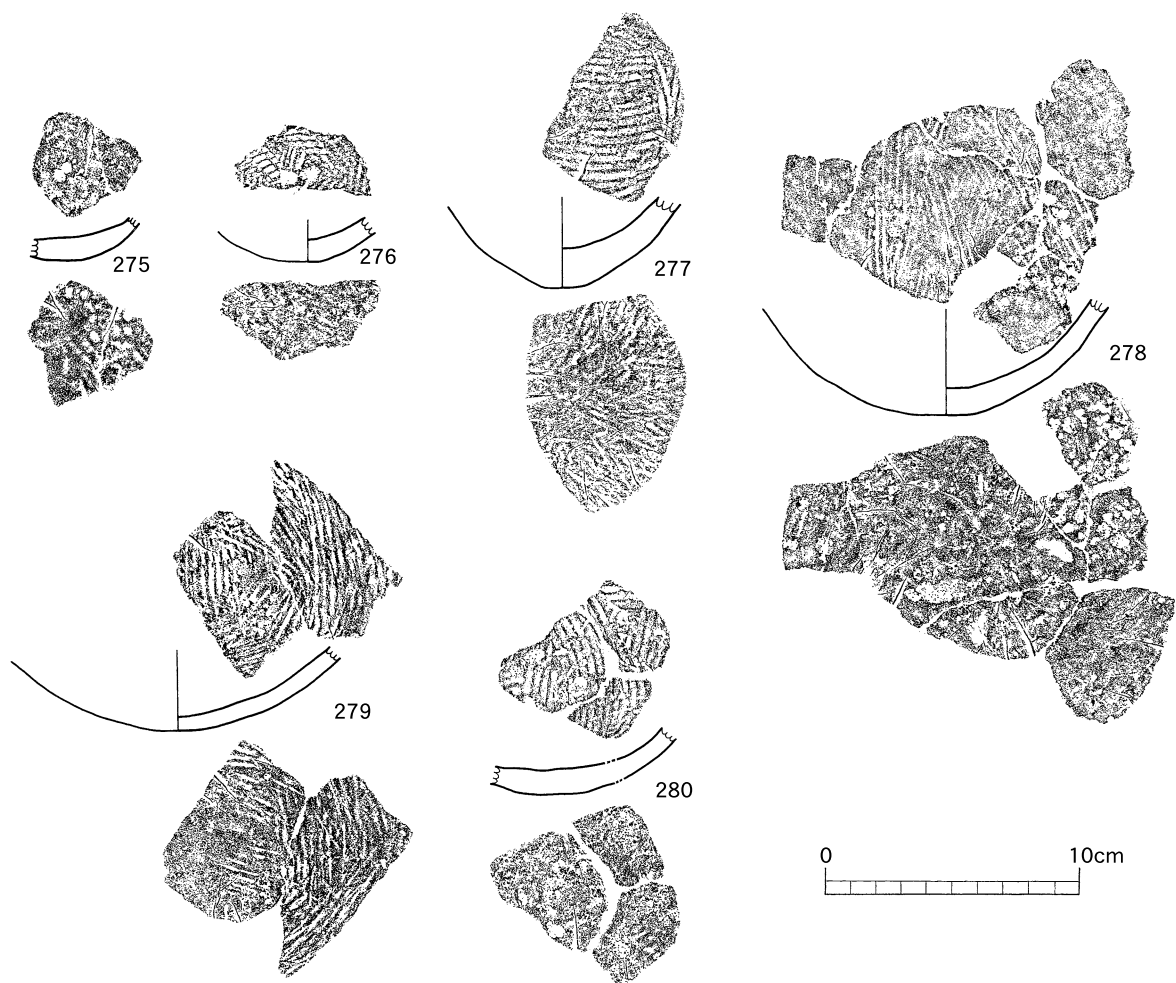
を施した後、2条の突帯を貼付する。また、内面はケズリ状のナデ調整を行う。胎土に石英を多く含む。268の外表面は縦位の貝殻条痕を施した後、上端に横位の貝殻条痕を施す。そして、縦位の細かい沈線文を不規則に施す。また、266・268は口唇部に貝殻条痕を施す。269・270は内反する口縁部である。269は縦位の貝殻条痕を施した後、ナデ調整を行い、口縁端部は丁寧なナデ調整を行う。穿孔途中の凹みがみられる。内面は上位に縦位・斜位の、下位に横位の貝殻条痕を施す。270は内反する口縁部から口縁部下位でくびれるものである。外表面は横位の貝殻条痕を施した後、口縁部上位はヨコナデ調整を行う。その後、文様効果を意識したと思われる2～4条単位の縦位の貝殻条痕を施す。271の外表面は横位の貝殻条痕を施した後、文様効果を意識したと思われる縦位の貝殻条痕を施す。273の内表面は条痕調整を行うが、二枚貝によるものではない。胎土に石英・長石類を多く含む。274の外表面は横位の貝殻条痕の後、縦位の貝殻条痕を施す。

11類土器 (第79図 275～280)

9類または10類の底部と考えられるものである。丸底もしくはやや尖り気味の丸底となる。275



第78図 縄文時代の土器18 (10類)



第79図 縄文時代の土器19 (11類)

第12表 縄文土器観察表 7

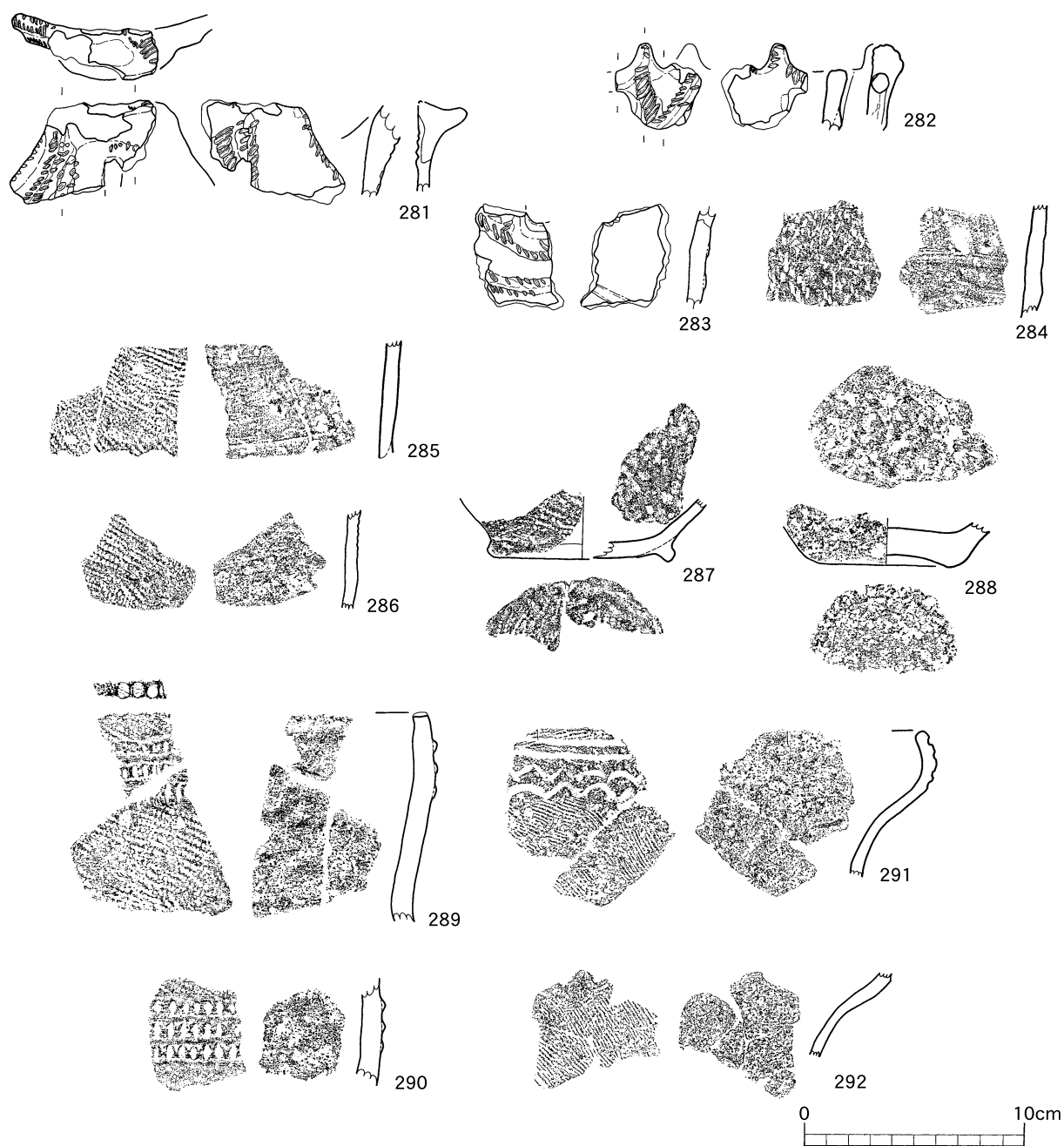
挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備 考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラ	砂礫 他	
74	249	9a	深浦式	口~胴	K35 K36	IIIb	735 781 1015 1172 3000 3277 3334 4624	ケズリ状 のナデ	ナデ	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白・黒	黒曜石・軽石 白・赤色粗砂	
	250	9a	深浦式	胴	L34 L35 L36	IIIb	6289 6528 1050	ナデ	ナデ	黒褐2.5Y3/1	にぶい赤褐5YR5/4	○	○	白△	赤・白色粗砂	
	251	9a	深浦式	胴	M35	IIIa	7039	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白	白色粗砂	
	252	9a	深浦式	口縁	J36	IV IIIb	9098 3607	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/5	灰黄褐10YR4/2	○	○	白	軽石 赤・白色粗砂	
	253	9b	深浦式	口縁	K36	IIIb	3365	タテ貝条	ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい赤褐5YR5/4	○	○	白△	白色粗砂	
	254	9b	深浦式	胴	K35	IIIb	3296	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白△	白色粗砂△	
	255	9a	深浦式	胴	M36	IIIb	7206	工具ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	256	9b	深浦式	口縁	I36	IIIb	5384	ヨコ貝条	ナデ	黒褐7.5YR3/2	オリーブ黒5Y3/2	○	○	白	赤色粗砂	
	257	9b	深浦式	胴	J35	IIIb	3487	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	△		砂礫	
	258	9b	深浦式	胴	K35	IIIb	5122 4225 3608 4631	ヨコ貝条	ナデ	黄褐10YR5/6	黒10YR2/1	○	○	白・黒	白色粗砂◎	

第13表 縄文土器観察表 8

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
74	259	9c	深浦式	口縁	K36	IIIb	5003	ナデ	ナデ	にぶい黄褐10YR4/3	褐10YR4/4	○	△		白色粗砂△	
	260	9c	深浦式	口縁	2T	IIIb	12319	ヨコ貝条	タテ貝殻条痕	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	△		白色粗砂 軽石・砂礫△	
	261	9c	深浦式	口縁	I35	IIIb	5683	ヨコ貝条	ナデ	にぶい黄橙10YR4/3	にぶい黄橙10YR4/3	○	△		白色粒	
	262	9c	深浦式	胴	I35	IIIb	173	ヨコ貝条	ヨコ貝殻条痕	にぶい黄橙10YR6/3	浅黄2.5Y7/4	○		白	砂礫	
75	263-1	9c	深浦式	口縁	L35 L36 M35	IIIb	6485 6513 7226 7407	ヨコ貝条 のち丁寧 なナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	橙7.5YR7/6	○	○	白・黒 △	白色粗砂 砂礫◎	
	263-2	9c	深浦式	胴	L35	IIIb	6251									
76	264-1	9c	深浦式	口縁	K36	IIIb	275 5036 5791	丁寧な ナデ	丁寧なヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙7.5Y7/6	○	○	黒・白 △	金雲母△ 粗砂	
	264-2	9c	深浦式	口縁	K36	IIIb	671 5002 5030									
	264-3	9c	深浦式	口縁	K36	IIIb	297 1163 3077									
	264-4	9c	深浦式	口～胴	J36 K36	IIIb	645 2024 3335 4491 6599									
	264-5	9c	深浦式	胴	K36	IIIb	646 2043 4485									
	264-6	9c	深浦式	胴	K36	IIIb	4494									
	264-7	9c	深浦式	胴	K36	IIIb	4496									
	264-8	9c	深浦式	底	K36	IIIb	673 5592 5616									
78	265	10	条痕文	口縁	I35	IV	9351	ヨコナデ	タテ貝殻条痕	オリーブ褐2.5Y4/3	黒褐2.5Y2/3	○	△	白	白・赤色粗砂	
	266	10	条痕文	口縁	I35	IIIa	5680	ヨコ貝条	タテ貝殻条痕	灰5Y4/1	黄褐2.5Y5/4	○	△	白	白・赤色粗砂	
	267	10	条痕文	口縁	J36	IIIb	1948	ヨコナデ	タテ貝殻条痕	明黄橙10YR6/6	にぶい黄橙10YR7/4	◎	○	白・黒	白色粗砂	
	268	10	条痕文	口縁	J36 I36	IIIb	3213 3682	ヨコ貝条	タテ貝条・ヨコ貝条	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白	白色粗砂 砂礫	
	269	10	条痕文	口縁	I36	IIIb	4818	貝条	タテ貝条・ヨコナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	○	○	白△	軽石 白色粗砂	凹穴
	270	10	条痕文	口～胴	I35 I36	IIIb	9372 3899 5428 5430 2381	ヨコ貝条	ヨコ貝条・ヨコナデ タテ貝条	褐7.5YR4/3	にぶい褐7.5YR5/3	○	○	白△	白色粗砂	
	271	10	条痕文	胴	M35	IIIa	7041	ヨコ貝条	ヨコ貝条・タテ沈線	橙7.5YR7/6	褐7.5YR4/6	○	○	白	砂礫	
	272	10	条痕文	胴	J35	IIIb	3098 3189	ヨコ貝条	ヨコ・ナナメ貝条	橙7.5YR6/6	明黄橙10YR6/6	○	○	白・黒	白色粗砂	
	273	10	条痕文	胴	I36	IIIb	3460 3461 2181	条痕	タテ貝殻条痕	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙10YR6/4	◎	○	白	白色粗砂 砂礫◎	
	274	10	条痕文	胴	I35 J35 J36	IIIa IIIb	827 3844 3905 4001 4035 5520	ヨコ方向 条痕	ヨコ貝条のち タテ貝条	明黄褐10YR6/6	橙7.5YR7/6	○	△	白△	白色粗砂 軽石	
79	275	11	—	底	L34	IIIb	5248	ナデ	ナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR7/6	○	○	白△	白色粗砂	
	276	11	—	底	K36	IIIb	6438	貝条	ナデ	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6	○	○	白	白・赤色粗砂	
	277	11	—	底	—	表	—	貝条	貝条のちナデ	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白	白・赤色粗砂	
	278	11	—	底	J35 J36	IIIb	4011 3994 2838 6124 5494	貝条のち ナデ	ナデ	にぶい橙10YR7/4	橙7.5YR6/6	○	○	白△	白色粗砂	
	279	11	—	底	L35	IIIb	7270 7272	貝条	貝条のちナデ	橙7.5YR7/6	橙7.5YR6/6	○	○	白△	白色粗砂	
	280	11	—	底	I35 I36 J35	IIIb	5647 1718 4773	貝条	ナデ	橙2.5YR6/8	赤灰2.5YR6/1	△	△	白△	砂礫△	



第80図 縄文時代中期遺物出土分布図



第81図 縄文時代の土器20 (12 a・12 b・12 c 類)

は外面に不明瞭ながら貝殻連点文が認められることから、9類の底部と考えられる。276・278～280は丸底となり、277はやや尖り気味の丸底となる。

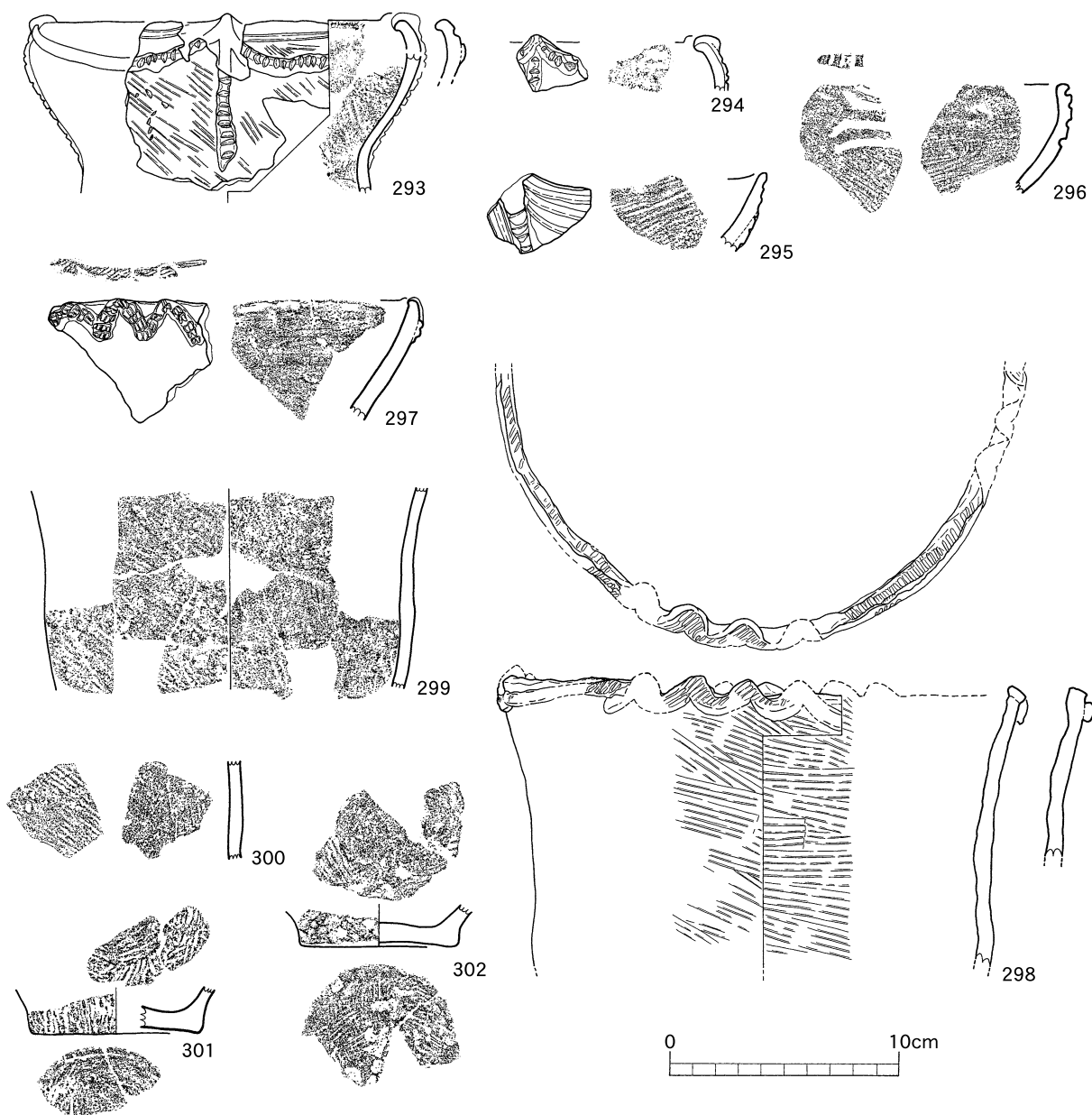
12類土器 (第81図 281～292)

地文に縄文または撚糸文を施すものである。突帯文や沈線文が施される。地文や胎土の違いにより3つに細分した。

12 a 類：地文に縄文を施すもの (281～288)

12 b 類：地文に縄文を施すもので、a類よりも器壁が厚く、胎土に角閃石・輝石類を多く含むもの (289・290)

12 c 類：地文に撚糸文を施すもので、口縁部が内湾するもの (291・292)



第82図 縄文時代の土器21 (13類)

281・283は同一個体である。281は外傾する口縁部で、波状口縁となり、波頂部に浅い凹みをもつ酒杯状突起をもち、突起上面には浅い刻みを施す。波頂部から放射状に低い突帯を貼付し、その突帯上に浅い刻みを施す。内面は波頂部中央から2条の低い突帯を縦位に施し、突帯上に浅い刻みを施す。また、波頂部中央下位に四角形状の透しがある。口唇部にも浅い刻みを施す。282は外傾する口縁部で、二叉状の突起をもつ。外面はV字状の低い突帯を施した後、突帯上に浅い刻みを施す。これも281同様、四角形状の透しをもつ。内面は口縁部上端に浅い刻みを施す。なお、281～283は胎土に石英・長石類を多く含む。284は撚りの粗い縄文(RL)を施す。内面はヨコナデ調整を行い、擦痕が残る。胎土に角閃石を多く含む。285は節が細かい縄文(RL)を施す。内面はヨコナデ調整を行い、擦痕が残る。なお、接合痕で剥離している。286は節が細かい縄文(RL)を

第14表 縄文土器観察表 9

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備 考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
81	281	12a	船元式	口縁	L36	IIIb	3058	ナデ	ナデ	黄褐2.5Y5/4	にぶい黄2.5Y6/3	○		白△	白色粗砂	
	282	12a	船元式	口縁	L36	IIIb	3059	ナデ	ナデ	黄褐2.5Y5/4	にぶい黄2.5Y6/4	○		白△	白色粗砂	
	283	12a	船元式	口縁	K36	IIIb	1150 5065	ナデ	ナデ	黄褐2.5Y5/3	黄褐2.5Y5/3	○		白△	白色粗砂	
	284	12a	船元式	胴	I37	IIIa	3481	工具ナデ	縄文	淡黄2.5Y8/3	にぶい黄橙10YR7/4	○	◎	白	粗砂	
	285	12a	船元式	胴	J36 3T	IIIa IIIb	957 12501	ヨコナデ	縄文	にぶい黄橙10YR7/4	橙5YR6/6	○	◎	白・黒	白色粗砂	
	286	12a	船元式	胴	J36	IIIb	2676	ナデ	縄文	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄10YR7/4	○	◎	白・黒	白色粗砂	
	287	12a	船元式	底	I36	IIIa IIIb	854 5380 4761	ナデ	縄文	浅黄2.5Y7/3	明黄褐10YR7/6	○	○	白△	粗砂	
	288	12a	船元式	底	K35	IIIb	2079 3281	ナデ	ナデ	暗灰N3/0	橙7.5YR6/6	△	△	白△	白・赤色粗砂	
	289	12b	本野タイプ	口～胴	M36	IIIb	7975 7976	ヨコナデ	縄文	褐灰10YR5/1	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	290	12b	本野タイプ	口縁	M36	IIIb	7420	ヨコナデ	縄文	褐灰10YR5/1	にぶい黄橙10YR7/4	○	◎	白・黒	白色粗砂	
	291	12c	撚糸施文	口縁	I36	IIIb	2424	ナデ	撚糸文	明黄褐10YR7/6	明黄褐10YR7/6	○	○	白△	白色粗砂◎	
	292	12c	撚糸施文	胴	I36	IIIb	2175 2847 3445 3914	ナデ	撚糸文	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	○	○		金雲母△ 白色粗砂	
82	293	13	春日式	口縁	I35	IIIb	5423 3835	ヨコ貝条 ナデ	ナナメ貝条のちナデ	にぶい褐7.5YR5/4	暗褐7.5YR3/4	○	○	白	赤色粗砂	
	294	13	春日式	口縁	I35	IIIb	3964	ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	暗オリーブ褐2.5Y 3/3	◎		白△	白色粗砂	
	295	13	春日式	口縁	J35	IIIb	5456	貝条のち ナデ	ナデ	赤褐2.5YR4/6	明赤褐5YR5/6	○	○	白△	白色粗砂	
	296	13	春日式	口縁	J35	IIIb	3156	貝条のち ナデ	浅い貝条のちナデ	明黄褐10YR7/6	明黄褐10YR7/6	△	△	白△	白色粗砂 金雲母△	
	297	13	春日式	口縁	K35	IIIb	4526	貝条のち ナデ	ナデ	赤褐5YR4/6	黒褐2.5Y3/1	○	○	白・黒		
	298	13	春日式	口～胴	K35 K36 I35	IIIb	266 637 1166 1170 1178 4517 4523 5010 5014 5839 6684	ヨコ貝条	ヨコ・ナナメ貝条	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙5YR6/4	○	○	白・黒 △	白色粗砂	
	299	13	春日式	胴	I36	IIIb	3678 3679 3840	タテ貝条 のちナデ	ナナメ貝条	灰黄2.5Y6/2	にぶい黄橙10YR7/4	○	◎	白・黒 △	白色粗砂 砂礫	
	300	13	春日式	胴	I36	IIIb	2447	ナデ	ナナメ貝条	灰2.5Y6/2	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白△	白色粗砂	
	301	13	春日式	底	J36	IIIb	2686 2691	貝条	タテ貝条 貝条のちナデ	橙5YR6/6	橙7.5YR7/6	○	○	白・黒	砂礫	
	302	13	春日式	底	I36	横転	—	貝条のち ナデ	貝条のちナデ	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6	○	○	白・黒	砂礫◎	

施し、胎土に角閃石を多く含む。287・288は底部である。287は粘土紐を貼付し、高台状になっている。286と同一個体であり、外面には地文の縄文が認められる。288は上げ底となり、胎土に小礫を多く含む。

289・290は同一個体であり、一個体のみ確認できた。やや内反する口縁部で、外面には縄文（RL）を施し、3条の突帯を巡らせ、突帯上に刻みを施す。また、口唇部に刻みを施す。胎土に角閃石・輝石類を多く含む。

291・292は同一個体であり、一個体のみ確認できた。口縁部が内湾し、キャリパー形を呈する。地文に無節の縄を巻いた撚糸文を施す。口縁部外面上端に2条の沈線文を横位に施し、その下位には波状の沈線文を2段施す。胎土に石英・長石類を多く含み、その他金色の雲母や角閃石を含む。

13類土器（第82図 293～302）

口縁部が内湾・内反または外傾するもので、地文に貝殻条痕を施すものである。文様は、突帯文や沈線文、押引文を単独もしくは組み合わせて施す。

293・294は同一個体で、口縁部が内湾し、頸部でくびれる。外面は口唇部から頸部にかけて突帯を縦位に施した後、そこを基準にして突帯を波状に施す。そして、波状の突帯に沿うように沈線文を1条施す。295はやや内反する口縁部で、刻みのある突帯を施した後、沈線文を施す。296は内湾する口縁部で、外面に押引文を施し、口唇部には刻みを施す。その他の土器とは異なり、石英・長石類を多く含み、また金色の雲母を若干含む。297はやや内反する口縁部で、外面は突帯を波状に施した後、突帯上に貝殻腹縁による押引文を施す。口唇部には貝殻条痕を施す。

298は外反する口縁部から、そのまま胴部へ至るものである。口縁部外面上端に横位の直線状の突帯と4ヶ所に波状の突帯を貼付する。そして、突帯上と口唇部に貝殻条痕を施す。

299・300は同一個体で、外面に斜位の浅い貝殻条痕を施す。胎土に細かい角閃石を多く含む。

301・302はやや上げ底気味となる平底であり、胎土に細かい角閃石を多く含む。

14類土器（第84図 303～309）

口縁部の出土で、器面には凹線文による文様が施される。口唇部に小凹点が施されるもの、器面には逆S字状文などの曲線や平行な凹線が施されるものがある。

303・304の器面にはやや太めの凹線が施され、口唇部に連続した凹点が施されることで口唇部は波状を呈する。305～309も器面に浅い凹線が施される。307・309は口唇部に刻みが施される。

15類土器（第84図 310）

310は破片のため器形は不明であるが、やや屈曲する胴部に刻目突帯がほどこされる。施文具は不明であるが、先が二股に分かれているものを使用していることが観察できる。後期前半のものと思われる。

16類土器（第84図 311）

口縁部のみの出土である。器面には沈線文が施される。

17類土器（第84・85図 312～323）

口縁部を肥厚させて断面三角形の文様帯を作出し、貝殻文・凹線文・刺突文などが施される。また、口縁部がくの字状断面になるものもある。口縁部は波状縁と平口縁がみられ、胴部から底部にかけて緩やかにすぼまり、底部は平底になる。

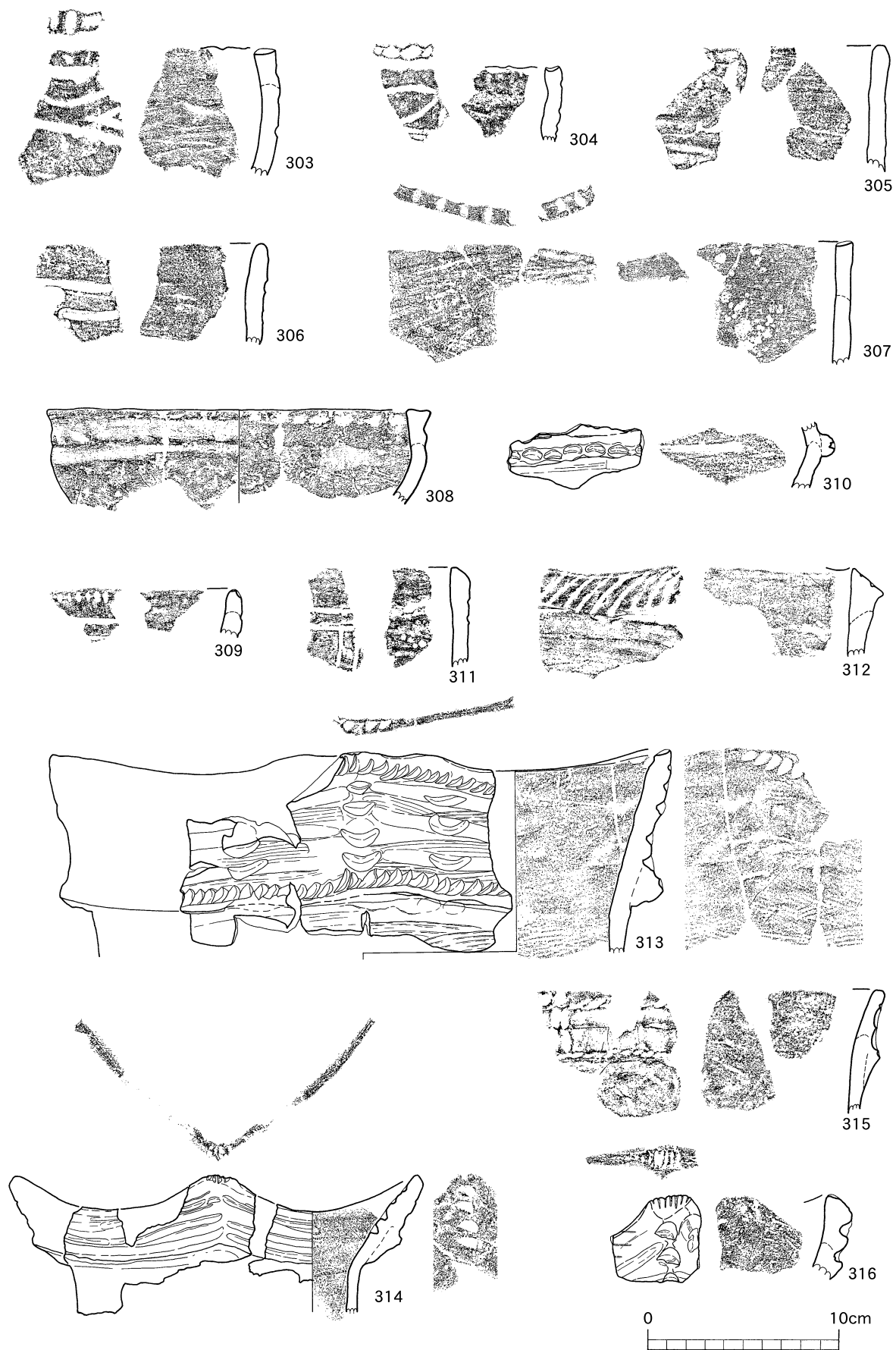
312は口縁部断面が三角形で厚く、貝殻腹縁で単一刺突文が施される。320は腹縁部による刺突が上下横位、斜位に連続して施文されている。313は貝殻条痕による器面調整ののち、口縁部文様帯に3条の浅い凹線文と上下に連続刺突文を施し、波状口縁頂部の表裏面と波状頂部口唇部にヘラ状工具で刺突文が施される。316も類似する施文である。314は口縁部文様帯に3条の凹線文を施し、波条口縁部頂部の口唇部に刻みが施される。318は2条の凹線文の上下に連続刺突文が施されているものである。315は凹線文の間にさらに貝殻刺突文を施文している。322・323は平口縁部で口縁部文様帯に工具による連続刺突文が施される。概して、平口縁には単純な口縁文様が多く、文様帯の断面形状が厚く幅が広がると、文様も複雑になる傾向がうかがえる。

18類土器（第85図 324～327）

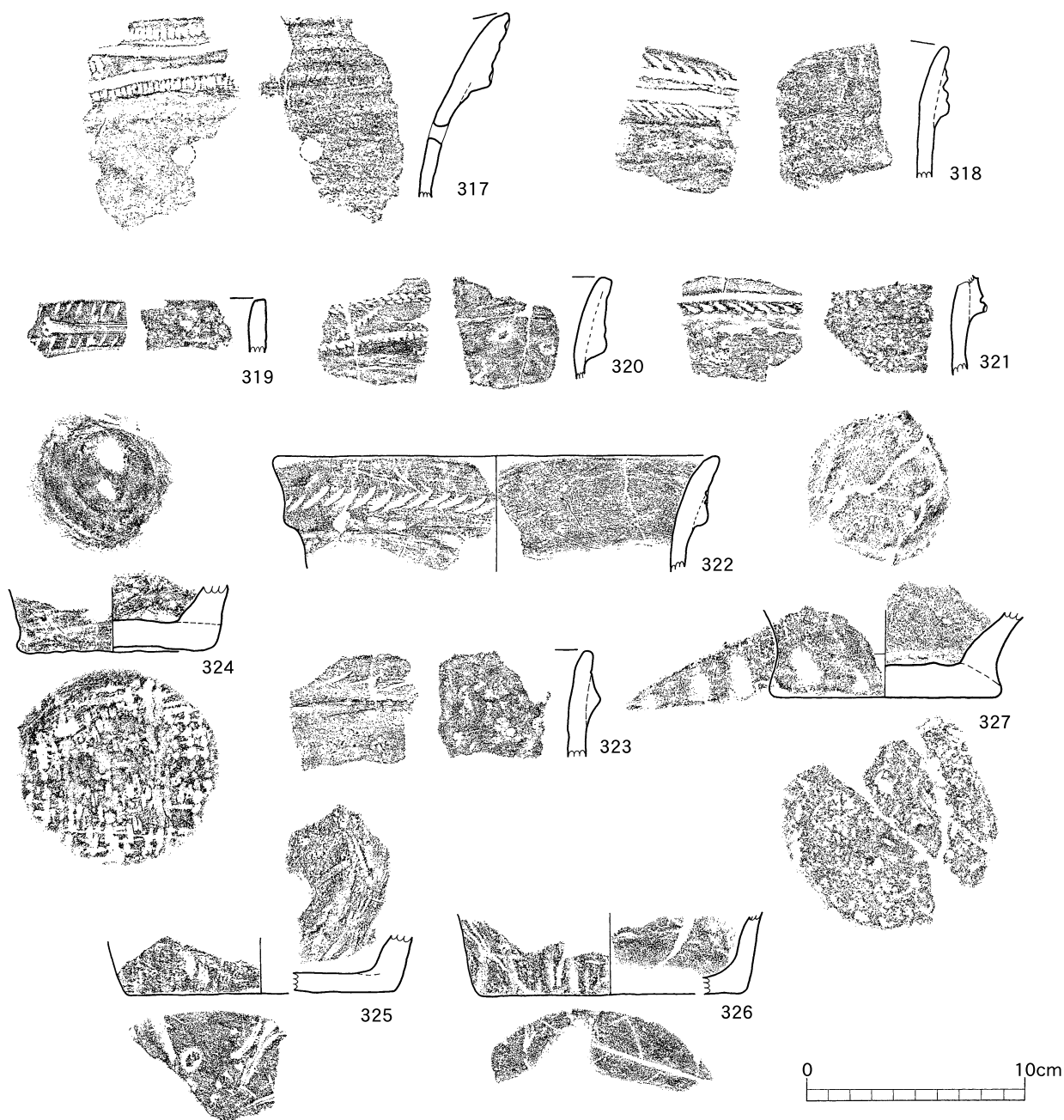
平底の底部で、胴部に向かって緩やかに開き、底部圧痕がみられる。324は明瞭ではないが網代痕の可能性もある。モジリ編み痕もみられ、RL方向とLR方向の撚りの圧痕がハ字状に対峙してみられる部分がある。また、底部に丸く煤が付着し、黄白色の付着物がみられる。325は植物質の



第83図 縄文時代後期遺物出土分布図



第84図 縄文時代の土器22 (14~17類)



第85図 縄文時代の土器23 (17・18類)

茎のような圧痕がみられる。326は木葉痕が底部にみられる。327は底部に浅い凹凸がみられ、鯨骨圧痕の可能性も考えられよう。外面は指頭痕がみられ、その上から工具により横ナデをしている。

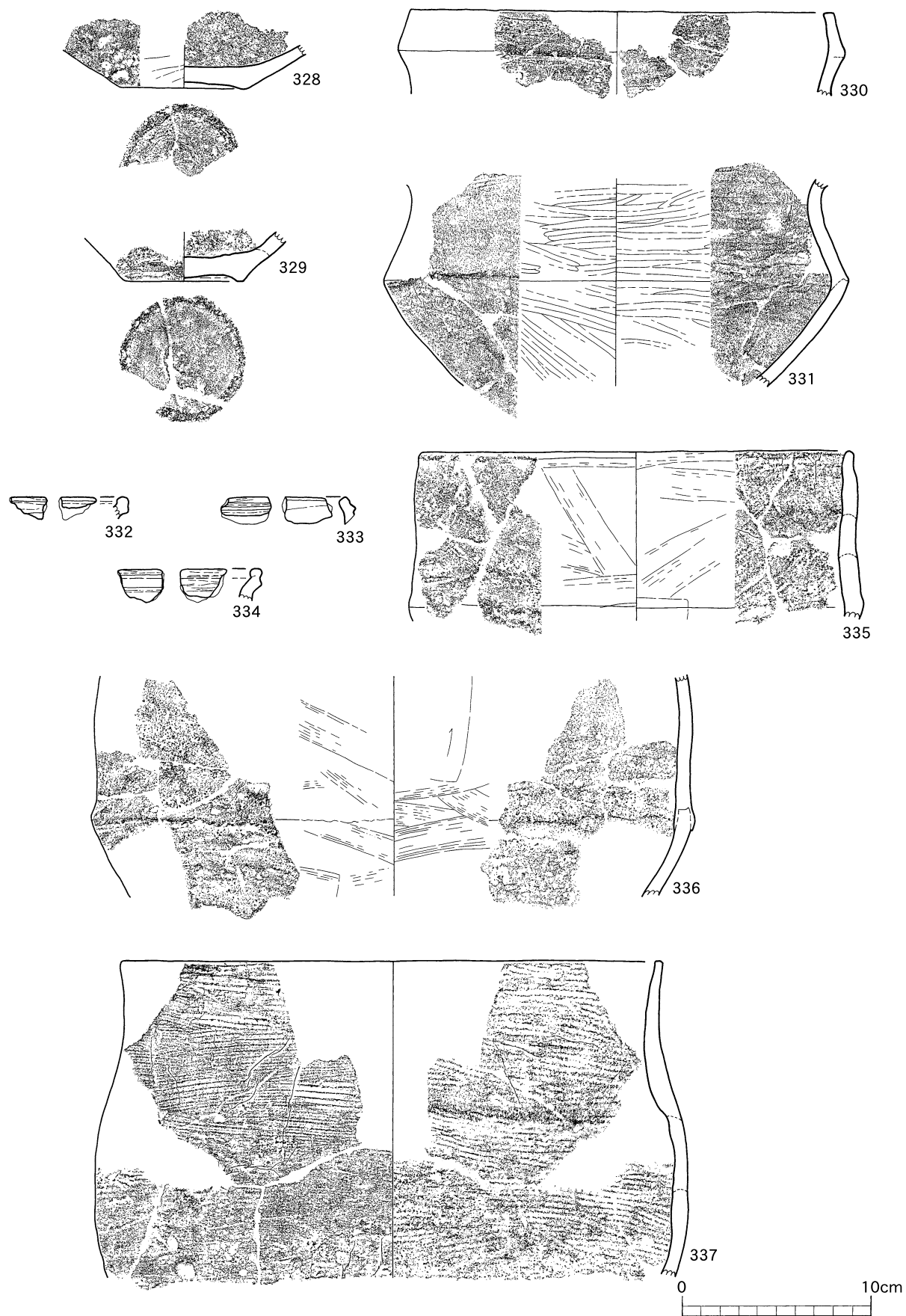
19類土器 (第87図 328～331)

口縁部文様帯はやや内傾して立ち上がり、頸部は弧状を描き肩部でくの字状に屈曲し、底部に向かって緩やかにすぼまる。底部はわずかに上げ底である。

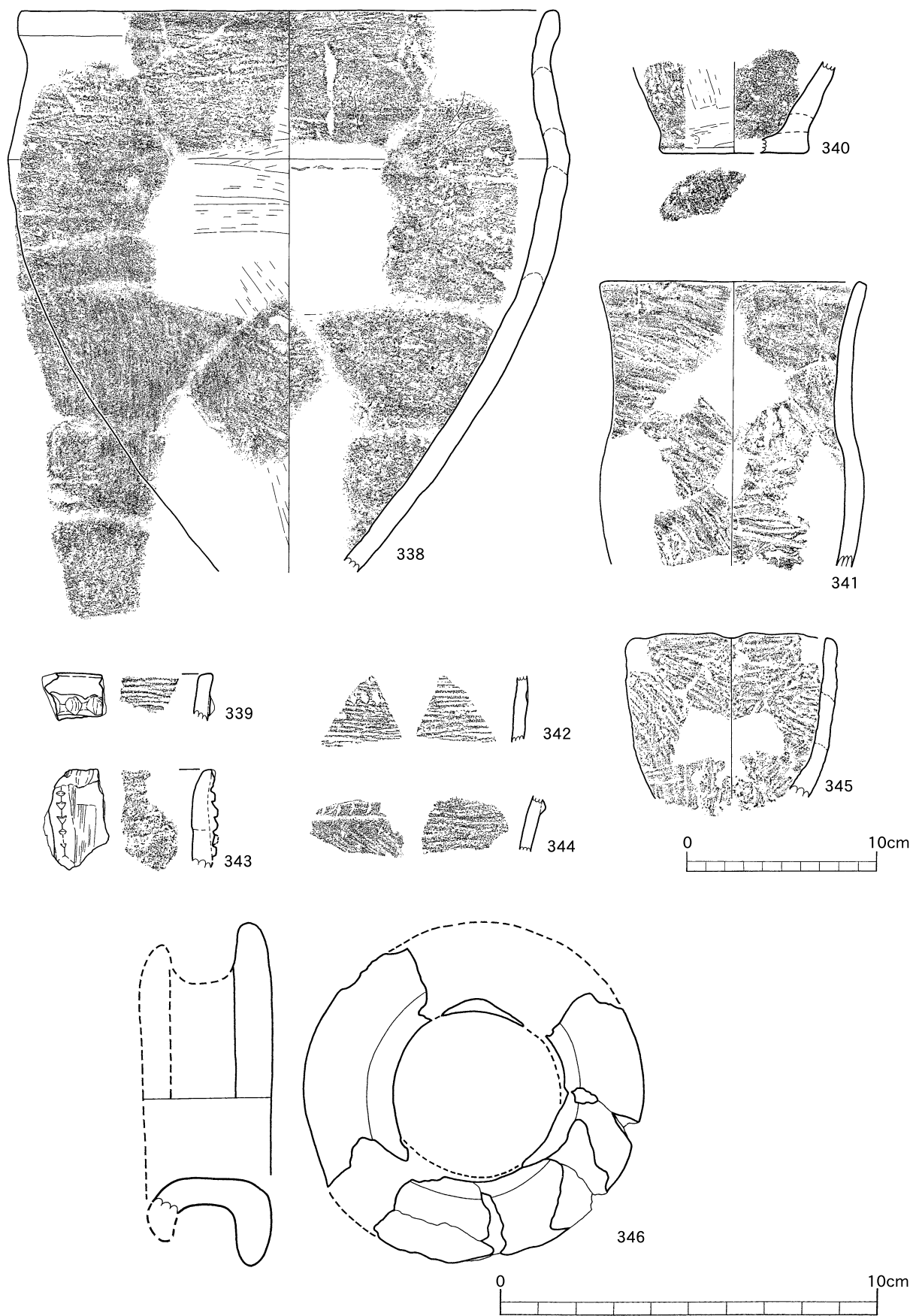
330は口縁が屈曲して内湾する。横方向のナデ調整がみられる。331は330と同一個体の可能性がある。328・329はほぼ同時期の土器の底部と思われる。



第86図 縄文時代晩期遺物出土分布図



第87図 縄文時代の土器24 (19～21類)



第88図 縄文時代の土器25 (22~24類・耳栓)

20類土器（第87図 332～334）

浅鉢の口縁部と思われる、口縁部文様帯に浅い凹線が施される。332・334は頸部が口縁部に向け弧状に開き口縁部が立ち上がるもの、333はくの字口縁をもつものと思われる。

21類土器（第87図 335～337）

肩部がごくゆるく屈曲し、器面は工具によるナデ、条痕がみられる。

336は肩部屈曲部で一部剥落しており、屈曲部までの胴下半を製作後、胴上部を接合したことがうかがえる資料である。337は内外面に条痕がみられ、内面の頸部が屈曲し真っすぐに立ち上がる器形と思われる。型式は不明であるが、器形や器面調整などからこの分類とした。

22類土器（第88図 338・340）

肩部がゆるく屈曲して内傾する。口縁部に無刻目突帯文が施される。

338は胴上部は横方向・胴下部は縦・斜め方向に調整痕がみられる。340は胎土・調整などから、338の底部の可能性がある。底はやや張り出している。

23類土器（第88図 339）

口縁部のみの出土で、全形は不明である。口縁部に刻目突帯が施され、内面は条痕がみられる。

24類土器（第88図 341～345）

その他の形態のものを一括した。341は頸部がしまり、口縁部が広がる。341・345は、条痕・胎土の特徴から5・6類に近縁のものである可能性もあるが、不明土器とした。342は貝殻条痕による器面調整後刺突文が施される。343は口縁部と縦方向に刻目突帯が貼付され、344は細い刻みの入った突帯が貼付される。

耳栓（第88図 346）

346はK-36区IV層から出土した耳栓である。最大外径9.1cm、内径約4.4cm、高さは不明である。文様は特にみられない。

第15表 縄文土器観察表10

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備 考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
84	303	14	南福寺式	口縁	K35	IIIb	732	ナデ	凹線文	橙7.5YR6/6	浅黄2.5Y7/4	○		白・黒		
	304	14	南福寺式	口縁	I36	IIIb	4803	ナデ	凹線文	橙5YR6/6	明赤褐5YR5/6	○	○	白△	白色粗砂	
	305	14	南福寺系	口縁	M35 L35	IIIb	7537 7536	工具による ナデ	浅い凹線文	にぶい橙7.5YR5/4	にぶい赤褐5YR5/4	△	△	白△	粗砂	
	306	14	南福寺系	口縁	L36	IIIb	7195	ヨコナデ	浅い凹線文	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	△	△	白・黒	粗砂	
	307	14	南福寺系	口縁	I35	IIIa IIIb	9362 9468	ケズリ	ナデ・口唇刻み	橙5YR6/6	赤褐5YR4/8	△	△	白・黒	粗砂	
	308	14	南福寺系	口縁	J35	IIIb	2616 3547	ハケナデ	ナデのちミガキ 凹線文	赤褐5YR4/6	にぶい赤褐5YR4/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	309	14	後期前半	口縁	M35	IIIb	7173	ナデ	ハケナデ・突帯文	橙7.5YR6/6	明赤褐5YR5/6	○	○	白・黒	白色粗砂	
	310	15	後期前半	口縁	J36	IIIb	4797	ヨコナデ	凹線文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	△	○	白	粗砂	
	311	16	指宿式	口縁	M35	IIIb	7202 7205	ヨコナデ	ナデ・凹線文	明黄褐10YR7/6	橙7.5YR7/6	○	○	白・黒 △	粗砂	
	312	17	松山式	口縁	M36	IIIb	7697	ナデ	口縁部貝殻腹縁	明赤褐5YR5/6	にぶい橙5YR6/4	○	○	白	白色粗砂△	
	313	17	市来式	口縁	L36	IIIb	3038 3040 3037	貝条	貝殻条痕文・凹線文 工具による刻み	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/6	○	○	白◎ 黒○	白色粗砂△	

第16表 縄文土器観察表11

挿 図	番 号	分 類	型式等	部位	出土区	層	取上 番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英 長石	角閃 輝石	火 山 ガラス	砂礫他	
84	314	17	市来式	口縁	L35	IIIa IIIb	359 1100 1114 5911	ナデ	凹線文・刺突文	橙5YR 6/6	橙5YR 6/6	○	○	白・黒	砂礫	
	315	17	市来式	口縁	L34	IIIb	6284 6283	ナデ	ナデ・凹線文・刻み	明褐7.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	○	△	白△	白色粗砂	
	316	17	市来式	口縁	L35	IIIa	7056	ナデ	凹線文・刺突文	にぶい黄橙10YR6/4	橙5YR6/6	○	△	白・黒		
85	317	17	市来式	口縁	L36	IIIa	1085	ナデ	凹線文・刺突文	にぶい赤褐2.5YR4/4	明赤褐2.5YR5/6	○	○	白	白色粗砂 砂礫	穿孔 有
	318	17	市来式	口縁	J35	IIIb	3087	ナデ	ナデ・凹線文	橙7.5YR6/6	明赤褐2.5YR5/6	△	○	白・黒	白色粗砂	
	319	17	市来式	口縁	K36	IIIb	6450	ナデ	凹線文・刺突文	橙7.5YR6/6	橙5YR6/6	△	○	白	砂礫	
	320	17	市来式	口縁	L34	IIIb	4939	ナデ	ナデ・刺突文	橙5YR7/6	橙5YR7/6	○	△	白		
	321	17	市来式	口縁	L35	IIIa	1093	ナデ	凹線文・刻目	明赤褐5YR5/6	にぶい黄褐10YR5/3	○	◎	白・黒	粗砂	
	322	17	市来式	口縁	L36	IIIa IIIb	2977 1075 1088	ナデ	ナデ	明赤褐5YR5/8	橙2.5YR6/8	○	○	白・黒	白色粗砂	
	323	17	市来式	口縁	J35	IIIb	5664	ナデ 指圧痕	ナデ・刻目	にぶい橙10YR6/4	橙7.5YR6/6	○	○	白・黒	白色粒	
	324	18	後期前半	底	M36	IIIb	7691 7689	ナデ	ナデ	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	○	○	白・黒	白色粗砂◎ 軽石	
	325	18	後期前半	底	M36	IIIb	7481	ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒	白色粗砂△	
	326	18	後期前半	底	M36	IIIb	7480 7588	ナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	○	○	白・黒	白色粗砂	
87	327	18	後期前半	底	M36	IIIb	7690 7688 7450	ナデ	ナデ	橙5YR6/6	明赤褐5YR5/6	○	○	白	白色粗砂 砂礫◎	
	328	19	後期末	底	L36	IIIb	700 699	ナデ ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	オリーブ黒5Y3/1	にぶい黄橙10YR7/4	○	○	白	白・赤色粗砂 ◎	
	329	19	後期末	底	I35	IIIa IIIb	815 2395 797	ナデ	ナデ	明黄褐10YR6/6	明赤褐5YR5/6	○	△	白・黒	軽石 白色粗砂	
	330	19	後期末	口縁	K35	IIIb	2080 2082	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	○	△	白	白・赤色粗砂	
	331	19	後期末	胴	I36 J36 K36	IIIa IIIb	969 973 2143 2188 3436 3918	ヘラミガ キ	ヘラミガキ	橙7.5YR 6/6	橙2.5YR6/6	○	○	白・黒	白色粗砂	
	332	20	後期末	口縁	I36	IIIb	5381	ヨコミガ キ	ナデ・浅い凹線	褐7.5YR4/4	灰黄褐10YR4/2	○	○			
	333	20	後期末	口縁	J36	IIIb	1637	ナデのち ミガキ 沈線	ナデのちミガキ 沈線	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄2.5Y6/4	○		白・黒		
	334	20	後期末	口縁	I36	IIIb	1490	ナデのち ミガキ	ナデのちミガキ 凹線文	黄褐2.5Y5/4	にぶい橙10YR6/4	○	○	黒	白色粗砂	
	335	21	後期末	口～頸	L35	IIIb	6335 6351 1222 4942	工具によ るナデ	工具によるナデ	明赤褐5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	○	○	白	白色粗砂 軽石	
	336	21	後期末	胴	J36	IIIa IIIb	209 575 1682 2704 3229 4823	ハケナデ	ハケナデ	黄橙10YR8/6	淡黄2.5Y4/6	◎	○	白・黒 △	粗砂◎	
88	337	21	晩期	口～胴	K34	IIIa IIIb	5220 5221 5222 5224	条痕	条痕	にぶい黄2.5Y6/3	黄褐2.5Y5/3	○	○	白・黒	白色粗砂◎ 金雲母△	
	338	22	無刻目突 帯文	口～胴	K35 K36 L35 L36	IIIa IIIb	303 408 410 447 1269	工具によ るナデ	工具によるナデ	橙5YR6/8	明赤褐5YR5/6	○	◎	白・黒	粗砂◎	
	339	23	晩期	口縁	K36	IIIb	4502	貝殻条痕	ナデ	褐7.5YR4/6	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白△	白・赤色粗砂	
	340	22	無刻目突 帯文	底	K35	IIIa	741	ナデ	ハケナデ	橙7.5YR6/6	明赤褐2.5YR5/6	○	◎	白	白色粗砂	
	341	24	不明	口～胴	J36 K36	IIIb IV	9162 1692 4785	ナデ	工具によるナデ	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白・黒	白色粗砂	
	342	24	不明	—	K34	IIIa	88	ヨコ貝条	貝殻条痕・刺突文	赤褐2.5YR4/6	にぶい赤褐5YR4/4	○	○	白	白色粗砂	
	343	24	不明	口縁	—	表	—	ナデ	刻目突帯	黄橙10YR8/8	橙7.5YR7/6	○	△	黒	黒曜石 白・赤色粗砂	
	344	24	不明	胴	M34	IIIa	7132	ヨコ貝条	粗いナナメ貝条	暗灰黄2.5Y5/2	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	黒	白色粗砂	
	345	24	不明	口縁	K36	—	5079 5042	条痕によ るナデ	条痕によるナデ	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白・赤色粗砂	
	346	—	耳栓	—	K36	IV	9133	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	○	○	白△	白色粗砂 茶色粒	

4. 縄文時代の石器

先述の通り、Ⅲb層などは早期末～晩期の時期にわたる土器が出土しており、時期毎の石器組成を検討することは困難であるため、ここではⅢ・Ⅳ層出土の石器について一括して述べる。また、Ⅲ・Ⅳ層出土ではあるが、旧石器時代に属する可能性がある石器も少数含まれている。各石材の詳細については、後述する。

石鏃・石鏃未製品（第90・91図 347～378）

石鏃は欠損品や2点の未製品を含め、計189点出土しており、32点図化した。形態により5つに分類した。

1類：基部は直線的で全体の形は正三角形のもの

2類：基部の挟りが浅く、全体の形が正三角形または二等辺三角形になるもの

3類：基部の挟りが深く、逆刺が丸いもしくは方形で、全体の形は正三角形もしくは二等辺三角形になるもの

4類：基部の挟りが深く逆刺が鋭いもので、全体の形は正三角形または二等辺三角形になるもの

5類：側辺がやや外湾し、最大幅が胴部中～下位にあり、基部は浅いか直線のもの

3類は、逆刺が丸く全形が正三角形のもの（354・362・363など）、逆刺が方形で全形が正三角形のもの（364・365など）、逆刺が方形で全形が二等辺三角形のもの（366・367）がある。3類は73点、4類は16点、2類は32点、1類は11点、5類は11点出土している。360・366は中央部の膨らんだ部分にやや磨滅がみられ、着柄の可能性も考えられる。368・369・370・371は3類に含めたが、特徴のある形態をしている。371は胴部やや上位の幅が広がっており、5類にも類似する。また369・371は側縁が基部付近で外反している。また371は胴部下位の側縁に挟りが入っている。

石槍・石槍未製品（第91図 379）

石槍1点、石槍未製品が2点出土している。379は安山岩製のものである。

石匙（第91・93・94図 380～391）

石匙は刃部やつまみの形態により4つに分類した。26点出土しており、12点図化した。

1類：刃部が縦方向に作り出されるもの

2類：刃部が横方向に作り出され、つまみが斜めに作り出されるもの

3類：刃部が横方向に作り出され、つまみが真ん中に作り出されるもの

4類：刃部が横方向に上下で作り出されるもの

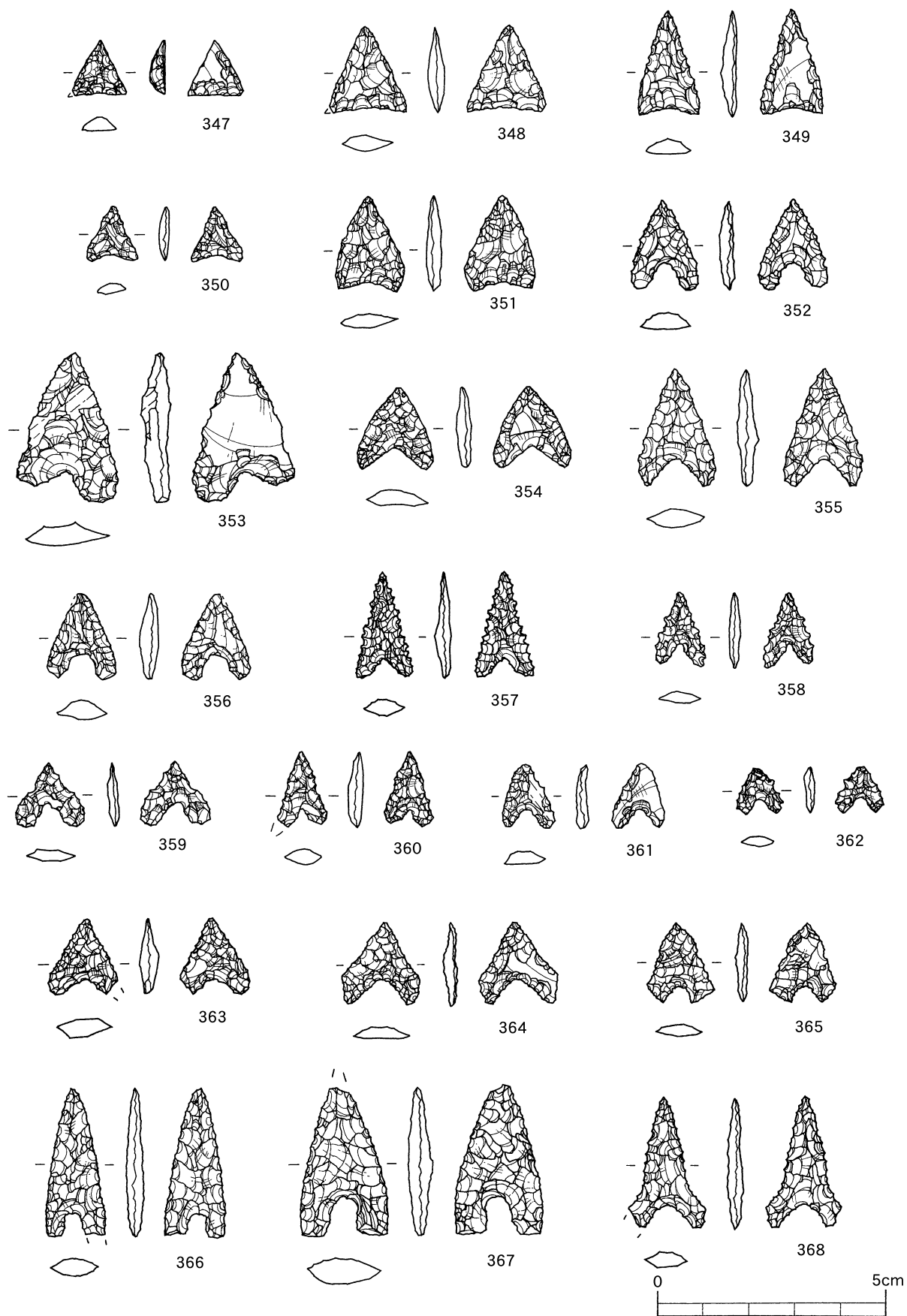
1類は5点、2類は5点、3類は15点、4類は1点出土している。386は日東産、387は腰岳産と思われる黒曜石を使用している。386・387は、横方向の刃部の片側が尖りもう一方の片側が丸く形成され、やや斜めのつまみが作り出されている。390は一部自然面を残す剥片を利用し、押圧剥離により刃部を形成している。つまみは大きく作られる。391は4類で、素材剥片の上下部に押圧剥離により刃部を作り出している。

楔形石器（第94図 392・393）

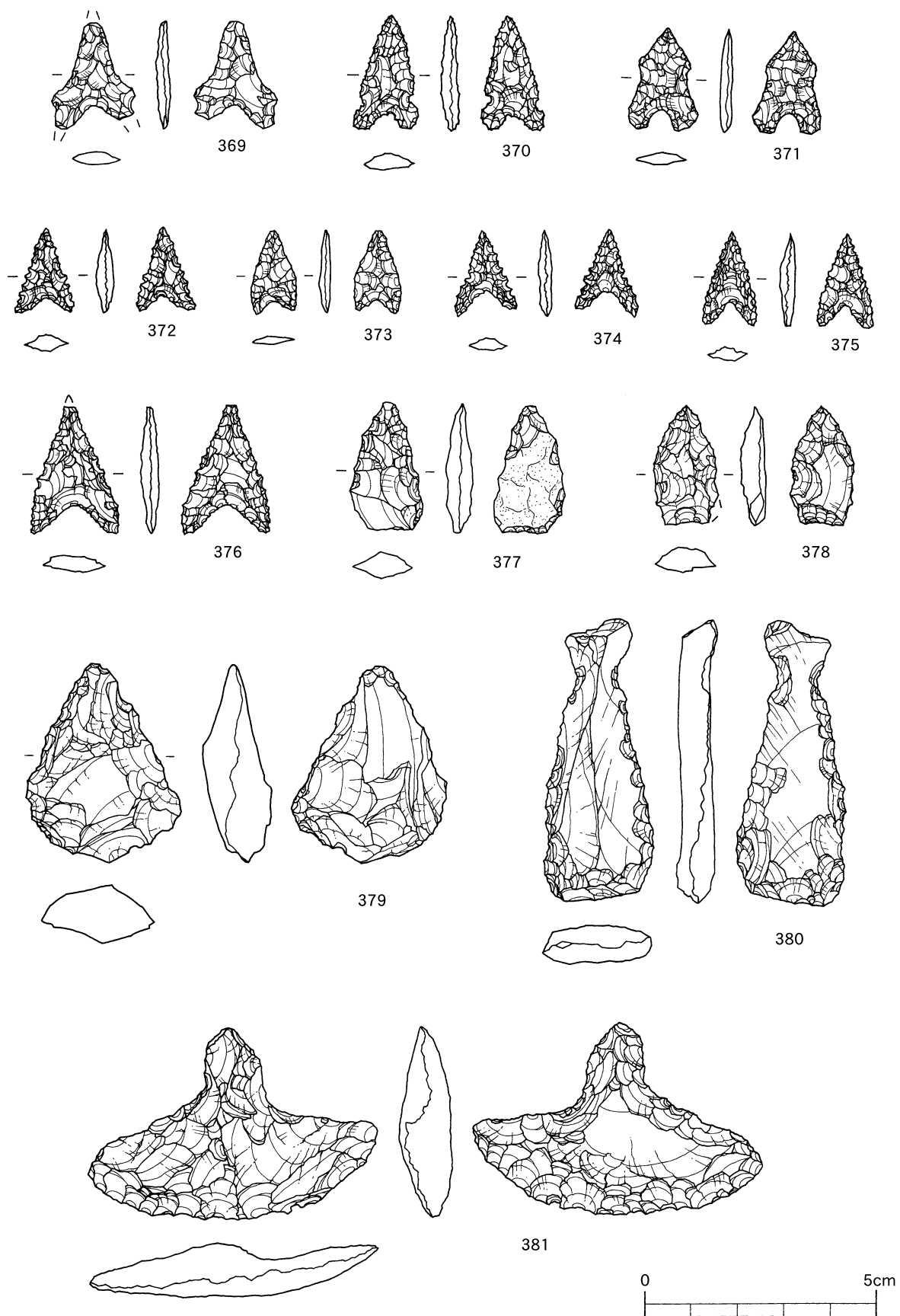
7点出土しており、内2点図化した。392はチャート製で、表裏面共に上下からの剥離面がみられる。393は鹿児島産の安山岩と思われるものである。上下面からの剥離、上面は裏面にも剥離面がみられる。



第89図 縄文時代石鏃・石槍出土分布図



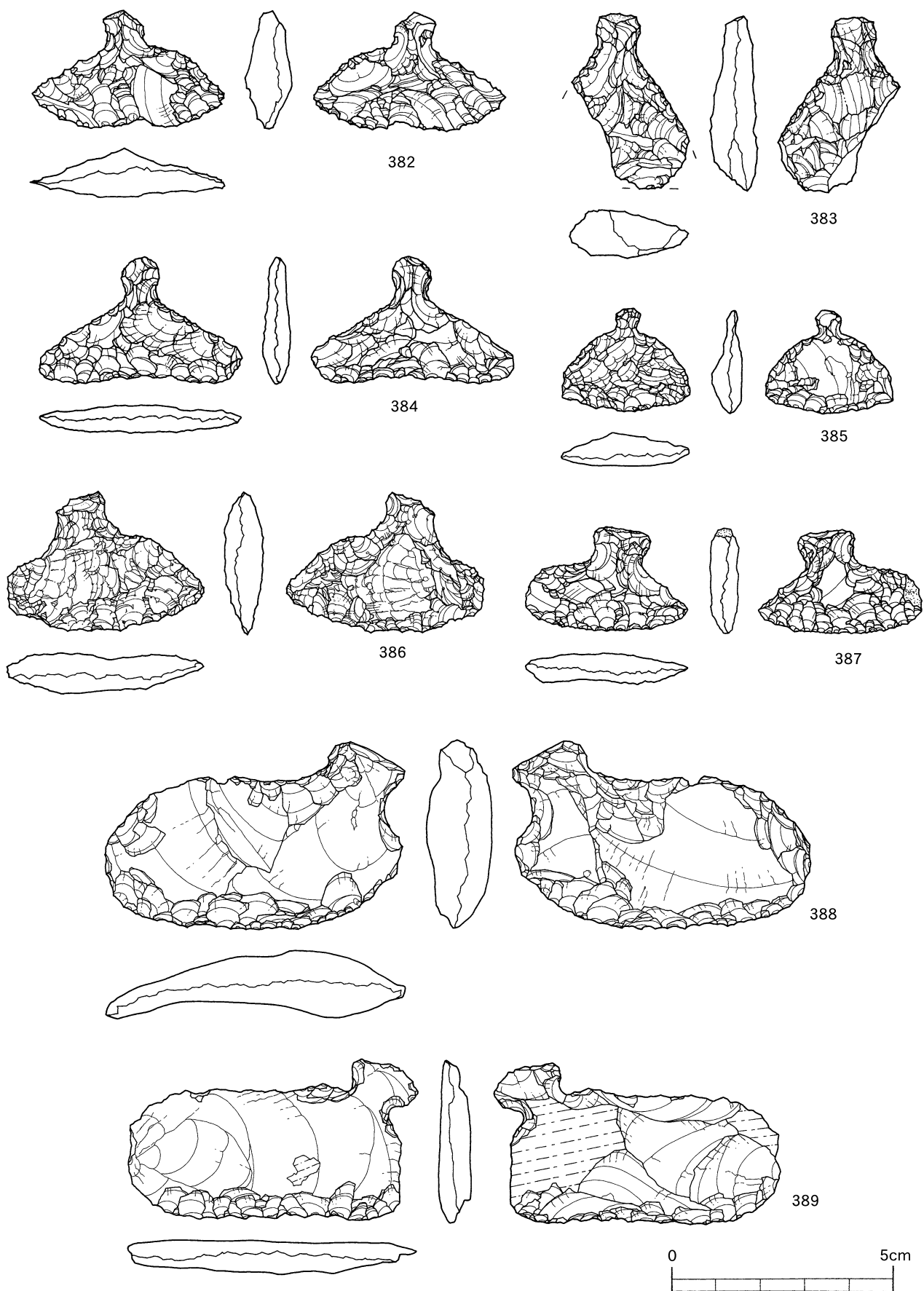
第90図 石鏃



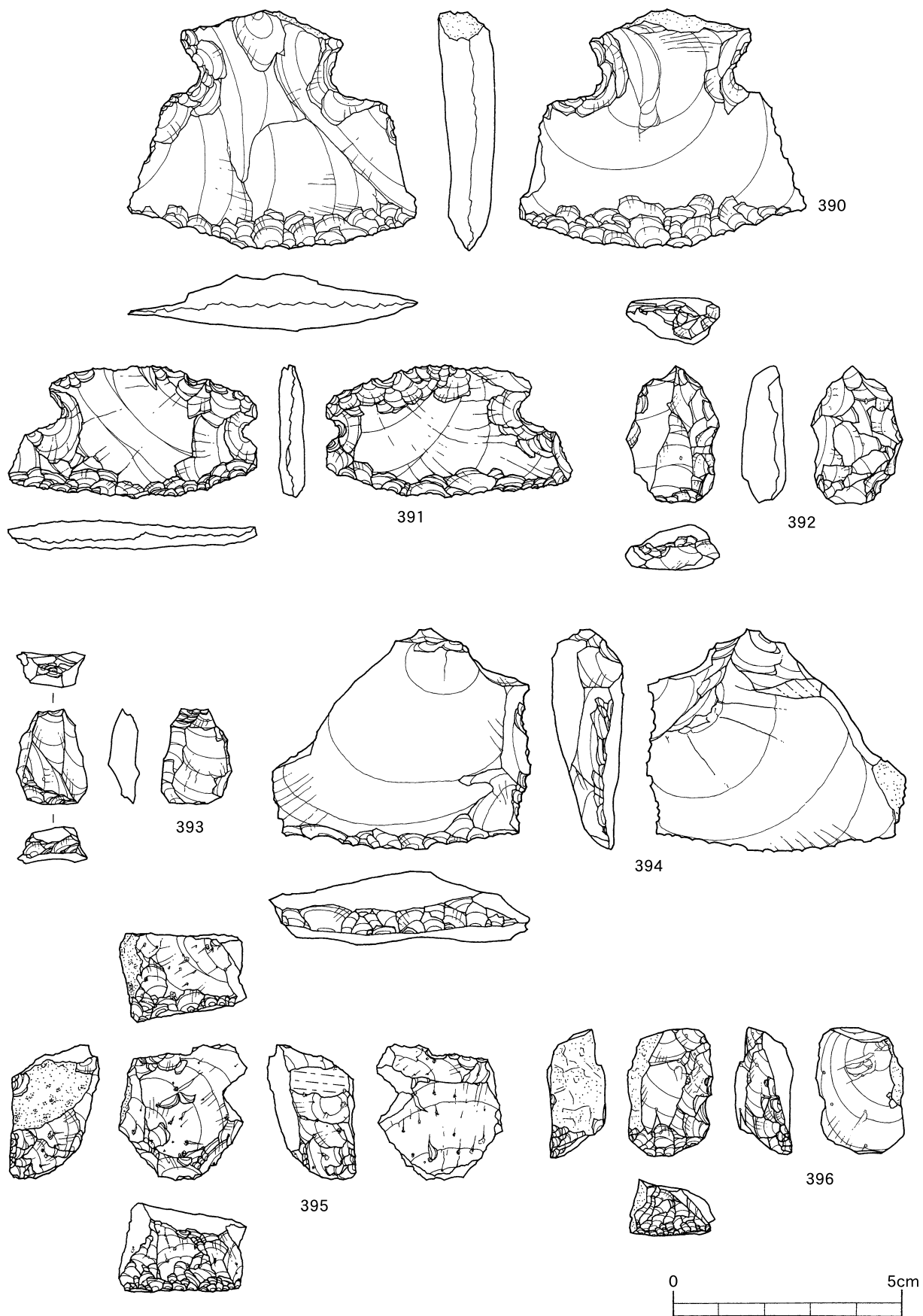
第91図 石鏃・石槍・石匙



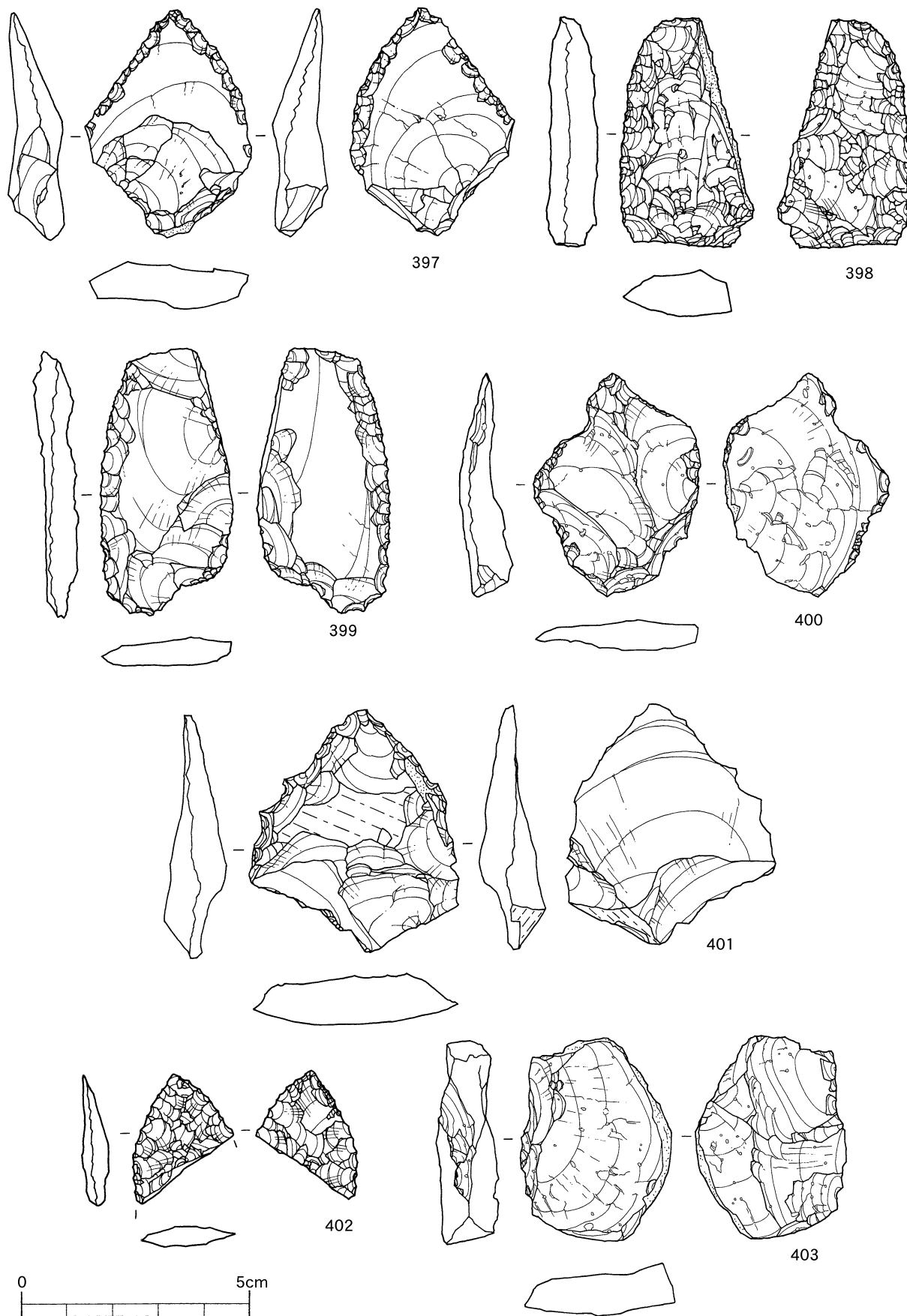
第92図 石匙・楔形石器・スクレイパー・石錐・異形石器・二次加工剥片出土分布図



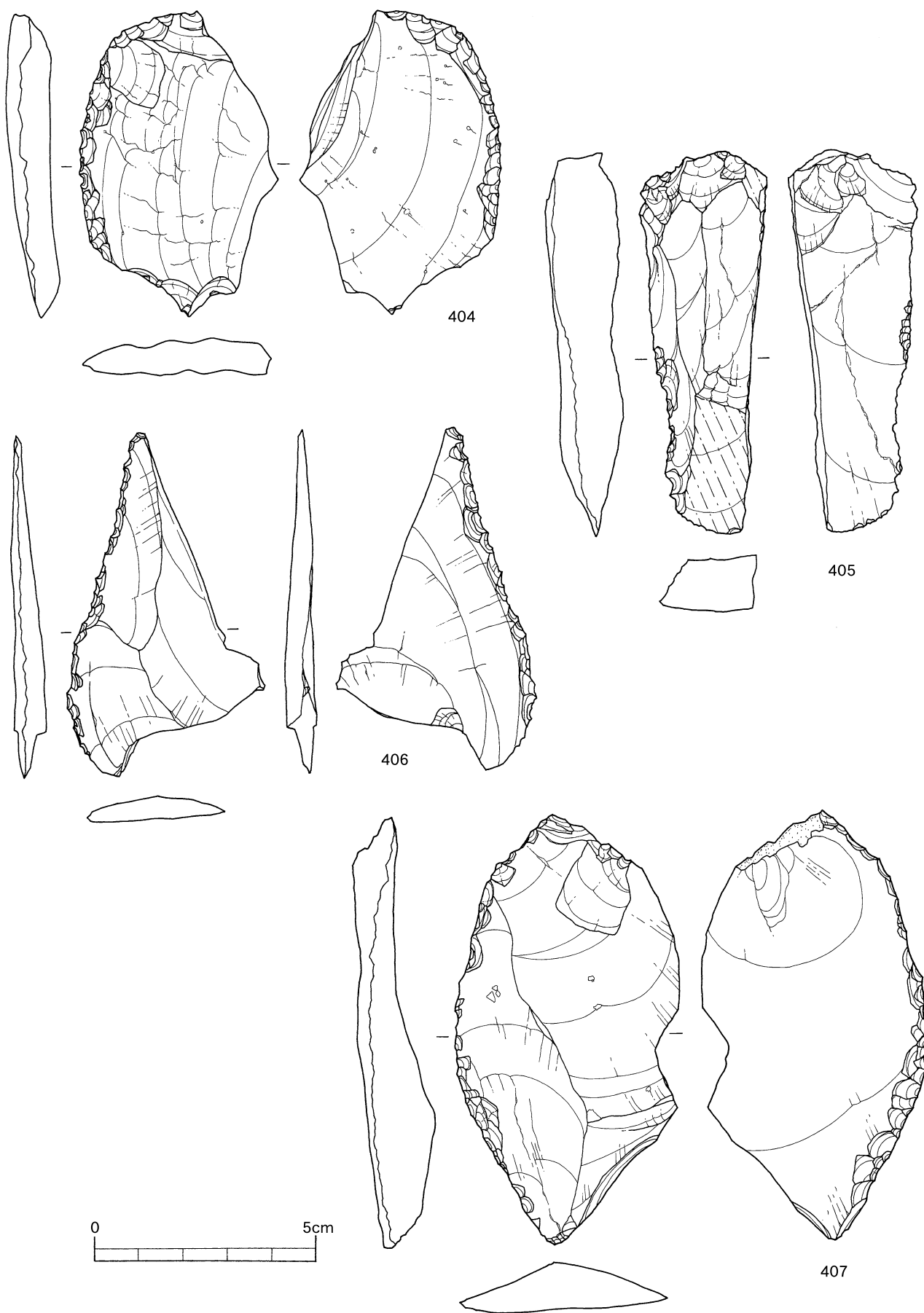
第93图 石匙



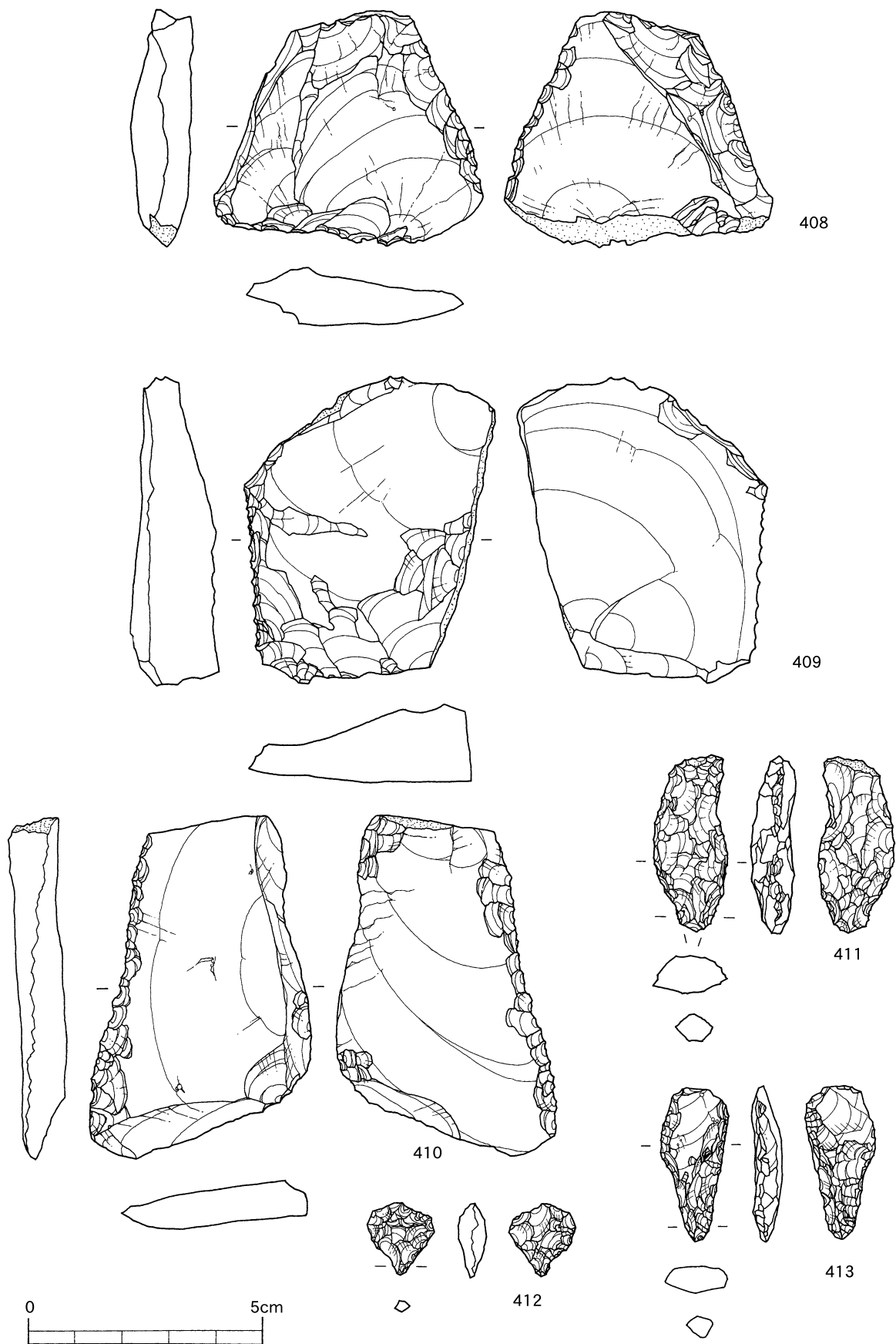
第94図 石匙・楔形石器・スクレイパー



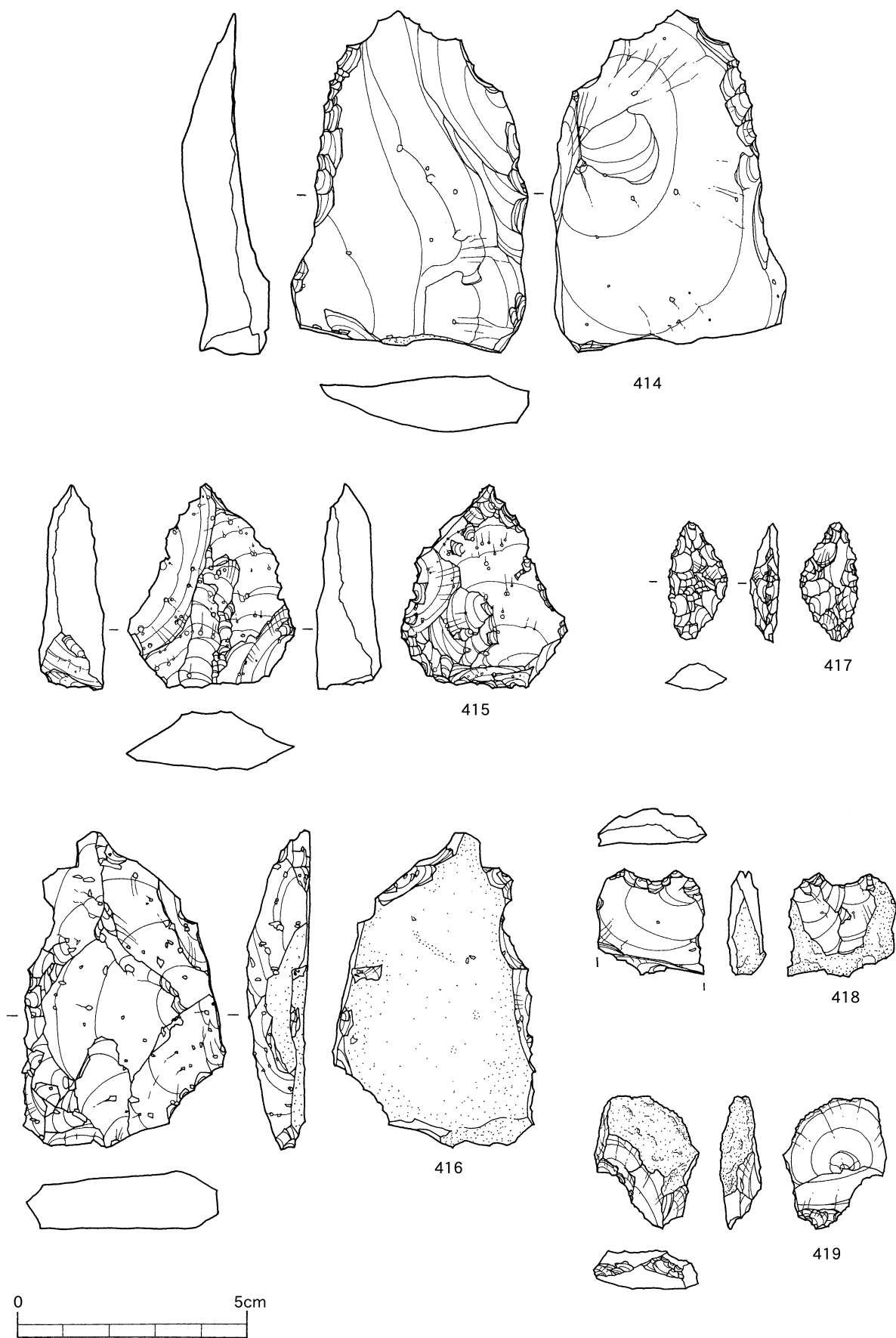
第95図 スクレイパー



第96図 スクレイパー



第97図 スクレイパー・石錐



第98図 スクレイパー・異形石器・二次加工剥片

スクレイパー（第94～98図 394～410, 414～416）

各種の石材が使用されているが、刃部の角度により下記の二種に分けられる。

1 類：剥片の端部に急角度の剥離を施し、刃部としたもの。いわゆるエンド・スクレイパー。

2 類：剥片の側縁に連続した剥離を施し、刃部としたもの。いわゆるサイド・スクレイパー。

1 類は3点図化した。395の上面端部には押圧剥離痕がみられる。396は剥片を利用し、急角度の刃部を作出している。

2 類は95点出土しており、14点図化した。両側から押圧剥離により刃部を作出するものと、片側からのみ刃部を作出するものがある。397・401・402は先端部が尖るよう両側縁に剥離が施され、402は丁寧に剥離されており尖頭器の可能性もある。398・399・404・405・406・407・408・410は素材剥片を利用し、一方の側縁に両側から押圧剥離が施され、刃部を作り出しているものである。404は剥離により下部に尖りが作り出され、ドリルのように使用された可能性がある。また409は片側側縁に片側から押圧剥離が施されている。

石錐（第97図 411～413）

1 類：先端部が短く、基部にも加工が施され形が整えられたもの（411・412）

2 類：先端部が長く、基部にも加工が施されたもの（413）

3 類：剥片を利用して先端部が作り出され、基部には加工が施されないもの

1 類が6点、2 類が3点、3 類が2点出土している。411は中央部に厚みをもち、先端が欠損している。

異形石器（第98図 417）

縄文晩期の異形石器と思われるものが417である。先端が欠損しており、石錐の可能性もある。針尾産の黒曜石と思われるものである。

二次加工のある石器（第98図 418・419）

2点のみ図化した。418は上牛鼻産の剥片を利用し、ノッチ状の加工を施す。419も剥片を利用し、表面と裏面2ヶ所にノッチ状の加工がみられる。

石核（第100～104図 420～439）

1 類：礫面上で複数回の打点転移を行いながら剥離を行う石核（420～427）

2 類：単一方向から剥離を行う石核

a 素材剥片を利用した石核（429）

b 作出した平坦な面から剥離を行う石核（428・430～435）

c 円礫の自然面から剥離を行う石核（436・437）

3 類：素材の周縁部から求心的な剥離を行う石核（438）

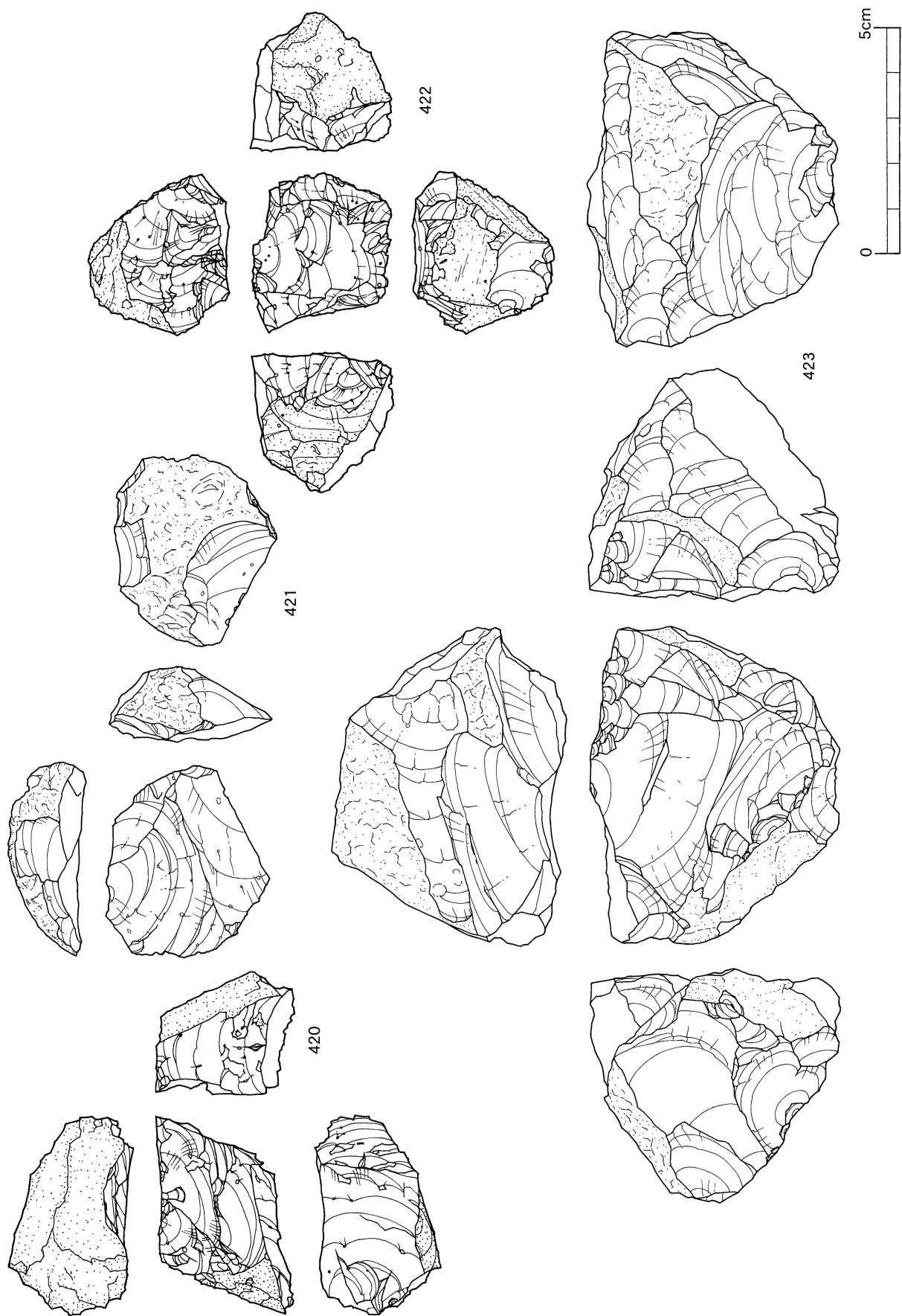
4 類：打面と作業面を交互に変えながら剥離を行う石核（439）

5 類：素材の上下面を打面とし、両側から剥離を行う石核

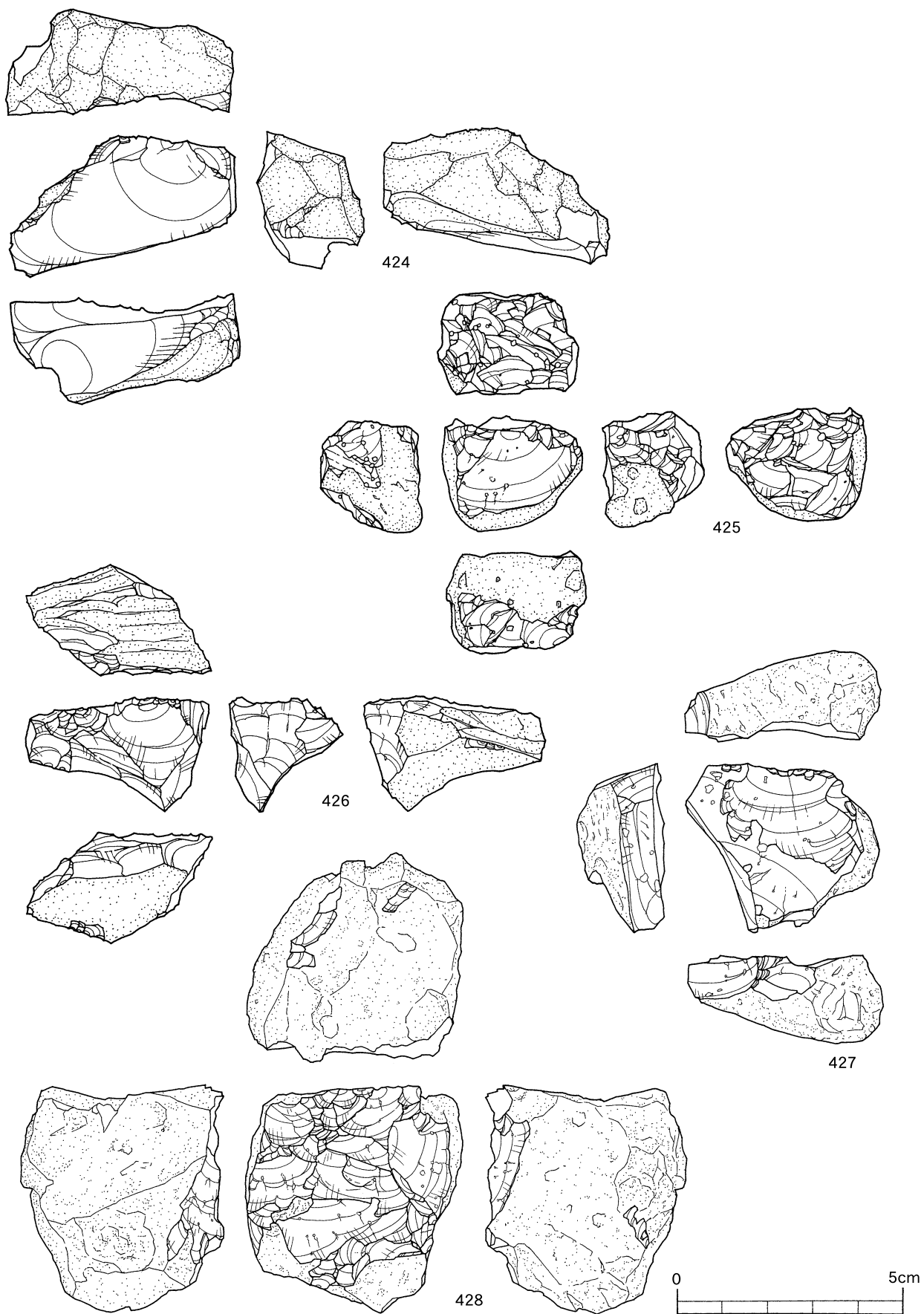
1 類39点、2 類33点、3 類6点、4 類1点、5 類1点がみられる。なかでも2 c 類が多くみられ、21点確認できた。これらは径3、4 cm程の小円礫の自然面を打面とし、素材剥片を作出した石核である。これらの小円礫は丸く磨滅しており、川などで採集されたと考えられる。437などがそれにあたる。また、そこから得られる素材剥片はさほど大きくないものであり、恐らく石鏃などの小型



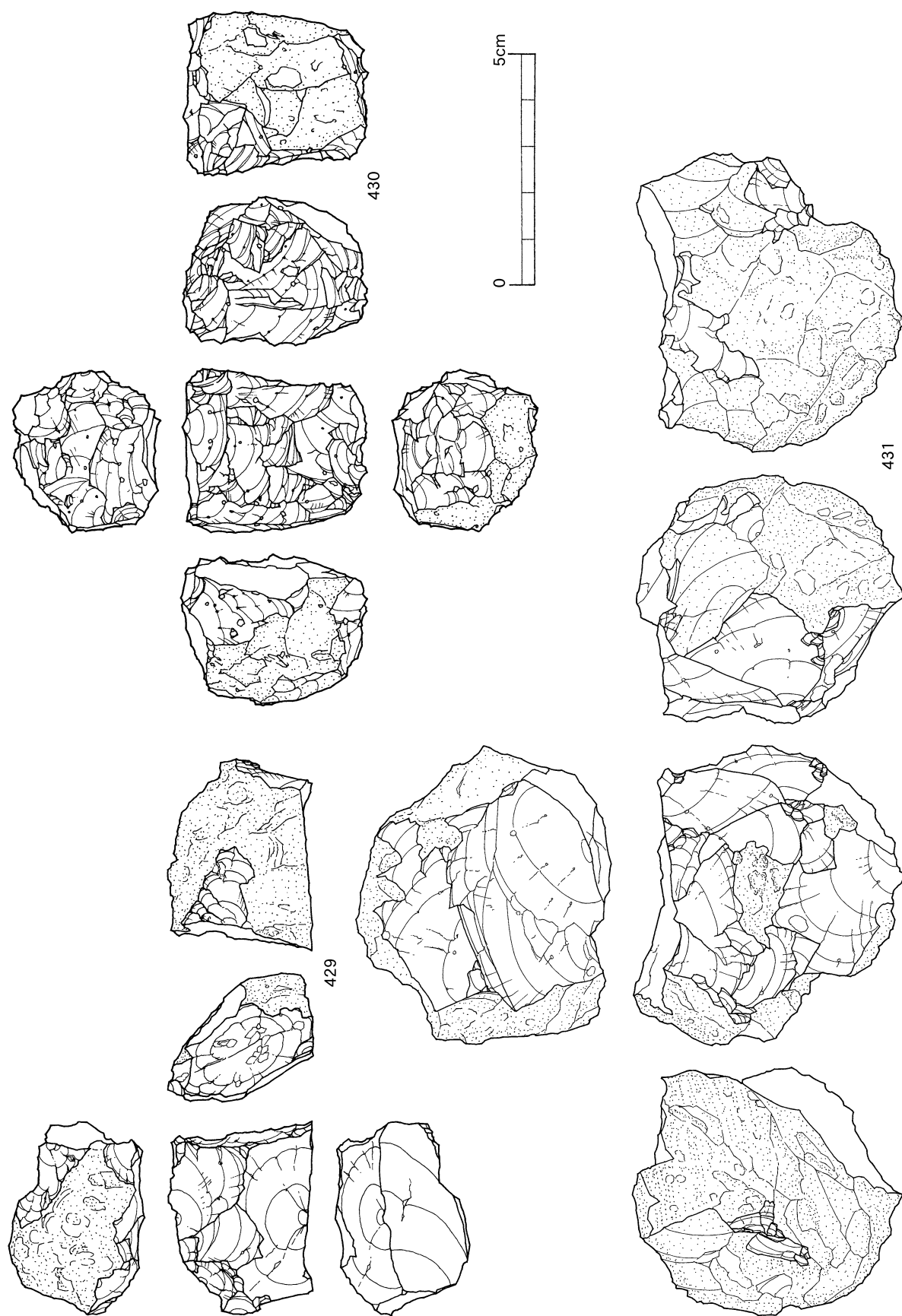
第99図 縄文時代石核出土分布図



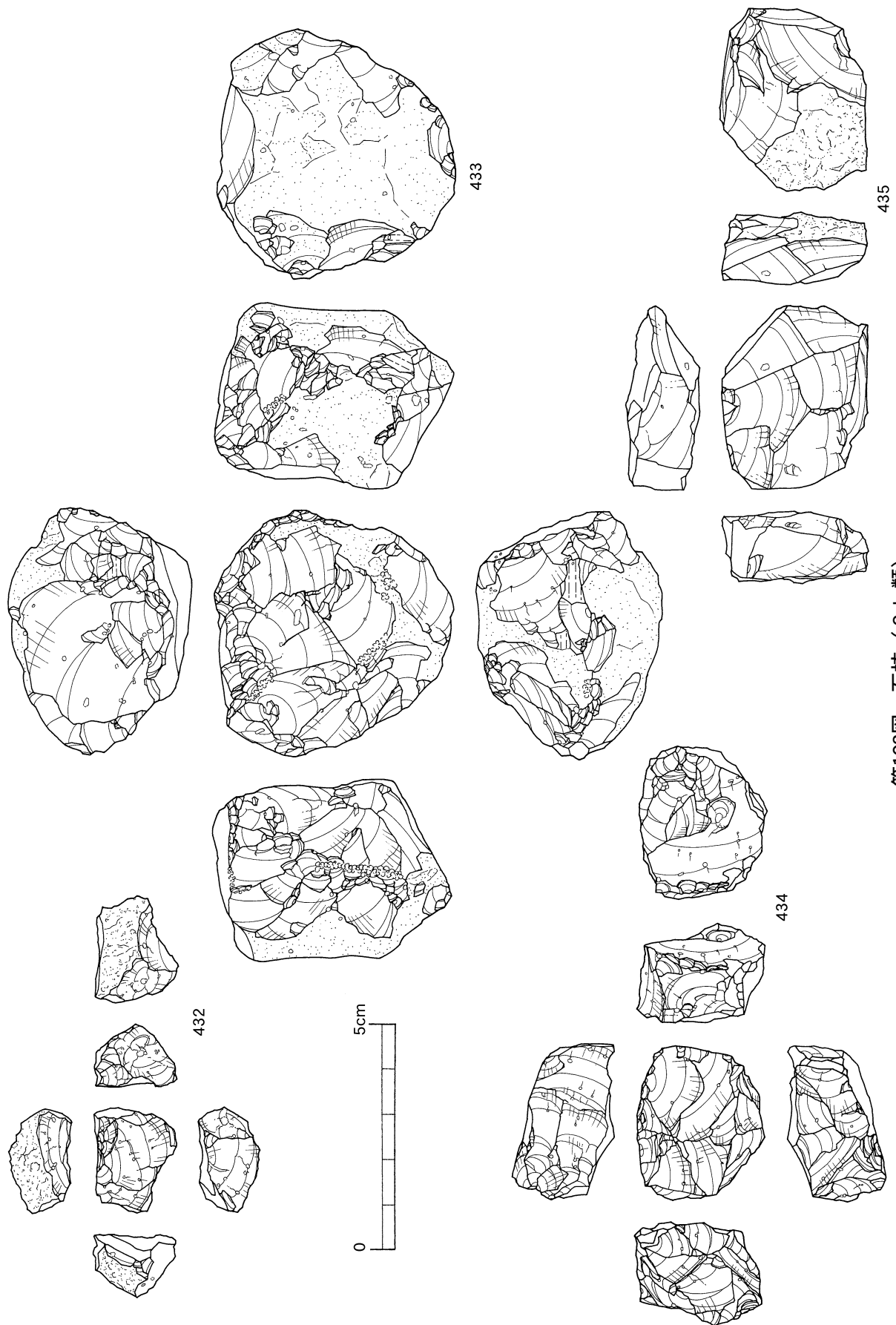
第100図 石核 (1類)



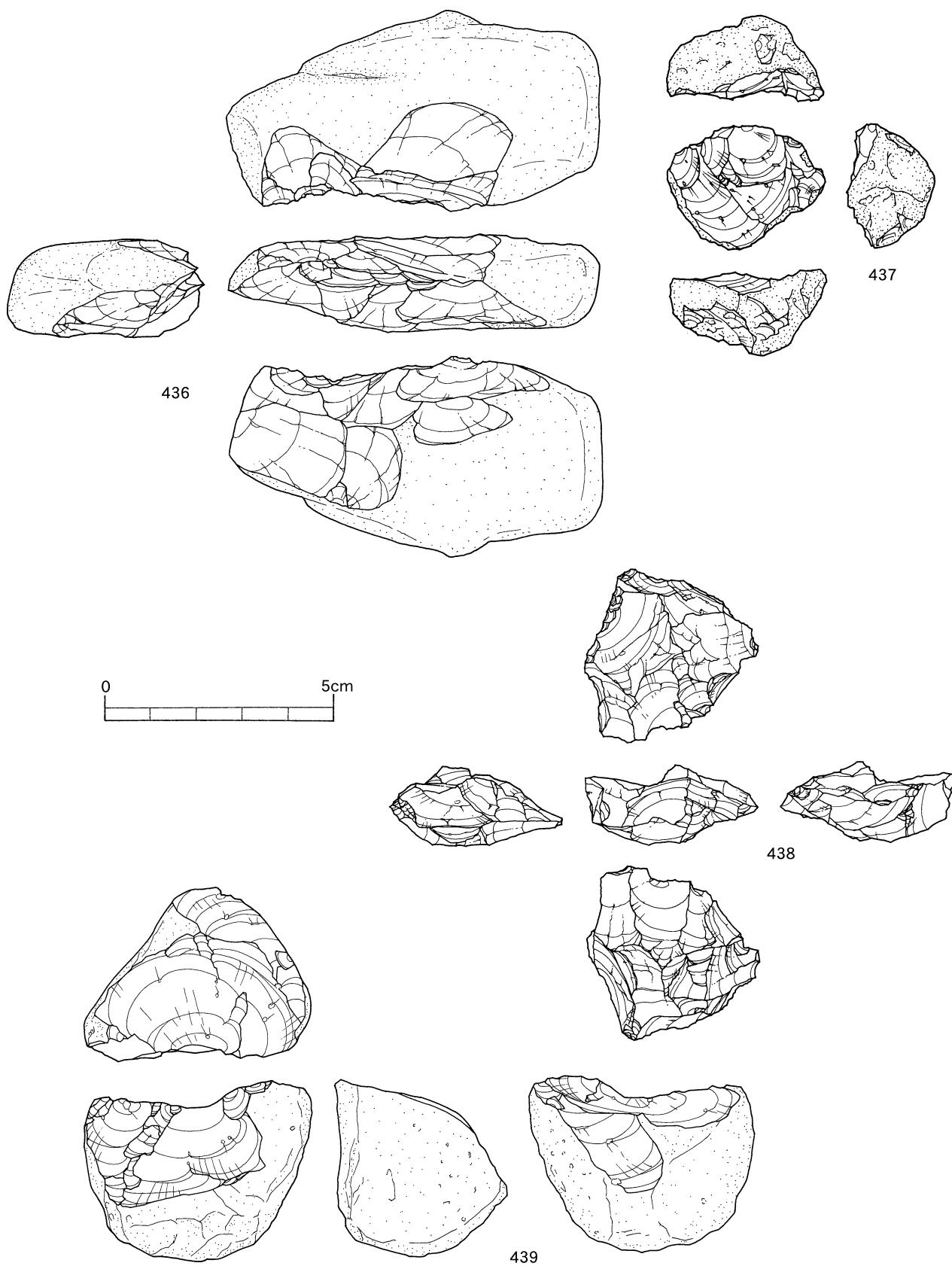
第101図 石核（1・2b類）



第102図 石核 (2 a・2 b類)



第103図 石核 (2 b 類)



第104図 石核 (2 c · 3 · 4 類)



第105図 垂飾品・擦切石器・石斧・礫器出土分布図

の石器の素材となったと考えられる。一方、長さ約6cmの針尾産黒曜石を始めとする大型の原核もみられ、これらは山で採集されたものと思われる。

420・426・427は1類のなかでも自然面を打面としている。427は姫島産の黒曜石と思われるものである。429は素材剥片を利用し、自然面を打面として剥離を行う石核である。428は2b類としたが、自然面の平坦な面を打面として利用している。431は西北九州系の黒色安山岩と思われる。433は、石核の稜にあたる部分に細かい剥離痕がみられる。二次的に使用していた可能性がある。436は円礫を利用し、打面を作り出しながら単一方向から剥離を行っている。

垂飾品（第106図 440～442）

440は蛇紋岩製で丁寧に研磨され、上部に線刻が巡り、表面にも沈線が施される。下部はゆるくカーブをもって研磨され、稜がみられる。垂飾品とした。442は両面が薄く磨かれたもので、垂飾品などの未製品の可能性がある。凝灰岩製である。441は上位中央に穿孔がみられ、裏面にも穿孔途中の痕跡が2ヶ所みられる。研磨痕も確認できる。

擦切石器（第106図 443）

1点出土している。砂岩製で研磨により刃部が作り出される。刃部中央部にくぼんだ使用痕がみられる。

礫器（第107図 444～448）

安山岩製6点、頁岩製6点、砂岩製1点が出土している。445、446は円礫の一部分に刃部を作り出している。444は一側縁に敲打痕、別の側縁に刃部、そして側面の一部分には磨面がみられる。447は斧型未製品の可能性もある。

石斧（第108図 449～454）

磨製石斧が5点、局部磨製石斧が4点、打製石斧が2点出土している。452は硬質砂岩製の磨製石斧である。453は硬質砂岩を素材とし、刃部を鋭く研ぎ直している。454は磨滅しており使用痕などは明瞭に確認できない。449は敲打痕の残る石斧の未製品である。製作途中に欠損したと思われる資料である。

砥石（第108図 456）

456は安山岩製の砥石である。擦痕はあまり明瞭ではないが全面磨られており、丸くゆるやかなくぼみが所々にみられる。

磨石・敲石、ハンマーストーン（第108・第110～112図 455・457～475）

20点図化した。形態や使用状況より、大きく以下のように5つに分類した。

1類：扁平な円・楕円礫で、表裏面に平坦な磨面がみられるもの

a 磨面と敲打痕があるもの b 磨面のみで敲打痕は確認できないもの

2類：円・楕円礫で、磨面が両面もしくは片面にみられるもの

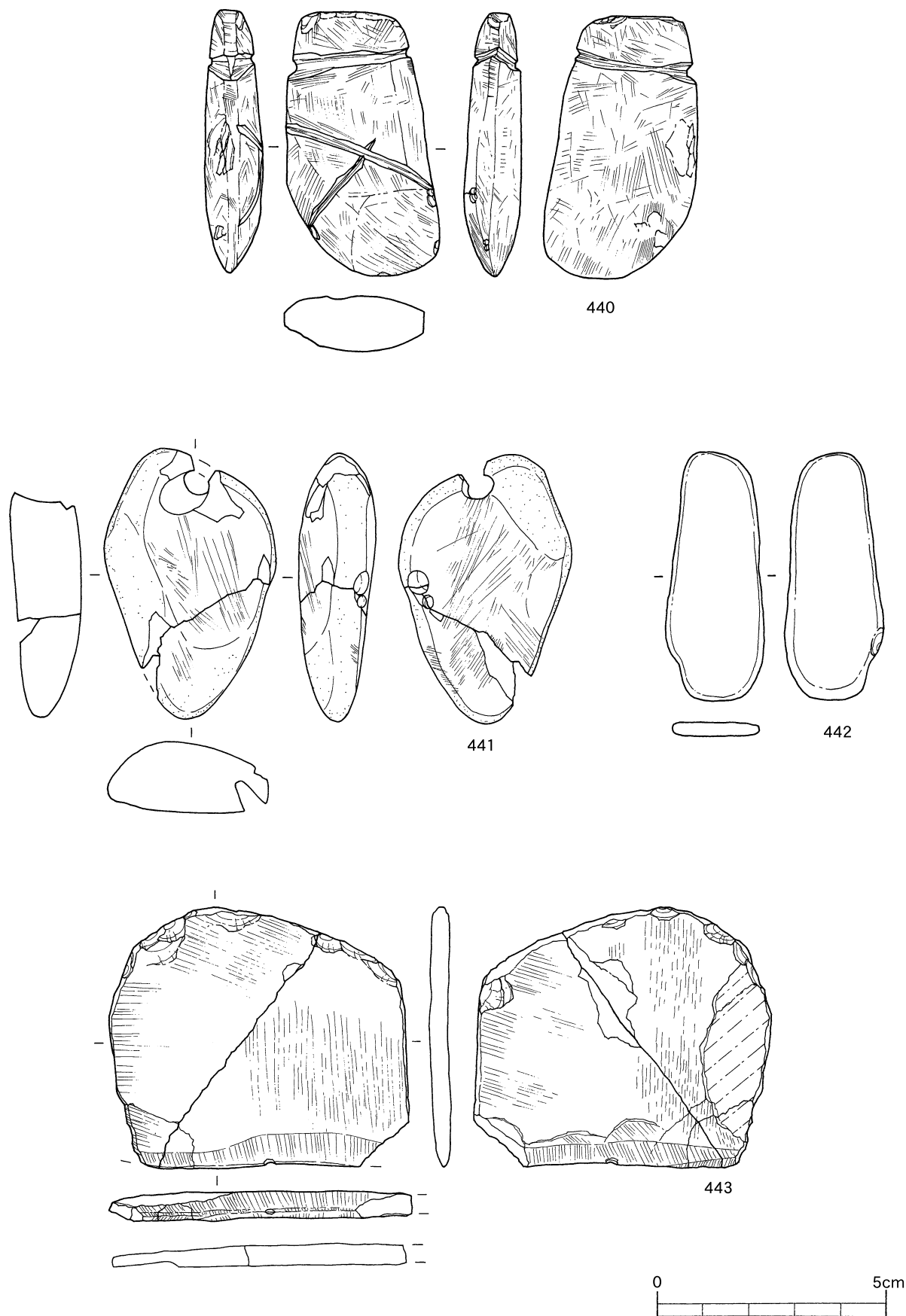
a 両面に磨面があり、敲打痕があるもの

b 片面に平らな磨面があり、敲打痕があるもの

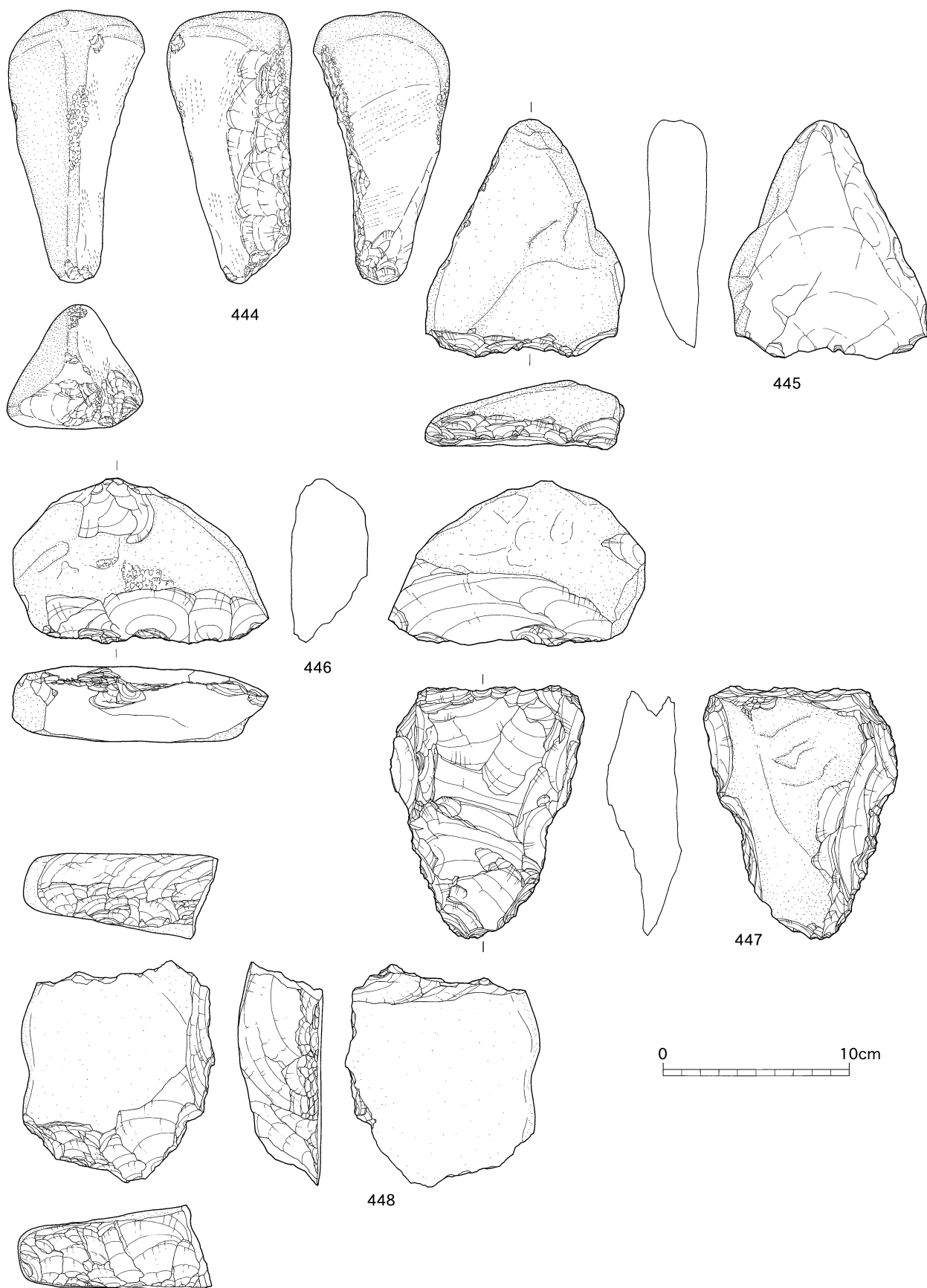
c 片面に平らな磨面があり、敲打痕は確認できないもの

3類：擦痕が面として明瞭でなく、ボール状の円・楕円礫のもの

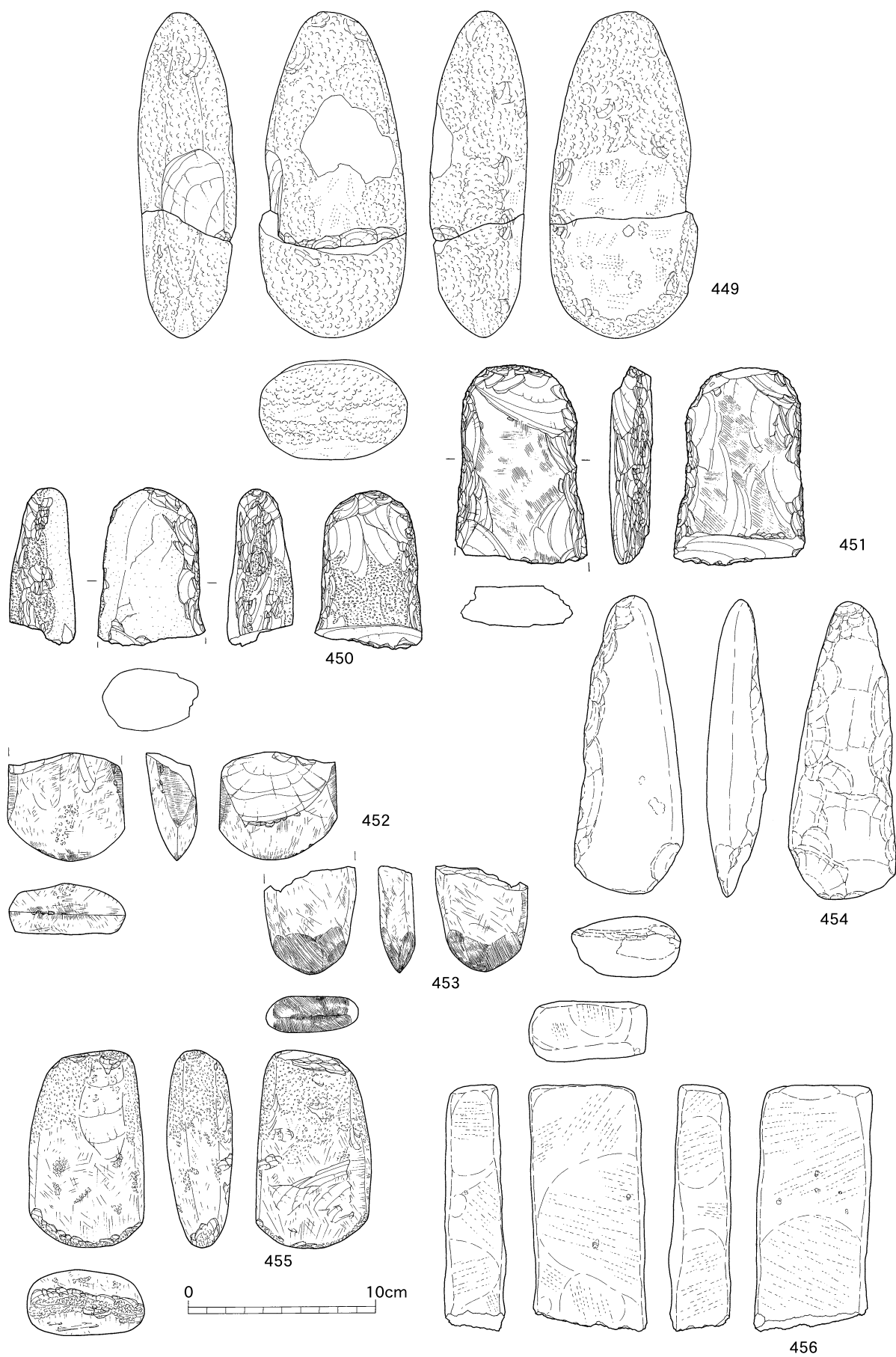
a 部分的に擦痕と敲打痕がみられるもの b 磨面のみのもの



第106図 垂飾品・擦切石器



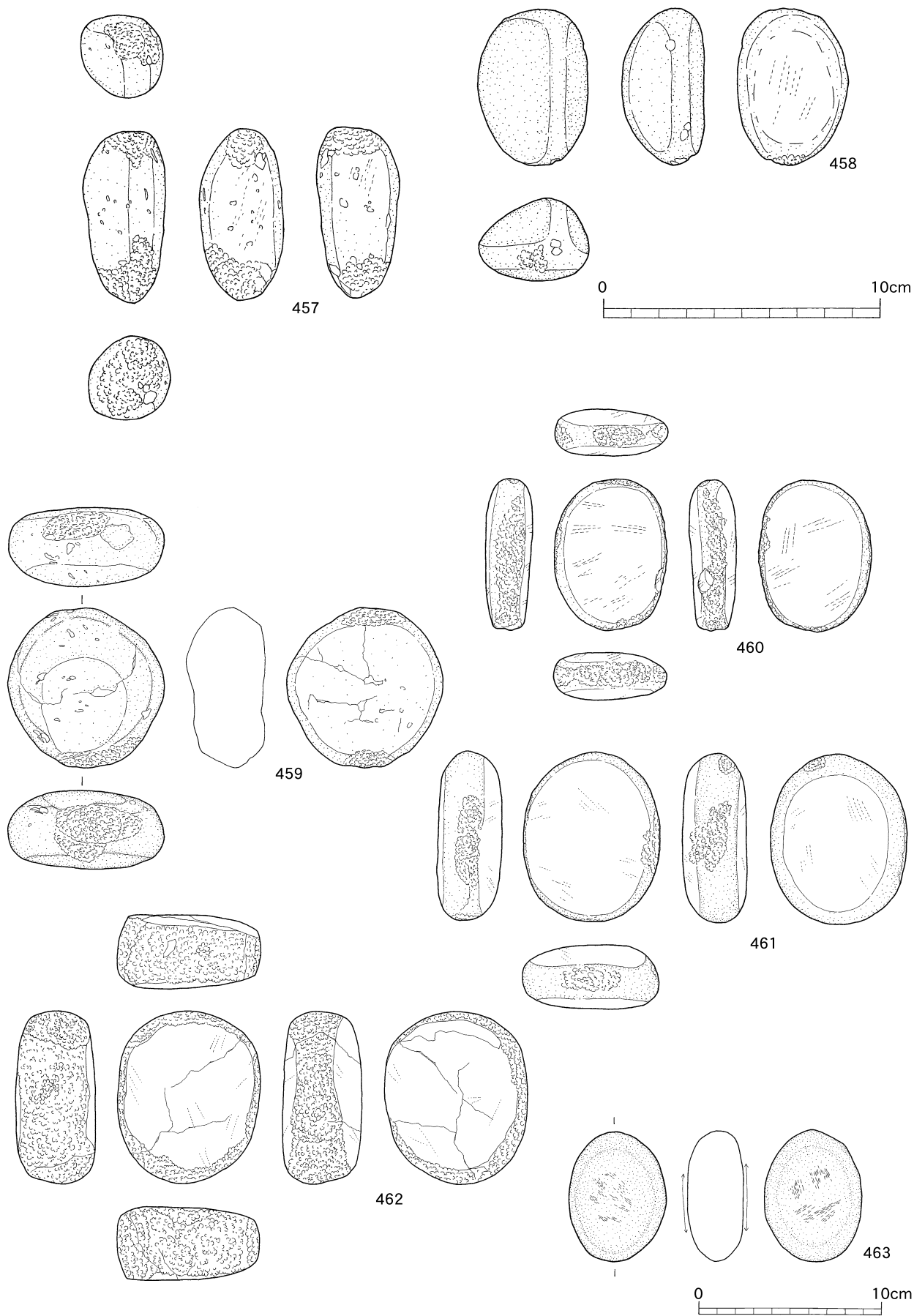
第107図 礫器



第108図 石斧・石斧未製品・敲石・砥石



第109図 磨石・敲石・石皿出土分布図



第110図 ハンマーストーン・磨石・敲石



第111図 磨石・敲石

4類：磨面が3面以上あるもの

a 敲打痕があるもの b 敲打痕のないもの

5類：自然礫の一部分を利用しているもの

a 磨面と敲打痕が確認できるもの b 磨面が確認できるもの

1 a類である461は側面上下左右、462・460は側縁周部に敲打痕がみられる。また、462は被熱礫である。459は側面上下に敲打痕がみられる。側面下方は2方向からの敲打により、鈍く稜がみられる。2 a類である464は主に側面上下に敲打痕、466は主に側面左右と表裏面中央部に、467は側縁周部に敲打痕がみられる。2 b類である468・469は上下に、470は側面周縁部に敲打痕がみられる。458は2 b類で、下方に敲打痕がみられるハンマーストーンである。471は3 a類であり、上下と裏面中央部に敲打痕がある。4 a類の474は6面を磨っており、磨面により作り出された稜に敲打痕がみられる。457は4面が磨られ、上下に敲打痕がある。ハンマーストーンである。455は石斧未製品を転用した敲石である。475は5 a類とした。やや尖った先端と周縁には敲打痕・剥離痕がみられる。

また、磨面の可能性がある平らな面を確認できる軽石も数点みられたが、使用痕が不明瞭なため今回図化しなかった。

石皿（第113・114図 476～478）

形態としては殆どのものが平らな磨面をもつもので、476のようにゆるやかにくぼむものは少ない。477・478は砂岩製で、ほぼ平らに磨られている。

使用石材・器種組成について

縄文時代の石器に使用された石材は、以下のようなものがみられる。

OB1：漆黒で光を通さず、不純物を含む。上牛鼻（薩摩川内市樋脇町）産、平木場（日置市市来町）産のものに類似する。

OB2：わずかに光を通し、不純物を多く含む。三船（鹿児島市）産か日東・五女木（大口市）・長谷（出水市）産のものに類似する。

OB3：黒色で、不純物は殆ど含まれない。腰岳（佐賀県伊万里市）産のものに類似する。

OB4：灰～暗灰色で不純物をごく少量含む。針尾（長崎県佐世保市）産のものに類似する。

OB5：透明度があって不純物は含まない。桑ノ木津留（宮崎県えびの市）産のものに類似する。

OB6：透明度は低く、灰白色で不純物を少量含む。姫島（大分県）産に類似する。

OB7：その他産地不明の黒曜石である。暗灰色で透明度は低く、不純物を少量含む、西北九州産と思われる黒曜石などがみられる。

SH1：節理を内包する淡緑色頁岩や硬質頁岩を包括する。

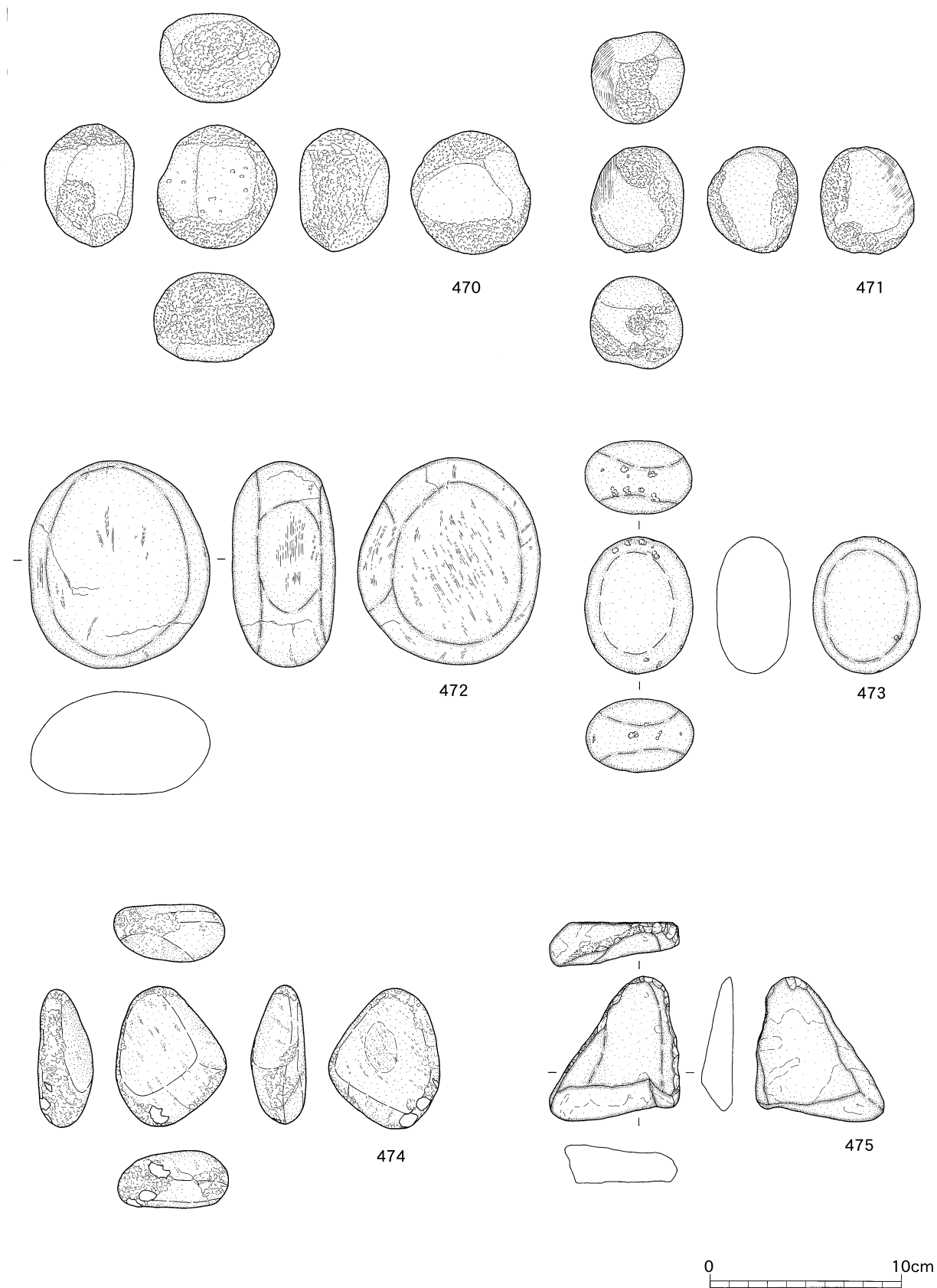
SH2：明灰色～黒色で接解変成岩のホルンフェルスである。

SH3：シルト質頁岩で、表面は灰白～黄白色を呈する。

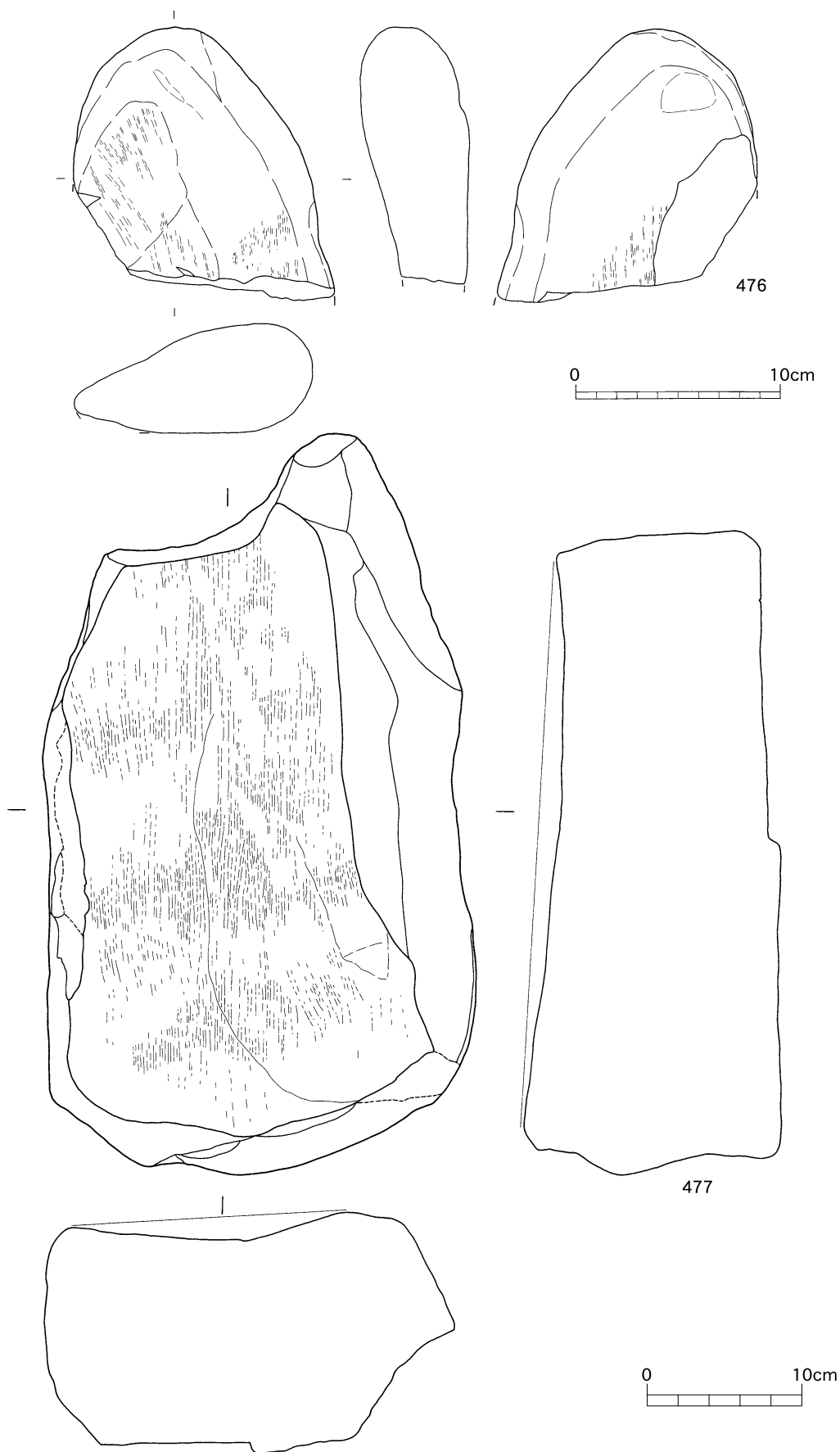
AN1：斑晶の発達した安山岩を一括した。主に磨石・敲石・石皿などに利用される。

AN2：無斑晶質安山岩で、サヌカイトや西北九州系のものを含む。

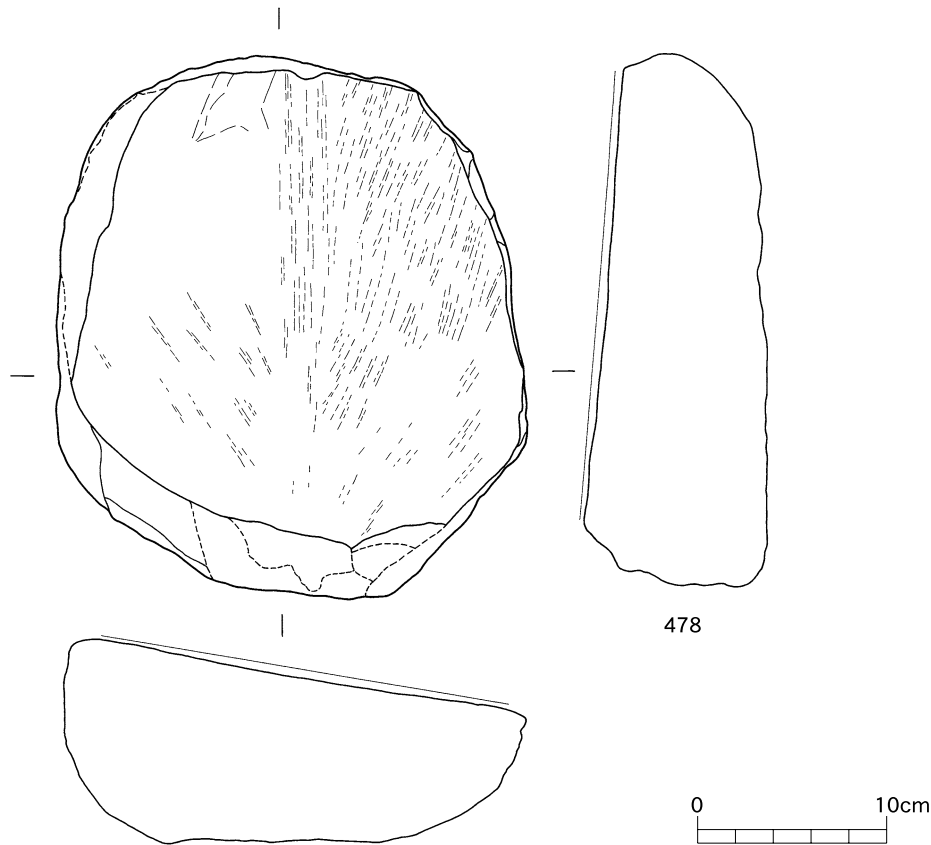
AN3：表面が風化して灰～暗灰色を呈しているが、内面は漆黒である。本遺跡では、表面が灰色のものと黒色のものがある。いわゆる玻璃質安山岩である。



第112図 磨石・敲石



第113図 石皿



第114図 石皿

CH：色調は赤色系，黄色系，灰色系，白色系とバリエーションのある節理をもつ珪質岩，いわゆるチャートである。2色以上が縞状に入るものもある。

CC・OP：白色が強いものを玉随（CC），白色に近く黄色系などの節理を含むものを便宜的にたんぱく石（OP）とした。

SA：砂岩である。材質にはバリエーションがあるが，緻密で硬質な砂岩は剥片石器類，石斧，磨石・敲石などに使用されている。

その他，石英（QU），鉄石英（FeQU）がみられ，ごくわずかであるが垂飾品に使用された蛇紋岩（Se），凝灰岩（TU）や水晶なども出土している。

石材別・器種別の出土比率は第17表である。本遺跡では，縄文時代早期中葉～晩期に至るまでの土器が出土しており，出土石器を層位的に捉えて時期を判別するのは困難な状況であるが，概要を述べる。

使用された石材は，本遺跡から距離的にも近い上牛鼻産（OB1）と思われる黒曜石が29.7%と3割近くを占める。また，西北九州の針尾産黒曜石（OB4）も8.94%使用されている。そのほかに剥片石器に使用される石材としては，無斑晶質安山岩（AN2）が多く1割近くを占める。斑晶質安山岩（AN1）は磨石・敲石で主に使用され，2割近くを占める。また1点のみシルト質頁岩（SH3）のものがみられる（401）が，旧石器時代の石器である可能性がある。

器種別の比率をみると、狩猟具（石鏃・石槍）は24.17%，調理具（石匙・スクレイパー・磨石・石皿）は36.25%，工具（石錐・楔形石器・礫器・擦切石器・砥石・石斧類）は6.02%である。調理具の割合が高いが、磨石・敲石は使い込まれたものは多くない。

第17表 縄文時代石器石材別・器種別出土数

	石 鏃 1 類	石 鏃 2 類	石 鏃 3 類	石 鏃 4 類	石 鏃 5 類	欠石 鏃損 その 品他	石 鏃 合 計	石 槍 未 製 品	石 匙 1 類	石 匙 2 類	石 匙 3 類	石 匙 4 類	石 匙 合 計	楔 形 石 器	パ 1 類 スク レイ パー	パ 2 類 スク レイ パー	合 ス ク レ イ パー 計	石 錐 1 類	石 錐 2 類	石 錐 3 類	石 錐 合 計
OB1	16	4	8	3	1	18	50	1						3	3	34	37	1	1	1	3
OB2	1		1	2		3	7				1		1		1	5	6				
OB3	8	2	1		1	2	14				1		1			1	1	1			1
OB4	20	4	7	1		6	38		2		2		4	1		3	3	1			1
OB5	2		1			2	5														
OB6		1				1	2														
OB7	4		1		1		6									1	1	1			1
SH1	6	1				1	8				1		1			8	8			1	1
SH2																1	1				
SH3																1	1				
AN1								1								5	5				
AN2	12	2	8	3	2	4	31		1	5	3	2	11	1	1	18	19		1		1
AN3	1		2	1		1	5				2	1	3	1	2	7	9				
CH	2	1				2	5	1	2				2	1		5	5				
FeQU		1		1		1	3									2	2				
QU																					
CC			2		4	3	9											1	1		2
OP	1		1		2	2	6				3		3			3	3	1			1
TU																					
Se																					
SA																1	1				
合 計	73	16	32	11	11	46	189	3	5	5	13	3	26	7	7	95	102	6	3	2	11
器種別(%)	9.19	2.02	4.03	1.38	1.38	5.79	23.8	0.37	0.63	0.63	1.64	0.37	3.27	0.88	0.88	11.9	12.8	0.76	0.37	0.25	1.38

	石 核 1 類	石 核 2 類	石 核 3 類	石 核 4 類	石 核 5 類	原 核・ 残核 他	石 核 合 計	礫 器	擦 切 石 器	石 斧 未 製 品・ 斧 石	砥 石	磨 石・ 敲 石	石 皿	異 形 石 器	垂 飾 品	二 次 加 工 剥 片	使 用 痕 剥 片	石 材 別 合 計 数	石 材 別 %
OB1	23	22	2	1	1	11	60									68	14	236	29.70
OB2	3	1				2	6									8		28	3.53
OB3	2	1					3									3	2	25	3.15
OB4	5	3				2	10							1		13		71	8.94
OB5																		5	0.63
OB6	1						1									1		4	0.50
OB7						2	2									1	2	13	1.64
SH1						1	1	5		5							2	31	3.90
SH2		2					2								1	2		6	0.76
SH3																		1	0.12
AN1								5		2	1	136					1	151	19.02
AN2	1	1	1			2	5	1								9	5	83	10.50
AN3		2	1			3	6	1					7			2		34	4.28
CH	2					1	3									6	2	25	3.15
FeQU	2	1				1	4									2	1	12	1.51
QU												7						7	0.88
CC																3	2	16	2.02
OP			2			1	3									8		24	3.02
TU															1			1	0.12
Se															1			1	0.12
SA								2	1	6		6	4					20	2.52
合 計	39	33	6	1	1	26	106	14	1	13	1	149	11	1	3	126	31	794	—
器種別%	4.9	4.2	0.76	0.12	0.12	3.27	13.4	1.76	0.12	1.64	0.12	18.8	1.38	0.12	0.37	12.8	3.9	—	100.00

第18表 縄文時代石器観察表 1

挿図番号	番号5	器種	分類	石材分類	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
90	347	石鏃	1	OB2	J35	IIIb	3888	0.30	1.20	1.20	0.35	
	348	石鏃	1	OB4	L35	IIIa	389	0.79	1.95	1.70	0.35	
	349	石鏃	2	AN2	M36	IIIb	7337	0.87	2.30	1.35	0.35	
	350	石鏃	2	OB5	J35	IV	9410	0.20	1.20	1.12	0.20	
	351	石鏃	2	OB3	L36	IIIa	7007	0.90	2.10	1.55	0.30	
	352	石鏃	3	OB4	I34	IIIb	1	0.59	2.00	1.50	0.30	
	353	石鏃	3	OB4	J36	IIIb	2255	2.87	3.30	2.25	0.60	
	354	石鏃	3	OB1	M36	IIIb	7850	0.66	1.80	1.70	0.30	
	355	石鏃	3	OB4	L36	IIIa	3045	1.17	2.60	1.70	0.45	
	356	石鏃	3	OP	K36	IIIb	5151	0.49	1.90	1.55	0.40	
	357	石鏃	3	OB3	K36	IIIb	5005	0.59	2.30	1.30	0.40	
	358	石鏃	3	OB4	J36	IIIb	531	0.27	1.70	1.10	0.30	
	359	石鏃	3	OB4	J36	IIIa	535	0.25	1.40	1.50	0.20	
	360	石鏃	3	OB3	K35	IIIb	440	0.34	(1.70)	1.15	0.30	
	361	石鏃	3	OB5	L34	IIIb	5345	0.25	1.40	1.15	0.30	
	362	石鏃	3	OB1	J35	IIIb	3525	0.14	1.00	1.00	0.20	
	363	石鏃	3	OB3	K36	IIIb	6405	0.61	(1.70)	1.50	0.40	
	364	石鏃	3	OB4	J36	V	9095	0.47	1.80	1.75	0.25	
	365	石鏃	3	CH	J36	IIIb	1686	0.48	1.75	1.45	0.25	
	366	石鏃	3	OB4	J34	IV	9658	1.45	(3.35)	1.30	0.40	
	367	石鏃	3	AN3	K34	IIIb	202	2.59	(3.35)	1.90	0.55	
91	368	石鏃	3	SH3	J36	IV	9171	0.91	(2.90)	1.70	0.40	
	369	石鏃	3	AN2	M36	IIIb	8293	0.76	(2.40)	1.80	0.30	
	370	石鏃	3	OB4	I36	IIIb	4898	0.90	2.50	1.40	0.40	
	371	石鏃	3	OB3	I35	IIIa	898	0.58	2.20	1.50	0.25	
	372	石鏃	3	OB4	I35	IIIb	9368	0.41	1.80	1.30	0.40	
	373	石鏃	4	OP	I35	IIIb	6050	0.31	1.80	1.00	0.20	
	374	石鏃	4	OB6	J36	IIIb	3610	0.31	1.85	1.35	0.25	
	375	石鏃	4	FeQU	I35	IIIb	6525	0.55	2.00	1.20	0.35	
	376	石鏃	5	AN2	J36	IIIb	2288	1.33	(2.80)	1.90	0.40	
	377	石鏃	5	CC	I35	IIIa	801	2.08	2.80	1.60	0.50	
	378	石鏃	—	OP	I35	IV	9374	1.90	2.60	1.40	0.55	
	379	石槍	—	AN1	K35	IIIb	728	15.20	4.32	3.40	1.35	
	380	石匙	3	AN2	M36	IIIb	7878	11.93	6.20	2.40	0.65	
93	381	石匙	3	AN3	K35	IIIb	450	19.52	4.15	6.35	1.15	
	382	石匙	3	OB4	M36	IIIb	7616	6.68	2.70	4.40	1.10	
	383	石匙	3	CH	J35	表層	—	8.60	4.00	(2.70)	1.10	
	384	石匙	3	AN3	J35	IIIb	4321	5.53	2.90	4.65	0.60	
	385	石匙	3	OP	K35	IIIb	3838	3.06	2.37	2.35	0.70	
	386	石匙	3	OB2	不明	不明	不明	9.81	3.20	4.55	0.90	
	387	石匙	3	OB3	J35	IIIb	2525	4.96	2.40	3.70	0.65	
	388	石匙	2	AN2	I35	IIIb	1353	36.75	4.30	6.85	1.50	
94	389	石匙	2	AN2	I35	IIIb	6080	18.72	4.20	6.60	0.75	
	390	石匙	3	AN3	J35	IIIb	5476	36.43	5.30	6.40	1.20	
	391	石匙	4	AN2	L36	IIIb	4589	9.97	2.90	5.45	0.55	
	392	楔形石器	—	CH	I35	IIIb	6007	5.78	3.05	2.05	0.98	
	393	楔形石器	—	AN3	J35	IIIb	4077	2.40	2.10	1.55	0.70	
	394	スクレイパー	1	AN3	K36	IIIb	9884	40.10	4.90	5.70	1.60	
	395	スクレイパー	1	OB2	L35	IIIb	7541	17.68	3.00	2.80	1.90	
	396	スクレイパー	1	OB1	J35	IV	5393	7.36	2.80	1.90	1.30	
95	397	スクレイパー	2	CH	I35	IIIb	3399	17.79	5.05	3.70	1.20	
	398	スクレイパー	2	OB1	K36	IIIb	6452	18.99	5.10	2.95	1.15	
	399	スクレイパー	2	OB4	K35	IIIb	5829	13.86	5.90	3.00	0.80	
	400	スクレイパー	2	OB1	J36	IIIb	3215	13.92	4.95	3.70	0.70	
	401	スクレイパー	2	SH3	L36	IIIb	6458	25.83	5.35	4.60	1.25	
	402	スクレイパー	2	OB3	L35	IIIb	6530	2.27	(2.90)	1.30	0.60	
	403	スクレイパー	2	OB1	M35	IIIb	8287	22.42	4.50	3.40	1.30	
	404	スクレイパー	2	AN2	K36	IIIb	666	30.29	7.00	4.60	1.00	
96	405	スクレイパー	2	CH	L34	IV	9666	47.56	8.75	2.95	1.65	
	406	スクレイパー	2	SH2	K35	IIIb	4472	16.73	7.80	4.55	0.70	
	407	スクレイパー	2	AN2	M35	IIIa	7044	55.40	9.80	5.25	1.55	
	408	スクレイパー	2	AN2	J35	IIIb	5662	34.32	5.10	5.80	1.25	
97	409	スクレイパー	2	FeQU	L35	IIIa	1117	66.49	6.60	(5.50)	1.80	
	410	スクレイパー	2	AN2	J35	IV	9278	38.46	7.40	4.80	1.10	
	411	石錐	1	AN1	I36	IIIb	2866	5.86	3.80	1.60	0.90	
	412	石錐	1	OB1	I35	IIIb	6046	1.11	1.60	1.50	0.60	
	413	石錐	2	OB1	M36	IIIb	7623	2.84	3.35	1.50	0.60	
	414	スクレイパー	2	AN2	J36	IIIb	2708	50.58	7.50	5.25	1.30	
98	415	スクレイパー	2	OB2	L36	IIIb	6254	18.61	4.50	3.70	1.40	
	416	スクレイパー	2	AN3	M36	IIIb	7986	43.62	6.95	4.50	1.40	
	417	異形石器	—	OB4	I36	IIIb	4770	1.79	2.65	1.30	0.60	
	418	二次加工剥片	—	OB1	J35	IIIb	5742	4.29	(2.30)	2.40	0.80	
	419	二次加工剥片	—	SH1	J36	IIIb	11700	3.93	2.90	2.30	0.80	

第19表 縄文時代石器観察表 2

挿図番号	番号	器種	分類	石材分類	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
100	420	石核	1	OB3	J36	IIIb	2265	29.40	3.10	4.50	2.80	
	421	石核	1	OB1	K36	IV	9137	24.54	3.65	4.35	1.70	
	422	石核	1	OB1	L36	IIIb	3067	35.92	3.15	3.60	3.15	
	423	石核	1	FeQU	J36	IIIb	1554	197.50	5.65	7.20	5.30	
101	424	石核	1	OB4	M36	IIIb	7347	27.46	3.10	5.10	2.40	
	425	石核	1	OB2	I35	IIIb	3407	23.54	2.60	3.15	2.30	
	426	石核	1	OB1	J35	V	9581	30.63	3.80	4.40	2.05	
	427	石核	1	OB6	J36	IIIb	4798	16.48	2.55	4.10	2.55	
102	428	石核	2b	OB1	K35	IIIa	154	135.00	5.65	4.90	4.60	
	429	石核	2a	AN3	L34	IIIa	5246	37.90	3.20	4.20	2.80	
	430	石核	2b	OB1	I34	IIIb	6374	60.88	4.10	3.60	3.30	
	431	石核	2b	AN3	I35	IV	9404	211.00	5.90	6.60	5.50	
103	432	石核	2b	OB2	K36	IV	9087	5.33	1.90	2.40	1.40	
	433	石核	2b	OB1	L35	IIIb	4578	152.00	5.45	5.60	4.00	
	434	石核	2b	OB1	J34	V	9643	24.76	2.90	3.50	2.10	
	435	石核	2b	OP	I35	IV	9333	25.99	3.30	4.15	1.60	
104	436	石核	2c	SH2	M36	IIIb	7783	108.34	4.50	8.20	2.20	
	437	石核	2c	OB1	J35	IIIb	4442	15.40	2.80	3.50	2.00	
	438	石核	3	OP	I35	IIIb	6024	20.69	3.85	3.35	1.80	
	439	石核	4	OB1	I36	IIIb	3703	74.15	4.00	5.05	3.80	
106	440	垂飾品	—	Se	K34	IIIb	193	34.20	5.80	3.40	1.30	
	441	垂飾品	—	SH1	J35	IIIb	4676	38.19	6.00	4.80	1.60	
	442	垂飾品	—	TU	K36	IIIa	256	6.70	5.50	2.20	0.40	
	443	擦切石器	—	SA	L36	IIIb	5947	32.49	5.80	6.80	0.65	
107	444	礫器	—	AN3	J35	IIIb	4076	660.20	14.70	7.30	6.90	
	445	礫器	—	SH1	J35	IV	10232	505.00	12.35	10.45	3.55	
	446	礫器	—	SH1	J36	IIIb	2680	620.00	8.90	13.00	4.10	
	447	礫器	—	SH1	J35	IV	9583	548.00	13.53	10.10	3.80	
108	448	礫器	—	AN1	M36	IIIb	7903	725.00	12.00	10.40	4.50	
	449	石斧未製品	—	SA	L36	IIIb	6414・6455	1060.00	17.50	7.90	5.30	
	450	石斧未製品	—	SH2	L36	IIIb	5926	218.50	(8.45)	5.75	3.40	
	451	局部磨製石斧	—	SH2	J36	IIIb	1539	216.40	(10.60)	7.05	2.20	
109	452	磨製石斧	—	SA	M36	IIIb	7685	128.80	(5.80)	6.35	2.30	
	453	磨製石斧	—	SA	J34	IIIb	5171	77.01	(5.20)	5.00	0.90	
	454	局部磨製石斧	—	SA	I35	V	9047	350.00	16.00	5.80	3.45	
	455	敲石	—	AN1	L35	IIIa	7070	350.00	10.60	6.15	3.50	
110	456	砥石	—	AN1	L36	IV	9717	540.20	13.25	6.35	3.35	
	457	ハンマーストーン	4a	QU	I35	IIIb	167	77.70	6.20	3.00	3.00	
	458	ハンマーストーン	2b	AN1	J35	IIIb	4292	71.80	5.70	4.00	3.00	
	459	磨石・敲石	1a	QU	K35	IIIa	133	450.30	8.75	8.60	4.30	
111	460	磨石・敲石	1a	AN1	K36	IIIb	6407	203.23	8.30	6.20	2.60	
	461	磨石・敲石	1a	AN1	K36	IV	—	388.00	9.30	7.50	3.60	
	462	磨石・敲石	1a	AN1	I35	IV	9400	437.00	9.50	7.90	4.40	
	463	磨石・敲石	1b	AN1	I36	IIIb	3478	176.00	7.20	5.30	3.00	
112	464	磨石・敲石	2a	SA	M36	IIIb	7464	440.00	9.80	7.00	4.40	
	465	磨石・敲石	2a	SA	4T	II	12561	324.45	7.15	6.10	5.20	
	466	磨石・敲石	2a	AN1	2T	III	12233	183.52	6.50	5.55	3.40	
	467	磨石・敲石	2a	AN1	J36	IV	9265	720.10	8.35	8.30	6.45	
113	468	磨石・敲石	2b	QU	M36	—	—	354.00	8.80	6.75	4.30	
	469	磨石・敲石	2b	QU	I35	IIIb	5999	385.00	9.50	7.45	3.80	
	470	磨石・敲石	2b	QU	M34	IIIb	7119	251.80	6.50	6.30	4.65	
	471	磨石・敲石	3a	AN1	K36	IIIb	5595	159.80	5.60	4.90	4.80	
114	472	磨石・敲石	2c	SA	K35	IIIb	4527	810.00	10.85	9.50	5.40	
	473	磨石・敲石	3	AN1	I35	IIIb	8322	222.00	7.10	5.60	3.80	
	474	磨石・敲石	4a	AN1	K36	IIIb	611	144.00	7.30	5.75	2.90	
	475	磨石・敲石	5a	AN1	I36	IIIb	3441	102.00	7.65	6.80	2.00	
113	476	石皿	—	AN1	K36	IV	638	10790	(13.40)	12.70	5.20	
	477	石皿	—	SA	K36	IIIb	2041	33050	47.80	27.50	16.70	
114	478	石皿	—	AN1	K36	IIIa	251	10500	29.00	24.30	10.30	

第5節 弥生～古代の調査

1. 調査の概要

古代の遺構・遺物はⅢa・Ⅲb層で検出・出土している。遺構はJ・K-35区の溝状遺構，J-35区の須恵器壺を埋設した土坑，K-35区の炭化物集中部が検出された。遺物は約100点弱出土し，須恵器（壺・坏），土師器（坏・碗），黒色土器A類，内赤土師器，紡錘車，土錘などがみられる。また，J-35区では大型礫の下から古代須恵器が出土し，周辺から出土した遺物と接合した。このことから少なくとも古代の時期において，この遺跡地は土石流災害に見舞われたものと考えられる。

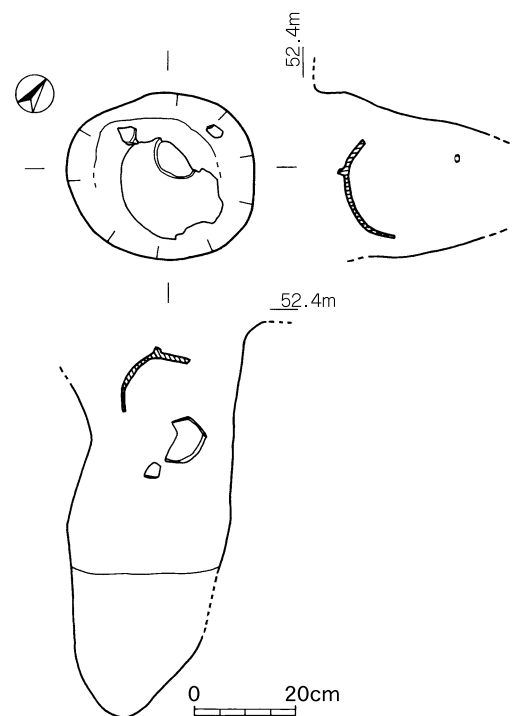
2. 古代の遺構

(1) 溝状遺構（第118図）

J・K-35区Ⅲa層で，南西－北東方向に長さ約10m・幅10～20cmの浅い溝状遺構が検出された。時期は不明であるが，黄白色砂質土を埋土とする。



第115図 古代遺構分布図



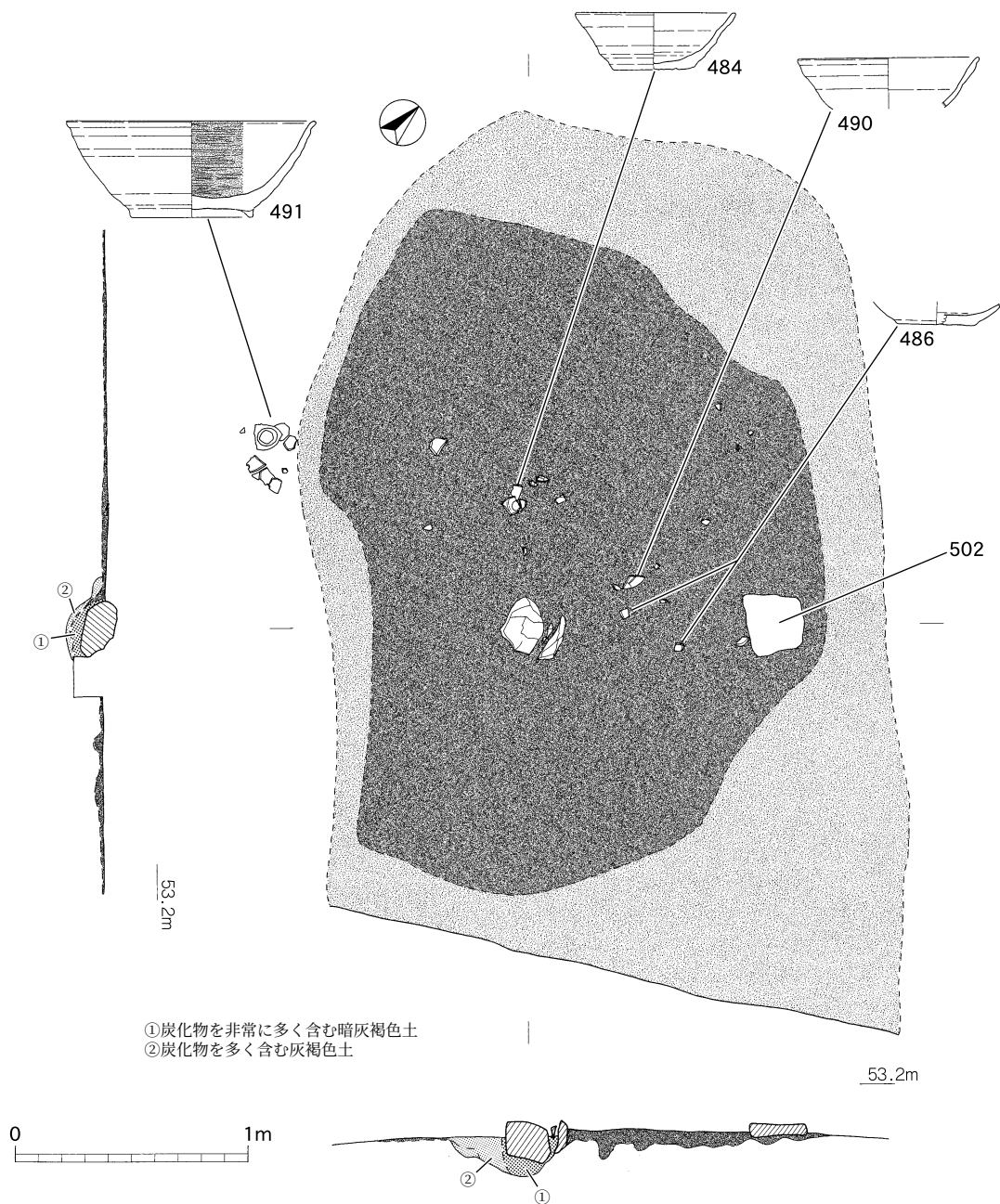
第116図 須恵器壺検出土坑図

(2) 須恵器壺検出土坑 (第116図)

J-35区Ⅲb層検出の土坑内からは、496の須恵器短頸壺が口縁部を下にして出土した。須恵器壺は蔵骨器に類似する形態のものであり、注目される。

(3) 炭化物集中部 (第117図)

K-35区のⅢa層上面で炭化物の集中地点がみられた。炭化物は長径約3m×短径約2mの範囲に広がり、中央部の礫の下には炭化物を多量に含む土坑が検出された。周辺からは9世紀代のものと思われる内黒土師器、土師器のほか石皿などが出土している。



第117図 炭化物集中部検出状況図

3. 弥生～古代の遺物

(1) 弥生・古墳時代の遺物

479は弥生時代中期～後期のものと思われる壺の口縁である。他に、接合のための刻みがみられる胴部片が出土しており、弥生～古墳時代の高坏の坏底部の可能性もある。また、表層から古墳時代の成川式の壺底部と思われる破片も1点出土している。

(2) 古代の遺物

土師器（第120図 480～492）

坏，碗，鉢，黒色土師器A，内赤土師器が出土している。480は口径と底径の差があまりない箱形を呈する坏で，8世紀代～9世紀前半と考えられる。外面には一部赤色が塗布される。481・482も底部の切り離しはヘラ切り技法であり，9世紀代と考えられる。483・484は口縁部が広く開き，深さもあるため鉢とした。2点とも9世紀代と思われる。485・486は坏（もしくは鉢）の底部である。489・490は坏もしくは鉢の口縁部である。487・488は9世紀代と思われる碗である。487は主に内面に赤色が塗布される。491・492は9世紀代と思われる内黒土師器である。492は底部の高台の痕跡はあるものの，欠損後磨っている。491はK-35区炭集中部付近から出土している。高台は一部が剥がれ落ち，高台を接着するための3条の凹凸がみられる。

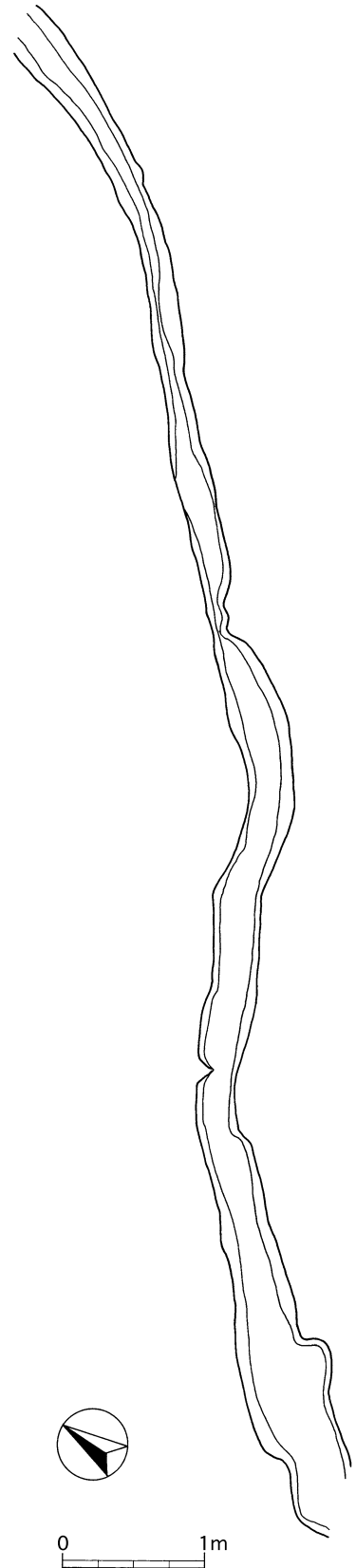
須恵器（第121図 493～499）

坏，坏蓋，壺がある。8～9世紀代にあたると思われる。組成としては，甕がみられない点が特徴である。このことから，古代における遺跡の性格として，日常生活とは異なる空間利用であった可能性が考えられる。

493・494は坏であるが，493は胎土に粗砂が含まれ，494よりは古い時期のものと考えられる。また，494の割れ口は部分的に磨られている可能性がある。短頸壺はほぼ完形の大小二個が出土しており，496はJ-35区Ⅲb層検出土坑より出土した壺である（第116図）。内面にたたき目がみられる。形態は，蔵骨器によくみられ「葉壺」と呼ばれる高台付須恵器短頸壺に類似する。また，498・499など，底部の高台を打ち欠いている壺などがみられる。

その他の遺物（第121図 500～502）

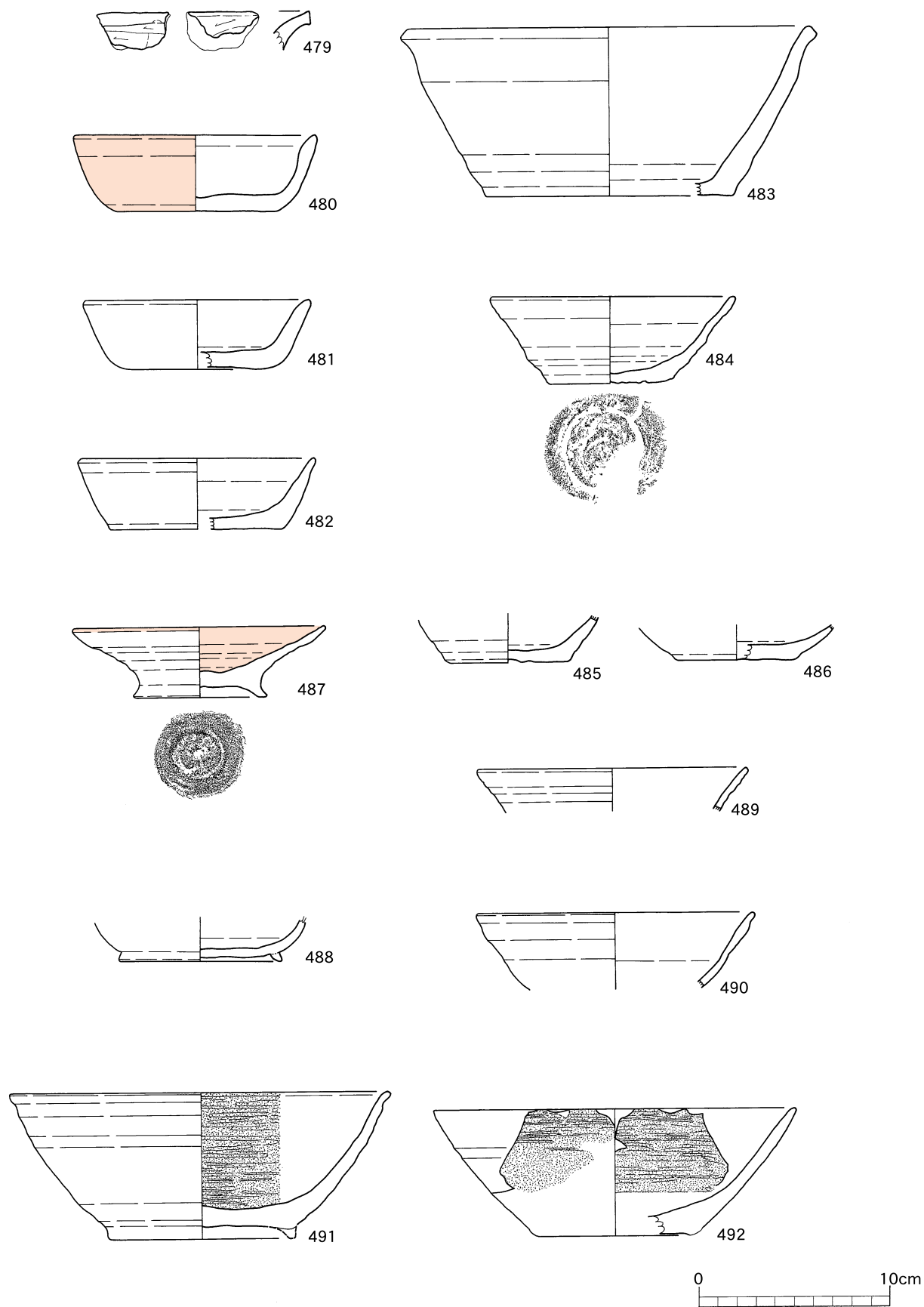
500の紡錘車は裏面にヘラ切り痕がみられる。501は土錘と思われるが，欠損し調整も明瞭でない。また，K-35区のⅢa層上面で検出された炭化物が集中している地点から，502の石皿が出土している。表面のほか，裏面にも使用による緩やかな凹みがみられる。



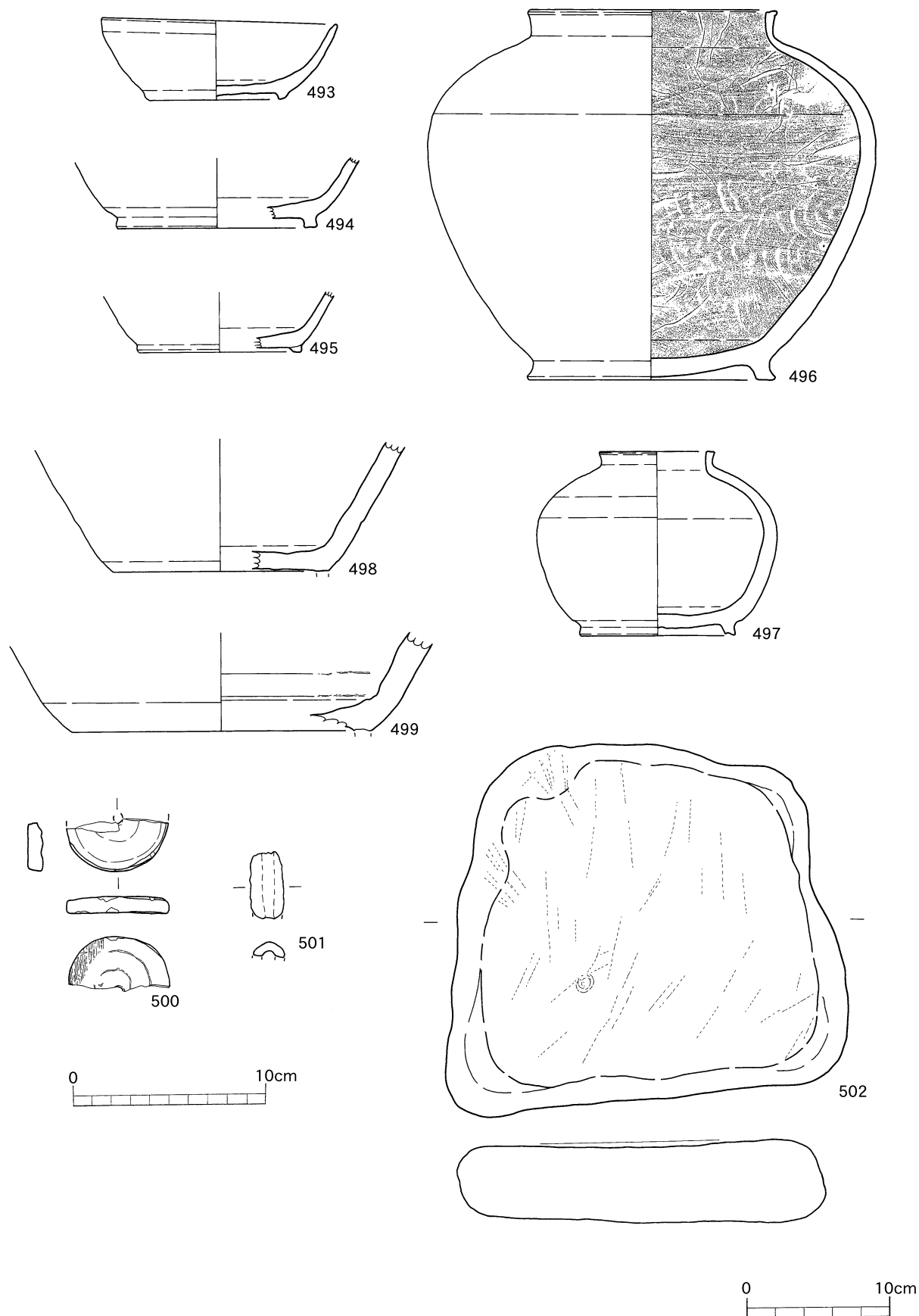
第118図 溝状遺構検出状況図



第119図 出土遺物分布状況図



第120図 弥生時代・古代の遺物

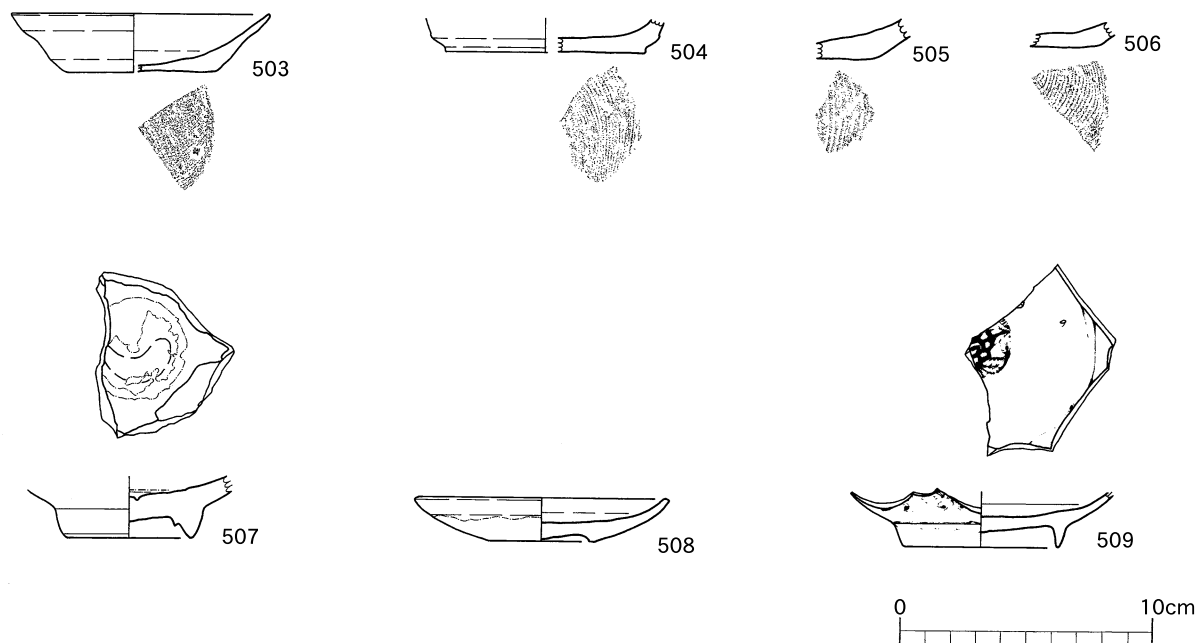


第121図 古代の遺物

第20表 弥生～古代出土遺物観察表

挿 図	番 号	種別等	器 種	部 位	出土区	層	取上 番号	調 整		色 調		胎 土	備 考
								内面	外面	内面	外面		
120	479	弥生	壺	口縁	M36	IIIa	7001	ナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR7/6	輝石・白色粒・赤色粒	内面スス付着
	480	土師器	坏	完形	J35 J36	IIIa IIIb	503 1615	横ナデ	横ナデ	浅黄2.5Y7/3	橙5YR6/6	黒色粒・白色粒・赤色粒	外面赤色塗付
	481	土師器	坏	完形	J35	IIIa IIIb	180 1803 2883 3571	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄2.5Y7/4	浅黄2.5Y7/4	角閃石・石英・黒色粒	一部スス付着 底部ヘラ切り後ナデ
	482	土師器	坏	完形	J35	IIIb	1799	横ナデ	横ナデ	橙2.5YR7/6	橙7.5YR7/6	赤色粒・黒色粒	
	483	土師器	鉢	完形	J36	IIIa	236 581 582	横ナデ	横ナデのち 一部縦ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤色粒・黒色粒	外面一部スス付着
	484	土師器	鉢	完形	K35 L35	IIIa上 IIIb	714 861 862	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/6	浅黄橙7.5YR8/6	赤色粒・黒色粒	外面一部スス付着 底部ヘラ切り
	485	土師器	坏	胴～底	K35	IIIa	425	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	橙7.5YR7/6	赤・黒色粒・角閃石・石英	底部ヘラ切り
	486	土師器	坏	胴～底	K35	IIIa	868 866	横ナデ	横ナデ	淡黄2.5Y8/3	淡黄2.5Y8/4	赤色粒・白色粒・黒色粒・石英	底部ヘラ切り後ナデ
	487	土師器	椀	完形	J35	IIIa	2346 3552 119 4679	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR6/6	浅黄橙10YR8/4	赤色粒・黒色粒 白色粒・角閃石	内面赤色塗付
	488	土師器	椀	完形	J35	IIIa	2341 3519	横ナデ	横ナデ	浅黄2.5Y7/3	浅黄2.5Y7/3	黒色粒・白色礫	底部ヘラ切り
	489	土師器	—	口縁	K35	IIIa	422 2358	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄2.5Y7/4	赤色粒・黒色粒・角閃石	外面一部スス付着
	490	土師器	—	口～胴	K35	IIIa上	865	横ナデ	横ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙10YR8/4	赤色粒・角閃石・石英	
121	491	土師器	椀	完形	K35	IIIa上	860 878 880 863	横ナデ ミガキ痕あり	横ナデ	黒5Y2/1	淡黄2.5Y8/3	赤色粒・黒色粒・角閃石	内黒 外面一部スス付着
	492	土師器	椀	完形	K35 K36 L36	IIIa IVa	307 308 310 345 740 674	ミガキ	ミガキのち 横ナデ	暗オリーブ灰 N4/1	にぶい黄橙 10YR7/4	石英・黒色粒 1～3mm大の赤色粒	内黒 底部ナデ
	493	須恵器	椀	完形	J35	IIIa	100 1192	横ナデ	横ナデ	青灰5PB5/1	青灰5PB5/1	白色礫・2～3mm大の石英少量	
	494	須恵器	椀	胴～底	K34	IIIa	5313	横ナデ	横ナデ	灰オリーブ5Y	灰5Y5/1	白色粒・黒色粒・白色礫	
	495	須恵器	椀	胴～底	K34	IIIa	5212	横ナデ	横ナデ	灰N5/0	灰N5/0	黒色粒・白色粒	
	496	須恵器	壺	完形	J35 K34	IIIa IIIb	土坑内 2344 5351 3510 3509	横ナデ 叩き目あり	横ナデ	明オリーブ灰 2.5GY7/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	黒色粒・白色粒	
	497	須恵器	壺	完形	J35	IIIa	108 477 1186 1190 1197 1200 2348 3541	横ナデ	横ナデ	灰5Y6/1	灰オリーブ黄 5Y6/3	黒色粒・白色粒	外面微量の自然釉 あり
	498	須恵器	壺	胴～底	J35 J36 K36	IIIa IIIb	534 1171 116 2009 492	横ナデ	横ナデ	灰白N7/0	灰N6/0	黒色粒・白色粒	底部高台打欠き
	499	須恵器	壺	胴～底	K35	IIIa	125	横ナデ	横ナデ	灰オリーブ5Y6/2	灰5Y4/1	黒色粒	底部高台打欠き
	500	紡錘車	—	—	K35	IIIa	149	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	浅黄橙10YR7/4	赤色粒・石英	スス付着
	501	土鍾	—	—	K34	IIIa	5213	—	—	橙7.5YR7/6	浅黄橙10YR8/3	白色粒・黒色粒・赤色粒	

図	番 号	器種	石 材	出土区	層	番号	長さcm	幅cm	厚cm	重量 g	備考
121	502	石皿	安山岩	K35	IIIa	870	26.1	28.4	5.8	12100	



第122図 中世～近世の遺物

第6節 中世～近世の調査

1. 調査の概要

主に表土層から浅パンケース1箱の遺物が出土している。層位的に確認された遺物を中心に以下に述べる。

2. 中世～近世の遺物

土師器（第122図 503～506）

503は坏であるが、底部に糸切り痕がみられる。また、504～506は坏（もしくは鉢）の底部であり、同様に糸切り痕がみられ、12世紀以降のものと思われる。

陶磁器（第122図 507～509）

507は龍泉窯系の青磁碗である。14世紀後半から16世紀中頃のものと思われる。508は中国青花皿である。16世紀代のものと思われる。509は底部が基筈底を呈する小皿である。鈍い褐色をした胎土に、鉄釉が内面全体と外面上位までかかる。苗代川焼の可能性はある。

第21表 中世～近世出土遺物観察表

挿 図	番 号	種別等	器 種	部 位	出土区	層	取上 番号	調 整		色 調		胎 土	備 考
								内面	外面	内面	外面		
122	503	土師器	坏	完形	I35	表土	—	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黒色粒・白色粒・角閃石	底部糸切り痕
	504	土師器	坏	底部	—	表土	—	横ナデ	横ナデ	灰白10YR8/2	にぶい黄橙 10YR 7/3	赤色粒・白色粒	底部糸切り
	505	土師器	坏	底部	6T	II	12611	ナデ	ナデ	浅黄橙10YR8/4	橙7.5YR6/6	黒色粒・白色粒	底部糸切り 外面赤色塗付
	506	土師器	坏	底部	6T	II	12584	ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR 7/3	赤色粒・白色粒・黒色粒	底部糸切り
図	番号	種別	器種	出土区	層	番号	胎土色	釉	備考				
122	507	青磁	碗	J36	IIIa	232	にぶい黄橙	灰緑色	内底面は円形に釉剥ぎ（一部残しあり）、高台内面釉剥ぎ				
	508	青花	皿	—	表土	—	白色	透明釉	畳付以外総釉				
	509	陶器	小皿	—	排土	—	にぶい褐色	黒褐色鉄釉					



第123図 堂園平遺跡調査範囲と残存部分

第V章 分析・同定

株式会社 加速器分析研究所 (IAA)

年代測定報告書 (AMS測定)

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回 (通常は4回) の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{S} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_\text{S} - ^{13}\text{A}_\text{PDB}) / ^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_\text{S}$: 試料炭素の ^{14}C 濃度: $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_\text{S}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_\text{S}$

$^{14}\text{A}_\text{R}$: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_\text{R}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_\text{S} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{A}_\text{N}$) に換算した上で計算した値です。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{A}_\text{N} = ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{N} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好とその貝と同一時代のものであると考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \text{ (‰)}$$

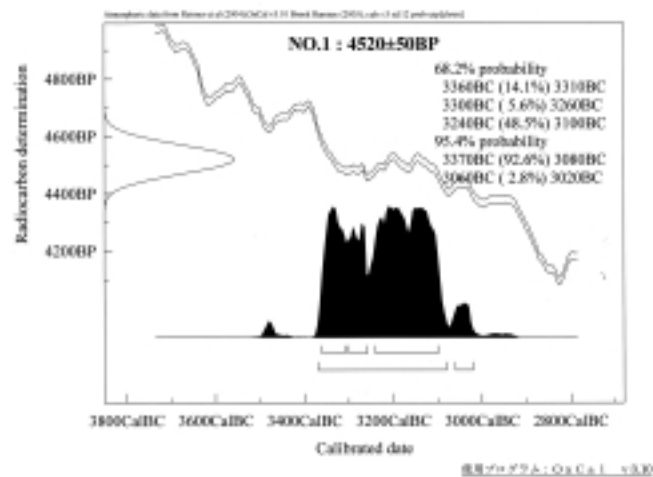
国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

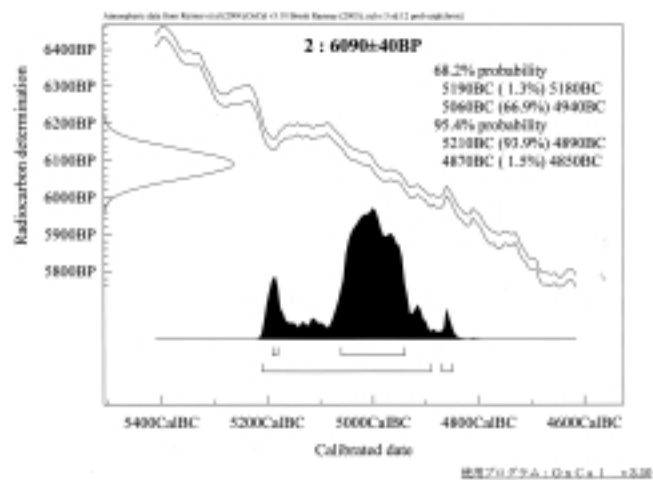
$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-51396	試料採取場所：日置市東市来町伊作田	Libby Age (yrBP) : 4,520 ± 50
	堂園平遺跡	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -27.47 ± 0.76
	試料形態：土器付着炭化物	$\Delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = -430.6 ± 3.1
	試料名(番号)：NO. 1 (報告書 NO. 263)	pMC(%) = 56.94 ± 0.31
#1031-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = -433.5 ± 3.0
		pMC(%) = 56.65 ± 0.30
		Age (yrBP) : 4,560 ± 40
IAAA-51397	試料採取場所：日置市東市来町伊作田	Libby Age (yrBP) : 6,090 ± 40
	堂園平遺跡	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -29.29 ± 0.98
	試料形態：土器付着炭化物	$\Delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = -531.2 ± 2.4
	試料名(番号)：2 (報告書 NO. 238)	pMC(%) = 46.88 ± 0.24
#1031-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = -535.3 ± 2.1
		pMC(%) = 46.47 ± 0.21
		Age (yrBP) : 6,160 ± 40

【添付図： 樹年補正 Radiocarbon determination】



【添付図： 樹年補正 Radiocarbon determination】



第Ⅵ章 発掘調査のまとめ

第1節 旧石器時代

1. 旧石器時代ナイフ形石器文化期の特徴と位置づけ

本遺跡のⅦ層～Ⅷ層で出土した石器群の器種は、ナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、搔器、削器、グレイバー、錐などであった。このような石器群の器種構成は、これまで小牧3A遺跡（鹿県埋セ1996）に代表されるような南九州ナイフ形石器文化期の一般的な状況と考えられてきた（宮田1995、桑波田・宮田1997）。

ところが、近年の調査成果では石器群石器組成について、新たな見解が生まれてきている。土層堆積の良好な大隅半島北部では、P15やP17といったローカルな分布範囲の狭い火山噴出物が認められ、石器群の組成や編年的関係において、南九州の基準となる層位的様相が明らかになった（宮田2005a・2005b）。

ここではそれらの最新の成果を通じて、本石器群の位置づけを行う。

出土したナイフ形石器は1a類の狸谷型（松藤1992）、2類の縦長剥片製基部加工のもの、3類の今峠型（橋1978）、4類の横長剥片製のもの、5類の小型ナイフに分類できた。狸谷型については仁田尾遺跡Ⅷ層（鹿県教委2005）や箕作遺跡（金峰町教委2004）などで剥片尖頭器や三稜尖頭器を共伴しない石器群として明らかになっており、また時期としてはAT直上期の時期と判断されている。

また2類の基部加工のナイフ形石器と3類の今峠型ナイフについては、西丸尾遺跡出土例で明らかなように同一時期であり剥片尖頭器の次の段階である。今峠型については次項で詳しく述べたい。

剥片尖頭器は、1類の先細り剥片を使用して基部加工のみを施すものと、2類の片側縁辺全体に二次加工を施すもの、そして3類として基部をノッチ状ではなく直線状に加工するものに区別した。このうち1類と2類は素材剥片の形状差によるもので真正の剥片尖頭器であり同一時期である。しかし3類は剥片尖頭器の形骸化したものと理解され、本来は剥片尖頭器として区分されないもので、時期的にも1類や2類より後の段階として理解される。

つまり剥片尖頭器の3類はナイフ形石器の2類及び3類の今峠型とほぼ同一時期の所産と考えることができる。これは、桐木耳遺跡Ⅰ文化層（鹿県埋セ2005a）の北側エリアにおいて共通する石材で共伴関係にあることから判断される。

台形石器については大型のものと一般的な大きさのものに区分でき、使用されている石材の共通性から、大型のもの以外は今峠型や基部加工ナイフの時期の石器群として捉えられよう。

ナイフ形石器5類とした小型ナイフ形石器の一群は、剥片の使用やブランディングの加工状況や細身の形態に仕上げる特徴が西ノ原B遺跡や城ヶ尾Ⅳ文化層と共通していることから、ナイフ形石器文化期末期として位置づけることができる。三稜尖頭器は3cm程度の小型品であることからこの段階もしくは前段階の可能性が考えられるが、いずれにしても後半以後の終末期ナイフ期に位置づけられよう。

以上のことから、本遺跡出土のナイフ形石器文化期石器群は、Ⅰ期…狸谷型ナイフ形石器の段階、Ⅱa期…剥片尖頭器を主体とする段階、Ⅱb期…基部加工ナイフ、今峠型ナイフ、剥片尖頭器が形骸化した基部直線加工のナイフと台形石器の段階、Ⅲb期…小型ナイフ形石器の段階（三稜尖頭器についてはⅢbに含まれるか、もしくはわずかに古いⅢa期の可能性も考えられる）に区別・編年することができよう（第124図）。

そして本遺跡で主体となる時期はⅡb期であり、そのなかでも今峠型ナイフが多量に出土したことは県内初であり、本地域でも今峠ナイフを主体とする時期が存在することが明らかとなった。またその石材として遺跡に近い上牛鼻産黒曜石が多用されており、加えて腰岳産黒曜石と宮崎北部産に近い頁岩製のものが含まれていたことは、その集団の移動や領域を考えるうえで示唆的である。

2. 細石刃文化期について

Ⅶ層を主体としてわずかに出土した。出土した細石刃核は船野系船野2型と野岳系稜柱型（宮田2004a）が主体であり、これらは船野型及び野岳・休場型細石刃核の型式内変遷としてとらえられ、細石刃文化後半期のⅡ期に相当する。また福井型細石刃核も2点出土しており、このうち1点は西北九州の針尾産黒曜石を石材としたものであり、南九州細石刃石器群のⅢ期に位置づけられる。

3. 今峠型ナイフ形石器とその出土意義

本遺跡において今峠型ナイフ形石器に比定される資料が計17点出土した。これらは素材剥片として「ノ」字」形を呈する斜軸剥片を利用し、基部調整を施したものである。

ところで筑後川上流域に所在する五馬大坪遺跡でも多くの今峠型ナイフが主体となって出土している。この遺跡の今峠型ナイフは、本遺跡出土例と同様に背面から打面への二次加工が施されているものが主体であった。

資料を報告した綿貫俊一は今峠型ナイフ形石器の違いについて、背面からの打面に加工を施すものを大坪類



第124図 堂園平遺跡旧石器時代編年図

型とし、それが施されないものを今峠類型とし、両者を区別した。そして両者の分布より北部九州と東九州の地域性であるとした（綿貫1989）。その後、萩原博文はこれに左側縁部のノッチ状の細調整を加えたものを加えて原の辻型台形石器と共通する特徴であるとして「西北九州類型」（萩原2004）と呼称した。関連して西丸尾遺跡出土の石核は瀬戸内技法が変質したものであり時期的に新しいとした。ただし、桐木耳取遺跡と同様にP17の下位に位置していることから、その見解は見直しが必要となっている。

また今峠型ナイフについて、石核や基部加工など網羅的にまとめた鎌田洋昭は今峠ナイフの編年について、古い時期からナイフ終末期直前まで継続する（鎌田1999）と考えたが、南九州の最新の桐木耳取遺跡などの出土状況からの編年（宮田2005a）によると、古い一時期だけとなる。

近年宮崎で調査された北牛牧第5遺跡（宮県埋セ2003）では多数の今峠型が出土しており、今峠型ナイフ主体の石器群として一時期存在することが再確認されることとなった。ここで出土した今峠型は西丸尾や桐木耳と同様背面から打面への加工は施されないものが主体である。このような今峠型ナイフは今峠遺跡や他の東九州域のものと同様である。ただし北牛牧第5遺跡でも打面に調整加工が施される資料もわずかに認められている。また両側縁の調整加工により茎状の基部を形成するものを北牛牧型ナイフと仮称した（秋成2005）。ここでは今峠型ナイフを3類に分類する。

1類…「ノの字」形の斜軸剥片を使用し、打面はそのまま、打面から頭部調整状の平坦剥離が特徴となる。剥離加工は基部のみである。綿貫の今峠類型に相当する。

2類…「ノの字」形の斜軸剥片を使用し、打面を背面から調整加工するもの、加えて、その調整された打面から背面に平坦剥離が施されたもの。綿貫の大坪類型、萩原の西北九州類型に相当する。

3類…「ノの字」形の斜軸剥片やすづまりの縦長剥片を使用し、両側縁の調整加工により明瞭な基部を形成するもの。秋成の北牛牧型ナイフ、綿貫の今峠型剥片尖頭器に相当する。

本遺跡出土の今峠型は、素材剥片の打面部分に背面からの二次加工を施して基部右辺の基部形成を行うという特徴のある今峠ナイフ2類が多い。それに加えて、その調整部分を打面にして背面の平坦剥離を行っているものも4点認められ（26・27・29・30）、これは原の辻型台形石器と共通する技術（萩原2004）である。このうち29の資料は原の辻型台形石器に極めて近い形状を持っている。

また本遺跡で出土した基部加工ナイフ（ナイフ2b類）や剥片尖頭器が形骸化した3類（例えば75）は今峠型ナイフ3類とは素材剥片の形状が異なるだけで整形加工は共通しており同一の系統につながるものと判断できる。つまりこれら各分類した今峠型は時期差ではなくバラエティーとして理解できよう。

使用されている石材は、遺跡に近い在地産石材としての上牛鼻産黒曜石がほとんどであるが、肉眼的観察により腰岳産黒曜石と推定されるものが1点と、宮崎北部の流紋岩に類似する頁岩製のものが2点含まれている。

これまで本県で出土している今峠型ナイフは、西丸尾遺跡の1類2点と桐木耳取遺跡の1類数点が知られている。これらの資料は頭部調整のある「ノの字」形剥片が使用され、基部の右辺つまり剥片の打面部はそのままの状態であり、本遺跡例では約半数がこれにあたる。これらの遺跡では今峠型ナイフは客体的であり、基部加工ナイフが主体となっている。本遺跡では今峠型ナイフは客体的という数量ではない。本遺跡で今峠型1類より2類が多いのはそれが客体的でないことによると判断される。

さて、今峠型ナイフの「ノの字」形剥片を素材とする剥片の生産基盤は同一に近いものであっても基部加工のあり方は差異が存在し、綿貫のいう大坪類型と今峠型の違いは、本遺跡例及び北牛牧第5遺跡出土例より、完全に形態が地域により分離されるものというより、取りもなおさず集団の移動や活動領域とも関連するものであり（宮田2002b）、本遺跡出土の石材に腰岳産黒曜石や宮崎北部産流紋岩類似の石材が含まれることは、そこに起因すると考えられよう。（文責：宮田）

第2節 縄文時代

1. 遺構

集石と土坑・ピット群が検出されている。集石は4基のうち3基がIV層、1基がIIIb層での検出である。IV層からは主に早期中葉～後葉の土器が出土しており、3基の集石もその時期に比定されよう。土坑・ピット群はIIIb層から検出され、厳密な時期や性格は不明であるが、1～3号土坑の埋土には炭化物が混じる。

2. 土器

本遺跡では、アカホヤ火山灰の堆積は明瞭でなく、厚さ20cm余りのIIIb層のアカホヤ二次堆積層にブロック状に混入する状況であり、IIIb層からは縄文時代早期末～後期にかけての土器が出土する。分布域はM-36、I・J-35・36区にまとまりがみられる。各類土器について述べる。

1類土器は早期の貝殻条痕文円筒形土器である。倉園B式に近いものと思われる。

2類土器は押型文土器である。158・161・162は手向山式であり、主にK-35・36区から出土している。

3類土器は平椀式である。主にIV層から出土し、K-35区周辺から出土している。

4類土器は塞ノ神式である。4a類は高橋（1998）の塞ノ神Ⅰ式古・中段階、新東（1988）の椀ノ原a式にあたる。4b・c類は河口（1985）の塞ノ神式Aa類であり、その定義は「器面全体に幾何学文を施し、この上に重ねて間隔を置きながら縦位の撚糸文を施したもの」である。また新東の椀ノ原b式、高橋の塞ノ神Ⅰ式新段階、多々良（1985）のJj型・IV類、木崎（1985）のVI類である。4d類は河口の塞ノ神式Ab類、すなわち「器面に篋描きの幾何学文的な区画を施文し、この区画内に撚糸文の文様を回転押捺したもの」である。また、高橋の塞ノ神Ⅱ式、新東氏の鍋谷式、多々良のJk型・V類、木崎のV類にあたるが、頸部に施されるのは凹線文である。3類の平椀式と4類の撚糸文系塞ノ神式は、主にIIIb層下のIV層から出土している。

早期中葉～後葉の土器については、早期前半の貝殻文円筒形土器の系譜を引く塞ノ神様式と押型文土器の系譜を引く平椀様式が併存するという二系統編年（新東1988、多々良1985）と、貝殻文円筒形土器を祖形とする一系統編年（木崎1985）、手向山式を祖形とする一系統編年（河口1985、栗畑1995）という諸説がある。桜島火山灰P11（約7500年前）や蒲牟田スコリヤ・米丸スコリヤ（P11直下）などとの層位関係から（栗畑・東1997、栗畑1998）、「手向山式→平椀式→撚糸文系塞ノ神式→貝殻文系塞ノ神式」の一系統の型式変遷の妥当性が指摘されている。本遺跡では、撚糸文系の塞ノ神式しか出土していないという状況であるが、系統や型式変遷については、各遺跡の層位的・平面的分布状況の分析を重ねて検討していく必要がある。

5類土器は苦浜式に比定できる。一部IV層からも出土するが、主にIIIb層より出土している。苦浜式は、横峯遺跡の調査ではアカホヤ火山灰層の下層から出土し（堂込1994）、早期末に位置づけられた。調査区西側のI・J-35・36区から3個体とも出土している。

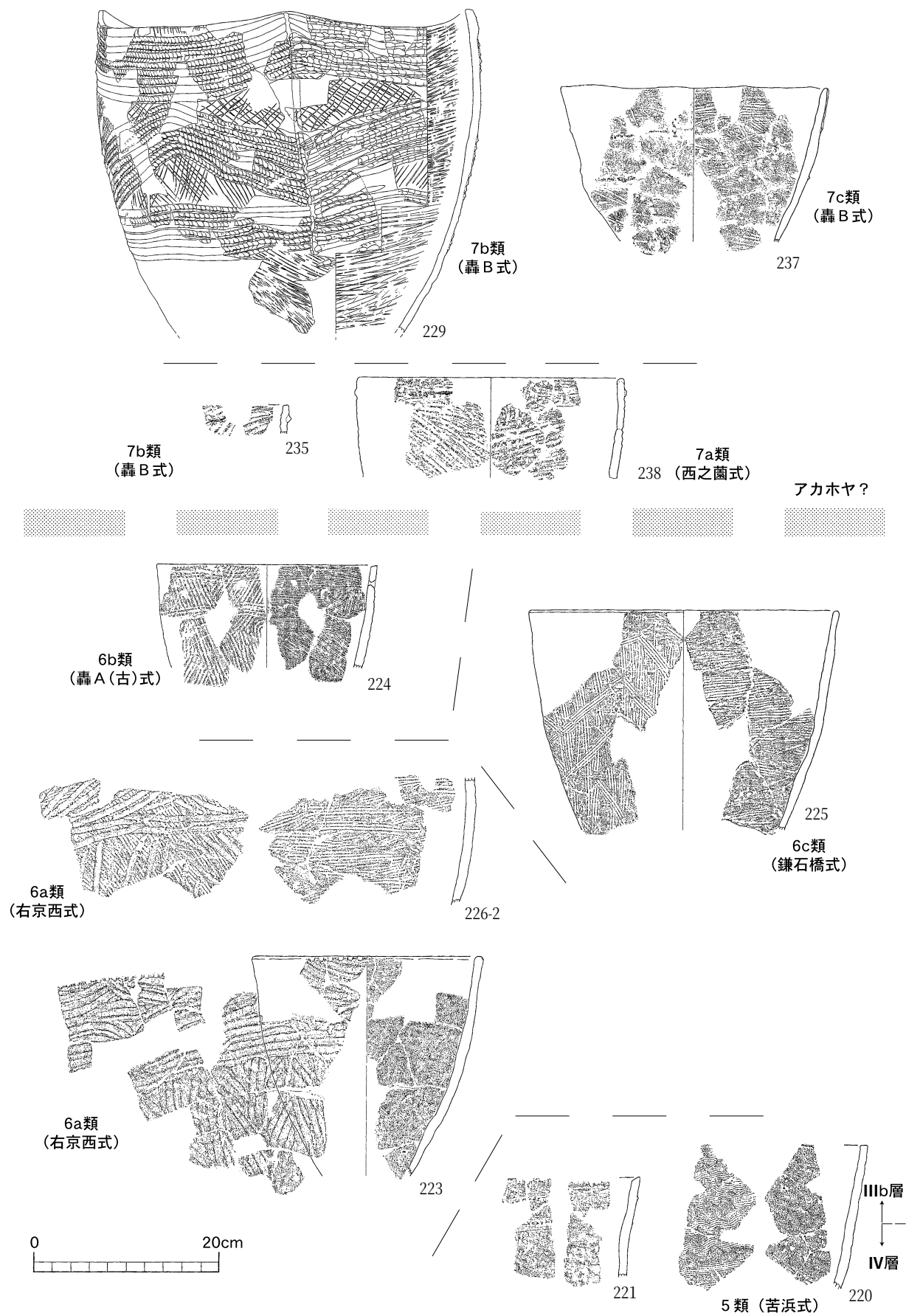
6類土器は早期末から前期初頭の条痕文系土器である。本遺跡で6a類とした土器は、栗畑（2002）の右京西式、高橋（1989）の轟1式にあたり、6c式は鎌石橋式、6b式は栗畑の轟A（古段階）式にあたる。226は凹線文の類似から6a類としたが、地文の条痕文や内面調整は鎌石橋式に近縁のものとして位置づけた。6a類土器については、高橋は轟1式が鎌石橋式に後続するものとしているが、栗畑は右京西式に鎌石橋式が後続するとしている。本遺跡では、器面調整や微隆起線文などの特徴から右京西式に鎌石橋式が後続するとした（第125図）。

7類土器は、アカホヤ火山灰上位より出土すると考えられ、器面に条痕がみられ、突帯文をもつ土器群である。7a類は器面に粗い条痕を施し、口縁部に突帯をもつのが特徴である。栗畑の西之蘭式、高橋の轟3式の一部にあたる。7a類に該当する238は、炭素年代測定の結果、 6090 ± 40 BPという年代を得ている。また、このタイプのものは突帯に刻みがみられるものが多いが、238の土器の刻目は明瞭ではない。7b類は器面にみみずばれ状突帯を施すのが特徴であり、栗畑の轟B（古段階）式、高橋の3式の一部にあたる。花ノ木遺跡（鹿県教委1975）、上焼田遺跡（鹿県教委1977）、大畝町園田遺跡（宮之城町教委1985）などで類似するものが出土している。上焼田遺跡、大畝町園田遺跡では、本遺跡と同様にアカホヤの二次堆積層中から出土している。また、花ノ木遺跡ではアカホヤ下層からの出土であるが、上位層から塞ノ神式が出土しており、その出土状況については疑問を呈する研究者もいる。7c式は屈曲型轟B式に類似する。轟B式には胴部断面形態の違いから、単純形と屈曲型があり、その違いについては、高橋は屈曲型は山陰系で轟3・4式に共伴するとし、栗畑は時期幅がある可能性も示唆しており、これが時期差であるか共伴するバリエーションかは諸説あり、論議されている。（文責：寒川）

8類土器は曾畑式に比定できる。240・241は口縁部に三角文を施すことから、中村愿の曾畑Ⅲ式（中村1982）に相当する。また、胎土に滑石を含むものは器面に条痕が残ることから、新しい時期のものと考えられる。

9類土器は深浦式に比定できる。深浦式は相美によって3つに細分されており（相美2000・2006）、その編年によれば、9a類は日本山段階、9b類は石峰段階、9c類は鞍谷段階にそれぞれ相当する。

そのうち、256・263・264は特徴的である。まず、256は施文順序に注意したい。石峰段階では「貝殻連点文→突帯」の順序が一般的であるが、256は「突帯→貝殻連点文」の順序になっている。263はこれまで実見してきた深浦式に比べて、重厚な感があり、また外面の文様も特徴的である。そのため型式比定に悩んだが、内面の貝殻連点文や口縁部の山形突起から、深浦式の可能性が高いと判断し、年代測定の結果もそれを裏付けることとなった。また、口縁部下位でくびれる器形や波状に施された貝殻連点文から鞍谷段階の土器と考えた。264はドーナツ状の円形浮文をもつ文様が特徴的である。ドーナツ状の円形浮文をもつ深浦式は花ノ木遺跡（鹿県教委1975）や石峰遺跡（鹿県教委1980）、山ノ脇遺跡（鹿県埋せ2003）、中尾遺跡（鹿県埋せ2005b）で認められている。また、突帯を貼付する前に相交弧文を施す手法は鞍谷段階でよく行われる手法である。その相交弧文は、外面の6段目のみ施文具である二枚貝が異なっている。貼付される突帯は一本ではなく、継ぎ足すことで一本のように見せており、また円形浮文も粘土紐がはみ出ており、そしてそれら突帯はナデ付けられておらず、剥落している箇所も多いなど、施文が粗雑な感がある。なお、底面にも文様が施されており、この



第125図 堂園平遺跡早期末～前期初頭土器編年図

手法は曾畑式からの伝統を残しているものと考えられる。

10類土器は深浦式に伴って出土することの多い条痕文土器である。上水流遺跡（金峰町教委1998）において良好な資料が出土している。外面に縦位の貝殻条痕を施すことが特徴である。横位の貝殻条痕を施した後、縦位の貝殻条痕を施しているものもあり、それは文様効果を意識したものと考えられる。なお、最近相美はこの土器を「上水流タイプ」と仮称し、深浦式石峰～鞍谷段階の時期において深浦式と器種のセット関係として存在していたことを指摘している（相美2006）。

11類土器は9類または10類の底部と考えられるもので、丸底となるが、やや尖り気味のものもある。

12a類土器は突帯上やその周辺に刻みを施すもの（281～283）が存在することから船元Ⅱ式に、その他も船元Ⅰ～Ⅱ式に比定できる。なお、胎土に石英・長石類を多く含むもの（281～283）と角閃石を多く含むもの（284～287）の2種類が認められることは注意したい。ところで、9・10・12a類土器の関係については併行関係が考えられる（相美2000・2006）。しかし、矢野健一は時間差を考慮しており、「深浦式→条痕文土器（その内容は上水流タイプとはほぼ同じであるが、やや型式概念が異なる）→船元Ⅰ式（新）～船元Ⅱ式」という編年観を提示している（矢野2005a・b）。しかし、氏の挙げている根拠には事実誤認と疑問が認められ、時間差と捉えることには問題がある。その詳細については別稿を用意しており、それに譲るとして、本遺跡の様相の検討結果からも、三者は併行関係にあると判断できる。

まず、平面分布状況（第72・80図）であるが、各型式はK・J-35・36区を中心に散在した状況を示しており、有意の差は認められない。なお、J-35・36区の境付近に上水流タイプが集中しているように見えるが、それは274と同一個体の破片であり、上水流タイプが集中して出土しているわけではない。接合線を全て引くと煩雑になるためにそのほとんどを割愛した。層位的には、Ⅲb層を中心にⅢa～Ⅳ層にわたって出土しており、有意の差は認められない。

そこで型式学的視点からみても。264の円形浮文は大蔵山式～船元Ⅰ式にみられる円形浮文の影響が考えられ、260のボタン状突起と263のコブ状突起も円形浮文がデフォルメされた可能性がある。また、263は年代測定結果、 $4520 \pm 50^{+4}$ CBPという年代が出ており、小林謙一の成果（小林2004）と比較しても、深浦式鞍谷段階が縄文中期前葉に位置づけられる。

ところで、深浦式と上水流タイプが同時併行のセット関係と考えた理由の一つとして、縦位の貝殻条痕が鞍谷段階にもみられることを挙げた（相美2006）。260は浅い貝殻条痕がみられることから、上水流タイプに見える（実際、当初はそうように考えていた）。しかし、詳細に観察すると相交弧文状の貝殻刺突文が認められたため、鞍谷段階と判断した。この260を巡る経緯からも、両者が併行関係にあると判断できる。以上のことから、深浦式、上水流タイプ、船元Ⅰ・Ⅱ式が時期差と考えることは困難であろう。

12b類土器は、最近相美が「本野タイプ」と仮称した土器（相美2006）に相当する。本野タイプは船元Ⅱ式併行期を中心とした時期に人吉～都城盆地周辺に分布する、地域的特色の強い縄文施文土器である。その特徴は厚手で黒褐色を呈することが多く、また胎土に角閃石・輝石類を含むことであり、本遺跡の土器もその特徴に合致する。

12c類土器は地文に撚糸文を施すものである。撚糸文を施す特徴から里木Ⅱ式に比定できなくもないが、近畿・瀬戸内地域の里木Ⅱ式とは異なる雰囲気をもつ。

13類土器は春日式に比定できる。293・294・296は前谷段階、295・297は轟木ヶ迫段階、298は南宮島段階に相当する。そのなかで、胎土に石英・長石類を多く含む296と胎土に細かい角閃石を含む299・300は、南九州でよくみられる春日式の胎土・質感（ざらざらして、砂っぽい感じ）と異なり、注意したい。（文責：相美）

14類土器は、後期前葉の凹線文系土器の一群である。303・304は南福寺式に比定できる。306は小片でこの類に含めたが、指宿式にも似る。15類土器は、後期前半のものと思われる突帯文土器である。16類土器は、指宿式に比定される。出土点数はごく少数である。

17類土器は、松山・市来式に比定される。312は松山式である。319・320は、松山式の時期に北薩にみられる口縁部が平坦なものである。出土地点は、調査区北方のM・L-35・36区に集中する。18類土器は、後期前半期の阿高・指宿式の底部と思われるものである。324は指宿式の底部である。底部にはモジリ編みと網代圧痕、黄白色の付着物がみられる。

19類土器は上加世田式に比定される。20類は後期末の浅鉢の口縁部である。332・334は上加世田・入佐式、333は三万田式に相当すると思われる。21類土器は黒川式に比定される。337は計志加里遺跡から出土している貝殻条痕による器面調整の深鉢形土器に類似している（鹿県埋セ2002）。22類土器は、晩期の無刻目突帯文土器である。23類は、晩期の刻目突帯文土器の可能性のあるものである。

24類土器は型式不明のものを一括した。341・345は、器面調整の点からみて早期末～前期初頭の条痕文土器に似る。

3. 耳栓

IV層より耳栓が1点出土している。IV層出土土器は主に縄文時代早期の1～4類土器である。これは南九州における他遺跡の耳栓の出土時期と矛盾せず（新東1993）、堂園平遺跡においても早期後半の時期に該当すると考える。

4. 石器

縄文石器の石材別・器種別比率は第17表で示した。縄文石器は時期判別が困難であることを前提とするが、器種別でみると石鏃が25%弱を占め、石錐・石斧など工具類の比率が少ない。

5. 小結

本遺跡の土器は、早期後葉～前期初頭の塞ノ神式・条痕文土器・轟式、中期の深浦式などがやや多く出土しているが、縄文時代早期～晩期に至る各時期にわたる土器が出土している。また、特に塞ノ神式、轟式など、完形となる土器が各時期に数個体ずつみられるのも特徴的である。このようなことや、出土石器の器種、検出遺構の性格などから考えて、キャンプサイトのような利用が想定されよう。（文責：寒川）

引用・参考文献

秋成雅博2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観—A T上位石器群—」『旧石器考古学』66
鎌田洋昭1999「今峠型ナイフ形石器について」『人類史研究』11
河口貞徳1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』19
木崎康弘1985「熊本県大丸・藤ヶ迫遺跡の塞ノ神式土器について」『塞ノ神式土器』
鹿児島県教育委員会1975『花ノ木遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（1）
鹿児島県教育委員会1977『指辺遺跡・横峯遺跡・中之峯遺跡・上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
鹿児島県教育委員会1980『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
鹿児島県教育委員会2005『先史時代の鹿児島—仁田尾遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター1996『小牧3A遺跡・岩本遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書15
鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書38
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『山ノ脇遺跡ほか』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書58
鹿児島県立埋蔵文化財センター2005a『桐木耳取遺跡I』鹿児島県立埋蔵文化財センター91
鹿児島県立埋蔵文化財センター2005b『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書87
金峰町教育委員会1998『上水流遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書9
金峰町教育委員会2004『箕作遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書18
小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点』
相美伊久雄2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』12
相美伊久雄2006「条痕文土器と縄文施文土器」『大河』8
新東晃一1988「塞ノ神式土器再考」『永井昌文教授退官記念論文集・日本民族・文化の生成』
新東晃一1993「縄文時代の二つの耳飾り」『南九州縄文通信』7
新東晃一1999「九州地方早期（貝殻文円筒土器）」『縄文時代』10
桑波田武志・宮田栄二1997「鹿児島県における旧石器時代の現状と課題」『鹿児島考古』31
柴畑光博1998「東南部九州のテフラと平杵式土器・塞ノ神式土器の出土層位」『九州縄文土器編年の諸問題』
柴畑光博2002「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』41（4）
柴畑光博・東和幸1997「南九州の火山灰と考古遺物」『月刊地球』214
高橋信武1998「縄文早期後葉の九州」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会
高橋信武1997「轟式土器再考」『考古学雑誌』75
多々良友博 1985「塞ノ神式土器群の文様構成—その分類と

変遷の位置づけ—」『塞ノ神式土器』

橘昌信1978「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査（1）今峠遺跡」『別府大学博物館研究報告』2

堂込秀人1994「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式—苦浜式の認定—」『考古学ジャーナル』378

中村愿1982「曾畑式土器」『縄文文化の研究』3

南種子町教育委員会 1993『横峯遺跡』南種子町埋蔵文化財調査報告書（4）

萩原博文2004「ナイフ形石器文化後半期の集団領域」『考古学研究』51—2

東和幸1991「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』5

松藤和人1992「南九州における始良T n火山灰降灰直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』

宮崎県埋蔵文化財センター2003『北牛牧第5遺跡・銀座第3A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集

宮田栄二1995「始良火山噴火後のナイフ形石器文化—南九州の石器文化」『始良火山噴火後の九州とその人びと』九州旧石器文化研究会20回研究会・シンポジウム資料集

宮田栄二1988「南九州細石器文化—福井型細石刃核の波及について—」『鹿児島考古』22

宮田栄二1996「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集

宮田栄二1998「南九州の旧石器文化」『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料集』

宮田栄二2002a「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」『Stone Sources』1

宮田栄二2002b「南九州ナイフ形石器文化の集団と領域に関する予察—西丸尾遺跡を遺した集団の活動領域と移動」『九州旧石器』第6号

宮田栄二2004a「九州地方—九州細石刃石器群の東西対極構造と集団—」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会20周年記念論集

宮田栄二2004b「剥片尖頭器と三稜尖頭器—折れと破損率及び使用痕からの視点」『山下秀樹氏追悼考古論集』

宮田栄二2005a「旧石器時代の編年的研究—東南九州—」『旧石器時代の地域編年とその比較』東京大学大学院人文社会科学系研究科考古学研究室・公開シンポジウム実行委員会

宮田栄二2005b「鹿児島の旧石器時代—最近の調査成果より—」『鹿児島大学総合研究博物館 第10回研究交流会』

宮之城町教育委員会 1985『大畝町園田遺跡』宮之城町文化財調査報告書（1）

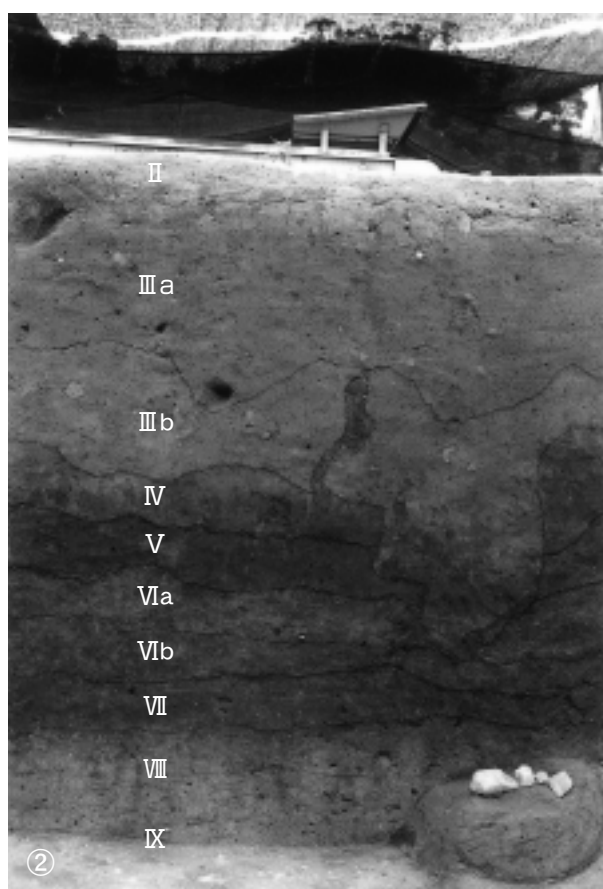
矢野健一2005a「九州南部における縄文時代中期前葉の土器編年」『立命館大学考古学論集IV』

矢野健一2005b「土器型式圏の広域化」『西日本縄文文化の特徴』

綿貫俊一1989「今峠型ナイフ形石器の分布と地域差」『五馬大坪遺跡』天瀬町教育委員会



堂園平遺跡遠景



- ① I～K-35区北壁土層（a・b・c）断面図
② I-35区北壁土層（a）断面図
③ 調査風景





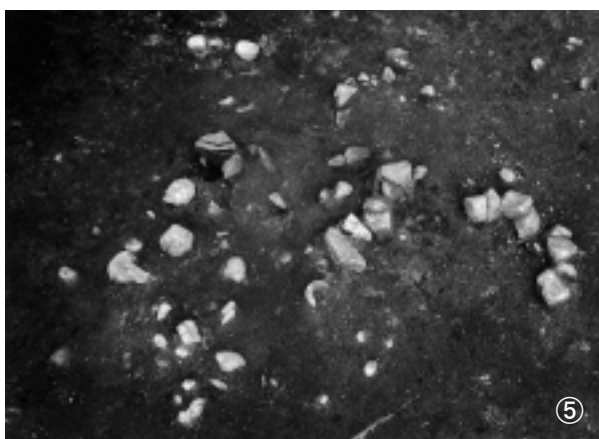
① VIII層1・2号礫群検出状況



② VIII層1号礫群検出状況



③ VIII層2号礫群検出状況



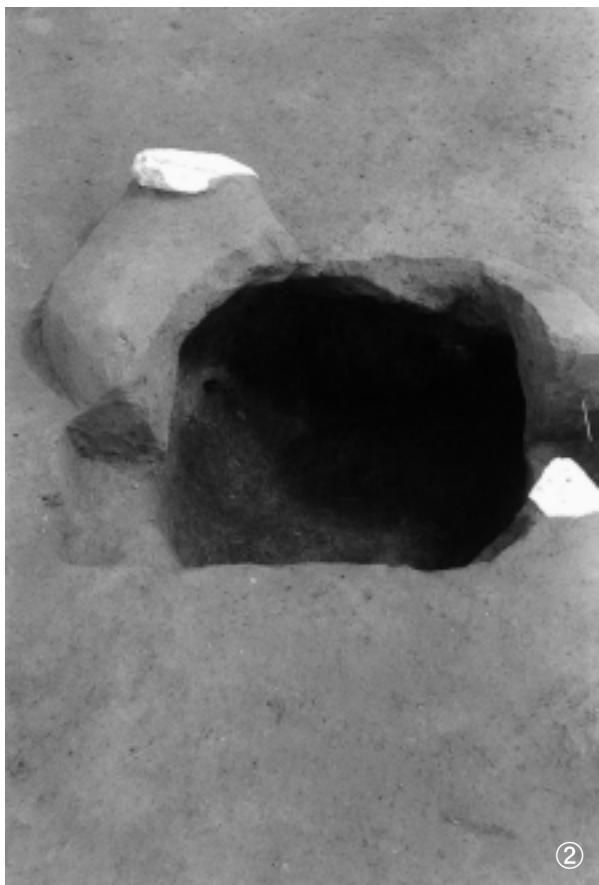
① Ⅷ層 3 号礫群検出状況
② Ⅷ層 5 号礫群検出状況
③ Ⅷ層 6 号礫群検出状況

④ Ⅷ層 7 号礫群検出状況
⑤ Ⅷ層 8 号礫群検出状況(1)
⑥ Ⅷ層 8 号礫群検出状況(2)
⑦ 剥片尖頭器出土状況



① VI層下層9号礫群検出状況(1)
② VI層下層9号礫群検出状況(2)
③ 1号集石検出状況

④ III b層検出6号土坑断面
⑤ III b層検出6号土坑完掘状況
⑥ III b層検出4・5号土坑完掘状況
⑦ IV層2号集石検出状況



① Ⅲb層検出2号土坑断面
③ Ⅲb層検出3号土坑断面

② Ⅲb層検出2号土坑完掘状況
④ Ⅲb層検出3号土坑完掘状況



① 炭化物集中地点



② 縄文時代遺物出土状況



③ 須恵器壺検出土坑断面



①



②



③

① Ⅲ b 層検出溝状遺構完掘状況

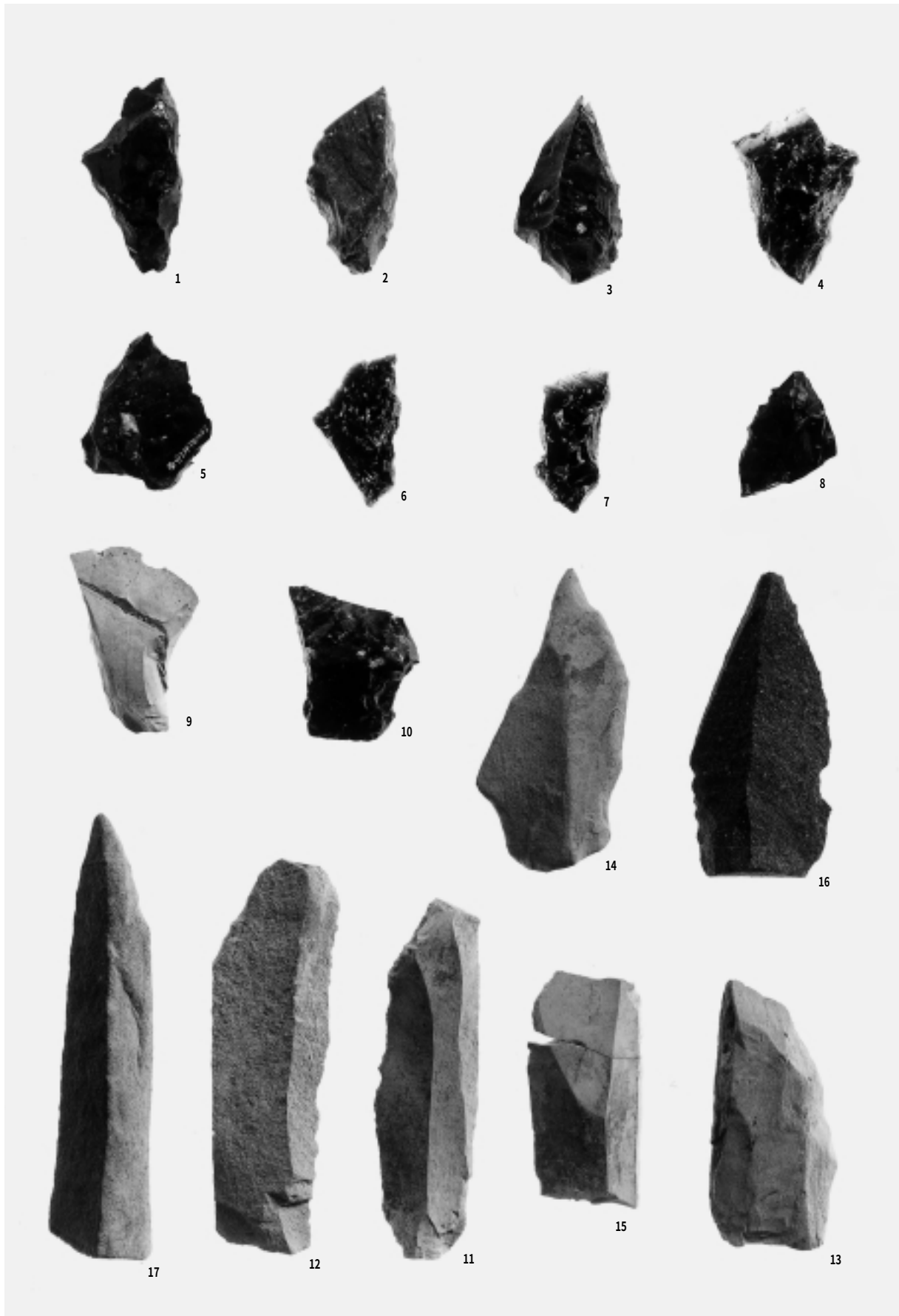
② 内黒土師器出土状況

③ 須恵器出土状況

④ 蛇紋岩製垂飾品出土状況

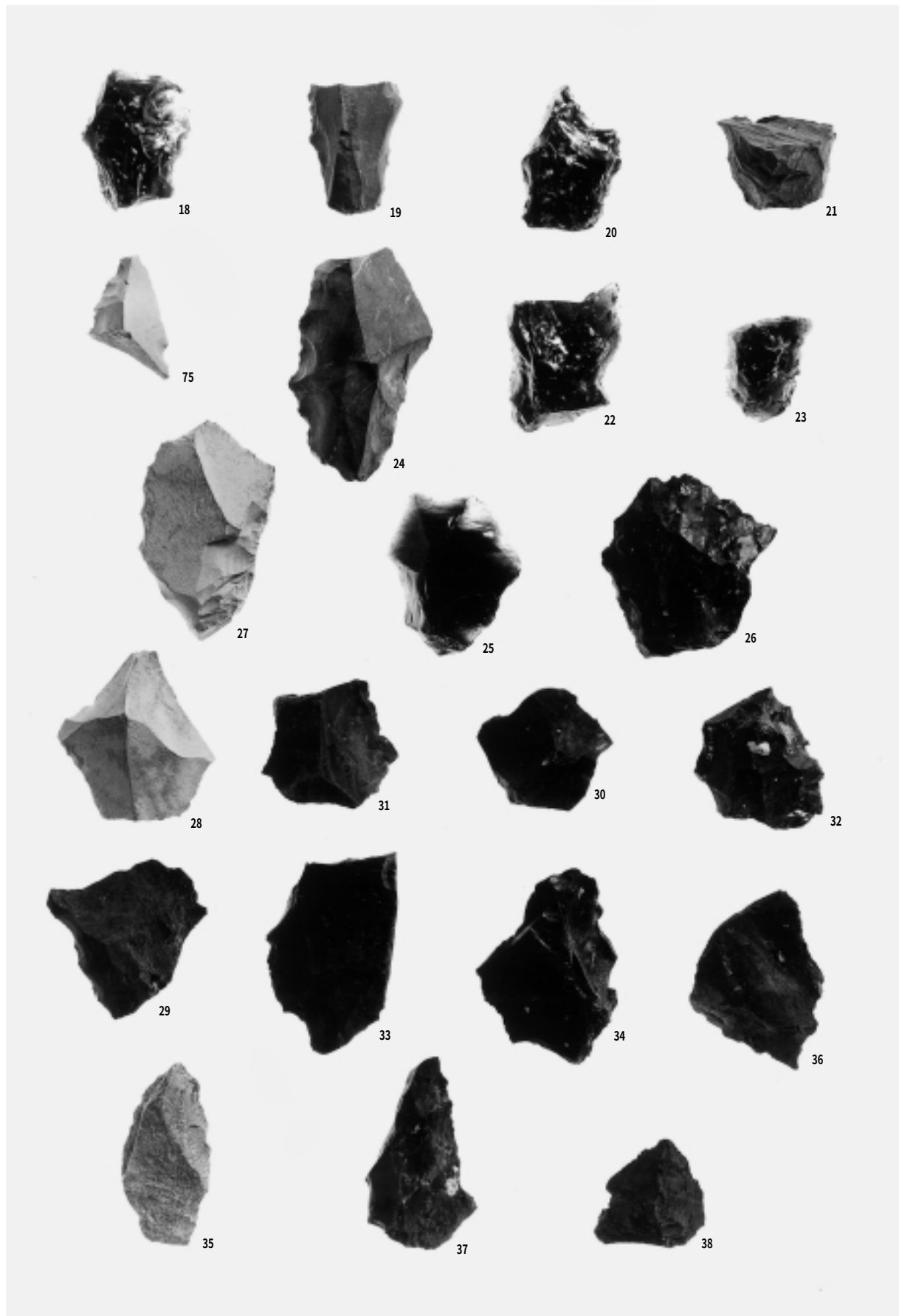


④

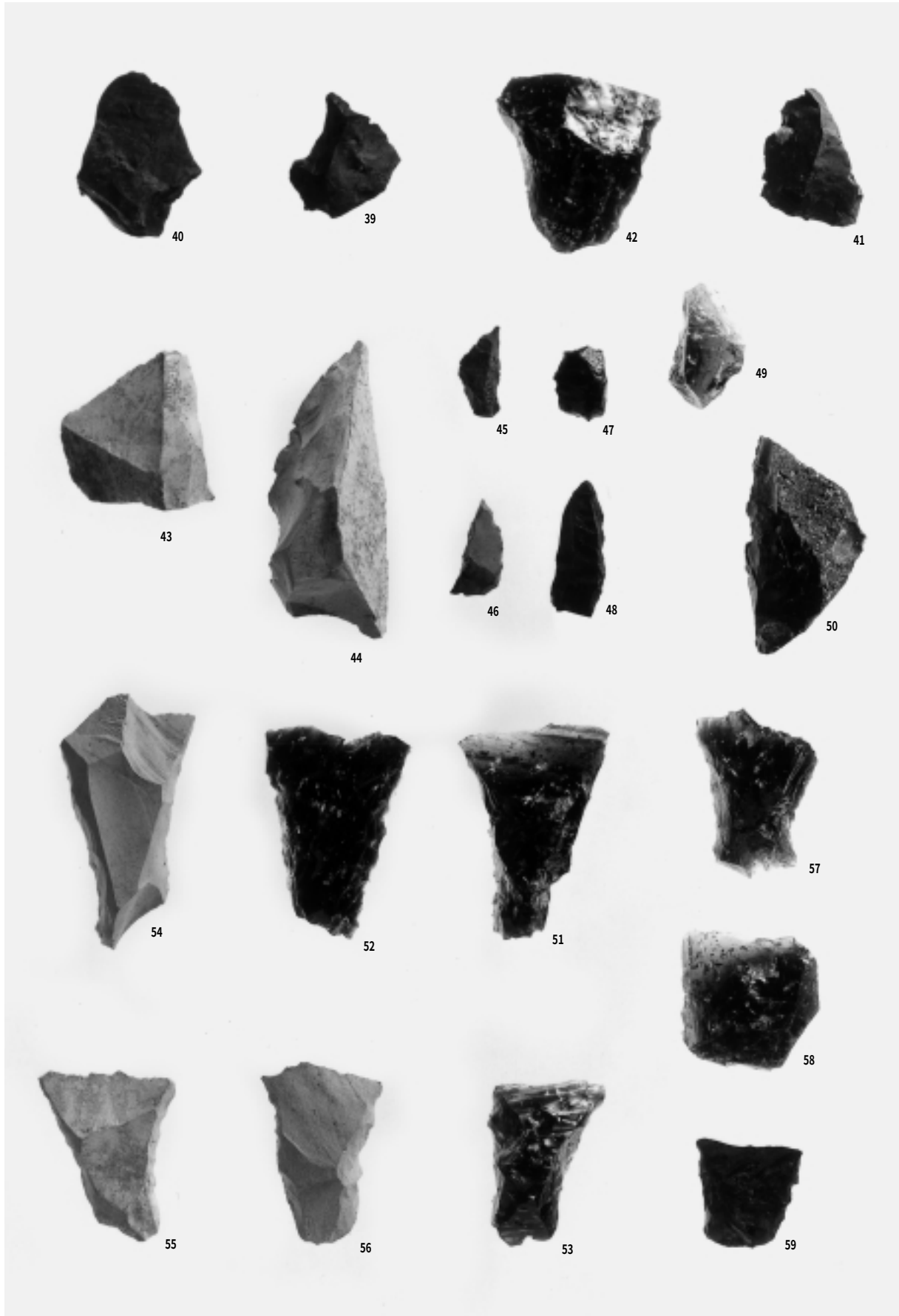


旧石器時代の遺物 1（ナイフ形石器）

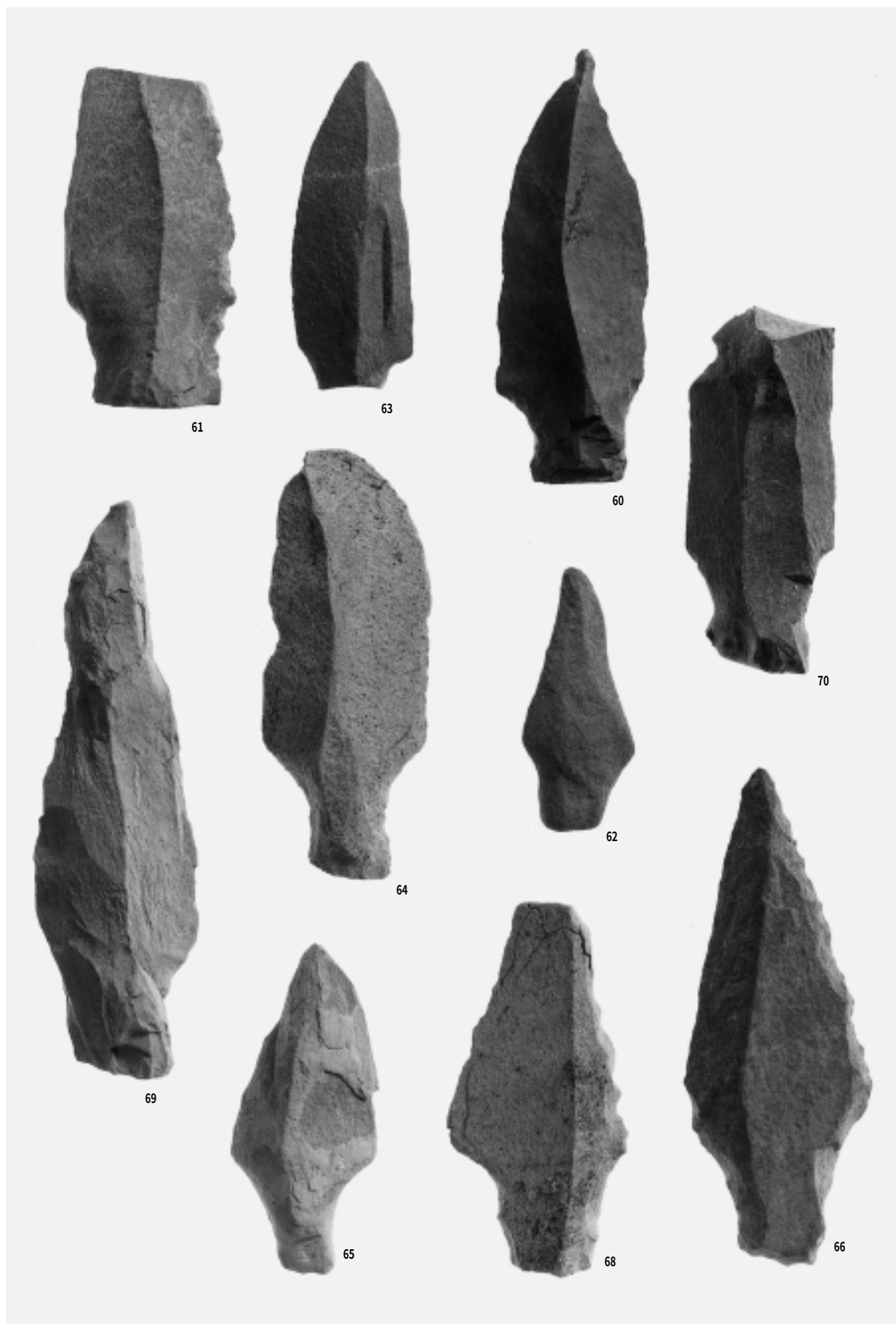
写真図版



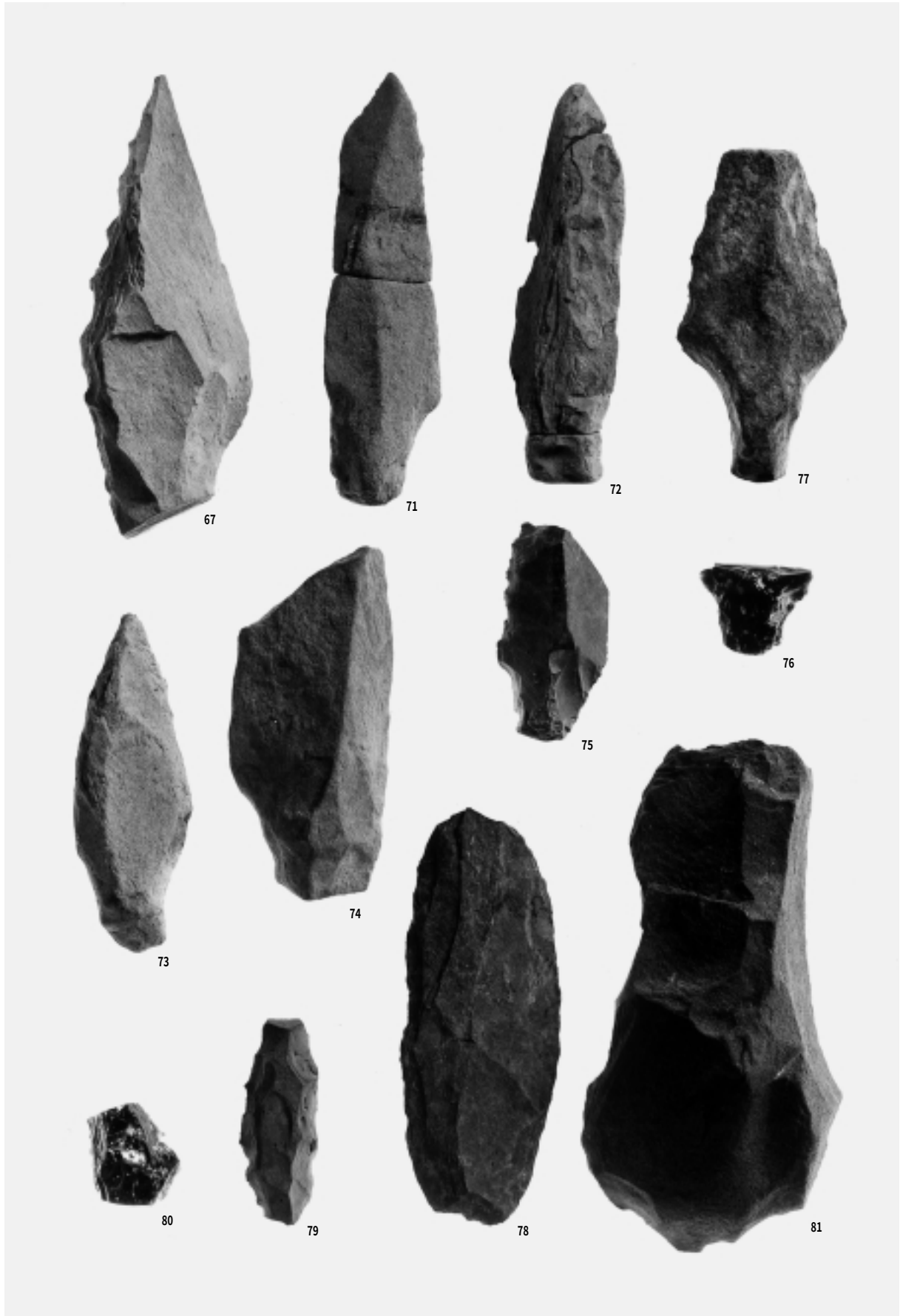
旧石器時代の遺物 2（ナイフ形石器）



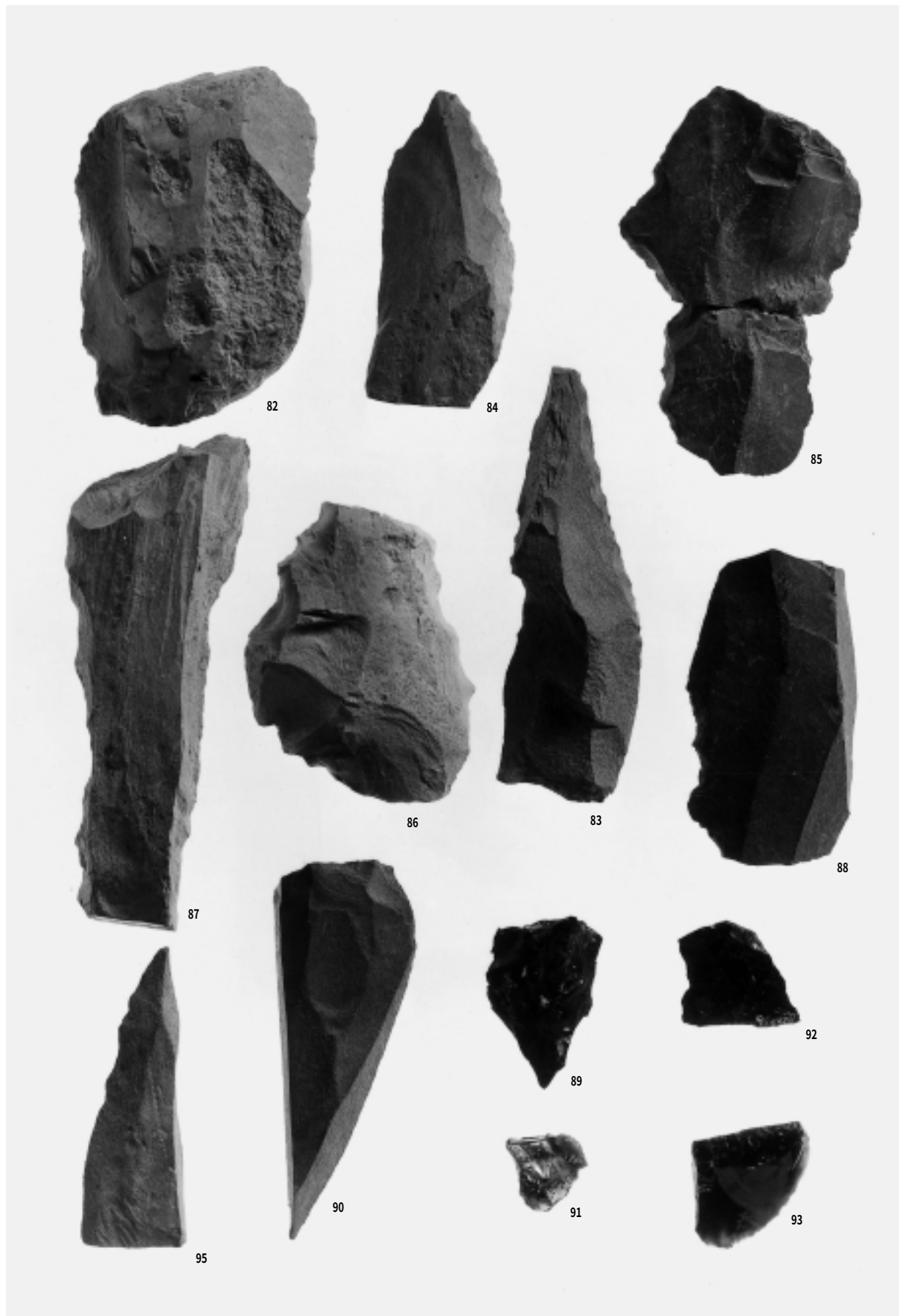
旧石器時代の遺物 3（ナイフ形・台形石器）



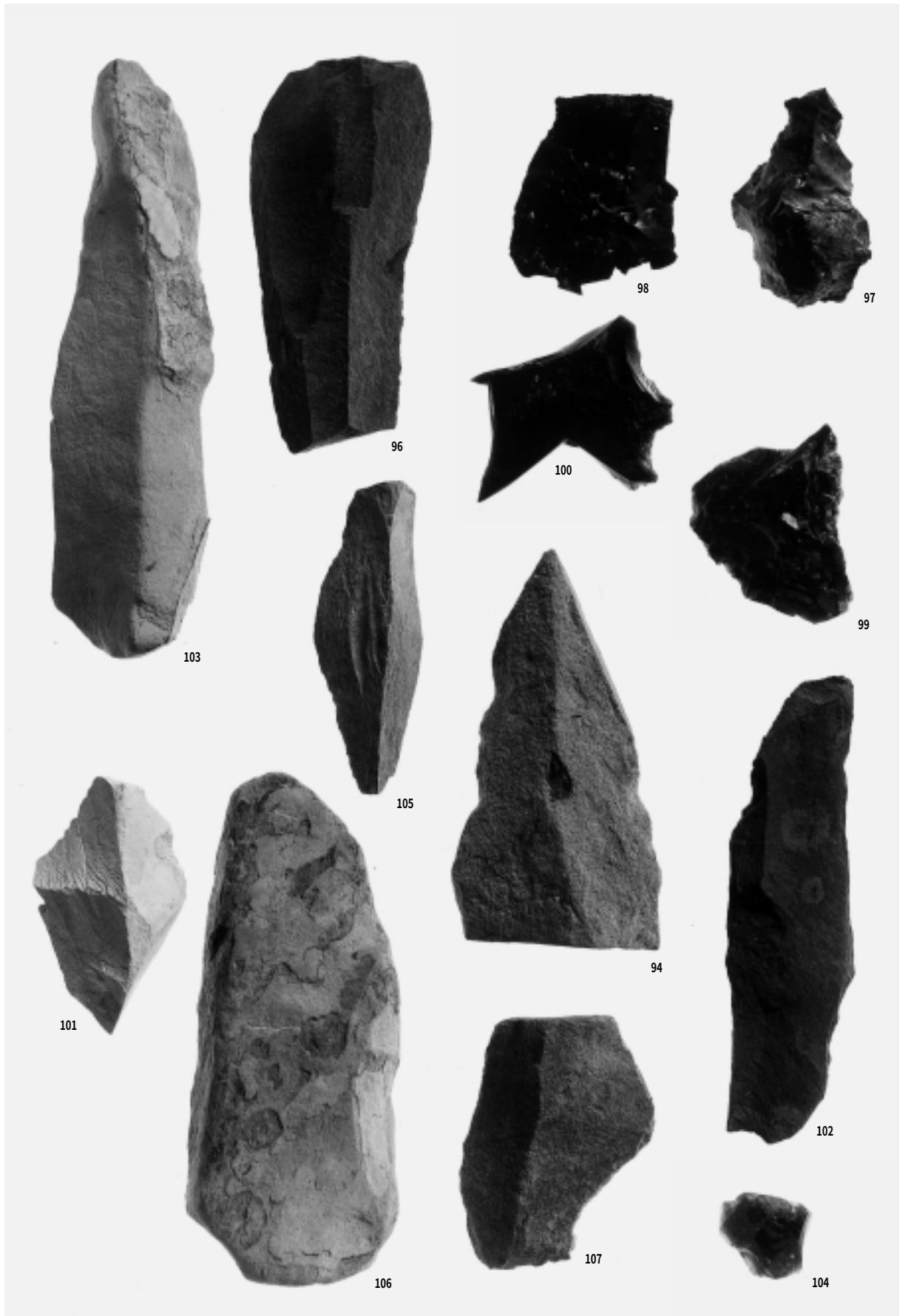
旧石器時代の遺物 4（剥片尖頭器）



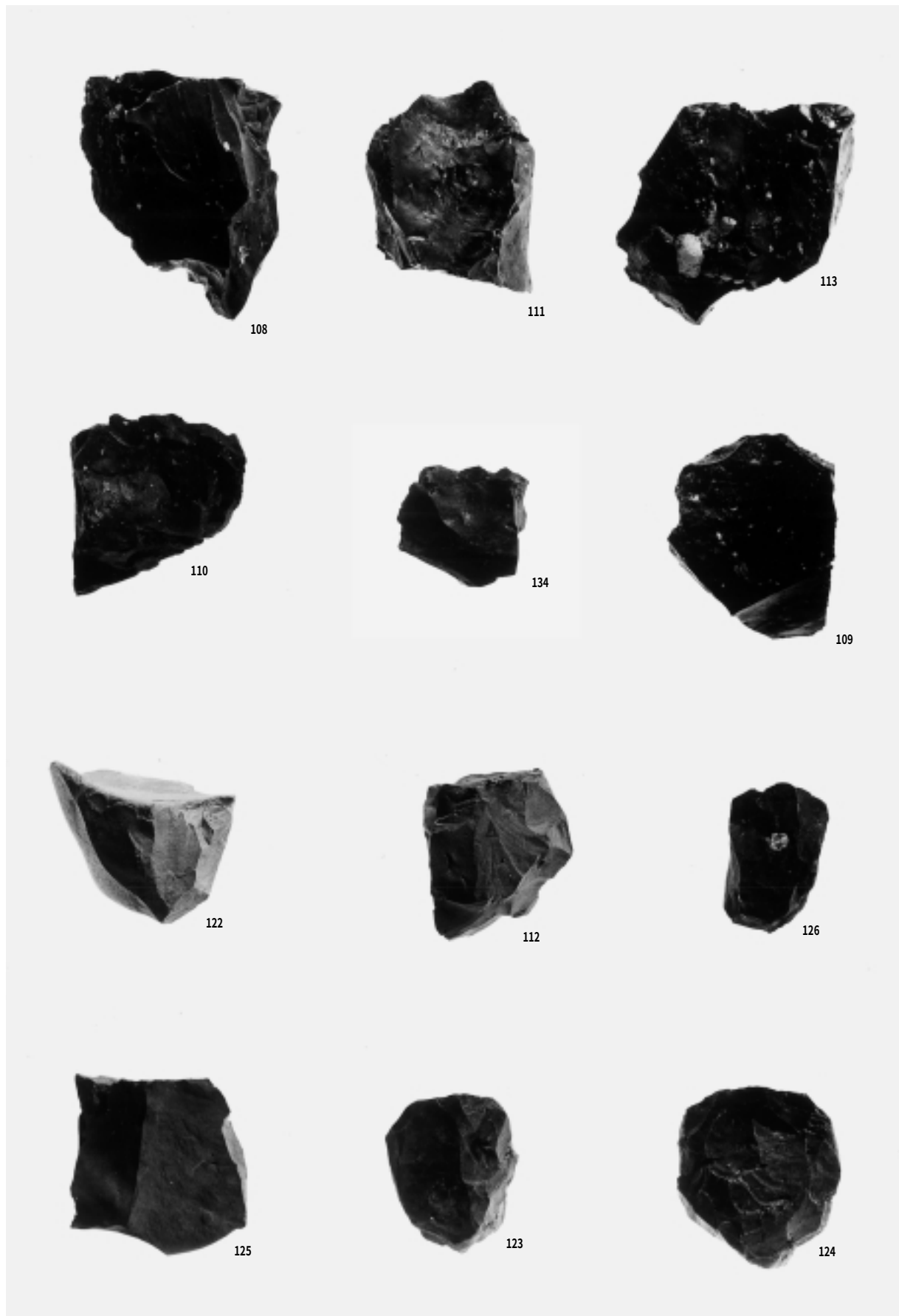
旧石器時代の遺物 5（剥片尖頭器・木葉形尖頭器・三稜尖頭器）



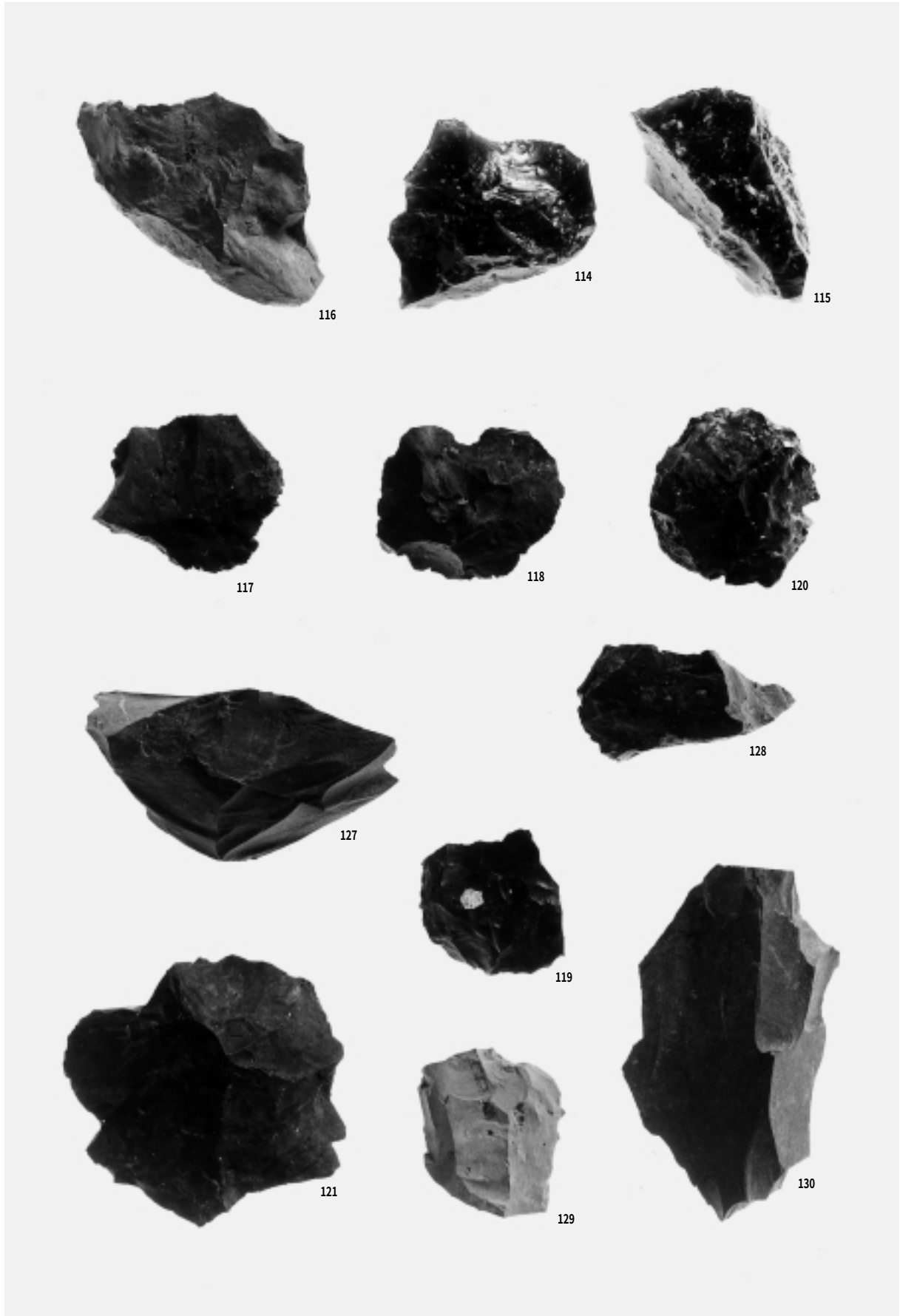
旧石器時代の遺物 6 (搔器・スクレイパー・二次加工剥片)



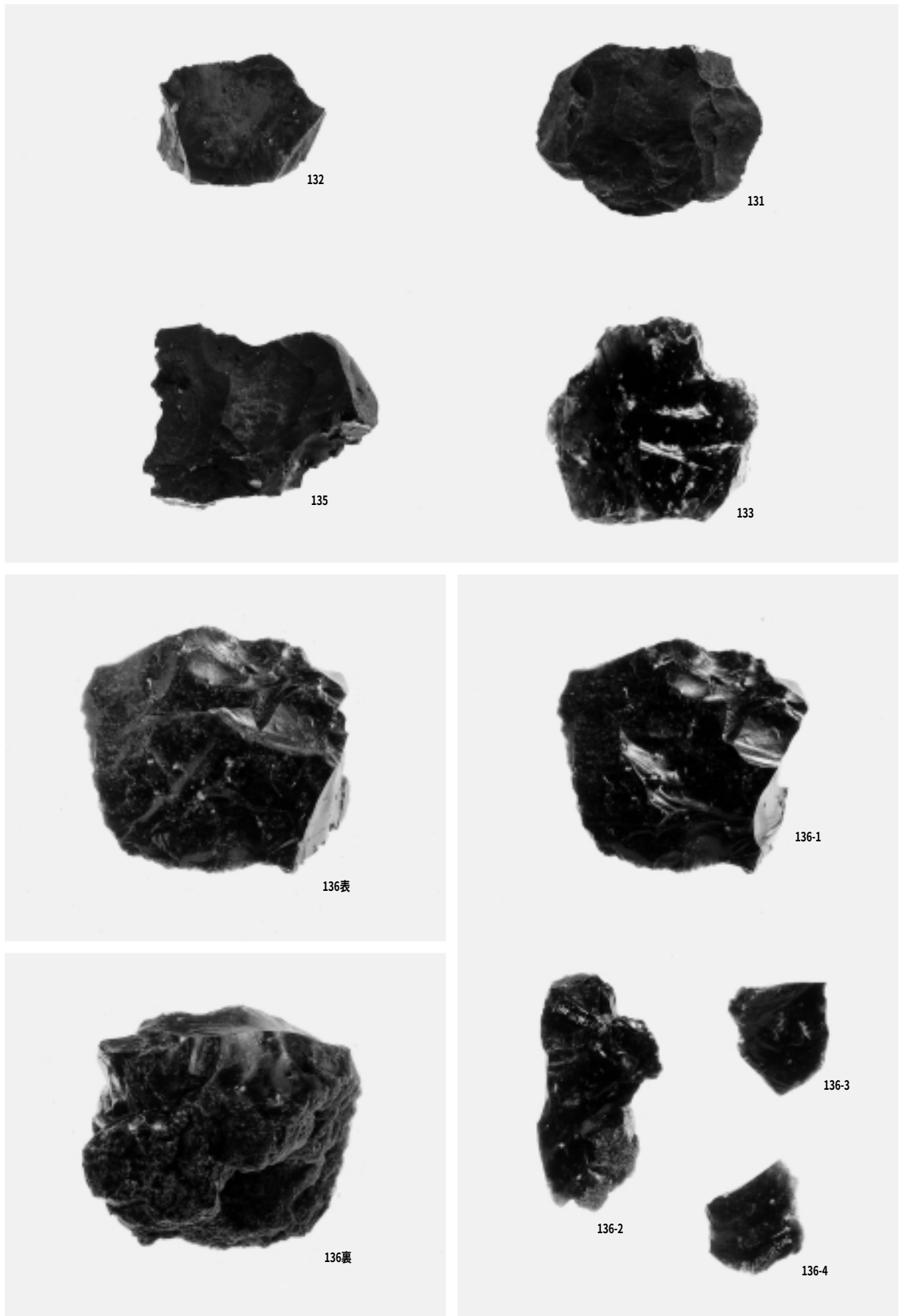
旧石器時代の遺物 7（二次加工剥片）



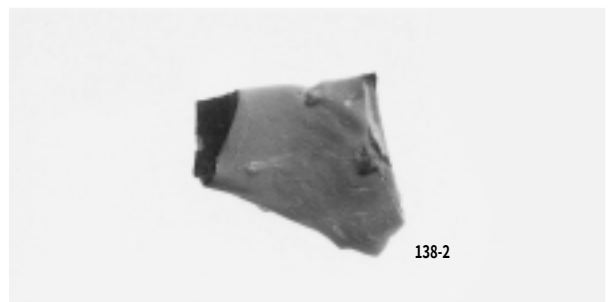
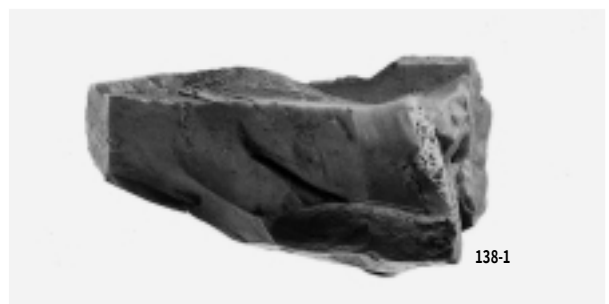
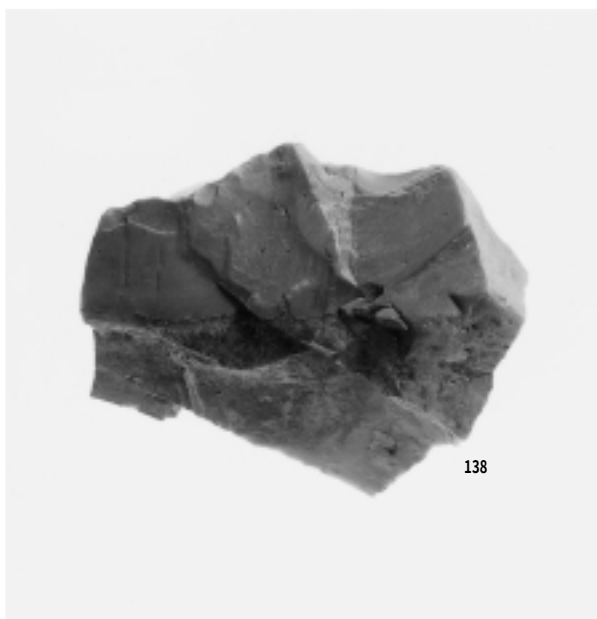
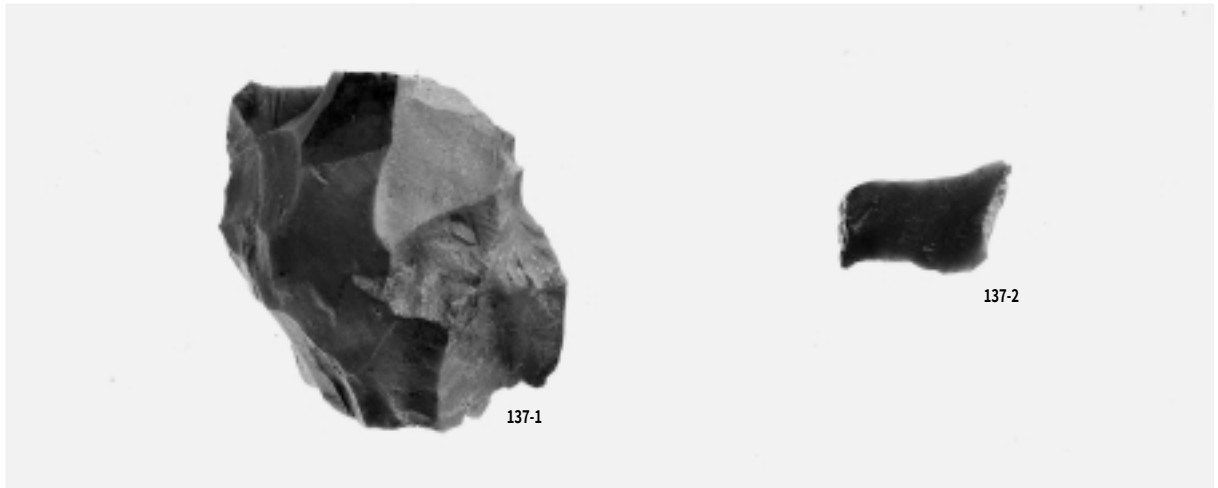
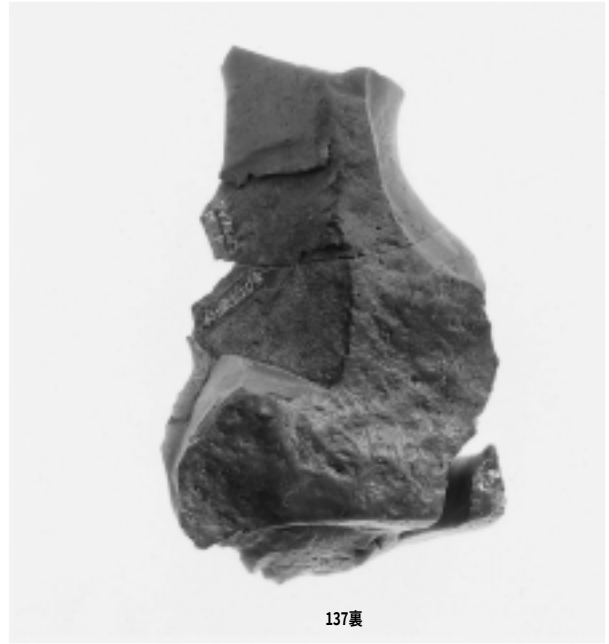
旧石器時代の遺物 8（石核）



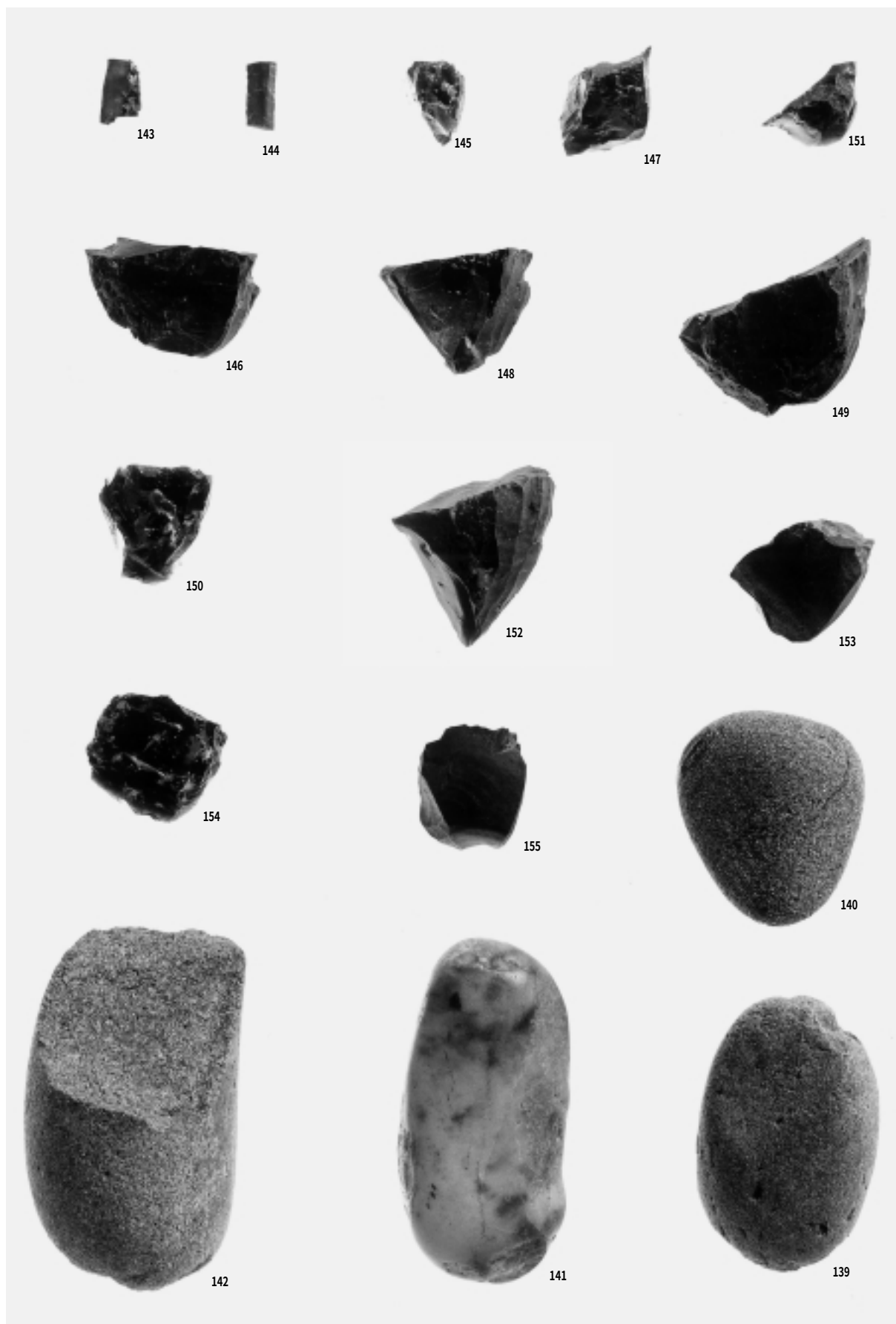
旧石器時代の遺物 9（石核）



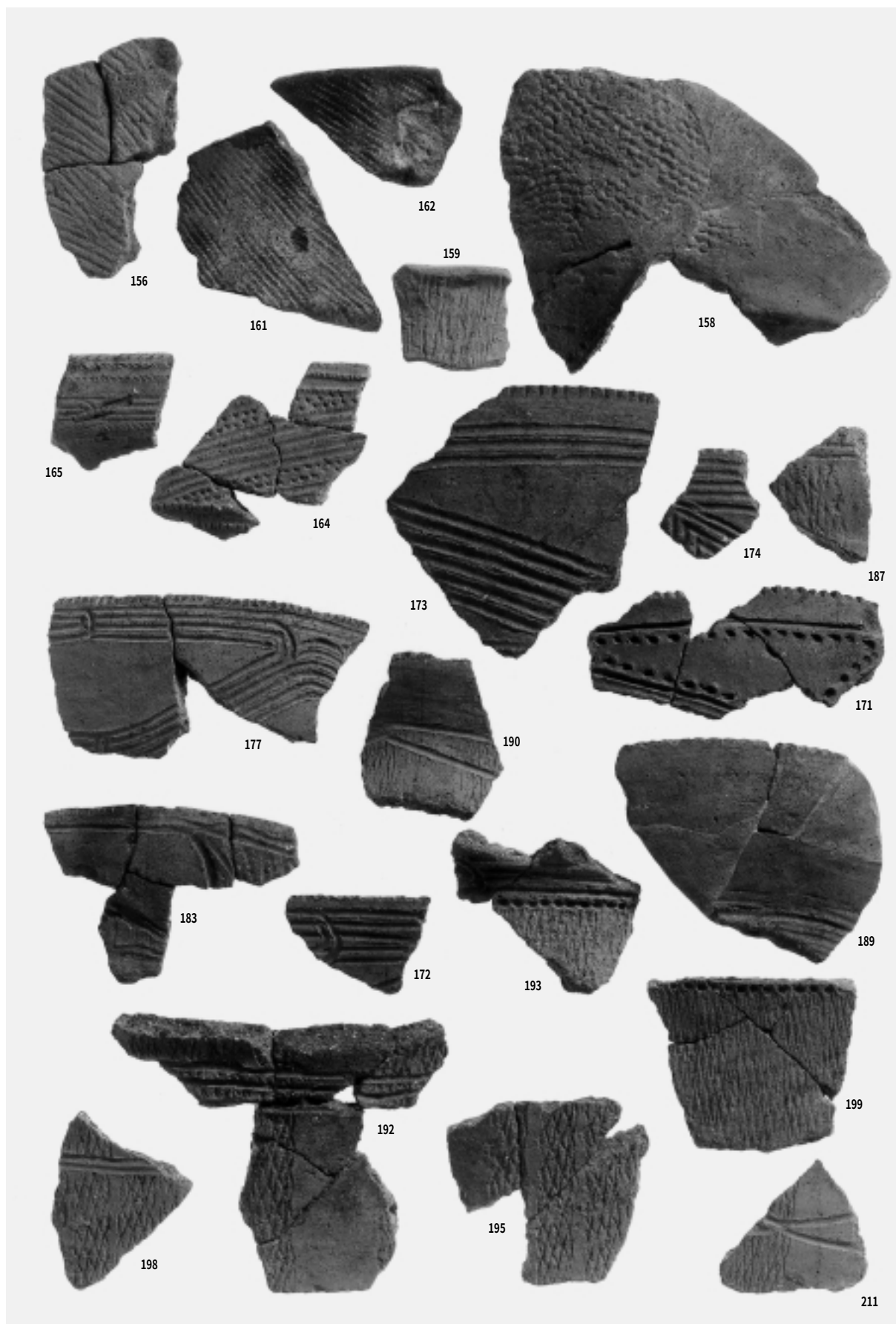
旧石器時代の遺物10（石核・接合資料）



旧石器時代の遺物11（接合資料）



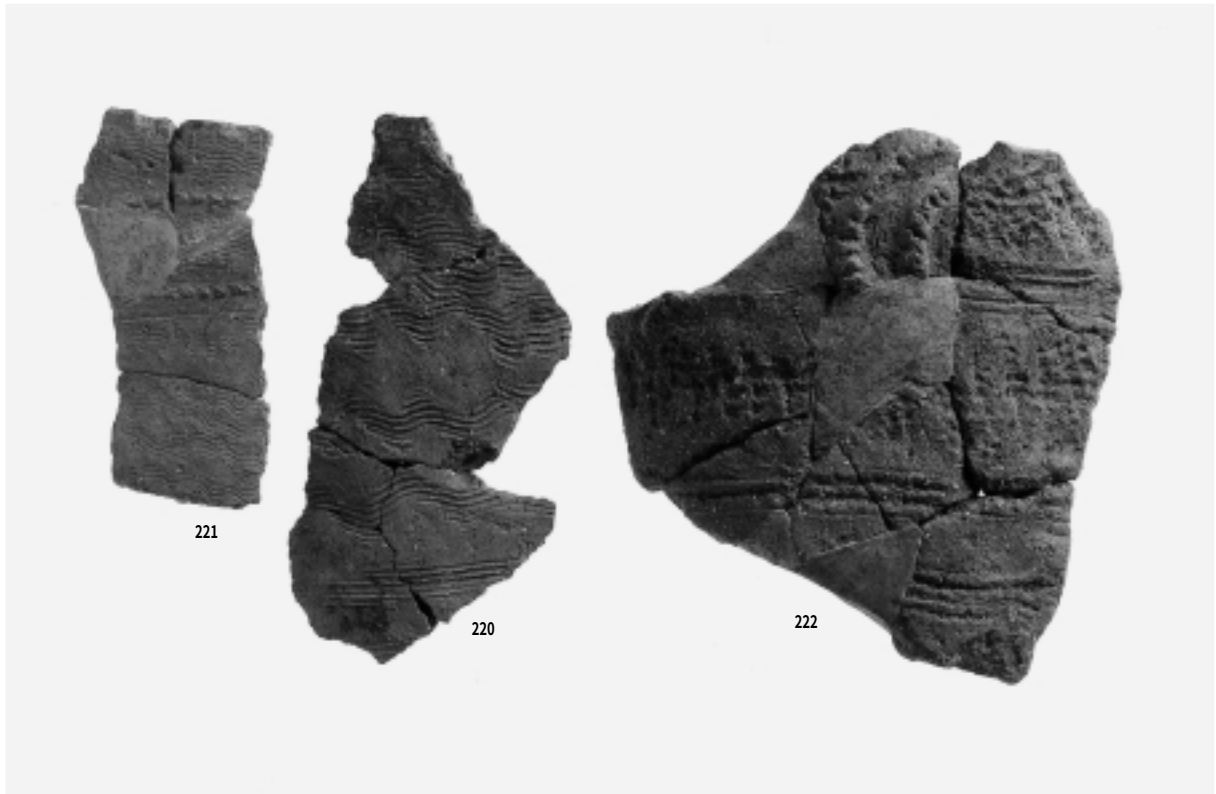
旧石器時代の遺物12（細石刃・細石刃核・ハンマーストーン）



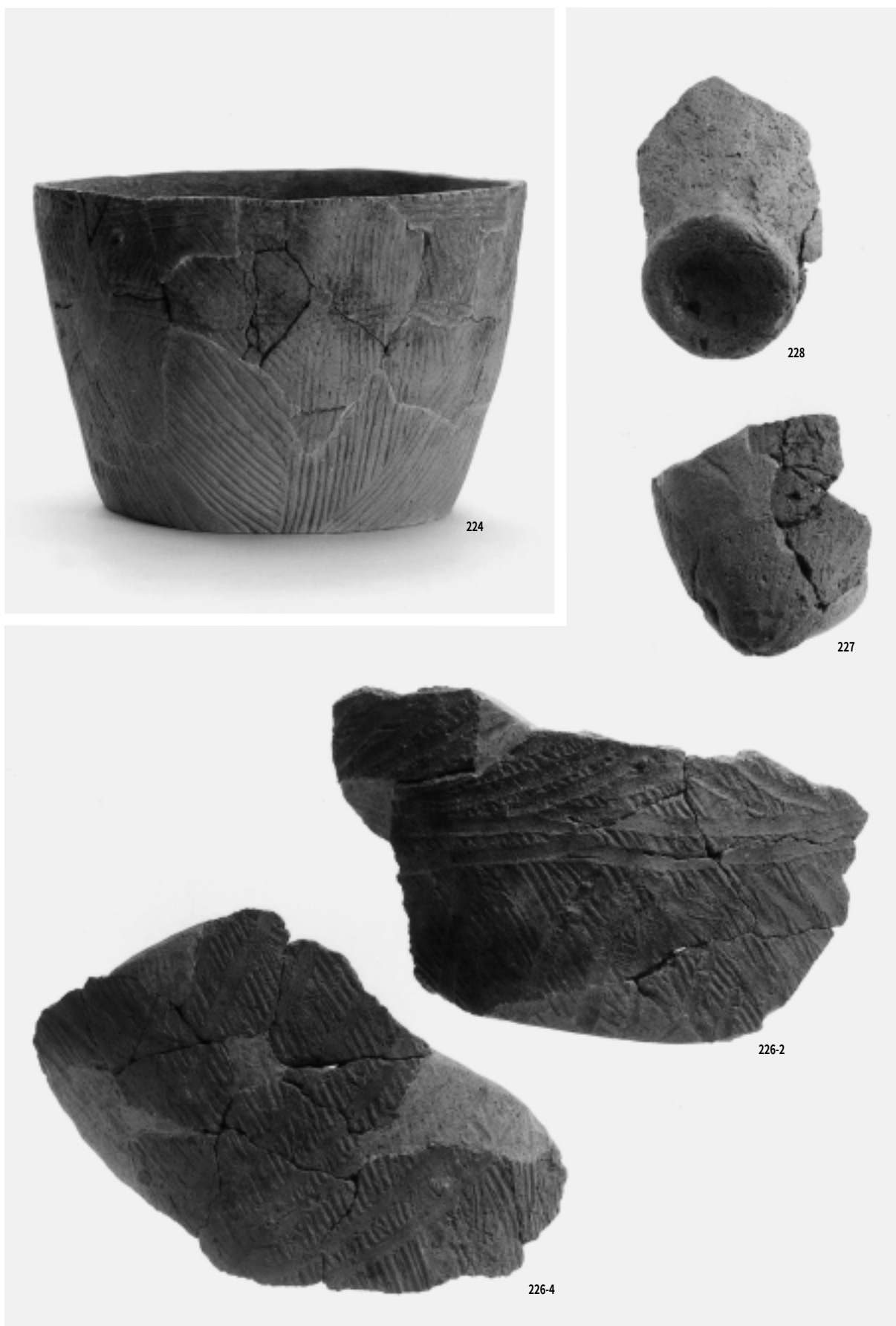
縄文時代の土器 1 (1～4 d 類)



縄文時代の土器 2 (4b・4e類)



縄文時代の土器 3 (5・6a類)



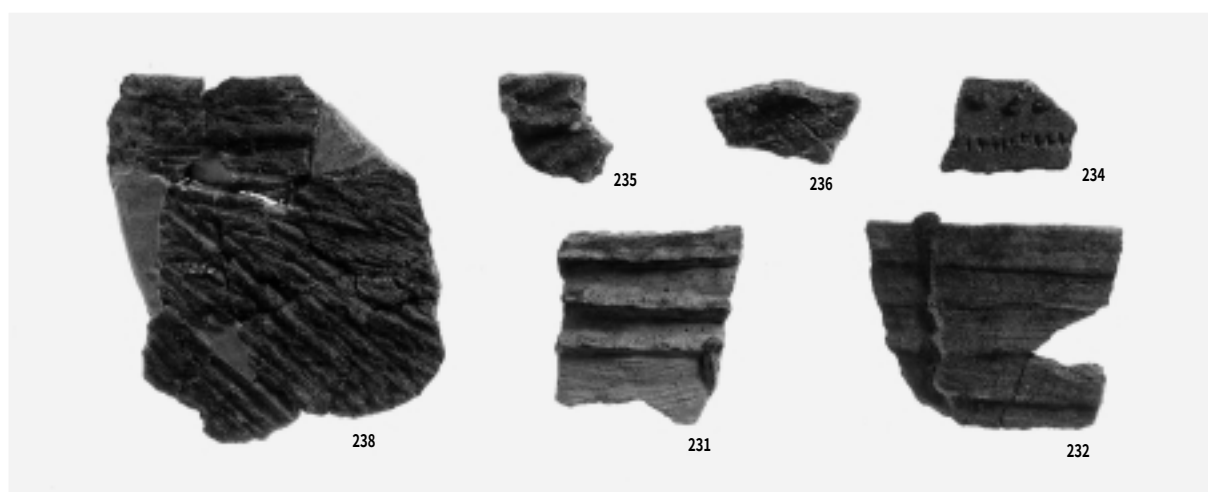
縄文時代の土器 4 (6a・6b類)



225



237



235

236

234

238

231

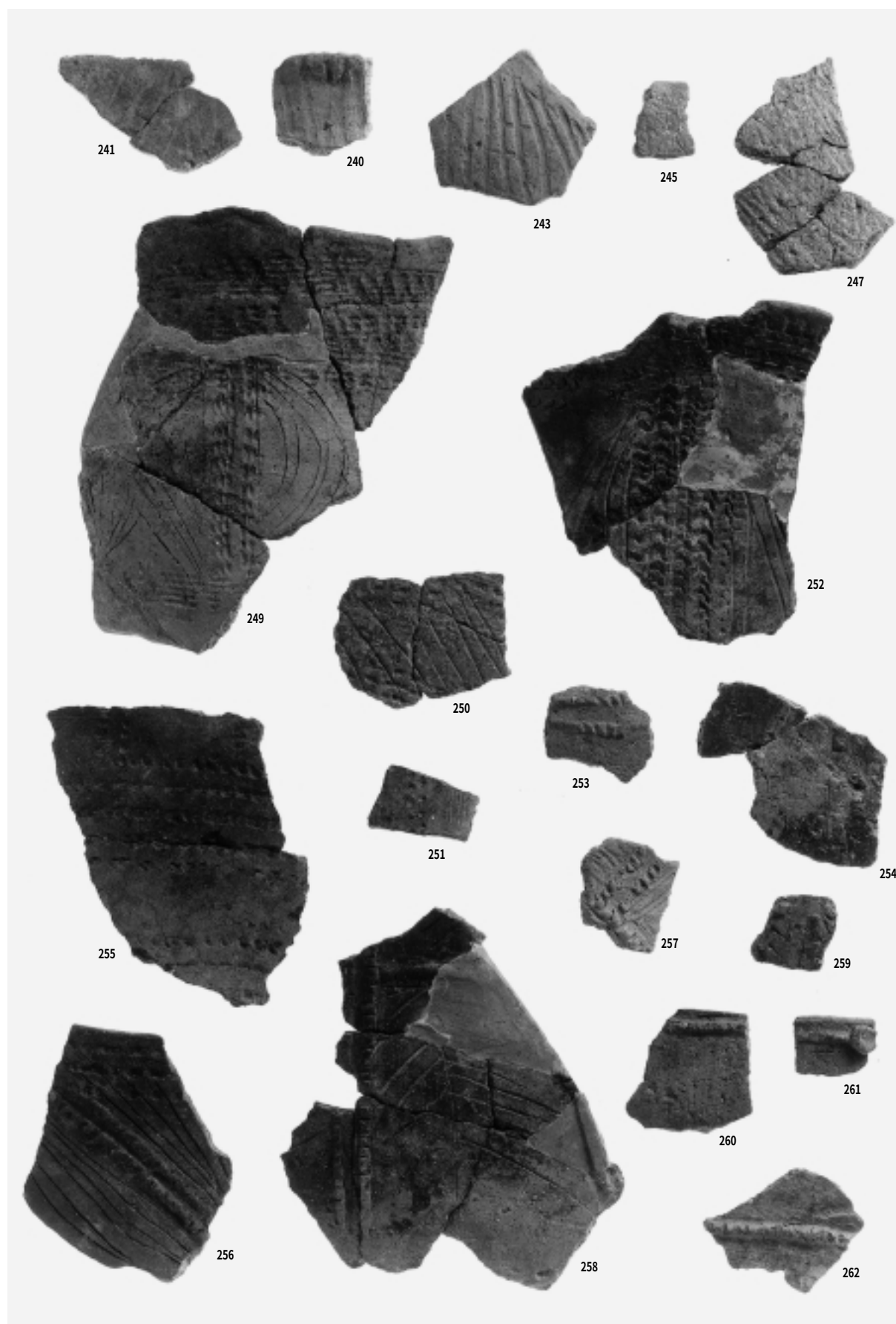
232

縄文時代の土器 5 (6c・7類)

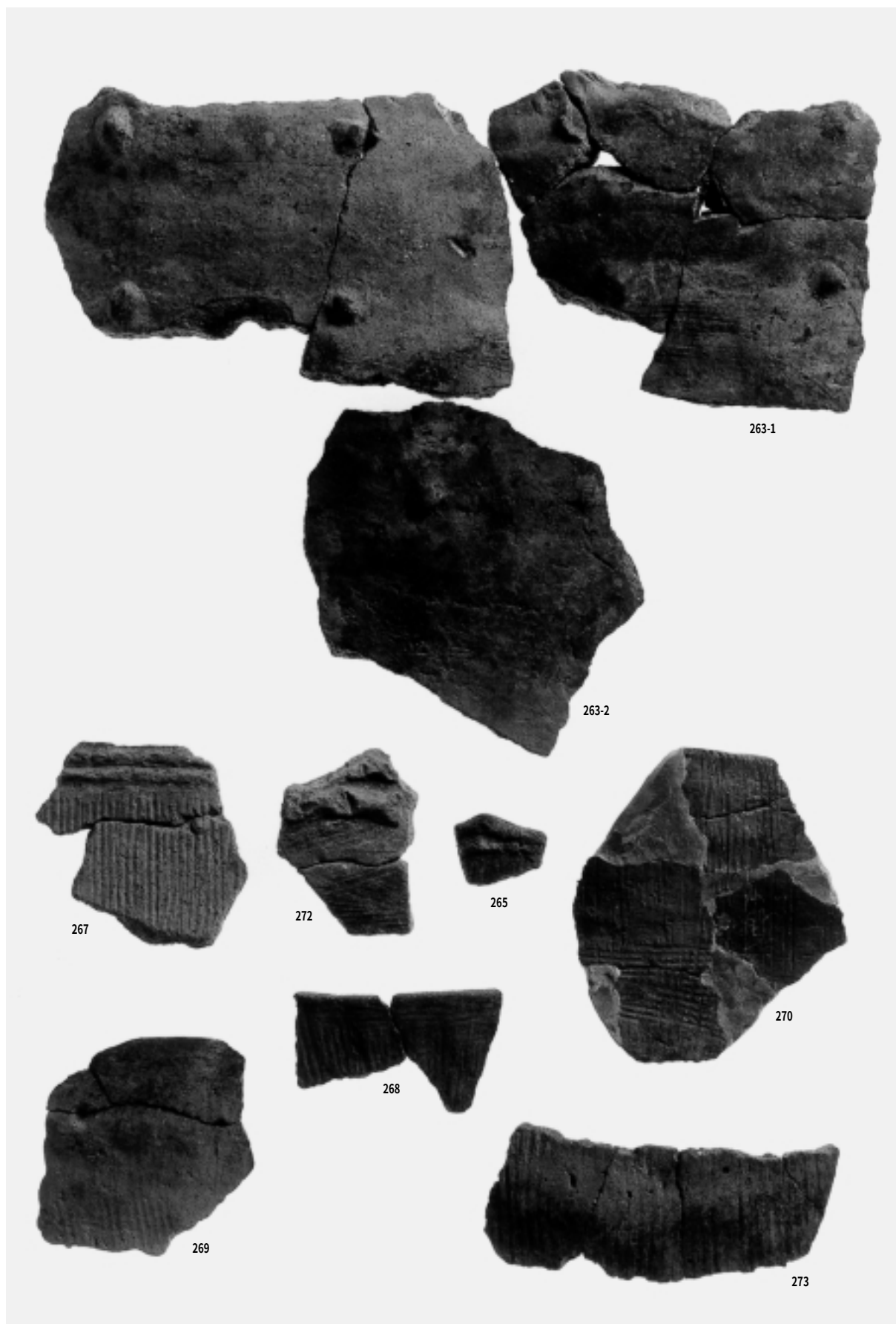


229

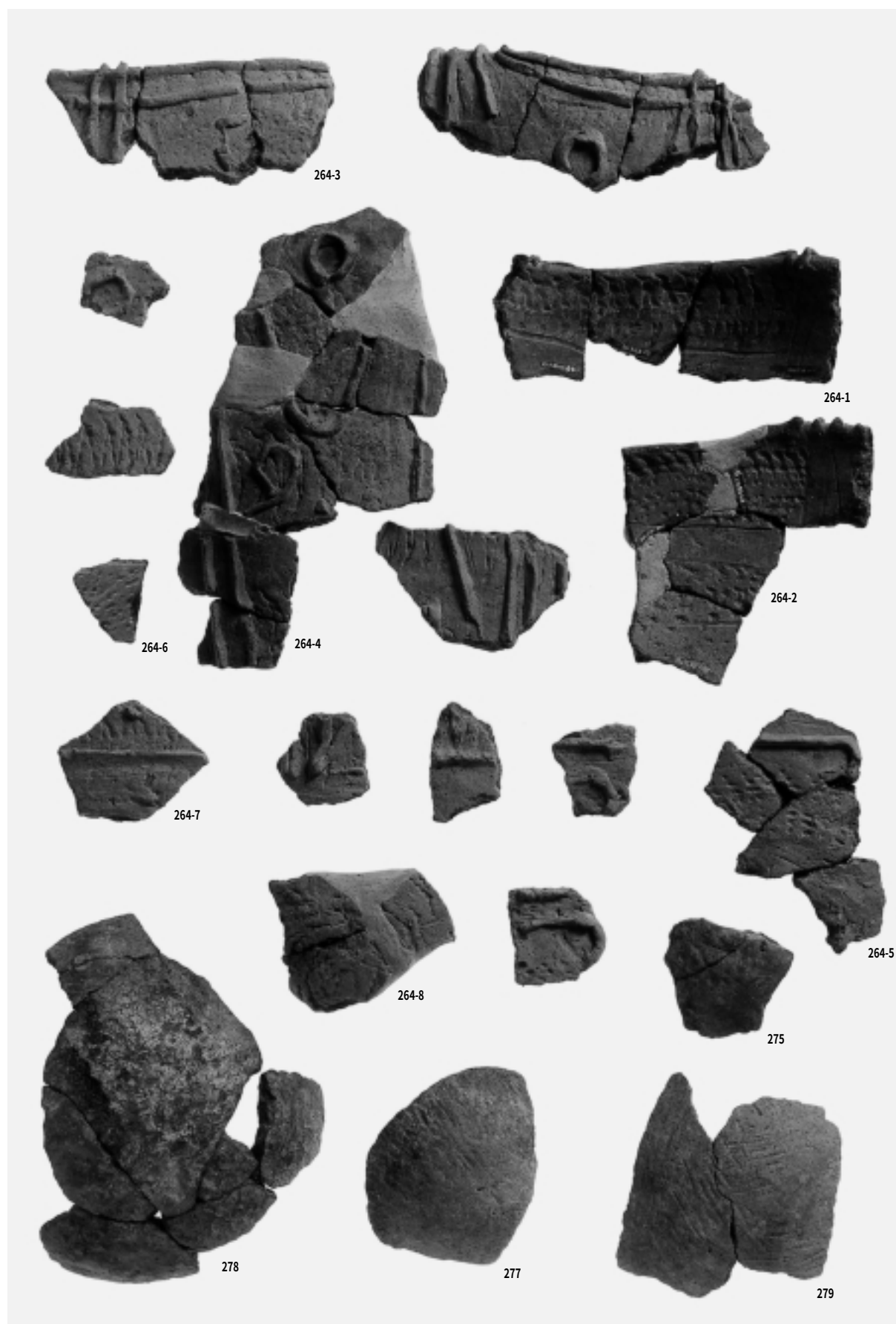
縄文時代の土器 6 (7b類)



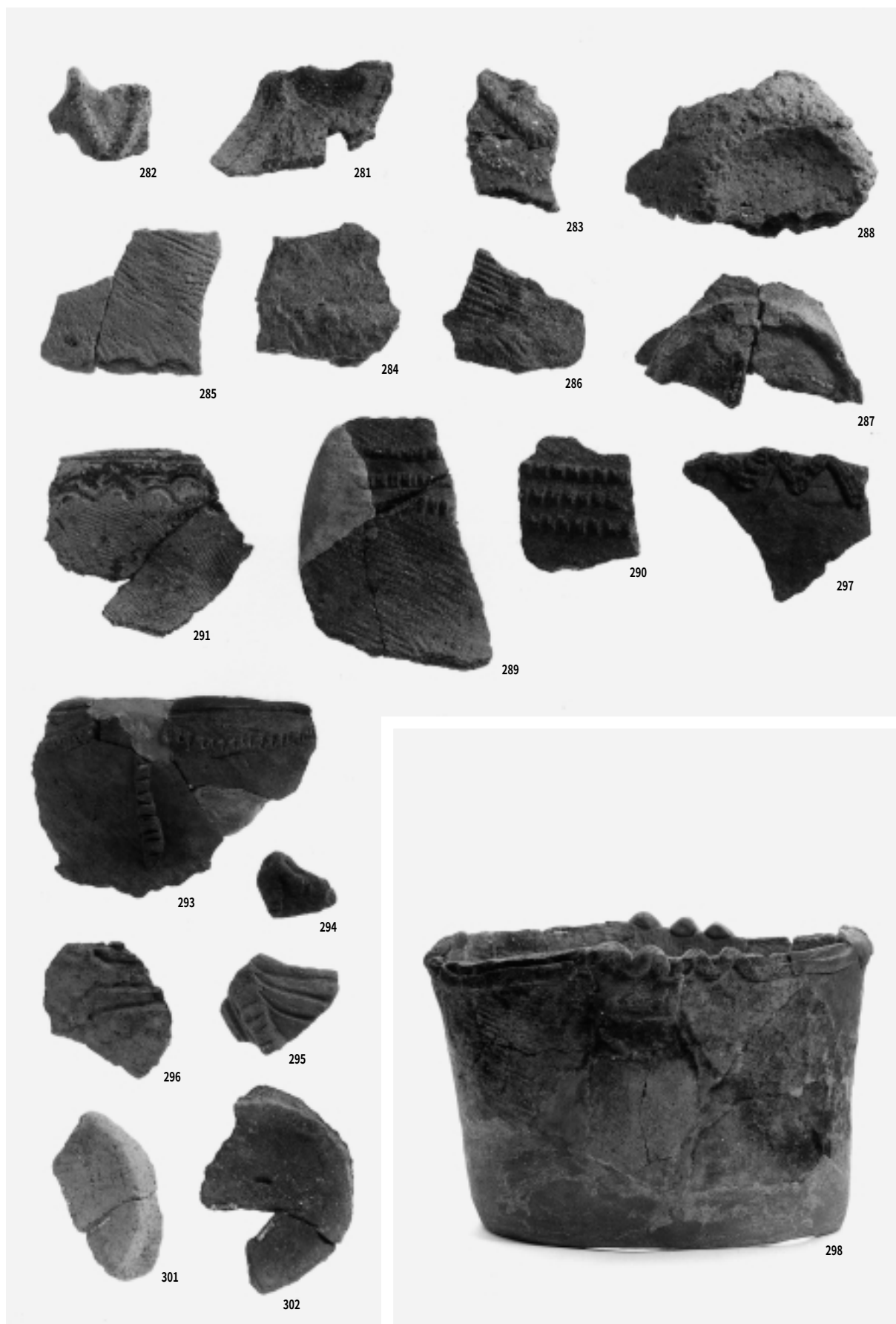
縄文時代の土器 5 (8・9類)



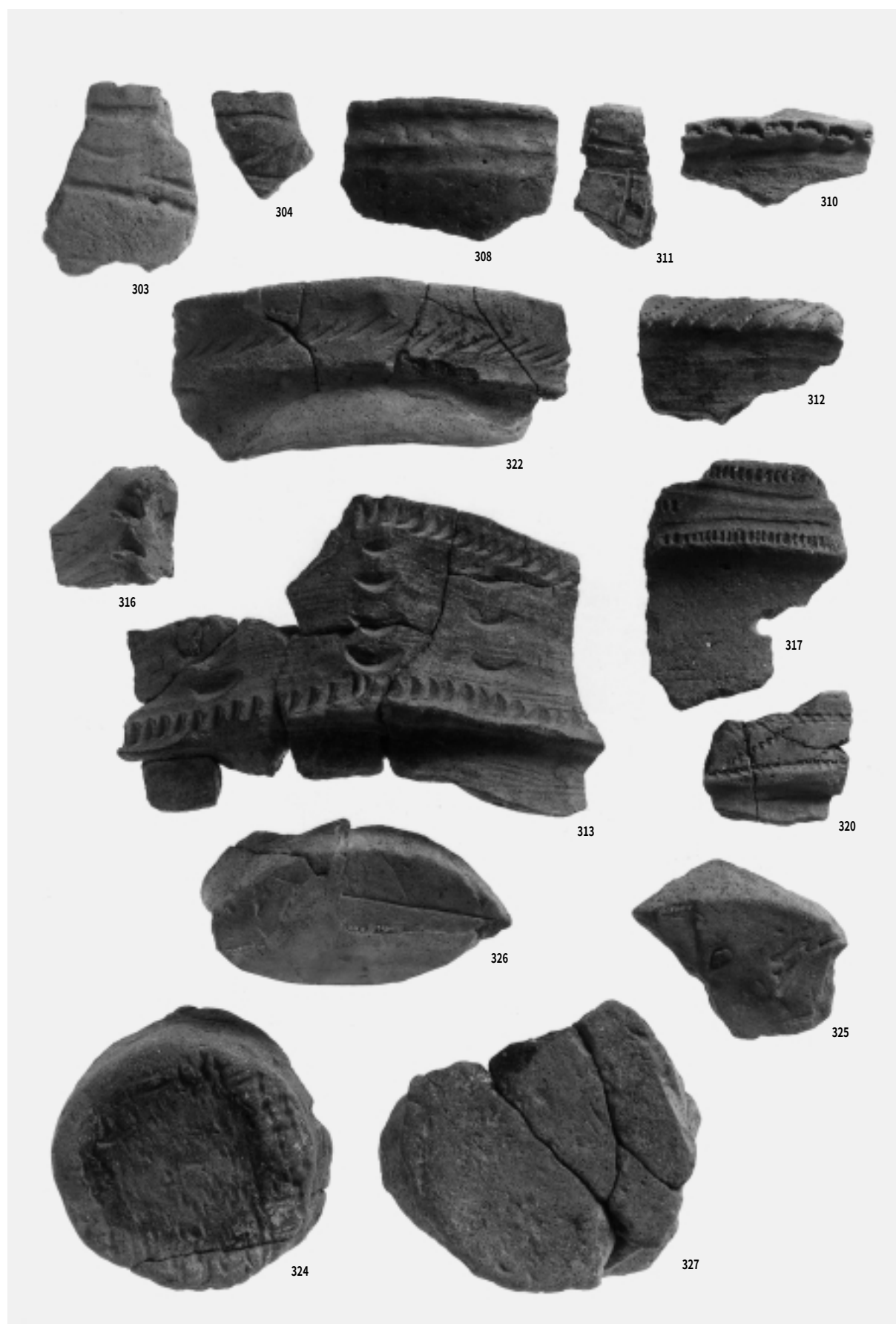
縄文時代の土器 6 (9・10類)



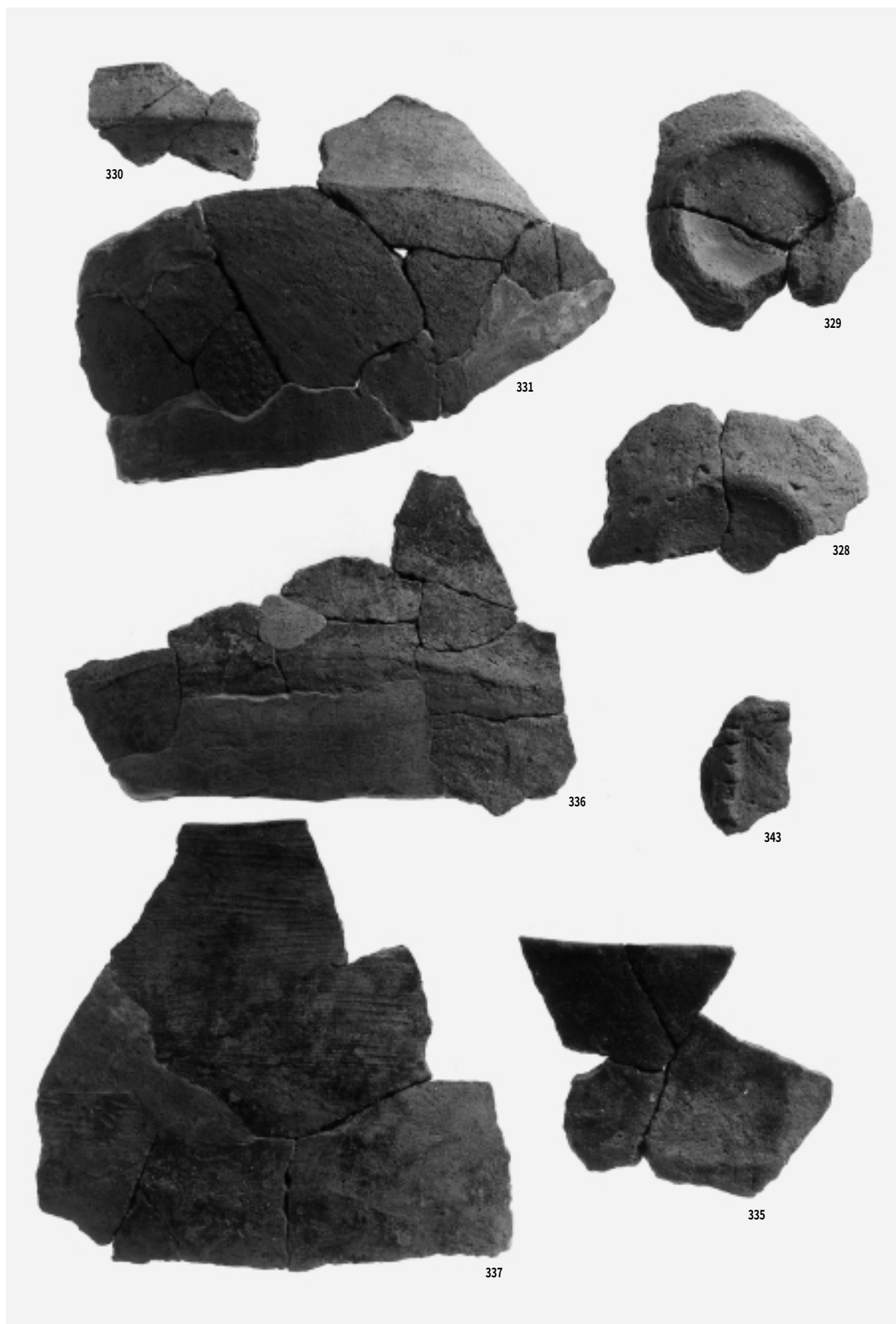
縄文時代の土器 7 (9c・11類)



縄文時代の土器 8 (12・13類)



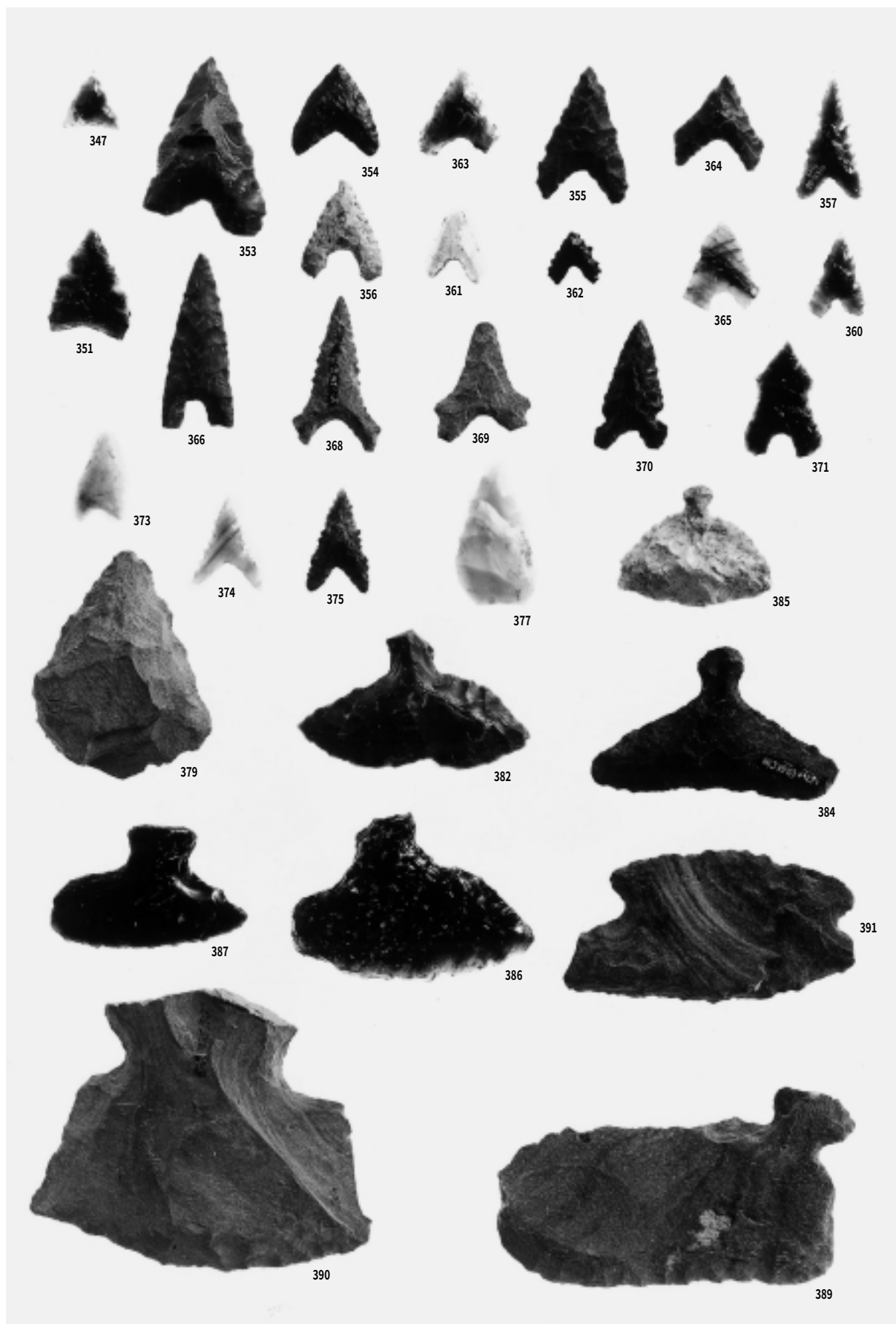
縄文時代の土器 9 (14～18類)



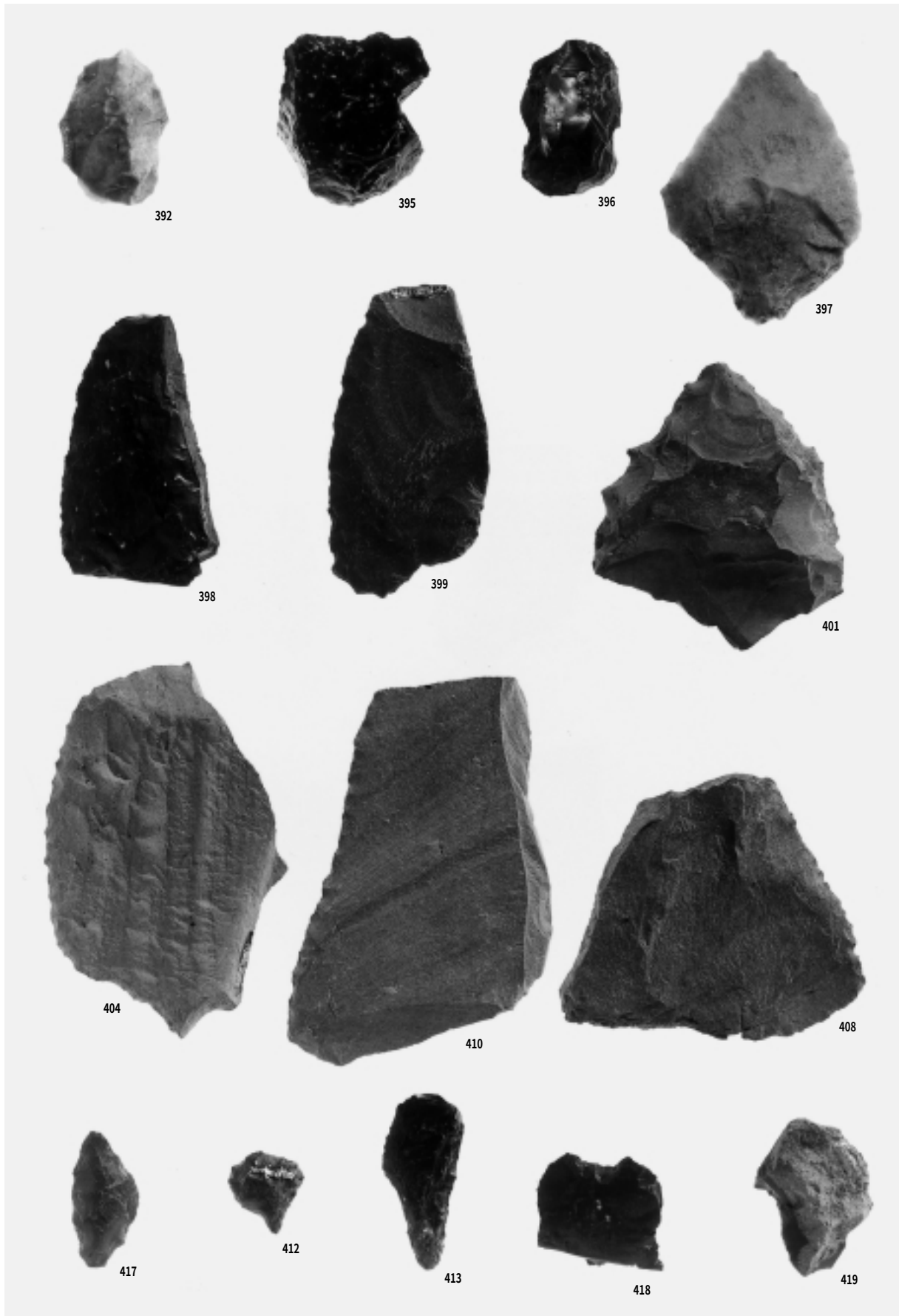
縄文時代の土器10 (19・21類)



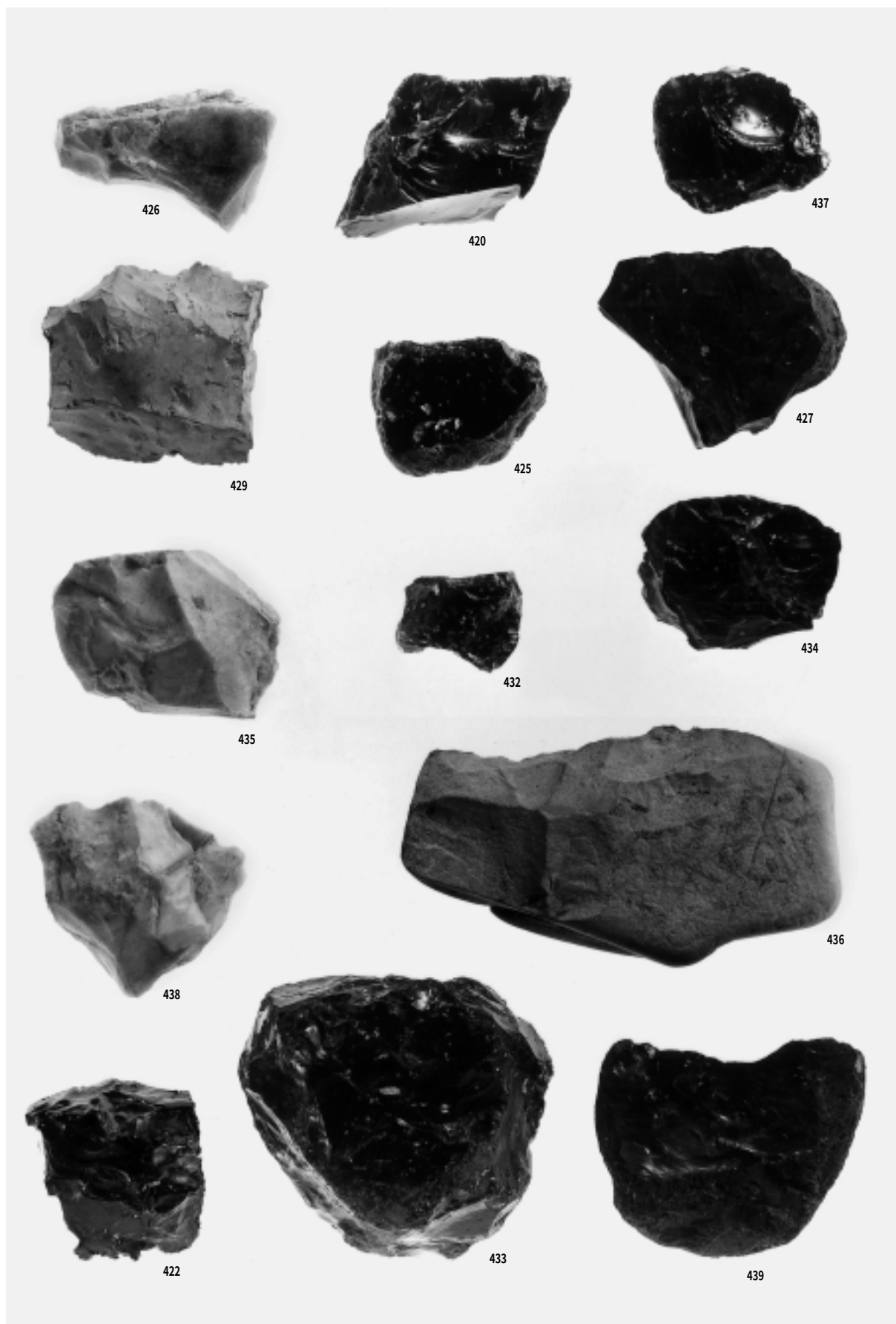
縄文時代の土器11（22～24類・耳栓）



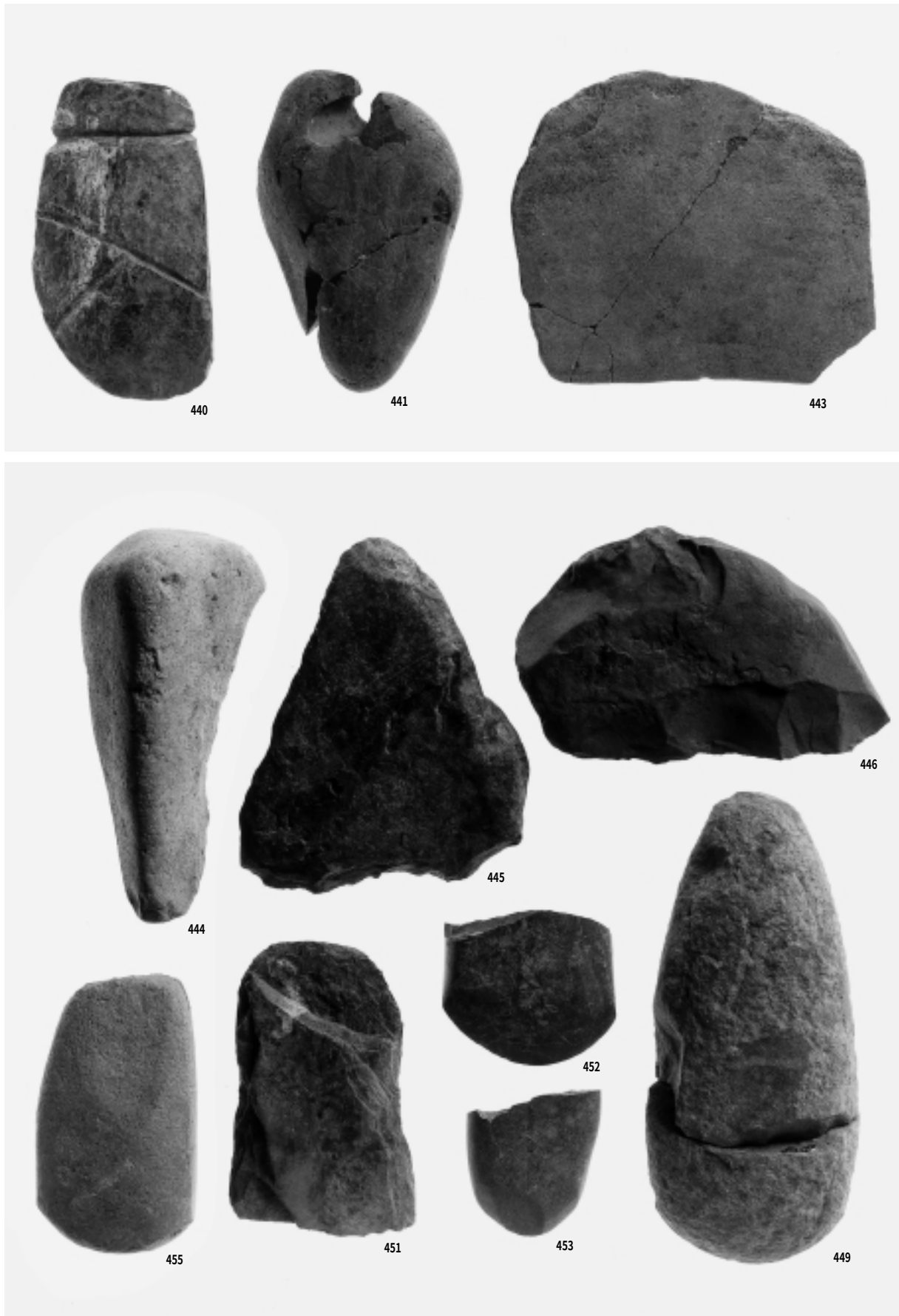
縄文時代の石器 1 (石鏃・石槍・石匙)



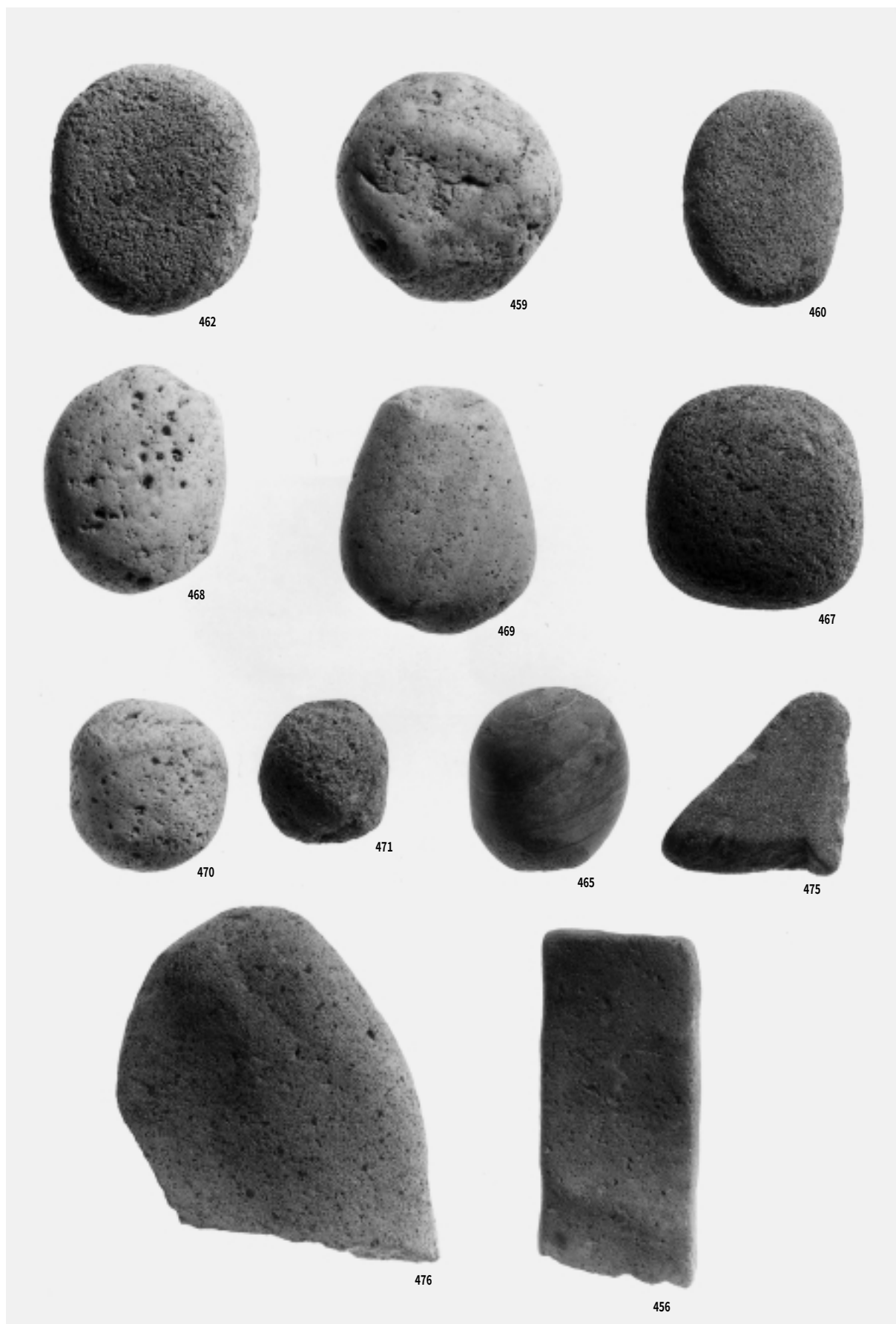
縄文時代の石器 2（楔形石器・スクレイパー・石錐・二次加工剥片）



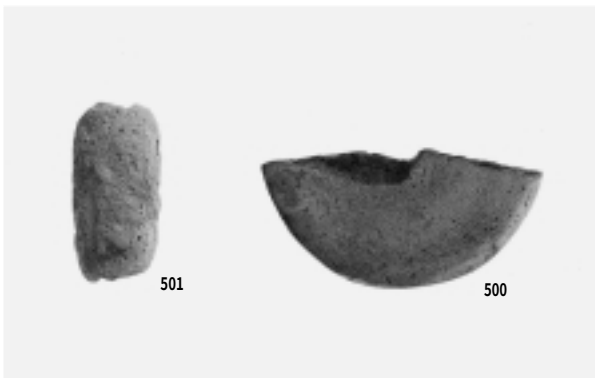
縄文時代の石器 3（石核）



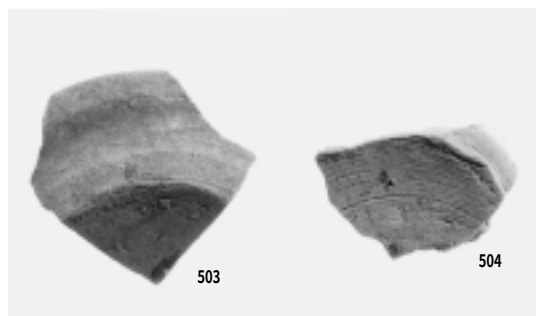
縄文時代の石器 4 (垂飾品・礫器・石斧類)



縄文時代の石器 5 (磨石・敲石・砥石・石皿)



古代～中世の遺物 1



古代～中世の遺物 2

あ　と　が　き

堂園平遺跡は、旧石器時代から近代に至る時期の遺物が出土している遺跡である。特に旧石器・縄文時代の資料は良好で非常に興味深く、なかでも、報告書作成にあたり時間をかけて復元された轟B式の深鉢は、とても美しく立派なものだった。

機会を得て、5月には現地を訪れることができたが、当然のごとく跡形もなく西回り自動車道となった遺跡跡地を目の当たりにし、改めて報告書を作成することの責任と不安を強く感じた。多くの方々からのご協力・助言を頂き、また本遺跡の良好な資料からも背中を押されるような気持ちで、こうして何とかひとつの形にすることができた。

ページをめくると、もっとここはこうした方がよかったのだろうか、などという反省もあるが、本遺跡の資料が広く活用されれば幸いに思う。

最後に、堂園平遺跡の発掘調査・報告書作成に関わり、御協力頂いた作業員の方々を始め、お世話になったすべての方々に心よりお礼申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVII

（伊集院IC～市来IC）

どう　ぞの　びら

堂園平遺跡

発行日　2006年3月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　霧島市国分上野原縄文の森2番1号
T E L （0995）48-5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899-0041　鹿児島市城西2-2-36
T E L （099）250-7033